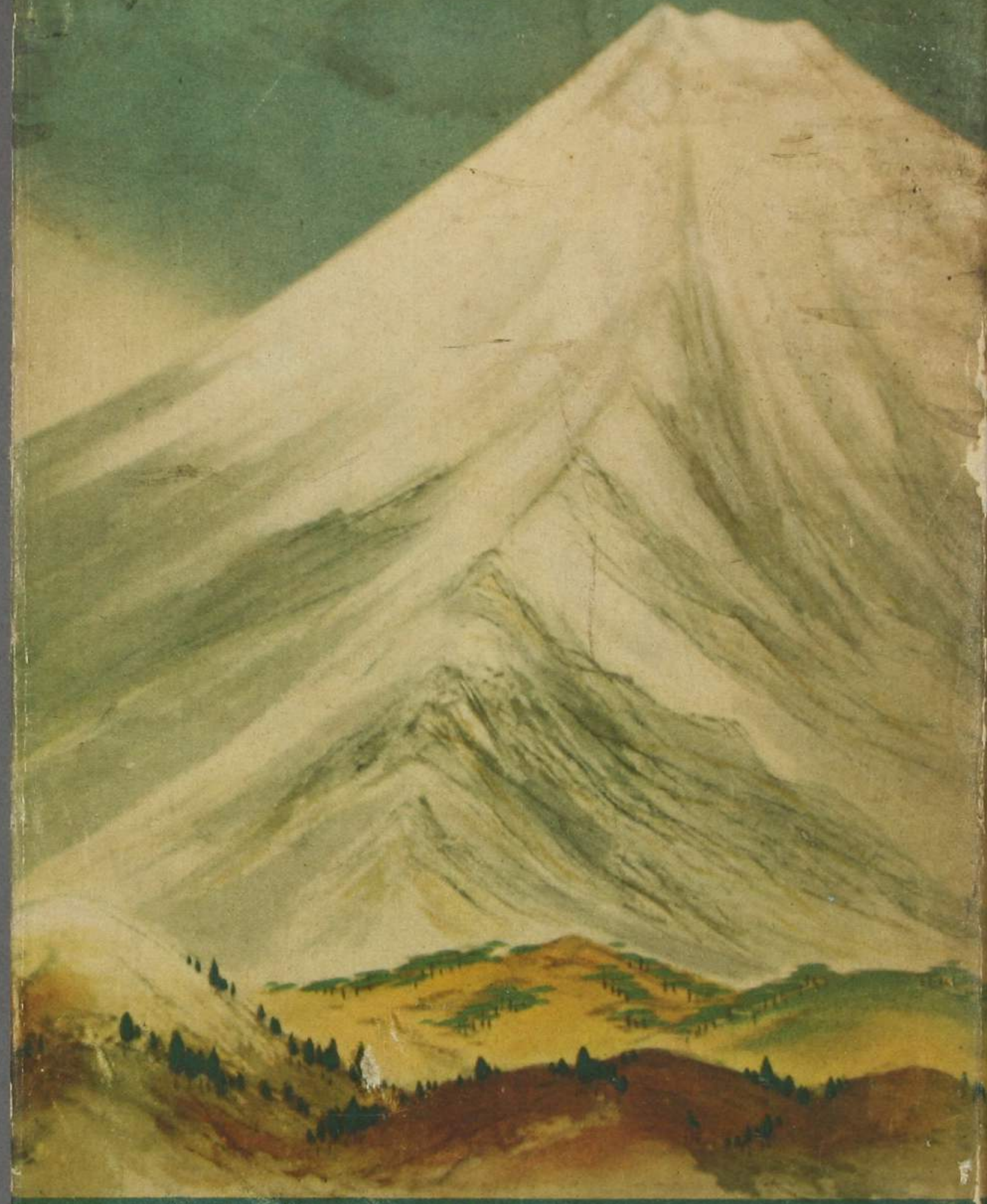
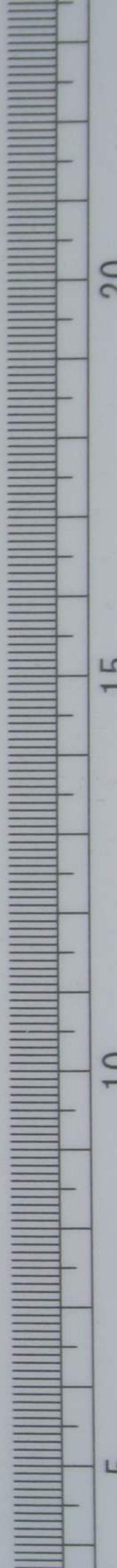
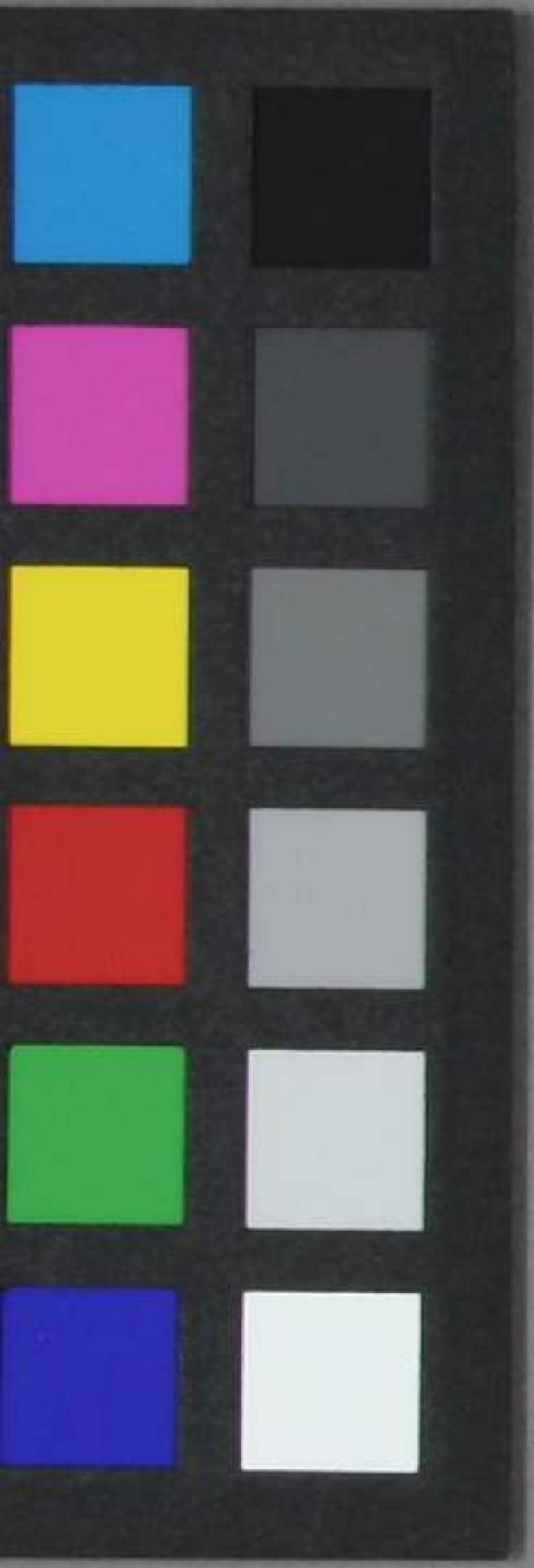


旅そこよけ

近松秋江著



富士山房百科文庫



旅こそよけれ

近松秋江著

七九

60



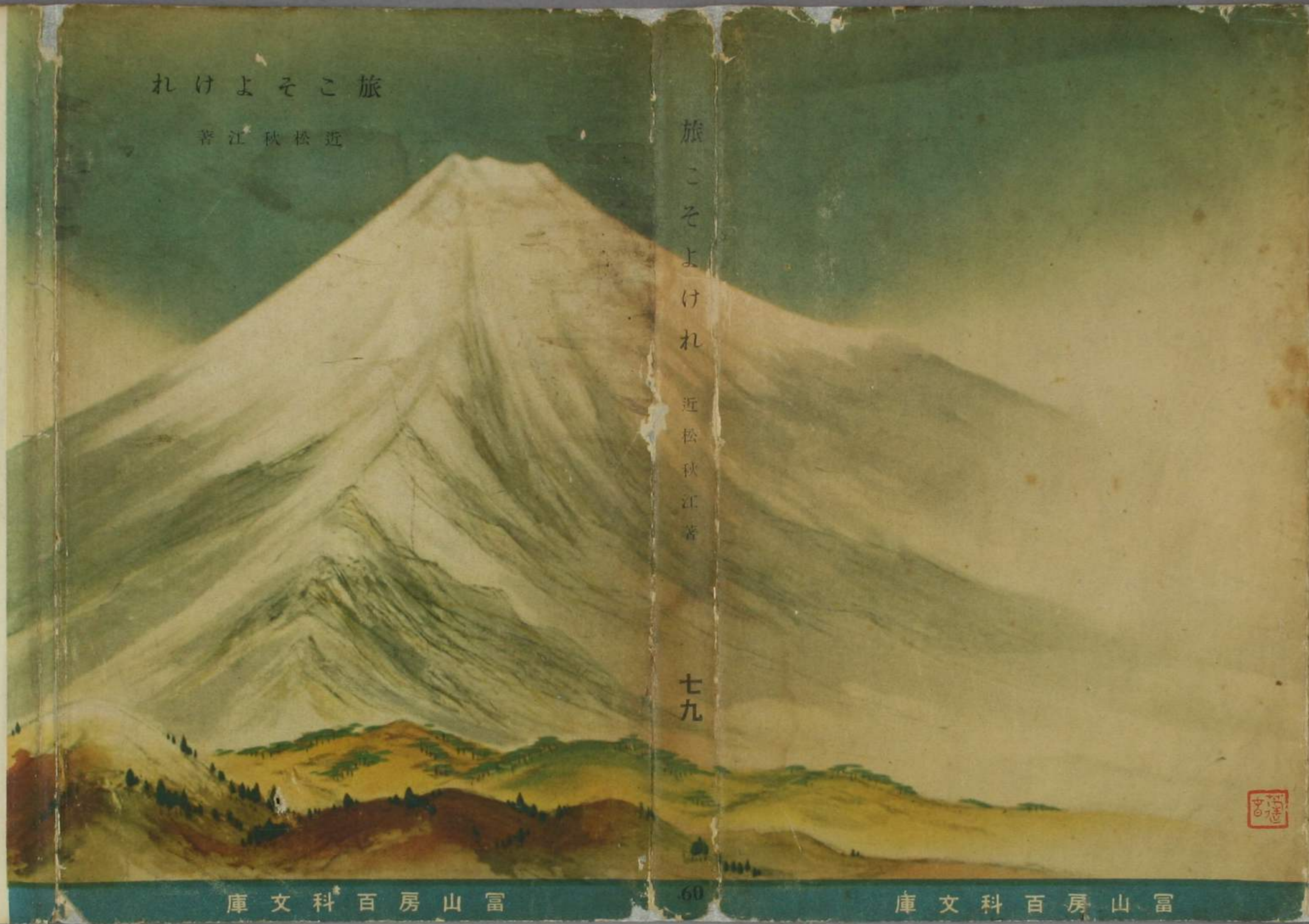
富山房百科文庫

既刊  
大槻文彦著 復軒旅日記  
芭蕉翁繪詞傳  
幸田露伴著 譚

全二七六頁 定價五十六錢  
全一八八頁 定價三十八錢  
全三三四頁 定價七十四錢

内容の色別 表紙上包の  
下にひいた太い五色の線で種  
目を大別してあります。  
〔橙色線〕日本及東洋古典及近  
代文學。  
〔綠色線〕西洋古典及近代文學  
〔青色線〕學術名著。  
〔赤色線〕家庭及兒童讀物。  
〔鼠色線〕辭典・參考書・圖彙。

¥・60



旅こそよけれ

近松秋江著

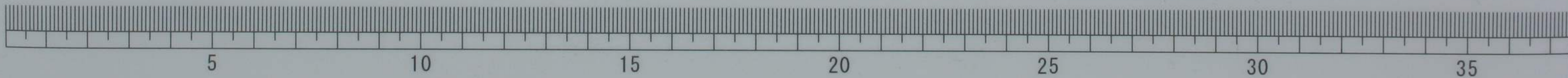
旅こそよけれ 近松秋江著

七九

旅こそよけれ

纏綿たる世話人情の小説家として、新替と委曲を兼ねた文藝評論家としての近松秋江氏は、一面に、好んで旅より旅へ、人間と自然の情趣を求めて殆どその半生を送り來り、行くところ必ず記ある紀行文家である。その紀行文は作者独自の繊細な感覚に、花袋の清新と紅葉の絢爛を加へ、さらに豊かな古典文學の教養をもつてこれを貫いたところに冒すべからざる一家の風格を備へてゐる。紀行文の模範作として久しく各種の詞華集または國語讀本を通して青年子女に愛誦されてゐるのも偶然でない。ここに作者の嚴密な自選による佳什二十四篇を集め、題して「旅こそよけれ」といふ。多く關東および近畿、北陸の名勝を語り、山水と人間と食物のほかに、古人を憶ひ、文學を談じ、藝術と宗教に造詣を示してゐる。作者の昨今は久しき眼疾のため明暗の境に在り、曾遊の自然の幻影の、季節の交代とともに心眼の中に復生し來ることをわづかに楽しんでゐる。古來文人の不幸まことに傷心の事に屬する。

¥・60



れけよそこ旅

著江秋松近



富山房百科文庫

富山  
百種  
文庫

旅  
こ  
そ  
よ  
け  
れ  
近  
松  
秋  
江  
著



1  
ことを志した。

れ け よ そ こ 旅

著 江 秋 松 近

庫文科百房山富

79

版 房 山 富



自序

自  
私は幼い時から自然の風景が好きであつた。それは、自分の生れた田舎の野や山を見てもさうであつた。灌漑用水の溜池の堤を見ても田甫の間を流れる小溝のせゝらぎを聴いてもなにかしら詩境が湧いた。そして稍、長じて少年の頃歴史と地理と繪畫とが好きであつた。やがて頼山陽の日本外史を讀み得るに至り、その感興は益々旺盛になつた。そして頼山陽が自分の母を伴ひ、吉野を見にいつた、といふことを知り、私も自分の母を伴つて吉野を見にゆききいと念願を抱くやうになつた。そのことを私は時々母に物語りしてその實現を夢みたものであつた。

その希望は果し得たのであつたが、遂に果す機會がなくなつてしまつた。しかし私の母は、私よりも先に數人の同行者と大和から吉野の方を數十日の日數を費して歩いてきた。

1  
私は前にも云つた通り繪畫が好きであつたところ、私の父は私に畫家たらんことを勧めたが、私は繪畫は好きであつたが、描き得る自信がなかつた。繪畫よりも一層文章が好きであつた。そして文章家たらんことを志した。

頼山陽は私の理想の人物であつた。日本外史の楠氏の巻に山陽は、吾れ、京攝の間を往來して所謂櫻井驛なるものを過ぎ、遙に金剛山の雲表に聳ゆるを望んで、楠公父子の忠誠を思ふた。といつてゐる。私もさういふ意味で煙霞懐古の癖があつた。それをひとり日本國內にとどめず、支那や西洋にまで押し進めたと思つて空想してゐたが歐山米水は愚か、支那にも遂に行くことが出来ずして不具の身體になつた。日本の内地でさへ、未見の地が多いのは、實に生涯の遺憾である。これ等の内外の名勝舊蹟を見ずして終ることは、恰も古今内外の名著を讀まずして終ることの心残りとその嘆を同じうする。

私は日本の書物は悉くとはいはぬが、名著傑作と云はれるものは、精讀はせずとも略、瞥見してゐる。しかし漢洋の書籍は茫洋として僅かに、その一端を覗いてみたゞけである。甚だ残念である。

英人ジョン・エジングトン・サイモンズが胸を病みて伊太利に客寓し、伊太利に關する數多の著述を残した。その中、伊太利紀行は、私が將來伊太利を訪問せんとする手引として愛讀したものであつたが、それも今は仇なる望みとなつてしまつた。

アーサー・シモンズの伊太利紀行もよい本であつた。私のここに集めたものは甚だおこがましい申し分であるが、アーサー・シモンズの文章に多少教へられたところがないこともない。

昭和十四年三月十七日

近松 秋江

目次

目	自序	〔一—三〕
	春の關東平野	〔二〕
	駿河灣の一夏	〔三—三〕
	身延山	〔三—三〕
	久能山	〔三—三〕
	箱根の山々	〔二—六〕
	下田の港	〔四—四〕
次	秋の駒ヶ岳	〔五—五〕
	日光湯本温泉より	〔五—五〕
	房總をめぐるて	〔六—六〕
	秩父紀行	〔七—七〕
1	木曾の明月	〔八—四〕

北陸紀行……………〔八九〕

車窓……………〔九七〕

郊外小景……………〔一〇〇〕

嫩竹……………〔一〇〇〕

芭蕉……………〔一〇一〕

柿……………〔一〇三〕

雁來紅……………〔一〇三〕

關原あたりの春……………〔一〇六〕

湖光島影……………〔一〇七〕

鳥羽の海光……………〔一〇七〕

伊賀國……………〔一〇七〕

箕蟲庵……………〔一〇八〕

月ヶ瀬……………〔一〇八〕

雨の京都へ……………〔一〇九〕

峽中の大原野……………〔一〇九〕

吉野路……………〔一七〕

伊賀、伊勢路……………〔一九〕

大和路……………〔二〇〕

大和路の春……………〔二〇〕

高野山から……………〔二九〕

高野山奥の院……………〔三〇〕

春興……………〔三七〕

河内の観心寺……………〔三九〕

廢滅の寺々……………〔四一〕

光悦寺……………〔四六〕

京都の冬を懐しむ……………〔五三〕

順禮歌……………〔六二〕

旅  
こ  
そ  
よ  
け  
れ  
(紀  
三十一  
行)

## 春の關東平野

櫻の咲く春が来て、何となく、廣々とした自然の味けれる廣野へ出てみたくなつた。關東の平野は、どちらへ向いて出ても、それぞれ異色のある趣があるが、私は、もう此間から北武藏から兩毛の平野へ行つてみたかつた。同じ東京附近でも、上野口から東北に出てゆくのと、新橋、品川口から東海道方面に出てゆくのと、野の趣が、まるで異つてゐる。荒川の鐵橋を渡つて、汽車が次第に埼玉の野を駛つてゆくと、左窓の野の果に甲州境の連山の上に富士が白く秀でゐるのが見える。荒川堤に櫻の咲く頃になると、春靄遠く武藏野を罩めて、その秀麗な姿もやうやく臙になるが、まだ秩父嶺の寒い／＼風が關東の平野を吹いてゐる時分に、その方面を行く汽車の窓から望む富士の姿は、それを品川口の東海道方面から望む山の色とひどく相違して、雪の肌も純白に冴えてゐる。そして、あのわたりの野の色も東京の南郊の土とちがつて、黒く肥えてゐるのが氣持ちが好い。もし晩秋初冬の頃ならば、黒い畑に取り残された大根の葉が眞青に霜を凌いでゐるのも眼に快感を與へる。私は氣候さへ南郊と違はなかつたら、むしろ東京の北郊、荒川を渡つて、埼玉の縣域に入ったあたりに居を卜したいくらゐに思つてゐる。

三月の三十一日、一日冷い春雨の降りこめた翌日、いよ／＼月が變つて四月の一日になると、昨日の雨

は名こりもなく晴れて、櫻は恰も満開である。もうこの二三日を見過して、春雨となつたら、見頃は過ぎてしまふ。櫻は俗の花のやうで、やつぱり俗ではない。俗でもあり、非俗でもあるところに櫻が花の中の花といふ價值がある。櫻はそれ自身よりも、むしろ春の季節を代表して、春雨に胎蕩たる點に於て實に春そのものである。

その日、上野から汽車に乗つて東京の北郊を出離れ、だん／＼武藏の野を過ぎ、埼玉縣の領域を通過してゆくと、到る處の驛々にある櫻は爛熳として今正に咲き盛つてゐる處である。汽車の窓に蔽ひかぶさるばかりに枝を翳してゐるその大樹を見上げると、滿枝の花の彼方の空は薄墨を流したやうに花ぐもりに黒く曇つて、やつと咲きそろつたばかりの花の壽命も、今宵一夜のほども氣づかはない。

驛々の花を見てゆくと、平潤な野の面はまるで青い絨毯を敷き展べたやうに青麥の畑が眼も遠くついでゐる。そして、ところ／＼に夢のやうな黄色い菜の花が少しづつ咲いてゐるのが、もうそれだけで春そのものゝ如き色彩である。櫻はどこまで行つても眞盛りである。

やがて栗橋と古河——埼玉と栃木との縣界を劃してゐる大利根の鐵橋を向うに越してゆくと、遠く青麥の野の果、碧蕪籬落の斷續する彼方に、筑波山が霞の如く見えてきた。私は右窓に凭つて其等の遠景近景に眼を遊ばしてゐると、汽車の進行につれて、此度は左窓に遠く日光の雄偉なる山魂が見えて來たではな

いか。日光の山、それは、暫く見なかつた山の姿である。私はふと振顧つて、過ぎこし年月を思ひ出して見ると、今からもう六年ばかり前に見たきり見なかつたのである。大正五年の夏は殆ど一と夏日光にゐた。あれきり日光へは行かなかつた。日光の山水よ、汝は私の生活に缺くべからざる崇高明媚なる山水である。私が日光を見ることが出来なかつたら、どんなに私の生活は不幸であるか知れない。私は夏季炎暑に苦しむ時に「日光があるから」といつて、夏をも涼しいものにする事が出来るといふ意識に、いかに私の生活を安らかならしめるか知れない。

今度は左窓に凭つてきて、そちらの方に眼を放つてみると、男體、大眞名子、赤雜の諸峰は歴々として指すことが出来る。残雪が山の中腹のあたりまで皴壁を被てゐて、遠い野末の裾山の上に、泰然不動の姿勢で静かに天につかへるやうに見えてゐるのが、何ともいへず懐しい。兩毛の國は、此のとほりの平野と、あの如き雄偉なる山とを有してゐる。何といふ、いい國であらう。など、思つてみる。汽車はステーション毎に満開の櫻を旅客の眼に振舞ひつつ、綠麥の野を駛せてゆく。ステーションを通過するたびに、左窓の日光の山塊も倍々明かに認められてくるし、右窓の筑波の山の色も次第に鮮かになつて来る。

私のその日の豫定はかねてから一度行つてみたいと思つてゐた下總の結城の町へ行つて見るつもりであつた。結城の町は東北本線の小山驛から、水戸線に分歧して、すぐ次の驛である。結城は、結城つむぎの織物を産するので古來有名な土地である。結城つむぎは殆ど、私の年中身に着けてゐる着物である。地方

の農家で、農業の片手間に長い手間をかけて産出する堅實で古風な絹織物である。素樸な此の地方の農家から、都會人が愛好する、あんな濛い織物が、どうして出来るであらう。この地方の風土が、なんとなく見てみたかつたので、私は結城の町にいきたかつたのである。

それと、も一つは結城地方は南北朝時代に南朝の忠臣結城一族の根據地であつた處である。太平記や日本外史の愛讀者であつた私は少年時代から南朝の忠臣を憧憬してゐた。楠氏はいふに及ばず、伊勢の北畠氏、肥後の菊池氏、關東の結城氏などに對しては少年の純眞な同感を持ち、渴仰の情を抱いたものであつた。歴史に彼等の存在するといふことが、直に人道いまだ全く地に落ちざるの感じがしてゐた。私はその結城一族を以て日本歴史上關東の野に咲いた一と叢の花と見る。それから又、馬琴の八犬傳は、この結城氏の殘黨から、その空想を引き出してゐる。

小山驛に着いた頃には、もう四月の日も春づきかけてゐた。それから白河ゆきの汽車に乗り棄て、プラットホームを向ふに渡つて水戸ゆきの小さい車室に入つた。汽車はそれから黒く肥えた平野を横ぎつて東に向つて駛つて行つた。關東の平野は、東京からこゝまで北へ入つて來てもまだまだ山に迫つてゐないといふ感じがする。結城はすぐ次の驛である。ステーションを出て、寂しい通りを町の中心まで歩き、とある鄙びた商人宿に一泊することにした。

翌日ステーションに来るまでに、一寸町を歩いてみると、平野の中にある田舎の一古邑に過ぎないが、さすがに古めかしい結城紬の間屋がさき／＼にあつたり、その他小さい町にしては割合に染物屋だの、呉服屋などの多いのが眼につく。南朝の忠臣結城朝光の墓も近い處に在ると、ステーションの掲示に誌してあつたが、旅程を急ぐので不參にして、とある間屋で結城の單衣を一反買ふ約束をして直に停車場に行つた。

四月の二日、空は碧く晴れて、眞に春風駘蕩としてゐる。緑麥の野のつゞきに林があつて、そちらにも此方にも櫻花が今を盛りに爛熳と咲いてゐる。汽車はそこから下館の方に行くのである。そちらに乗つていつて、平野を流れる鬼怒川の白帆を見ようか、それとも小山に引返して上州の方へ行つてみようかと迷ひつゝ、下館にあたる方向を眺めると、向うに櫻花の満開してゐる野の彼方に筑波山が昨日の汽車から眺めたよりもずつと近くなつて春霞の中に靨として長く裾を曳いてゐる。それは結城紬の藍の色よりも尙ほ匂やかである。西洋の繪畫に、春の女神が林の蔭で踊つてゐる處などを見るが、あの繪畫は決して藝術家の空想ではない。綾羅を装つた女神が筑波山の頂の方から舞ひ下りて來はせぬかと思はれる。

やつぱり上州の方へ行つてみることに決して、又小山驛まで引返した。今日は日光の山塊も昨日の夕方よりもよく見えてゐる。残雪が淡藍色の山肌にくつきりと彩取つてゐる。小山から汽車は平野を左に入り、日光山麓につゞいた前山一帯を前景にしつゝ進んでいつた、櫻花は兩毛の野まで來ても、どこまでも満開である。思川の清流を渡つて、平野の中に在る栃木の町を過ぎると、車道は右窓に方つて連互する低い山つゞきに接近しつゝ進んで行く。

野には目の覺めるやうな麥が青く伸び、櫻花は到る處の野の畔、山の麓、停車場のほとりに爛熳と咲き盛つてゐるが、山々の雜木はまだ冬のまゝで、新芽をつけてゐないのが、却つて南畫めいた瀟洒とした色彩を表はしてゐる。それにしても兩毛は好い國である。北に山又山が重疊して、南に至るに従ひ平野が開展してゐる。春風の野に犁鋤を携へて農夫は桑麻の畑を耕してゐるのが汽車の窓から眼に入る。彼等は畑の畦に腰をのして休息しつゝ四邊を眺めてゐる。遠く日光の山塊は春の残雪を載せて遙に南陽の平野を俯瞰してゐる。さうして利根川、鬼怒川の諸流は其等の深山幽谷に源を發して、ひた／＼と兩岸の平野を浸しつゝ流れてゐるのである。むべなるかな足利新田の豪族が是等の國土より崛起せる。佐野の驛に來て、武士道の精粹を誦つてゐる「鉢の木」を聯想し、佐野源左衛門常世の事が考へられた。日本の武士道が時勢と共にその倫理的標準たる資格を失つたといふは皮相の見解である。なるほど武士道の外的條件は、以て今の世の倫理的標準とするわけにはゆかぬが、その精髓には紳士の精神が存してゐる。且夫れ、斯の如き精神——倫理思想史を辿つて日本民族といふ國民は儼然として地球の上に命脈を保ち、發達して來てゐるのである。兩毛の平野と、北方に連らなる山群と、鬼怒、利根の長江大河を思へば是等の土地に常世

や、高山彦九郎の如き國士があつたといふことが不思議でなかつたやうに思はれる。

私は、上州の太田までの切符を持つてゐる。太田へ行くには足利で乗り換へることゝばかり飲み込んで、そんなことを空想してゐて、やがて佐野の町を通過して足利に着き、そこで驛員に訊ねると、太田へ行くには佐野で乗換るのであつた。それは結城で買った切符に、ちやんと、さう記してあつた。驛員は、それを間違へる人が多いといつて、丁寧に教へてくれた。そこで佐野まで誤乗にして又引返すよりも、足利驛から渡良瀬川を挟んだ向岸の足利町驛まで十町ばかりの道をぶら／＼歩いて、そこから太田ゆきに乗ることにした。それは私設の東武鐵道で淺草驛を出發して上州伊勢崎との間を往復してゐるのである。

春は今、此の山國に一時に押寄せて來たと思はれて、昨日上野を出はづれると、王子飛鳥山の櫻花も満開であつたが、この足利市でも向ふの山の上でどん／＼煙花が揚がつて、渡良瀬川の河原では、五色の旗を春風に吹き靡かして何か競技を催してゐるらしい。

私はこれから太田を経て、蕨驛に近い西長岡の鑛泉に一浴しようと思つてゐるのである。それとともに上州の野から赤城の殘雪を望まうとするのである。足利を西に出はづれて、汽車が桑畑の只中を駛つてゆくと、北の方に當つてその赤城山がどん／＼とした春霞の彼方に見えて來た。赤城の山ももう何年となく見なかつた。それは日光の山よりもまだ長いこと見なかつた。思ひ起すと今から十五六年前の夏伊香保

にいつてゐた頃に毎日見てゐた以來、ずつと見なかつた。前橋方面の平野から眺めた赤城の姿は美しい。太田から蕨塚へ行く平野からは、やゝ遠過ぎるのと、今は春霞が深いのでいくらか物足りない。太田で乗り換へた汽車は大きなボギイが一車臺きりで、三等車である。太田から三つ目の驛が蕨塚であつた。荒蕨とした砂地の桑畑の中に鄙びたステーションがある。赤城風の北風が吹く頃の寒威が思はれるやうな處である。そこから十六七町の道が小川の麓をめぐつて長岡の鑛泉のある浅い谷の間に入つてゆく。道の傍に小さい三つの溜池があつて、三段に重なつてゐる。その堤に櫻樹が澤山立つて、こゝでも、もう七分どほり開いてゐる、片山里の春といふ感じがする。日の暮れ方になつて、空氣の肌觸りが薄ら寒い。

鑛泉旅館は一軒きりで、建物はなか／＼大きい棟が二三連らなつてゐるが、室の構造など、まるつきり田舎風の、不意氣で、襖を一枚隔てゝゐるきりであるから、とても吾々には安心して旅の疲れを休めることなど出来ない。

この數日來、森々崎にゐながら、時々東京の郊外に近い宿屋へ一泊二泊してみたが、稻毛の海氣館が一等優れてゐる。それは、私の京都大阪などの見聞を標準にして比較しても、稻毛の海氣館はなか／＼好いところがある、そして可なり上品である。——と、飛んだ處で海氣館の提灯を持つて置く。

長岡の鑛泉では、宿料その他が安くつて、氣も張らなかつたが、高くつてもよいから、行き届いた待遇



をせられて、室の設備の安らかな處でなければ旅の情趣を大半減却してしまふ。二晩も寢處が變つたので、もう東京大森の定宿に歸りたくなつた。

翌日は、蕪塚の停車場まで、ぶらぶら歩いて、そこから淺草行き例の一臺きりかない三等車に乗つた。赤城はどうかと思つて、そちらの方を見ると、大分曇つてゐるので、山の姿も鈍く曇つてゐる。太田で伊勢崎から來る列車に連結して東京へ行くので、たゞ太田で二等に轉乘さへすればよいのだが、新田義重の創立した義重山新田寺、通りの名は吞龍様へ參詣して見る氣になつて、太田で一應下車し、停車場から乗合自動車で吞龍様へまゐる。朝のうちは曇つて薄寒かつたのが、次第に晴れて陽氣になつた。吞龍様の廣い寺域にも大變な人出である。寺の庭の櫻樹は爛漫として、そこに建つた二基の鐘樓を花で埋めてゐる。寺域を一廻りして背後の金山を見ると、松林を以て蔽はれた山の姿が京都の近郊に見る山に違はない。何となく京都にいつたやうな感じがする。汽車の時間を急ぐので、すぐ又自動車で引返し午後二時の汽車に乗る。

二三日薄寒かつた陽氣がだんぐ暖かくなつて、汽車の中に凭れて、うつらうつらと快よい假睡をしてゐるうちに、足利から、尙二三のステーションを通り過ぎて、やがて館林驛まで來た。遠くの空は暖く花曇りに曇つて、やゝ暑いやうな日の色が廣潤な野邊に漲つてゐる。ステーションのプラットフォームに並んでゐる満開の櫻花が春の暖氣に蒸息<sup>いそぎ</sup>れて、溢れて落ちさうに危なつかしい。こゝで一と雨あつたら、今年

の花は果敢なく散つてしまふのだが、この空模様では、明日の天氣が氣づかされる。

私は、クッションに凭れて、春の暖氣に又しても眠りがちになる。そして、うとうととしてゐるうちに上野行きに乗換ねばならぬ久喜驛に來た。そこで下車して三十分間待ち合はし、此度來た上野行きに乗らうとすると、さあ大變、とても乗れはしない。もう二等三等の區別などあつたものではない。乗降臺のドアの内側に凭れて、三日の旅程の疲勞を醫すべくもなく、疲れのうへに疲れねばならぬ。こゝから上野まで尙一時間半以上の時間をかうして立つてゐなければならぬことかと、とうとう観念してしまつた。これなら、いつそ先の汽車で淺草驛まで乗りつゞければ可かつたと思つたがもう爲方がない。そのうへ、次から次のステーション毎に乗客は押込んで來る。乗降臺の上も一杯人で詰まつてしまつた。これで、もし汽車に様事でも出來したら鐵道省は、何とするのであらう。又例の不可抗力で責任を免れようとするのか。私は、その乗降臺から、遂にはみ出されてしまひ、とうとう、車臺と車臺とを連結した。舌の形をした鐵板と鐵板との喰ひ違ひになつてゐる、車橋の上に立つことになつてしまつた。遂にいつまでも立つてゐられないので、そこに渡し架けて置いてあつた大きなトランクの上に腰を下ろし、車臺の鐵柱を、まるで機械體操をする如くしつかりと握り締めてゐた。片時も氣が許せない。そして下を見ると、下の鐵道の砂利や、レールの鐵がまるで博多帯の縞目の如く連続して走つてゐる。赤羽で荒川の鐵橋を渡る時、見ると、下には深碧の水が見えてゐる。私は鐵板と鐵板とは容易に喰ひ外づれないといふ信仰によつて、そこに腰

を掛けてゐたが、他の人間は、その乗降臺に押込んで来た無鐵砲らしい印半纏の男でも、それは、やらなかつた。やつと生命拾ひをしたつもりで夜の八時宿に安着し、その翌日の新聞を見ると、京都の嵐峽で汽車顛覆の惨事があつたのは、丁度自分が赤羽の鐵橋の上で一生懸命棒に取り縋つてゐた時刻であつた。こんな世の中では人間は毎日生きるにも、まさしく生命がけでなければならぬ。

(大正十一年四月八日誌す、東京朝日新聞)

## 駿河灣の一夏

### 身 延 山

ことしの夏は、七月の二十七日から八月の三十一日まで三四十日の間を駿河灣頭の興津の海岸で過した。青年時代から、二十幾年の長き間海水浴から全く絶つてゐた私も、この夏は、俄に若返つたやうな氣持ちになつて毎日、日に二回づゝ海水に浴してゐた。あの炎天の下に海濱の砂の灼熱してゐることを思つたり、赫耀として明る過ぎる海波の光を聯想したゞけでも海濱はあんまり好ましくないのであつたが、それでも、めづらしくそこにいつてみると、思つたよりも快適で楽しい一夏を銷すことが出来た。

そこへ行つて數日の間は、何となく海水に親みが出て來なかつたが、段々馴れて來ると、さすがに水に漬かるのが楽しく愉快になつて來た。しかしながら私は、あの東海の名區に暫くでも居つて、思ふさま駿河灣の風光を楽しみたいと思つたのであつたが、今年の夏は、わけても水蒸氣が多かつたせゐか、最も多く期待してゐた富士の麗姿を十分に眺めることが出来なかつたのは遺憾であつた。それでも、海水に漬かりながら四方を顧望してゐると、東の方に愛鷹、箱根などの山々が、いつも白い雲の中に遠く眺められたの

は何となく懐しい気分を咬るのであつた。そして、どうかして少しく海にも飽いたなと思ふやうな時など、恰も八ッ頭を積上げたやうに見えてゐる箱根の山塊を望んで、あれが神山で、あちらが駒ヶ嶽だ。私の好きな蘆の湯は、あの駒ヶ嶽の腕を伏せた様な、向う側にあるのだ。歸りには一寸あそこへ寄り道をして鹽分に日焼けのした身體を、蘆の湯の硫黄泉で洗つて行きたいなどと思つてみたりした。

それと、もひとつは、興津に来てゐる間に、あそこからあんまり程遠からぬ甲州身延山へ一度詣つてみたいと思つてゐた。身延山へ行くには興津から四つ手前の、駿河の富士驛から身延線に乗つて行くのだが、わづかに十驛ばかりのステーションを隔てゝゐるに過ぎない處に行くにも、生活上と藝術上との理由から、一日か二日の暇を繰合はすことも容易ではなかつた。それゆゑ、やつと、それだけの時間を都合することが出来た時には、まるで子供が宵祭りを樂むやうな心地で明日になるのを待つてゐた。

八月の十四日から五日間ばかり雨に降りこめられ、颱風めいた荒れ模様の枕に轟く波の音に脅かされてゐたのが、數日來の不快な低氣壓が一過して明るく十九日になると、昨日に變る穩かな朝輝の海の上には無數の漁舟が群がつてゐた。遠くの伊豆半島や箱根の愛鷹の連山が、いつものとほりに美しい淡藍色に見えて來た。

私は、刻々に小さく靜かになつてゆく波の打寄する際に漬りながら愉快的な大空を仰ぎ、それ等の山々を願望しつゝ、勃々とした遊意を動かされるのを覺えた。

「身延山にいつて來たいな。……今からすぐ往かうか。」

と思ひながら、東北の空に當る富士の方を眺めると、富士は尙ほ深い密雲に鎖されて、わづかにほんの僅に、その山背の一部を眞黒に顯はしてゐるのみである。これでは折角の富士を仰ぐことが出来ぬと思つた。が、今日の此の好晴を外したら、又明日は雨になるかも知れぬといふ氣がした。そのうち新聞で數日來の豪雨で身延線も不通になつたといふ記事を見たので、その日は遂に斷念した。

その翌日の二十日はいつもより早く起きいでて八時十一分の汽車に乗つた。富士驛から身延線に乗り換へて青田の清風に吹かれながら行くと、今日は富士も頂上まで綺麗に雲を拭はれて、汽車の進行につれて次第に、壯大なる山の全廓が、恰も額縁に收めたる一幅の風景畫の如く車窓に入つて來た。入山瀬、富士根の二驛を過ぎて大宮町まで來ると、いつとはなしに汽車はもう海拔五百尺の高標の地點に上つて來てゐるのであつた。大宮には官幣大社淺間神社があるので、そこへ詣つてみようと思つたが、それは歸途の時間の都合にゆづり、そのまま乗通していつた。汽車が大宮を過ぎて次第に緩勾配をなせる平野を駛走してゆくと、東北に當る裾野は一大溪谷の觀を成して遠く開展してゐるのが眼に入つて來た。それけ白絲の瀧、人穴、曾我兄弟仇討の跡等の舊跡を経て富士七湖の西端なる本栖湖に通ずる要路になつてゐるのであつた。遠くに起伏してゐる山々の容、白紗のベールの如き夏霞の幕は、そつちの方へも遊意を咬るのであつた。汽車はそれから富士河の東岸に沿うて起伏せる一小丘を穿つて通ずる二ヶ處のトンネルを西に向つ

て抜けると、眼下に富士河の大溪谷が開けて来た。そこに芝川驛があつた。こゝまで来ると山水紛糾の状、漸く峽中に入つて来た感がある。折柄前日來の降雨の爲に河水は黒濁してゐたが、もし晴天つゞきの後河水が紺碧に澄んでゐる時であつたならば、山林の緑と積の洒れ石と相映じて、一段と溪谷の美觀を増すのであらうかと思つた。さもなければ却つて雨霧濛々の際であつたら更に一層の奇觀をなすであらうと想像した。芝川の先き、河水の小丘に沿うて屈曲してゐる處のトンネルを隔て、駿河と甲斐と相境す。やがて十島驛に着く。峽中の山水倍々凡ならず。篠井、安倍峠等の對岸の高嶺雄岳巍然として屏風を連ねたる如く聳え立つてゐるのが、車程とゞもに眼を悦ばしめる。身延山の一角もその邊から見へて来た。それより内船南部、甲斐大島の二驛を過ぎて身延驛に達す。

私は、かねて、富士身延鐵道會社から贈られた沿線案内記によつて、終點から、富士河に架した同鐵道會社架設の一大鐵橋を西岸に渡ると、直ちに身延山久遠寺の總門の前とに出来るのかと思つてゐたら、どうしてどうして、そこから尙ほ三四十町の山際の野道を、溪に入つて行かねばならなかつた。そして當節は何處へ行つても乗合自動車の便のある事を、つい、迂濶に氣附かずにて、ステーションの構内に客待してゐた人力車にふと飛び乗つてしまつた。そして非文明の俥によた／＼揺られて行く間に後から来た三臺の自動車に後からあとから追抜かれてしまつた。先程汽車の二等室で口を利き合つた此の地方の人らしい乗客から、此の間中の雨で人力車のほかけ通せぬといふ噂を聞いてそれが先入主となつてゐたので

あつた。同じ汽車で来た自動車の客は夙うにもう久遠寺に參詣してゐる時分に、私だけは一人人力車で容赦なく炎天に照り付けられながら田圃道の草いきれの中を後れていつた。

やがて總門に達し、そこで俥を乗り棄て、徒歩して門前の一筋街を五六町ばかり山門の方に上つていつた。山門前の玉屋といふ旅館に着いて二階に通り、少憩して汗を入れ、晝支度をすまし、寺に詣でた。山門をくゞれば、直ちに正面の老杉森々として、緑蔭暗き處に殆ど直線に近き急角度の石磴峭立して、その邊頂は、老杉の梢頭わづかに空の隙けた處に達してゐる。それを菩提梯といふ。梯の上り口右側の老杉の幹根の處に新たに落成せる小廚子あり、中に衣冠束帶の銅像を安置す。これ即ち日蓮上人が久遠寺開山の檀越波木井公長の像である。

私は、一つは好奇心から、遙かに雲に達する感あるその菩提梯を登攀せんとして、石磴の上り口に進んで行かうとするところへ、不意に背後から、

「旦那も詣るの？」と、馴々しく聲を掛けた者があつたので、そつちを振り返ると、十七八歳ばかりの洗髪にして、白いものを化粧してゐる小娘がそこに立つてゐる。私は不思議に思つて「何だ、お前は？」と訊ねると、

「あの旦那も今まるんだから、旦那の後に蹤いて行くと詣れるから、まるつてお出でとおかみさんがいつたから、それで大急ぎで後を追掛けて来たの。」

妙なことをいふ娘だと思つて 尙ほよく訊くと、その小娘は、静岡の者で、自分が今晝食をした旅館に此の間中雨の間四五日逗留してゐて、今日は富士河の水が大分減じたので、これから三時發の飛行艇で鰍澤まで溯航して行くのだといふ。此方の旅館のおかみの妹が鰍澤で宿屋をしてゐるので、此方のおかみの世話で向うへ女中奉公に行くのである。

「あゝ、さうか。私も静岡の手前の興津に居るんだ。そしてお前は一人で身延へ来たのかえ？」

「うゝん、お父さんと一緒に来たの。」

「さうか。それでお父さんはもう歸つたのかい。」

「あゝ、二三日前歸つた。……旦那一緒に詣つてくれる？」

「あゝ、一緒にまゐらう。お前、此方から上がれるかえ？」

私は菩提梯の上り口に立つて眼も届きかねる高い處を見上げた。娘も躊躇したやうに上の方を見上げて、

「わたし、とても上がれないわ。何處かあつちの方からも上がれるところがあるのよ。」といつて、彼女は振返つて左の方の樹間を指した。

「お前はまだお寺に一度もまゐらなかつたのかえ？」

「うゝ、まだ詣らなかつたの。」

「そりや驚いたねえ。四五日も此地こゝに来てゐて。そんな不信心では好いことがないぞ。」

「うゝん、不信心といふこともないんだけど……」

「ぢや、もし足を踏みはずして轉げ落ちでもしたら危いから、あつちから上らうかねえ。」

それから緩なだかな遠道の方を迂迴して本堂の方へ上つていつた。

「旦那、それは寫眞機？ わたし寫眞を撮つてもらうわ。」

「うむ、撮つてやつてもいい。……その代りお前これを持つてくれるか。」

「そんなものを持つのは何でもないわ。」

少女は私からコダックを受取つて提げた。

久遠寺は身延山の山麓に在つた。少女との話を道草に、やがて五町の坂道を登つてゆくと、次第に平凡ならぬ山谷の形態が脚下に俯瞰されて来た。杉檜の鬱蒼として隙間もなく山と谷を蔽うてゐる有様は、數年前暫く脚を逗めてゐたことのある高野や比叡よりもつと樹が深いと思はれた。谷底のところ々には木立の中に僧坊が立つてゐたりするのを見ると、數年前高野や比叡に夏三月も居つて過したことを思ひ出し、此處でもそれが出来ないことはなからうと思はれた。否、數年前の單身の自分であつたならば、きつと身延にも一夏げを修行したであらうと思つた。

四五町登り切ると山腹の平地に久遠寺の堂塔が並び建つてゐた。本堂は明治の初年に炎上したまゝまだ建つてゐないといふことだが、祖師堂、釋迦堂、御眞骨堂、大客殿等をはじめ、流石に日蓮宗の大本山たる崇嚴觀を興へるものがある。私は階段の下に靴を脱いで祖師堂の中に拜首ひまかき、長き渡り廊下を傳うて客殿の間毎々まごを拜觀して歩いた。

寺の庭から頭を上げて祖師堂の屋宇の方を高く仰ぐと、奥の院は眉端に迫つて杉檜鬱蒼として、遙かに陽炎を吐いてゐる。

二三日前、身延に詣つて來ようと思つた時にはこゝに一二泊して奥の院を極めようとまで思つてゐたのであつたが、高野山や比叡山に各々三箇月も參籠してゐた時分とは、自分の境涯が一變してゐるので、何だか一泊さへもする氣がなく、それよりも少しでも早く興津の假宅に歸り着いて、毎日の例にならひ、幼児どもを風呂に入れてやることの柔かなる慰樂を思望した。午後三時發の汽車に遅れぬやうに、そこ／＼に寺院を見廻り、女人坂より下りて、バスケットを預けた旅館に戻つて來ると、三時の汽車に聯絡する乗合自動車が見廻り、女人坂より下りて、バスケットを預けた旅館に戻つて來ると、三時の汽車に聯絡する乗合自動車がすぐ出るといふので、自動車の出發する總門の處まで直ちに人力車を急がせた。

歸途は乗合自動車に乗つて身延まで戻つて來た。汽車は右窓にまともに三時ごろの日を受けて、煤烟と暑熱とで堪らない暑苦しさであつたが、それでも往路よりは時間の經つのが早く思はれた。富士驛で東海道線に乗換へ、無事興津の自宅に着いたのは午後七時頃であつた。

## 久能山

八月もやうやく末になつて、今年の夏も終に近づいた二十九日の晴れた朝であつた。もう此の間から一日遊びに行きたいと思つてゐた、清水市郊外不二見の龍華寺畔に住んでゐる大岡龍男君を訪問した。

三十一日か九月の一日の朝早く立つて歸京する豫定にしてゐるので、執筆の仕事は二十八日きりであつた。二三日は何もせずに、のんきに遊ぶことにして、龍華寺畔の大岡君を訪ねるついでに、その先の久能山に詣つてみたいと思つて、八時三十分發の汽車ですぐ次の驛の江尻に向つた。そこから久能ゆきの乗合自動車に乗つて行くと、約四十分で久能山の下まで行くのだが、途中龍華寺畔の大岡君の處を先づ訪問せんとて、同乗の客も皆龍華寺見物に來た客であつたので、久能ゆきの道を、六町ばかりそちらに自動車を横道さして、龍華寺の手前の鐵舟寺の前で自動車を下りた。そこから三四町いつたところ、龍華寺の前松ノ木山の田圃の中に、大岡氏の別荘は新築されてゐる。大岡別邸の縁側から渡すと、緩い傾斜面の青田の果に三保の入江はすぐ眼の下に差入れて、左の方は、それにつゞく清水の港に碇泊してゐる巨船が、幾つとなく沖に繋つてゐるのが見える。もし、空がからりと晴れてゐれば、そこらあたりの中空に、眞正面に富嶽を望むのであるが、その日も、あひにく雲が多かつた。

大岡君と少時文學談に花を咲かしてゐたが、今日はこれから久能山に詣るつもりで居ることを話し、もし差支へなければ案内かたゝ同行をしてもらひたい希望を語ると、大岡君は直ちに同意して、それよりほつほつ支度をして、涼しい青田の畔道を傳うて、十町ばかり久能街道の自動車の停る處まで歩いていった。

これから自動車は、三保の岬の根元になつた處の、海濱の砂丘に沿うて走つていつた。そして砂丘が盡きると、久能山の突端になつてゐる水成岩質の山麓を、駿河灣の外洋に沿うて西に向つて行くのである。そこは駿河灣の中になつてゐるが、そこまで來るともう太平洋の水に瀕してゐるのである。蒼海渺茫として一點の眼を遮る物もない。

やがて久能山下の漁村に到着した。徳川家康を祀つてある久能山は、太平洋の波打つ際に迫つて突出した峻嶮なる山角を、急角度の傾斜を成した數千級の石磴を雁列形に迂曲して登つて行くのであつた。そして外洋の展望は、石段の一級ごとに大觀を増して來た。石磴の兩側には各種の常磐木の綠葉が蒼鬱として繁茂してゐるのを見ても、冬季の溫暖なることが思ひやられた。大岡君はいつた。

「却つて、此の海には島などないのが月並でなくつて好いですな。」

私は大きく肯いて賛成した。

「家康は、日光で存分山巒の氣分に浸つてゐるから、此處で思ふ存分に海を眺めてゐるのだ。」

烈しい炎陽の輝きの漲り渡つた萬里の蒼波は、白銀の如き強い光を反射してゐるので、私のやうな眼の衰へてゐる者は、少しでもそれらの方へ視線を向けると、眼がしくしく痛みを感じる。その海のふちを取つたやうに眞つ白に波の碎けてゐる長汀が、何處までもく遠くへ走つてゐるのが水煙模糊の彼方に消えてゐる。

やがて高い石磴を上りつめると、そこには恰も城門のごとき嚴めしい樓門が建つてゐる。そこに佇んで又しばらく涼を入れながら、双眸に入つてくる海洋の壯觀を眺めてゐた。見飽かぬ景觀である。そこを又一寸上つて行くと、やゝ廣い平坦な地面に出た。そこには見晴しの茶屋、寶物館、有名な深い堀などがあった。私達は茶屋に腰掛けてやゝ暫く憩ひ乍ら、そこで梨を割り、菓子を摘み、茶を啜りつゝ、大いに大岡君と政治を談じた。蓋し大岡君は、有名な政治家を父としながらも尙ほ文學に志すくらゐの人であるから、私に政談を持ちかけられるのは甚だ迷惑する所であつたらうが、政談は僕の病癖であると同時に、先刻から文學談はもう飽きるほどして來たのであるから、少しは政談をしても氣が變つてよかつたのであつた。

茶店でやゝ疲れを休めてから、清酒とした茗蒸した石疊みの道を、東照宮の本殿の方へ上つて行つた。四邊樹木鬱蒼として、神寂び、清涼爽快の感溢れてゐる。私は、十日ばかり前に詣でた身延山を自然に聯想した。あちらは日蓮宗の本山であり、こちらは徳川氏の始祖家康を祀つてゐる處である。明治以後は徳

川氏の権力地に落ちたけれども、流石に幕政三百年の餘威は今日の久能山にも窺ふことができる。身延山の何となく俗化してゐるのに比して、久能は遙に神寂びたる一清淨の地域をなしてゐる。型のとほりの拜觀をそこそこに済まして、一時に久能を發する江尻行きの自動車に間に合ふやうに又石段を下りて來た。嚴冬一二月の候、その邊はすでに黄色い菜の花が咲くといふ。さもあらう。たしかに久能は、冬季にもう一度、來て見たいといふ氣持ちがした。

それから又自動車で先きの停車場に戻り、再び青田の畔道を傳うて大岡氏邸に歸り、晝食の馳走になつて、長き夏の日を殆ど五時頃まで閑談に耽つた。三保の入江の方から青田の上を吹いて來る風は眞に夏を知らない。

龍華寺畔の大岡氏別荘から清水の街を通り過ぎて江尻の驛まで約一里ある。六時に近い汽車に、間に合ふやうに大岡氏の俚に送られて道を急いだが、少しの事である間に合はなかつた。それで江尻から興津ゆきの乗合自動車に乗つて、興津の自宅に戻つて來ると、家ではもう子供達も風呂に入り、夕飯を済まして蚊帳の中に入つてゐるところであつた。

大岡君の處を辭するに際し、鯖の大尾を贈られたのを持ちかへり私は洋服を脱いで眞裸體になり早速それを調理して、悉く鹽浸しにした。翌日軒先につるして炎天に乾かし晝餉の菜に焼いて食べると、その好味は、海水浴に適度の運動をして快い空腹を覺えてゐる胃の腑に更に一段と食欲を唆るのであつた。

その日は完全に一日を有効に遊んで來たといふ満足の感を抱きながら、涼しい蚊帳の中に入つた。子供達の寢亂れた乳くさい臭までが生存の悦樂を唆るやうであつた。

(十月一日)



## 箱根の山々

夏が来て、また山の地方を懐かしむ感情が自然に私の胸に滲んでくるのを覚える。何といつても山を樂しむのは夏のことである。會遊の夏の山水風光を、かうして今都會の中にある追憶して見るさへ懐かしさに堪へないで、魂飛び神往くの思ひがするのである。

日光の奥中禪寺湖の短艇ボートの上で遠く仰望した男體山の雄姿。そこからまだ三里の山奥を巡つて入つていつた湯の湖の畔、自然がいかなる妙技を以つて作り成したかと思はれる人工その物の如き庭園の草樹を分けて流れる潺流の美、盛夏八月既に秋冷を感じる湯元の浴舎の座敷から眞青な夏草に被はれた前白根の清らかな色を眺めた時、又はその前白根の突兀たる頂邊に夕月の輝きそめる宵、晩涼に乗じて古い神話の中にでもありさうな幽暗なる湯の湖の上に輕舟を操りながら、まるで魔界の巨人の如き男體山の肩背の枯槁色に黄昏れてゆくその崇嚴な美に見惚れた時、いづれか私の自然に對する感情を騒がさしめぬものはない。けれどその美しい日光の山の胡水の色も、私の弱い心には往々にして唯美しいといふよりは寧ろ不可思議な、そして怖しい自然となつて威壓を加へるかのごとく映ずることがある。それに比べると箱根は、日光のごとき崇美の感じには乏しいけれど、一層の安らかさを感じる。靜に心を落着け、病弱の體を休息

せしめようとするには箱根の方が好ましい。

私は去年の夏の半ばから秋の始めへかけて二九月ばかり箱根にいつてゐた時分のことを今そぞろに想ひ起してゐる。その年は六月の末からかけて七月一ばい八月の初十日ごろまで息をも次がせぬほどの炎暑で、東京などでは屋敷の隅に生えた桃の若木のやうな草木などはあまりの日照りに枯死してしまふ有様であつた。私はその八月の十日に立つて箱根にいつた。私がゆく二三日して、がらりと天候が一變して、連日駿河灣の方から箱根山麓を越して吹いて来る西南の風は涼しいといふよりも寒いほどの雨氣を含んでゐた。殊に私の滞在してゐる海拔二千五百尺の蘆の湯のあるところは、すぐ浴舎の後に聳え立つ駒ヶ岳と双子山との峽になつてゐるので、蘆の湯から双子山の麓を巡つて元箱根の町のある方に降りてゆく一と筋の坦道、鷺坂といつて八月の半ばまで箱根竹の叢敷の中で一日鷺の鳴きしきつてゐる、坂のあるあたりは蘆の湖の水を含んだ冷い雨風が顔をも向けられないやうに強く吹いてゐた。湯疲れのした湯治客などが毎日の雨天に球突にも碁や將棋にも飽いて、浴衣のうへに貸し襦袢を重ねて番傘を翳しながら其處らを退屈さうにぶらぶら歩いてゐたりするのを見掛けるが、彼等は少し歩くと話らないので、すぐ引返へしてしまふ。そこになると日本人に比べて西洋人は男も女も實に感心するほど勇ましく活潑である。彼等は雨が降らうが何が降らうが第一着物がすつかり防水の用意が出来てゐるので雨天には雨天の身装をして晴天と同じやうに一日も缺かさず運動をする。彼等は病人か何かでない限り温泉はななくとも多く蘆の湖畔に避暑してゐ

る。そして定つて毎日そこら中の山道を跋渉する、私が散歩してゐると毎時よく見る其ある二三人づれの婦人など、どれも縹緖は好くない女達であつたが、靴の上に草鞋を穿いて雨中の山道を歩いてゆくのであつた。どうかすると夜道を湖水まで歸つてゆくので懇意な店屋に寄つて、店頭から、

「提燈々々。」と呼ぶ。

すると世辭のいゝ、その内儀や娘は尻輕に立ち上つて、

「奥様、まあお遅くから。これからお歸りになるのは大變ですなえ。」

など、言ひつゝ、手早く大きな文字で屋號を記した提燈を取つて蠟燭に火を點しながら渡すと、

「おゝ、大變々々。ありがたう。」

など、アクセントの違つた日本語を店頭に残しておいて歸つてゆく。

その時分からずつと九月の末まで五十日ばかりの間雨天の日の方が多かつた山の上でも、偶には清い初秋の風が習々と高原の草原を吹いてゆくやうな美しい日に出會ふことがあつた。この模様なら明日もまた雨であらうとおもつてゐて翌朝起きてみると陰晴定めない高い山の上は相模灘の方から朦々として湧き上つて来る白い水蒸氣に峯も溪も人家も埋つてしまひ、わづかに大空の眞中のところが少許り明るい日光を洩してゐるばかりである。さういふ日は山の上の天氣も今日は好晴であることが分る。その水蒸氣の湧くのを見てゐるのも夏の高山生活の一興である。蘆の湯は箱根七湯の中でも最も高い位地にある。その爲め

蘆の湖から吹き送る濕氣が多くていけないなどいふ者もあるが、併しその相模灘から湧き上つてくる水蒸氣が刻々千變萬化の奇趣妙景を盡しつゝやがて雲となり溪を埋め、峯を這ひ大空を蔽うてゆく有様を見ようとすれば蘆の湯に足を逗めてゐなければならぬ。それは蘆の湯のある處が箱根山彙中の最も展望に都合の好い位地にあるからだ。蘆の湯から一里ばかり下の中腹にある小涌谷や底倉、宮の下などは旅館も完備してゐて入湯するには何斯たかが便利ではあるが散歩はいつも溪の底の單調な一筋道に限られてゐる。そこから仰ぐ明星テ岳、明神岳の眞青な夏の姿も美しくないことはないが眼界は上の方に比べてひどく狭められてゐる。小涌谷まで登ると眺望は底倉あたりよりは遙に遠く展けてくる。けれども、蘆の湯附近の峯々の、相模灘の煙波を遠く眺めうる形勢の地勢に比ぶべくもない。國府津、大磯から江の島につゞく津々浦々に打寄する波頭は丁度白銀の蛇の蜿れるごとく、靜に眸を澄すと三浦半島の長嘴は淡藍色の影を遠く雲煙漂渺の境に曳き、その尖端海に没するところ、あるかなきかの青螺のごとく微に水に浮んで見えるのは三浦半島の城テ島である。

蘆の湯はちよつと其處らの小山に登つてもそんなに展望の利くところにあるから、どちらにゆくにも道は四方八方に通じてゐて窮るところがない。日に幾臺となく自動車の馳走する九十九折せる坦道を小涌谷の方へ降りてゆく順路に沿うて歩いてゆくと道の右方にあたつて舊東海道を通ずる古い大溪谷の眺望が深く抉つたやうに展望される。私はその緩い勾配をなしてゐる往還に櫻木の杖を曳きなから宛然大きな生

物が口を開けたやうな溪谷を眺めるのが好きである。そこから見ると双子山が一入雄偉な容姿に見える上、双子と下双子とが須雲川の深い溪谷にまで長く裾を曳いてゐるのも何となく壯大な感を起さしめる。好晴の日に相模灘から湧いて来る水蒸気が、小田原口から早川の溪を眼がけて押寄せ、湯本から二派に分れて一團は早川の溪を埋め、明星ヶ岳、明神ヶ岳の峯を這ひつつ次第に西北に進んで宮城野の村を深い霧の底に沈め、金時山から足柄峠、長尾峠に向つて長驅する。私は、いつもそれを蘆の湯の笛塚山に登つて觀測する。そして一脈は、天氣の好い日であると須雲川の溪を埋めつゝ、舊東海道に沿うて軍を進め、聖ヶ岳と鷹の巢山との中腹を掩ひ双子山の裾を這ひ、肩を隠し倍々奔騰して蘆の湯の空を渡り、駒ヶ岳神社に向つて突進する。それが雨後の濕つた天氣の日であると、白い雲霧は丁度深い水の底に澄んでゐる眞鯉の背の如き濃藍色をした聖ヶ岳の中腹を靜に搖曳してゐる。

夕陽が駒ヶ岳の彼方に沈んでゆく頃の山々の美しさといふ者はない。駒ヶ岳は灰白色の雲霧に隠れてしまつて、日頃の懐しい姿はどこにあるかさへ分らない。太陽も雲風の奥に影を没して、たゞ僅に微薄の白光を洩してゐるので、あのあたりにゐるといふことを思ふばかりである。そして、ところどころ煙霧の稀薄になつたところに、まるで無數の金粉を播き散らしたやうな夕映えが水蒸氣となつて煙り、日の射さない處は凝乎と不動の姿勢でゐるかと思はれるやうな雲霧もその實非常な急速力で盛に渦巻きつつ奔騰をつづけてゐるのであることが分る。さうして稍、暫く見詰めてゐるうちに、どうかすると深い雲霧の中から

山の一角を微に顯はすことがある。この時の駒ヶ岳は平常好晴の日に仰ぐ駒ヶ岳とは全く違つた非常な神祕なものやうに思はれることがある。

それに反して好く晴れた日の駒ヶ岳は清楚な感じがある。笛塚山または稍、遠く離れて鷹巢山あたりから眺めると薄や刈萱などの夏草に掩はれた眞青な單色を遮ぎる一木もない、大きなヘルメットの如き圓い山の膚に丁度編靴の紐のやうな九十九折りせる山徑が裾から頂上まで通じてゐて、眞白い服装をした西洋人の男女がそこを登つてゆくのが小さく認められる。蘆の湯から頂上まで一里半。婦人や子供でも午前中に行つて來られる。少しの危険のない、優しい山である。そこに登ると展望は更に大きい。富士山は手に取るやうにすぐ西北の空に聳つてゐる。眼の下には蘆の湖の水が碧く湛へてゐる。が、駒ヶ岳は東に向いた方を小涌谷から登つて來る道から眺めたよりも、蘆の湯から双子山の裾をめくつて蘆の湖の方におりてゆくその途上より仰ぐのが最も優れてゐる。丁度蘆の湖の東岸に沿うて長く裾を曳いてゐるその傾斜が今歩いてゐる往還のところまで緩い傾斜の一線を引いてゐる。好く晴れた日でも紗のやうな軽い浮雲を頂邊に着けてゐることがある。少し曇り勝ちの日だと直ぐ雲霧に被れて蘆の湖から湧き上る水蒸氣が丁度腰から肩のあたりを疾風のごとき勢で双子山との峽の方に吹いて通る。その往還から見晴しの茶屋あたりまでのところから仰いだ駒ヶ岳は何ともいへない懐しい姿である。私はその駒ヶ岳を最も好む。駒ヶ岳の、さうであるのに反して、その邊から眺めた双子山の南に面したところは、何となく人を脅すやうな感じを

與へる。往還から舊東海道の方に向つて深い溪になつてゐて、双子山の裾は美しい一線を長くその方に曳てゐる。そして一面薄をもつて被はれた山膚の處々に凄じい焦黒色をした太古の火山岩が磊々として轉がつてゐて、中には今にも頭のうへから落ちかゝつて來さうな形をしてゐる。そこから仰いだ双子山はたゞ何となく憂鬱な恐怖の感に満ちた山である。昔の所謂箱根八里の峠を越して往來をした旅人の眼にはきつと最も強い印象を残した山であつたにちがひない。見晴しの茶屋から、幾曲りかせる新道のだら／＼坂を元箱根の方に降りていつて、舊街道に沿うた湖畔の八町の杉並木を通り越し、箱根町のところから振顧つて眺めた双子山の形も亦た印象深い容をしてゐる。私は蘆の湯からいつもの櫻のステッキを曳きながら一里ばかりの道を湖水の方に散歩して、そのローマンチックな突兀とした双子山の山容を仰ぎ眺めることを樂みにしてゐた。

湖水の享樂は限りがないが、私は去年の秋一度箱根町から塔ヶ島の離宮の傍をめぐるつて元箱根まで僅かの距離を舟に乗つたことがあつた。嘗ては宮の下から大地獄の方を巡つて湖尻から舟に乗り駒ヶ岳を仰ぎながら箱根町に着いたことがあつたが、それはもう今から十二年も昔のこととて、明瞭な印象が残つてゐないが、去年の時くらゐ湖水の色を美しいと思つたことはない。それは避暑の客も大方退散した九月の十八日であつた。毎日降りつゞく秋雨に一日湯に入ると部屋の中に閉籠つてゐるのに倦み果て、山の上の人人は頻に天日の輝きを望んでゐた。するとその日になつて空はめづらしく晴れ、拭うたやうな碧空は溜

璃の如く清く輝き、ところ／＼に紗のやうな薄い白雲が漂うてゐるばかり、夏の頃の重く濕つた風とちがひ、爽やかな軽い初秋の風が習々と軽いセルの袖を吹いた。九月になつてからはその方には長く降りてゆかなかつたので、私はあまりの好い天氣に浮かれたやうな心地になつて櫻のステッキを曳きながらぶらぶらと歩いていつた。そしていつもの八町の杉並木を通り抜けて舊關所の趾から箱根町の方へといつた。そこらからが双子山の突兀とした容を仰ぐに最もよい。私は双子山を眺めながら箱根町を歩いてみた。

日本人の浴客が八月一ばいで殆ど退き揚げていつてからも西洋人は九月の十日頃まではこの湖畔に残つてゐるのであるが、それすらもう殆ど全部山を降りてしまつて眞夏の頃の賑かさはなくなつて、湖水の上にも舟の影は絶えてゐる。私は、ふと歸途は舟で元箱根までかへつてみる氣になつて、船頭を呼んだ。船頭は、この間からの雨で、もう舟などに乗る客はないだらうといつて舟は悉く水涯から遠く砂の上に曳き上げてあつたのを、夫婦が／＼りで丸太棒を轉がして水に浮べた。莖と毛布とを持って來て坐るところを設けてくれた。私は、近いところだからそれには及ばぬと辭退しつゝ舟に乗つて横木のうへに腰を掛け、舟が漸次沖の方へ滑つてゆくにつれて四圍の風景を顧望してゐた。夏の頃とちがつた湖のうへは遠く澄み、駒ヶ岳の裾を吹き下して來る風はもう冷いほど強く肌を沁みだした。塔ヶ島の水際に續いたさゞれ石を洗つてゐる水の色も先達て中とはちがつてひどく秋寂びてゐる駒ヶ岳の裾はそのあたりの湖の上から眺めるのが最もよい。その長く引いた裾根が蘆の湖の水に達かうとする稍々平な處に、岩崎男爵家のコッテージ風の

別荘がある。丁度スチュヂオなどの繪畫雜誌で見る如きピクチュアエスクな家造りで、初め、あれが岩崎男爵家の別荘と聞いた時には、すぐ吾々の平生の心の習慣から富豪の獨占を嫉み憤る念がちよいと頭を擡げかけたけれど、それも仕方がないと稍と諦め心地になりつゝ、尙ほ凝乎と眺めてゐると、もしこのコッテージがなかつたならば、荒寥として見えるべき裾根の風景が、寧ろそれあるがために自然の景致に一點の情味を加へて、却つて親しみのあるものに感じられて來るのである。其等の風光に見惚れてゐるうちに舟はいつの間にか塔ヶ島の鼻をめぐつて元箱根から八町の杉並木を一眸に見渡されるところに進んできた。私はその時見たくらゐの杉の色の美しさを未だ嘗て見たことがなかつた。日光の東照宮山内の杉の色の美しさも忘れることが出來ぬのであるが、しかしその時湖の上からある距離を置いて遠く眺めた蘆の湖畔の杉の色の美しさといふものはない。どんな天才が丹青の妙技を凝しても、その杉の色の美はとも人工で描き出せるものではないと思ひながら、私は飽くことなく、ぢつとその杉の美に見惚れてゐた。その間に舟は段々元箱根の方に進んでゆくにつれて一としきり杉並木の方にも段々近寄りつゝ通つていつた。さうなると今までの美しさは恰も幻影のごとく次第に減じてきた。元箱根の上の方に突元としてローマンチックな情景を點出してゐた双子山も段々近づくにつれて、その怪奇な姿から、やゝ平凡な山の形に變つてきた。私ともし箱根山彙中の峯々によつて異なる奇趣妙景について名を選するならば駒ヶ岳は前にいつたやうに夏の姿をもつて最も優れりとする。双子山もこれを蘆の湯の方の西北から仰いだのでは何等の奇景がない。

それに反して南面舊街道の溪谷から見上げるか、或は蘆の湯より鷹巣山の方に向つて降つてゆく時、道の右側須雲川の大溪谷に面して長く裾根を曳いてゐる方面が最も雄偉の感じを與へる。それと箱根町の湖畔からやゝ遠く距離を置いて仰いだローマンチックな姿である。新道から須雲川の大溪谷に向つた方面には特に雲嵐矢よりも速く上騰してゐる時を選ぶ。

そして駒ヶ岳の晴天に仰ぐべき山であるに反し、蘆の湯方面より見た聖ヶ岳は、私は殊に雨後の景を好むのである。雨後の空がまだどんより灰色白に曇つてゐる時三千尺の聖ヶ岳は須雲川の溪谷の彼方に屏々として眞鯉の背の如き濃藍色の山膚をくつきりと浮出してゐる。そんな時には眞綿の如き純白の雲が腰から下を横様に棚曳いたまゝ凝乎と動かずにゐる。それを見ても自から氣が澄んで靜かな心持ちにならしめる。さういふ時に耳の近くで朝の晩涼を告ぐる銀鈴が爽かに響くと、もう堪らなく心が澄んで、名稱し難い希望と感興が湧いてくる。

八月末頃になると駒ヶ岳神山の裾から笛塚山、蓬萊山にかけて見る限り一面の茅原が可愛い淡紅の薄の穂を抽きそめる。それにまじつて女郎花、兜菊、野菊、米蓼、萩などが黄紫とりどりの色彩を添へる。去年蘆の湯にゐる間私の最も多く散歩した處は前いつたやうに双子山の麓を通つて蘆の湖へ降りてゆく新道、蘆の湯から舊道の辨天山の下を通つて池尻に降り茶屋の前で一度新道に出て、それから新道に即いたり離れたりしながら翠緑鮮かな松林の中を穿つて通じてゐる舊道の細徑を傳うて小涌谷に達する間。それ

から鷹巢山、笛塚山などへもよく上つていつた。松林の中を分けて舊道を小涌谷の方に歩いて来ると、もうそこら中に女郎花が點々黄色い花をつけてゐる。湯の宿にも客はめつきり減り、道を歩いてゐる人影も眞夏の頃と違ひ甚だ稀に、一山間として、氣爽かに、心自から澄み、神牙え何を思つてみても、それが何處までも深くふかく考へることが出来る。東京にゐたならば僅かに四町か五町の道を歩いても脚よりも先づ神經の方が四圍の物のために疲れを感じるのに、山の中では嘗てそんな憂ひはない。私は例の櫻のステッキを杖つきながら、松林から吐き出す強いオゾンの香を呼吸して、細徑を穿つて歩いてゆく、段々下へゆくにつれて、今まで自分と同じ高さにあつた笛塚山、鷹巢山は次第に高くなつたかなくなり、近くから見ると平凡であつた山の形もそれと、もに何かしら尊い威容を備へて頭の上から臨んでゐる。笛塚山は後三年の役に、新羅三郎義光が、兄の義家が清原武衡と戦ひ利あらざるを聞き、己れの官職を辭して遠く奥州の地に赴き援けんとする時、義光が笙の師豊原時元の子時秋が、乃父の秘曲を傳へてゐる義光の後を追ふて足柄山に到り、一夜明月の下に山上に桶を布いて坐し、笙を吹奏して秘曲を授かつた。その古跡として傳へられてゐるところである。果してその笛塚山が桶を布いた跡かどうかは知らないが、笛塚といはれてゐる處には大きな岩石が重なり合つてゐて上が三疊數ぐらゐに平つたくなつてゐる。私は荻萱の穂波をわけて雲霧の美しい好晴の日には必ずそこまで登つていつた。鷹巢山は昔小田原北條氏の出城のあつた跡と言ひつたへられてゐる。白茅ばかりおひ茂つたその山の背を淺間山、城山、湯坂山と、どこまでも傳うてゆく。

くと一里半ばかりで徑は獨りで湯本まで通じてゐる。湯本から蘆の湯に達するにはこの道を往くのが最も捷徑である。これは湯坂道といつて、昔の間道である。秋晴の日などに展望を恣にしやうと思ふなら、その峯を傳うてゆくに越したことはない。湯本から順路を宮の下に取つてゆくと、溪ばかりを往くことになつて眺望が利かない。然るに鷹巢山の背を歩いてゆくと、殆ど箱根山彙の全景を双眸に集めることができる。

それから前いつた道に戻つて小涌谷におりてゆく臺の茶屋から小涌谷の平、二の平、強羅の平を越して遠く明神ヶ岳に溪の底に群つてゐる宮城野の村を見下ろしたのも懐かしい。池尻か、臺の茶屋に熄ひながら初秋の冷涼そのもの、如き梨の汁を啜りつゝ、すぐ眉の上に聳つ鷹巢山と峯つゞきなる宮の下の淺間山と二の平と強羅の傾斜との彼方に早川の溪が挾つたやうに深く掘れてゐる。その上に明神ヶ岳は屏々として、濃藍色に暮れてゆかうとしてゐる。明日の晴を報ずる白い雲の千切れが刻々晒色に夕映えてゐる碧空に向つて飄々として上騰し、金時山、足柄山の方に進んでゆく、池尻の茶屋の老婆は

「毎日々々よく降りましたが、明日はどうやらお天氣らしいございます。雲の具合が大變よろしいでございます。」といふ。

さういふ言葉にはもう何十年の昔しからこの山に住み馴れた經驗から雲の動靜や暮れゆく山の色、空の夕焼の模様で天候を卜する知識を得てゐるらしい。

「あゝ、あの雲はお天気らしい雲だねえ。」  
 「左様でございますよ。あの雲が明神ヶ岳のところをあゝ西へ上つてゆくと明日はお天気がよろしうございます。」

そんな話を交はしてゐるうちにも山は黒く静に暮色に包まれてゆく。それとともにすぐ眼の下の小涌谷あたりに丁度夏の宵の星くづを數へるやうに彼方にも此方にも燈火が瞬きをはじめ。一番遠くの谷の底に暮靄の中に微かに見えてゐるのは宮城野の人家の灯である。吾々がたゞ見てさへ懐かしい。況してその村から、家にみれば氣まゝにしてゐられる親の傍をはなれて、蘆の湯や小涌谷邊りの旅館に奉公してゐる村の娘等が、山の上から遠くの溪の底に親里の團樂の灯を眺めて胸を挫る如に懐しがるのも無理はない。東京や横濱さへも知らず、中には小田原あたりさへ、生れて一度か二度しか活動寫眞の芝居を觀にいつたことがないくらゐ、生れてから死ぬる迄一生山の中を降りてゆかず、明神ヶ岳の麓から朝に駒ヶ岳や早雲山にかゝる雲を眺めて暮らす彼女等にとつては、わづか一里にも足らぬ山の上に来てゐながら親里が死ぬほど戀しいのである。夏場の急がしい最中を働くと、八月の末にはもう暇をもらつて歸つてゆくことばかりを考へてゐる。そして客の減つてゆくにつれて彼等も一人づつ下つてゆく。

山は靜かに暮れていつた。冷いくらゐの涼味は茶屋が軒先の笥の水から湧いて、清水に涵した梨の味にも秋はもう深かつた。私はそこから遠い新道を迂回するか、或はすぐその庭先から急坂を攀ぢて辨天山

の脇の舊道を登つて歸つて来る。尾花が長く穂を抽いて道の兩脇から夕暮の中に微白く揺いでゐる。部屋にかへつて、手拭をさげて浴室へおりてゆくと懐かしい硫黄の香が鼻を衝いてくる。人によつてはこの硫黄の香をひどく嫌ふ者があるが、私にはそれが何とも云へずなつかしい。朝目覺めて揚枝を叩へて浴室に入つてゆく時、昨夜の夢の名残りを洗ひ清め、夜遅くまで靜に讀書などしてこれから寢に就かうとする時は、自から安かな眠を誘ふ。……さうして私は湯に浴つて散歩の軽い疲れを醫するのである。

箱根の山々  
 あまり遠くへ散歩をするに心地よく疲れて、書き物をする前に眠くなつてしまふことがあるので、筆を執つてゐる間はなるべく近い山の上を歩いてゐた。さういふ時にはいつも辨天山へ上つていつた。山が雨のあとで靜に濕つてゐながら水蒸氣のないといふやうな日には殊に遠くの山の色が濃く美しくなつて見えた。明星ヶ岳、明神ヶ岳の上に尙ほ遠く高く見えてゐるのは足柄、愛甲諸郡につゞく北相模の山々である。ヘルメット形の大山も見える。好く晴れた日の下には其等の山々が遠近になつて濃淡を劃し、丁度品質の良いインキを溶かして塗つたやうである。横山大觀の雲去來でも寺崎廣業の白馬八題でもこの眞景の秋山雨後には到底企て及ばない。

八月の末をも待たないで大抵の浴客は、家族を連れだ多勢の客でも、東京や横濱の繁華な都會から來てゐては三十日もあると山の眺め、温泉の香にも飽いてしまつて、まだ残暑の劇しい八月の二十日頃にぞろ／＼行李をしまつて降りていつてしまふ。いつた當座は、百に近い部屋がいづれ満員で、私は廣い庭を

隔つた遠くの離家に、東京の某中等學校の校長なる老紳士と室を隣して起臥してゐたが、やがてその老紳士も歸つてゆき、ほかの部屋も段々明いてきたので、私は受持ちの女中が寂しがるのを察して本館に近い別館の一室に移つた。其處は今までよりも一層心の落着くところであつた。長い夏の間東京にゐて極度に疲労してゐた私の神経衰弱もそこにゐる間にだん／＼元氣を回復して來た。始終不眠症に悩まされてゐたのが、山上の空氣の清澄なると適度の散歩と温泉の効果とのため熟睡を得られるやうになつた。大きな建物の長い廊下を幾曲りかした果ての座敷に連日孤座してゐる私を見て、かゝりの女中は、御飯の給仕に來た時、

「旦那、お寂しくはないんですか。ひとりぼつんとして。」

といつて、氣の毒さうな眼をして私の顔を眺める。

「いや、ちつとも寂しくはない。」

といつて笑ふ。しかしその微笑には深い寂寞を湛へてゐたこととおもふけれども、その寂しみは私の好んで選んでゐる境地なのである。隣の部屋や廊下に登音や話聲がせぬので私は伽藍のやうな大きな建て物をわがものゝ如く獨占していつまでも朝寢をすることが出来る。

九月の七八日頃、二三日後に二百二十日を控えてゐるので何となく戶外はざわめいて、駒ヶ岳や双子山にかゝつてゐる水蒸氣は疾風の如く飛んでゐるけれど、日は黄色く照り、庭前の杉や楓は風に揺れながら

涼しい蔭を地に印してゐる。私はめづらしく隙間を洩れてくる日光が條文をなして白いものに包まれた軽い夜着に射しかゝるのを知りながら、いつまでも快い夢を貪つてゐた。やがて懐しい湯の香のそこはかとなく立ち上るのを嗅ぎ潔く起き上つて、戸袋に近い雨戸を二三枚繰ると、私の長寢をするのを知つてゐて、遠く庭の彼方に見える折曲つた廊下の先の部屋にゐて蒲團の綿を入れてゐるお秋といふ三十ばかりの質撲な女中は、雨戸の音に私の起き出たのを知つて、ふとこちらを見る。そして私が揚技を啣へて浴室に入つてゐる間にお秋さんはちやんと床を上げ、座敷を掃き清め、お茶を煎れて飲むばかりにしてゐる。私は靜かな心持ちになつて香ばしい番茶を啜つてゐると、そこへ彼女は味の好い焼きパンに甘いバターバターを付けたのを運んでくる。それが何ともいへず甘い。その時分であつた。ある朝のこと、まだ床の中に眼覺めたまゝでゐると、向うの双子山の麓のところを山を崩して地ならしをしてゐる、岩を推く鐵槌の音が靜かに山に反響してゐるのが長閑に枕にひびいて來る。私はその音に夢の名残りから綺麗に覺まされる。その頃であつた。私は駒ヶ岳に登つて見た。駒ヶ岳は前いつたごとく優しい、婦女子でも踏破することのできる山上公園中の主峯である。十五六の小娘などが二三人で四千五百尺の駒ヶ岳や四千七百尺の神山などへ午前に登つて來て、十分自分の健康を満足せしむるやうな雄々しい運動をしてゐた。私は炎暑のため衰弱し切つた體を物憂さうに持扱ひながら、僅に温泉の附近の山道を散歩してゐると、眞青な白茅に蔽はれた駒ヶ岳の背を九十九折りの山徑を傳うて登つてゆく人の姿が數へられる。私はどんなに其等の人の健康を羨んで



見てゐたか知れなかつた。私も早く初秋の風が山の背を渡る頃を待つて身内に元氣が回復して來たならば、少女でさへあゝして登つてゐる駒ヶ岳の頂を一度は是非とも踏んで見たいものである。蘆の湯五十日の逗留の間をこらの山道といふ山道は殆ど残る隙なく歩いてみた。たゞ一つ残るは駒ヶ岳である。

その日は朝の内は少しく二百二十日前の風が荒れてゐた。けれども清い秋の日は朗かに照り、浴舎のすぐ背に聳えてゐる寶藏岳の木々は細い梢の尖までも數へられる程に大氣は澄んで、黄金色の日光が其等の青い葉々に透きとほるやうに美しく漲つてゐる。天地渾然として瑠璃玉の如く輝いてゐる。駒ヶ岳にも今日は風に吹き拂はれてか、めづらしく雲霧がかゝつてゐない。それに自分は一昨日までに書く物も一段落を告げてこゝ二三日は頭を休め、放心したやうになつて居ようとおもつてゐる時である。よく晴れた日には書く物に精神を勞してゐる、休養してゐる時には山が曇つてゐたり、雨が降つてゐたりして果さなかつたが、今日は兩方都合の好い日である。が、少し風が強過ぎるやうである。それで女中のお秋に相談しようとおもつて呼鈴を押すと、お秋の代りに物靜かな老婢が廊下を歩いて來て、用を伺つた。

「今日これから駒ヶ岳に登らうと思ふんですが、すこし風があるやうですが、どんなものでせう。」  
さういつて訊くと、老婢は、

「左様でございますねえ。」といつて、外の木々の風に揺れてゐるのを眺めながら、思案顔にこちらを向いて、

「今日はすこし風が強過ぎるやうでございますから又の日になすつた方がよろしうございませう。下での通りですと、山の上はずつと風が強うございますから、今日はお止めになつた方がお宜しうございませう。」

人柄さうな老婢は忠實にさういつて、きつぱり止めた。

「ぢや止ませう。」

と云つて、私は其の時は斷念した。そしてまた暫くして、やがてお秋が運んで來た晝飯を喫しながら庭の方を眺めてゐると、立木などは先刻と同じやうにやつぱり風にざわめいてはゐるが、午前にくらべて稍靜かになつたやうである。日光は相變らず朗かに輝いて、そこらの庭木や芝生などが金色を帯びてゐるかのやうに思はれる。私の心はまた動いた。

「お秋さん、先刻駒ヶ岳に上らうとおもつて相談したら、風があるので止めた方がいゝといふので止めたんだが、どうだらうねえ。先刻よりか少し悪くなつたやうだが。」

お秋は外を眺めながら、

「このくらゐなら大丈夫でございます。ついでですもの、ちきに上れますよ。」

と事もなげにいふ。彼女等は昨日の朝私がまだ寢てゐる間に、お客や番頭や女中など七八人の多勢で上つて來たのである。

「いつてゐらつしやいまし。それは方々がよく見えて、いゝ景色でございますよ。昨日の朝は富士山がよく見えました。あんなに富士山をよく見えることはめづらしいつて番頭さんがさういつてゐました。それは面白うございましたよ。皆で勝手にいろんな面白いことをいひながら。」

それでもた私は心動いて、箸を置くと嬉々しながら渴を覺えた時の用意にと、大きな梨を二つ懐に入れて例の櫻のステッキを杖ついで、湯の花澤へゆく道から左に折て急がぬやうに登つていつた。道は暫く浅い溪の底を歩いて左右から蔽ひかゝつた苧宣の間を迂回しつゝ進んでゆく。ところづくに粗雑な休み臺がしつらへてあつたり、道の急なところには丸太を横へて磴道を設けてあつたりする。私は三步にしては憩ひ、五歩にしては振顧つて上つて來たあとを眺めてゐるうちに次第に自分のゐる處は高くなつていつた。そして知らぬ間に浴舎の直ぐ背後に聳つ寶藏岳は自分の脚下になつてゐた。自分の位地が高くなるにつれて四邊の峯々がまた漸次高標を増し、雄偉の度を加へて來た。双子山、聖ヶ岳、明星ヶ岳、明神ヶ岳は折から午後の秋の陽を全山に浴びて、愈々靜寂の容を示してゐる。山下の坦々たる一と筋の新道は双子山の裾をめぐつて長いリボンを展べたやうに遠く、駒ヶ岳の尾を引いてゐる彼方の高原の果にいつて没してゐる。尙ほ見返り／＼段々登つてゆくに從ひ、蘆の湖の水はすぐ右方の眼下に開けて來た。午後の日光を浴びて銀灰色に輝いてゐる水の上を幾つかの短艇が帆を孕ませて白鳥の如く動いてゐる。塔ヶ島の離宮、箱根町の人家、例の美しい八町の杉並木は沈んだやうな暗綠色を刷いて連なつてゐる塔ヶ島の蔭になつて

ゐるその邊は水の色も日光を反射しないので硫酸銅のやうな美しい紫色を湛へてゐる。山の色も水の色もそこら中の物が貴い顔料を落したやうに悉く翠緑の單色に彩られてゐる。

更に左方に眸を轉ずると、相模灘はまるで廣重の繪を展いたやうな濃藍色をして眼界に擴がつてゐる。小田原、國府津、大磯、それから江の島から逗子、葉山、三浦半島にまでつゞく津々浦々が双眸に集つてくる。大山、足柄山、金時山の峯巒が遠近に從つて幾色にも濃淡を劃しながら秋の陽を受けて桔梗のやうな色さまざまに浮びいでゐる。私はまたぢつと其等の遠景に眼を遊ばして一と息吐いた。清澄な山の上の風は心地よく汗ばんだ肌をさら／＼と吹いていつた。夏の初になるとそこら中眞青な夏草の上に點々として白い山百合が咲く。今は丁度その白い百合の花が靜かな山の夕暮れの中に隣いてゐる時分である。かうして今身はそこから百里を隔つてゐる京の町の中にも香氣の高いその百合の香が聯想作用で生々と私の臭官を刺激するやうである。

(大正七年六月卅日京都安井の寓にて)

## 下田の港

修善寺から十四里あるといふ、天城を越えて、七時少し過ぎにやう／＼、下田の街に入つて来た。自動車の窓からは、あやめも見えない。まるで雨空の闇の底に沈んでゆくやうに思はれてゐたが、町はづれに、ぼつり／＼<sup>ま</sup>點つてゐた灯影を認めると、皆な蘇つたやうな思ひがした。今朝東京から、汽車と、電車と、自動車とに八九時間も揺られて、神経も身體も可なり疲労してゐたが、小さいなりに眞角で、碁盤の目のやうに街路の整然としてゐるらしい道を、いくつか曲つて、平野屋旅館の入口に自動車が停ると、よろめく足を踏みしめるやうにして、十人の同勢は、なだれ出た。

瓦壁に白い漆喰ひをした入口から、雨に濡れた石畳みを歩いて明るい玄關に通ると、「いらつしやいまし」と、景氣の好い聲をかけてどや／＼と女中がどた／＼出迎へたりなどするので、一入氣持ちが引立つて、三時間乗り通して雨の天城を越えて来たのも、どこへやら、忘れたやうな心地になつた。

洋服を脱ぎすて、浴衣とどたらに着替へると、そのまゝ直ぐ風呂に入つて、ざつと流し、それで又一段蘇生した思ひになつて、互に顔を見合はして、悦び交はしながら茶をすすつたり、菓子を摘んだりした。

「たうとう、やつて来たさ」

「うむ。しかし随分疲れたよ」

私達は、其處でこのまゝ、ゆつくり夕飯をいただくことゝ思つてゐたところ、襦袢のままでは、又、秋雨のばらつく中を、自動車で、何處かそこらへ運んで行くといふので、爲方なしに多勢のするやうについて行くと、つい近處の料理屋の二階につれていかれた。

「は、下田の藝者を見せてくれるのだな」

と、合點しながら、秋聲老を先づ床柱の前に、それから年の順で私が右側、左側には中村武羅夫君、私の次には小川未明君といったやうに居流れた。早速御料理が運ばれ、下田選りぬきの紅褌がだん／＼繰込んで来た。これは、一行今度の案内にあつた東京灣汽船會社で催された歓迎會であつた。酒數行、一同、下田美人の派手やかなところを拜見所望とあつて、若いのが四人、姐さん顔四人の地で踊を觀覽。それから、酒盃の重なる度數の増すにつれて、地方情調の濃厚なる大島節の連發となつた。同行の漫畫家堤寒三、中川紀元君など紅褌の合唱に和して唄つた。就中堤寒三君は最も熱心で、これを好機と節を覺えることを勉めた。一行中の酒豪は翁久允君、中川君、林俊衛君などであつたが、下田美人にも決して退けをとらない豪の者あり、さいつ、おさへつ、果てはジャンジャコ／＼三味線の、かなぐり弾きの急調子に連れて、曲藝飲みといふのが、コップ酒を順繰りに呷るのが始まつた。

さうなくてさへ、今日の行程に、もう可なり疲労してゐる私は、一時頃汽車の中で辨當を使つたきり、定時の夕食も取らないで、さうして九時十時過ぎまでも、あまり欲しない酒盃を、やゝ過したので、三味線の騒音と大島節の亂調子に、かッと逆せ加減になつて、腦貧血を起しさうになつた。疲労が露骨に出て来た。

傍の秋聲氏は、しんねり強かつたが、それでも、御同様であらうと思つたので、前に坐つてゐる藝者に、そうつと飯の催足をして、中村君、小川君なども飯にした。私と秋聲氏とは、しほを見て、坐をはづして宿に戻つた。そして、秋聲氏と頭を突き合はして、寢床に横はつた時は、ほつとした。中村武羅夫君も、すぐ吾々の後から戻つて来て、頭を突き合はして四つ並んでゐる寢床の一つに横はつた。やがて、うと／＼となつてゐるところへ、元氣の好い連中も追々歸つて来たやうであつた。

次の日——九月二十二日——も生憎雨風であつたが、豫定のとほり、九時頃から、昨日の大型の自動車に同乗して、先づ下田灣内の左岸に瀕する、柿崎の玉泉寺に到つてタウンゼンド・ハリスの、日米最初の領事館跡を見物した。その沙洲の海濱柿崎辯天祠は即ち吉田松陰主従が、米艦に乗り移らんとして、暗夜暫らく身を潜めてゐた處である。

強風の襲ふ中に柿崎を一應見て、又自動車に乗り、下田の町を、今度は反對の方を抜けて、伊豆半島の南端を西南に向つて疾走すること五里許。石室岬の突端の眼近に見えるところまで連れて行かれた。その

往還には、到る處の川縁や田の中から、濛々湯氣を立てて温泉が湧出してゐるのを見た。

しばらく風ばかりであつた天氣は、又風のほかに雨を加へて来た。それでも大型の自動車に同乗してゐるので、みんな佻しい氣持ちなど忘れてしまつて談笑盡きなかつた。

十二時少し過ぎに豫定の蓮臺寺温泉に引返して来た。蓮臺寺温泉は、下田から三十町ばかり、天城越えの往還に寄つた處に在つた。温泉は無色澄明で、大きな、自然の川底に横した浴場に、適度の温度の湯が波々と溢れてゐた。一同それに浸つた時は、又、昨日からの疲れを一洗した思ひであつた。

午餐の膳に坐つて、又、暫く談話がはづんでゐたが、飯が済むと、私や中村君は、隣の室に入つて、一寸の間午睡をした。それで又、いくらか元氣が回復したやうであつた。しかし堤寒三君、中川紀元君、翁久允君などの元氣旺盛の連中は東京灣汽船會社の菊地氏、鈴木氏などと携へて来た色紙や短冊に漫畫や俳句を書いたりして座興盡きなかつたやうだ。

蓮臺寺温泉を夕方に引揚げて、その晩又、今度は、下田町有志の歓迎會があつて、それには 襦袢を脱ぎ更めて出席しなければならなかつたのは、一寸有難迷惑を感じたのであつたが、否むわけにもいかなかつた。今晚の料理屋は昨晚の處とは、ちがつてゐたが、紅裙は昨夕と同じ顔であつた。秋聲、中村二氏と私とは謀し合せて、いい加減にそつと外づして戻つたが、その後又、昨晚の料理屋に二次會をやつてゐるからせひ来てくれといふ迎ひで、爲方なく、中村君と私とで寢床を這ひ出していつてみたが、どちらも

酒はやらぬので、そこもまた間もなく出て戻つた。すると、その後で、下田町で刊行してゐる「黒船」といふ同人雑誌の一人に生意氣な奴が飛び込んで来たといふので、八人の同勢——その中には土地の人も入つてゐたが——が、そいつを袋叩きにしたといふ騒ぎを演じたりなどしたのは、今度の旅行の愉快なる挿話であつた。しかし元氣な連中は、それくらゐで、尙ほ有り餘る勢力を放散しないでは堪へられないので、土地の名物牛の厩を探索に出掛けていき、宿に歸つて来たのは、もう三時を過ぎてゐたと、翌朝になつての話。

秋の駒ヶ岳

秋の 一時は身の置き場の無いまでに劇しかりし今年の夏も、はや昨とすぎゆきて、まして梅雨このかたや、時候狂ひなる今年は、山の上に秋の訪れるも一入はやく駒ヶ岳、神山の裾より双子山の麓につゞく一望の茅原風清ふして秋心に満ち、新に穂を脱ける薄尾花の吹く風に靡けるさま野趣いと深し。

岳 櫻の若木にて造りたるステッキを打ち振りつゝ心の赴くまゝ肩を没する茅萱の中を分けて細徑を踏みゆけば、女郎花、野菊、水引、米蓼、兜菊、萩など、その間に點綴して咲き溢れたるが哀れなり。

九月七日

二百二十日を前に控へたる此の頃の天候とて、天は稀らしく晴れたれども、西南の風強く吹きて樹梢を鳴らし、戸障子を揺り動かす音騒々し。されど、さすがに秋は秋なり。日は尙ほ強く輝けども空碧く澄みて見る物すべて金色の光を浴び、温泉宿の背後に鬱蒼として聳てる寶藏ヶ嶽は明るき日の光にくつきりと

その全姿を浮び出して、明淨洗へるが如く、頂邊に到るまで樹々の梢端まで悉く葉の色を區別し得べし。陰晴一瞬の間も定まりなき双子山も今日は駒ヶ岳との狹隘より吹き來る風に雲霧を拭ひ去りて、全山を蔽ひ隠す篠竹の波の如く、強風に吹き靡くさまも縁端より認めらる。

蘆の湯より蘆の湖畔まで一里内外、双子山は僅に十三四町の登道のみ。蘆の湖畔へも既に數度散歩しぬ。双子山へも登りぬ。双子山の裾をめぐりて舊東海道の甘酒茶屋へもゆきぬ。余にとつて唯一つ未踏の地は駒ヶ岳の頂上あるのみ。駒ヶ岳（四千三百七十尺）神山（四千七百尺）と並びて箱根山彙中の主峯なり、之を日光の中禪寺湖を俯瞰して屹立せる八千尺の男體山などに比べて敢て雄彙とは云ふ能はざれども、目覺むるばかりの茅萱、薄などの青き夏草を以て全山を蔽はれたる清楚なるその形は恰も大なるヘルメットを伏せたる如く、溫柔にして親しみ易く、蘆の湯の西北に近く聳えて朝に、晝に、晩に余が眼を樂しましめぬ。浴舎のあるところより頂きまで僅に一里ばかり、婦人子供さへ午前のうちに容易に往いて復れるほどの適度の散歩道なり。遠目にはさながら滑かなる青絨氈をもつて包める如き半圓形の山腹を、殆ど編み靴の紐の如く九十九折せる細徑を白衣の人の三々五々登攀するを屢々望見しぬ。夏に疲れたる余はわづかに浴舎附近の低き丘陵を散歩しつゝ、毎にその駒ヶ岳を仰いで少しも早く彼の頂上を極め得るまでに健康の回復せんことを祈りぬ。

幸にして二十日ばかりするうちに健康は次第に回復して、肋骨の數へらるゝまでに傷ましく瘦せたる身

體も稍々肉付き、蘆の湖或は小涌谷あたりまで一里強の崎嶇たる山道を往復しても、さまで疲勞を覺えざるのみか、歸り來りて快く汗したる體を硫黄の香懐かしき温泉に浴すれば全身の筋骨この一時に溶けるかと思ふばかり譬へがたき快感を覺え、それとゝもに胃の腑は次第に軽く、淡き空腹を感じそめぬ。

かくて駒ヶ岳に登るべく余の元氣は次第に回復し、余の四肢は徐々に馴らされたり。しかも東京へ書き送るべき原稿は尙ほ余の適度の運動さへ束縛しぬ。今日健康のやゝ回復するとともに着手したるその原稿も昨日の夕刻までに認めをけりて、今朝の郵便に投函しぬ。次の仕事の期日は眼前に迫り居れど、今日明日二日位は着想を考案しつゝ心肝に湯に漬り、樂々と足踏み伸さんと思ひしに、幸なる哉、此間よりいつも雲霧に鎖されたる駒ヶ岳も、今日は珍らしく晴れて、浴舎の庭より明にその全姿を認め得べし。流石に大事をとりて、精力の無益なる放散を慎しみし余も、今日の美しき日の色を浴びつつ、碧く澄みたる空に繪の如く點出せる駒ヶ岳を見ては遊意勃々として禁ずる能はず。女中を呼んで相談せんものと鈴を押せば、いと物靜なるお針の婆さん出で來りて用命を訊く。

「今日駒ヶ岳に上らうと思ふのですが、どんなものでせう」と云へば、彼女は稍々沈黙しつゝ座敷より庭の樹木を吹き揺れる風の動靜を見乍ら靜なる言葉にて

「左様でございますか。すこし風が強いやうで御座いますから、今日はお止めになつた方がよろしう御座います。」

「さうでせうかね」

「下がこんなでございましたら、山の上は一層ひどうございます。もつと風の無い日にお登りになつた方がよろこばいませう。」

余はそれをきいて、忠實なる老婢の言葉に服して、即座に思ひ止りぬ。

やがて三時間ばかり経過して、午餐を運び來れる女中に、またそのことを語りて今日駒ヶ岳登山の望みをいへば女中は、

「此位の風なら大丈夫でせう」といふ。

風は前より静まりたるが如し。如之彼女も亦昨日の早曉四時滞在客や宿の番頭、男衆、女中など十人ばかりにて登山し、余の眼覚めたる八時頃には既に下山したるなりき。

而して昨曉の展望は雲霧のために妨げらるゝことなく、相模灘、三浦半島、遠くは房州の山々を前に眺め、後は蘆の湖の水を脚下に俯瞰し、遠く晴嵐の末に富士山をも眺めたりとて山上の絶景を激賞しぬ。

余の遊意は愈々動きぬ。午餐の箸を投ずると同時に心を決して、女中に麻裏草履を持ち來らしめ、例の櫻のステッキを打ち振りつゝ渴を覚えし時の用意として梨子を二個懐に入れ浴衣を二枚重ねて出でぬ。初め男衆を連れて行かんと女中に謀りしに、今日は生憎大掃除にて手の隙きたるものなしといふ。なに一人にても大丈夫ならんとて登りぬ。

道は暫らく山麓の陥落溪に沿ひて茅萱の間に切り拓ける細徑を傳ひてゆきぬ。高の知れたる山とは知りながら、はじめて登る山なればやゝ緊張したる心持にて漸々分け登るに、處々にロハ臺の設けなどもあり、下駄ばきのまゝ歩きし足跡など残れるを見て、此の山の畢竟、大なる公園の中の築山にほかならぬを感じぬ。

げに箱根は日光に比べて、深山幽谷の感極めて乏しけれど、これを婦人子供にまでも制取し得らるゝ一秋の山上公園として見んには斯くまで近づき易く、危険少き高山は他に求む可からず。近年箱根全山を開いて山上公園にせんと經營しつゝあるは宜なりといふべし。余は此處に來りて常に駒ヶ岳の麓を逍遙しつゝ彌々その感を深うしぬ。箱根全山一つの纏りたる山上公園なり。この上は東京との交通を一層便利にして日本の公園たらしむると共に、上野、井の頭、日比谷と同じく東京の公園たらしめたきものなり。

ところへに丸太にて足場をつくる山道を登りてゆけば、いつしか脚は既に寶藏ヶ岳の頂を踏んで遙に相模洋を俯瞰して立てるなりき。明星ヶ岳、明神ヶ岳、聖ヶ岳等の四千尺に垂んとする箱根火山群の外輪山は蜿蜒として一眸のうち全景を展開しぬ。小田原、酒匂、國府津、さては大磯に續く相模の平野はその彼方に遠くひらけ、大山、足柄の連山また秋天の下に淡藍色に染めなされたる艶姿を聳てたり。

(大正六年九月廿四日函嶺にて)

## 日光湯本温泉より

五月の末、來ん夏期の避暑のために、日光山内の寺院の貸別荘を借りに來たついでに、久しぶりに湯本の温泉に來てみた。

私は、前から、日光の如き山水の美を鍾めた處が日本國に存在することが、どんなに、吾々日本人を幸福にしてゐるか分らないと思つてゐるのであるが、それは、此の地に來る度に、新にする感懐である。

實は、日光の町——神橋のある町——に一泊したきりで、手頃な貸別荘の借約を済ました上は、早々歸京の豫定で來たのであつたが、その晩馴染みの旅館に泊つてゐると、東京では、もう薄暑を感じる季節であるのに、清爽な空氣の肌觸りといふものが何ともいへない心地が好い。今年から、東武鐵道の日光線が新に鹿沼まで開通して、從來の省線の汽車で、宇都宮を迂迴して來るよりか、東京、日光間が約四五分間も短縮せられたので、段々一日返りの觀客が殖ふるばかりで、泊まり客は劇減したといつて、旅館業者は、大分こぼしてゐるが、しかし、大日光の遊覽箇所は、廣大であるから、そんなに悲觀したものでもないと思ふ。

一浴して、汽車のほこりを洗ひ洗し、折柄一寸遊覽客の透いて、閑散な奥三階の座敷に、座布団を二枚

つないで敷いて、その上に、貸どてらを着て、寢轉んで、開放した肱かけ窓から南の方の空を眺めてゐると、そこに十日ばかりの新月が牙かにかゝつてゐるではないか。その際、私は、東京生活の地獄の苦惱を刹那的にだけでも、忘却して眞に蘇活の思ひがしたのであつた。

それで、どうせ夏には復た長期的にやつて來るんだから、その時にいつてみようと思つてゐたのであつたが、何だか、このまゝ直ぐ明日歸京するのが惜くなつたので、昨日、その前日一度見た貸家を、もう一度重ねて行つてみて、たうとう借約を定めた後、午前の汽車に乗つて歸京出來るところを、反對に、こちらに上つて來てしまつた。

まだ、五月雨には少し間もあるし、日光に來るなら五月も中旬過から丁度今時分が一等好い季節だと思つた。芭蕉に有名な句がある。

あら尊と青葉若葉の日の光

實際、日光くらゐ若葉の美しいところを、私はいまだ嘗て見たことがない。一體若葉の頃は、いかなる處を見ても美しいものであるが、日光ほど更に美しい處は私は知らない。

そこへ以つて來て、男體、女峰、赤薙の諸峰が、美はしい五月晴れの天空に、まるで手に取れるやうに、鮮かな薄藍色に匂ふてゐるではないか。

しかし、奥日光の新緑の最も美しいのは、何といつても、馬返しから先だ。あの深澤みこばの溪の兩岸に競ひ



削立してゐる斷崖絶壁を被ふてゐる木々の緑の色といふものは、世にも、これほど美しいものがあるだらうかと思ふばかりである。こゝは秋の紅葉にも好いところであるが、新緑は又一段の美である。

ところで、實は一つ困つたことがある。それは馬返しから先に自動車が開通したことだ。便利といへば便利にもかひないが、私は、馬返しから中宮祠（湖水）に至る間を自動車の通じたのは失敗であつたと思ふ。此の間の道は、あんまり遠い道ではない。盛夏ならば涼しい青葉のトンネルを徒歩して往き返へるに、まことに適度の山道である。私の知つてゐる限り、凡そ栃木縣くらゐ道路の整備された地方はないと思ふ。それは、彼の有名な、那須野ヶ原を開いた故三島縣知事の唯一の遺蹟であらうと思ふのだが、何にしても、栃木縣は道路が好い。殊に大日光は日本一の遊覽地區であるが爲か、馬返しから中宮祠邊に至る、男體山腰腹の山道など、非常に注意して修築し、且つ常に清掃せられてゐたものだつたが、二三年前から自動車がこゝを駛走するやうになつてから、ひどく道路が荒らされて來た。先には人力車に乗るか、徒歩したが、今日のやうな自動車が駛け出しては、それに乗らない者は、塵埃ばかり浴びて往かねばならぬ。且つ道にも車轍の跡の凸凹が出來てきて、その爲にも歩行に憚む。愉快な、盛夏尙ほ寒い緑蔭の散歩道であつたものが、不愉快極まる。都會地郊外の工場地のやうな悪道路に變つてしまつた。途中の茶屋茶屋に立寄つて一と息吐きながら、瀧を眺めたり、深い溪谷を俯瞰したりして、且つ涼を入れ、且つ山靈の氣を味はひ、やがて中禪寺湖の激瀾が眼に見えて來るのを樂みつゝ上つてゆくと、決して、道の遠きを

憂ひないばかりか、却て近きを惜むくらゐのものであつた。どうせ遊覽に來るので、用事で行くのではない。遊覽地を惡趣味にしてしまつたのは、馬返しから中宮祠までの自動車である。

しかしながら、中禪寺湖から、更に三里奥の湯元温泉までは、自動車は當然通すべきものであつた。坦坦として砥の如き戰場ヶ原の道路は、これも本當ならば徒歩する方が趣味があるのだが、乗り物で行くも亦惡からずだ。

戰場ヶ原から右方に仰ぎ見る男體山は格別の景致である。新緑の漸やく芽ぐみづけた雑木林の上に、ぬらつと濃藍色の山姿を靜かに天空に浮べてゐる。その風情は馴れ親むべき容姿である。

湯元は六月の初でもまだ寒いくらゐるが、豊富な温泉があるから、その寒いのは氣にならない。こゝも自動車が通じたりして、私が今から十五六年前初めて來た時に比すると、ひどく開けて來た。一體以前は、一と頃日本人よりも西洋人の方が多く避暑に出掛けて來てゐたものであつた。私は、それを見て思つた。西洋人は實に生活を享樂することを知つてゐる。日本人は、生活に追はれて餘裕のないためか、こんな幽邃明媚な自然境を國土に持つてゐながら、それを樂むことを知らない。さう思つてゐると、彼の歐洲大戰を境にして、その後は、西洋人は段々減り日本人の方がむしろ多く遊覽に來るのを見て、私は満足した次第であつた。

そんなわけで、旅館でも最も設備の整つたのは、ホテル式のものであつたが、近頃では必ずしもさう

ばかりではなくなつた。殊に去年の紅葉季節が、やうやく終りかけたところで出火があつて、此の狭い、山中の温泉郷は一夜の中に一軒の旅館を残して、あと全部焼失してしまつた。今や再建築が漸く出来上つて、自動車を通じたり、電燈が點火されたりする時代に適應するやうに新趣向が施されて、恰も太古の面影そのまゝであつた幽邃な別天地が、何となく俗化した感みがないではないが、いかに人間の力で成しうる部分だけが、新しい様式に變化したにしても、大自然の神工を、どうすることも出来るものではない。湯の湖の畔に沿ふた、幽靜なる散歩道路は、まだ大分季節が早いので、無暗に自動車の通行に妨げられる憂ひもない。兎島の鬱蒼とした森林の中、對岸の前白根の山麓には、さながら、この湖の傳説にある處女の面影を思はしめるやうな優にやさしい八汐花の、媚めかしい色が、そちらの緑の中にも、こちらの緑の中にも見出される。

人によつては、硫黄泉の香を嫌ふ人もあるが、私は、無臭無色の温泉よりも、多少硫黄の香のする温泉の方を好む。何となく温泉らしい、懐かしい匂ひがする。

私が初めて來た時から、もうそんなに不自由でもなかつたが、殊に自動車の通ずる今日となつては、日光の町から六七里も奥に入つた、この山中の温泉で、新鮮な刺身も食べられる。しかし私は、そんな贅澤な食物は要求する氣はない、何ともいへない清爽な感じのする空氣の肌觸りを味はひながら、床しい、懐かしい温泉の匂ひを嗅いで、向うの前白根の頂を去來する白雲を眺めてみると、眞に羽化登仙の夢心地がし

てくるのである。

## 房總をめぐるて

房總を隈なくめぐつたわけではないが、兩國から銚子にいつて、それから武總線の勝浦、上總興津の外房州を海岸づたひに、日蓮上人誕生の地小湊を経て内房州を還つて来た。

旅  
こ  
そ  
よ  
け  
れ

この方面は、私には、殆ど初めての自然であつた。今年け避暑期間の七月末から八月一杯を完全に東京の自宅に居つて、子供の看病に過してしまつた。私は、今更に子供といふものが、親の生活を束縛するものであることを、身にしみて感じた。尤も子供の生活といふものも、親の生活範囲のことだと思へば、それでも諦めがつくわけだが、子供といふものがあると、いかに自分一個の生活が拘束されがちであるかといふことを考へさせられた。

それでもお蔭で、從來夏といふと、半病人のやうに、まゐつてしまふ自分が、今に、自分もまゐりさうだ、まゐりさうだといひながら、毎日毎日素裸體で子供の看護の世話を焼いたり、夕方になると狭い庭の植木や草花に水を灌いだりして食事も一日まづいといふことなしに日を送つた。その他に執筆の仕事も少しはした。

どこかへいつて、二三日自然を見て來たい。やつぱり箱根が近くて好いのだが、めづらしくない。鹽原

房  
總  
を  
め  
ぐ  
る  
て

へは、十七年ぶりに八月の十三、四、五と三泊で、一寸息抜きに此の間いつて來た。その他、輕井澤へいつてみようか、それとも中央線で、信州の富士見の方へいつて高い山と白い雲を見て來ようかなどと考へた揚句、銚子の方をまだ見てゐないので、そちらへ何となしに新しい興味が動いた。

九月の二日の午前八時四十五分の汽車に乗るには、東中野からは七時半くらゐに出掛けなければならぬので、まだ、何處へ行かうかと思案してゐるうちに時が経つてしまつた。たうとう思ひ立つて十一時の兩國驛發の汽車に乗るべく家を出た。それまで行かうかゆくまいかと考へて、殆ど頭を悩ますまで考へたが「ちえッ！ 自然を觀て來よう。」と、決然として机の前を立ち上つたのであつた。なにゆゑに、そんなに考へたかといふに、そつちの方へいつて、心地よく二三泊出来る宿があるのであらうかといふ氣づかひであつた。實際夜分心地よく眠ることの出来ない宿へ泊らなければならぬくらひなら、自宅にじつとして居つた方が遙かに好いのだ。私が、房總地方へ未だ嘗て行つたことのないのは、それを氣づかつたからであつた。

しかし銚子の犬吠岬には、かねてその名を知つてゐる古い海岸旅館がある筈だし、それに銚子といふ處は、潮流の關係で、氣候が日本全國にめづらしく寒暑の中和を得た土地であると、少年の頃日本地理で既に知つてゐた。嚴寒と酷暑の時分に、新聞に掲出される各地の溫度表を常に注意してゐる自分は、嚴冬一二月の頃銚子の溫度は鹿兒島か、或は往々琉球あたりの溫度と同じい。そして八月盛夏の候は札幌函館あ

たりに稍、近いことを私は見てゐる。一度は必ずその銚子に往つてみたいものだ、私はかねて思つてゐた。

それに、自分は、全く、都會から遠く離れた田園に育つた爲めか、田野を見るのが殊のほか好きである。何人も廣々とした田野を見て心に快暢を感じぬ者はない筈ではあるが、私は、わけて夏の盛りの頃の水田の渺茫たるを眺めるのが好きである。芭蕉の句に、

早稲の香や分け入る右は有機海

といふのがある。私は、稲の花が咲き、やがて、それが稔る頃の稲の穂の香が好きである。その頃は蒸熱されるやうに暑いけれど、その、いきれる稲の香が私には何となく懐しい。いかに私が、生れながらの農民の子であるかが、それでも分るのである。私は農民の子であることに、淡い懐しみをおぼえる。稲の香の清新な氣持ちは、とても都會の塵埃の臭ひとは比較にならぬ。千葉地方は關東隨一の米の産地である。私はあの平潤な野に出ていつて、汽車の窓から、心ゆくばかり稲の香を嗅ぎたいと思つたのも、その一つであつた。

水田と丘陵と連続してゐる總州の平野は、どこまで行つても際涯もなくつゞいた。松林と杉の森と竹林とを背負つて小山を後にした田家がそこにも、こゝにも青稻を前にして散落してゐるのが汽車の窓から見えてゆくと、いかにも涼しさうである。が、あまりに平凡で奇趣のない眺望に飽き、後には、わづかに、銚

子まで四時間にも足らぬ車程に倦んでしまひ、クッションの上に長く仰臥して、ひたすら時間の経過するのを待つた。私は、こんな時に、もう前途の短い生涯の時間を空費することを惜むが、さういふ時には、どうも爲方がない。たゞ時の經つのを待つばかりである。

やがて、かすかに大利根の河口を遠望する處まで來た。けれども、地勢が、河口の風景を大觀することを許さぬ。たゞ、わづかに河岸の堤に連つてゐる松林の彼方に一縷の水を望むだけである。甚だ飽き足りない。

銚子はそのから次の驛であつた。汽車を降りると、たゞちに乗合自動車に乗つて大吠岬に向つた。三時頃の太陽は容赦もなく、乗合自動車の窓を射て、なか／＼暑い。古めかしい銚子の街を通り抜けると、海岸に近い甘藷畑と松林とのつゞく砂原道に出て來た。行く手の左方に白堊の燈臺が見えて來た。あゝ、これが有名な大吠岬の燈臺だと思ひつつ行くうちに、鷗鷗館に入つて行く田圃の中の岐道に着いた。そこで自動車を降り、四五町ほど松林の間の細徑を分けてゆくと、松の丘をだら／＼と向うに越した處に旅館があつた。しかし、私は少しく失望を感じた。旅館はいふまでもなく荒廢してゐて、殺風景である。その二階の縁側に凭つて、すぐ左方に近く眺める白堊の燈臺も、豫想してゐたよりも風趣に缺けてゐる。尤も、これは、燈臺を望むその時の場合によつて異ふので、もし暗夜波風吹き荒ぶ海上から望む時は、燈臺の燈臺らしい詩的價値を發揮するかも知れないのであるが、晩方、夕飯後に、その邊を散歩して見たとこ

ろによると、燈臺の直下の岬端の岩角を破壊して石材を採取してゐるのは、己むを得ないとしても、この岩角の風情を損傷するものである。

宿料は、高くないが、料理はすつかり田舎である。私は、爲方なく、あんまり欲しくもなかつたビールを飲みながら、午後の三時頃から日の暮れるのを待った。明朝は早々立つて歸らうと思つた。客は八月末までに悉く退散して、今は、廣い幾千百の客座敷に私のほかに一二人の客しかなかつた。

燈臺下の岩角を向う側に越した處の一帶の砂濱を君ヶ濱といひ、燈臺のすぐ下の亂岩が海波に洗はれてゐる處で、今から十年ほど前に早稲田の英文科を卒業して、まだ間のなかつた三富朽葉と今井白楊とが過つて溺死した。女中に訊くと、そこに石碑が建つてゐて、すぐ近くだといふので、私は夕飯後、燈臺を見ながら散歩して、彼等の靈魂を弔うた。二人は、三上於菟吉、宇野浩二など、ほと同時代の人間で、生存してゐたら、必ず相應に文壇に名を成してゐたに相違ない。惜しいことをした。私は時代が違つてゐたが、時代がちがつてゐたにしては、死んだ彼等や三上於菟吉などからは、相應に親まれてゐた。島村抱月氏を圍繞した、自然主義時代の早稲田派の人間のごとく私を排斥しなかつたばかりか、彼等はその代りに、それ等の人間の、私を排斥することを多少憤慨の意味を持つて、私を推讃し、評價してゐてくれたことを記憶してゐる。

のを、私はステッキをたよりに、漸うやうそつちの方へ下りていつた。なるほど、物凄い波の岩礁に向つて荒れ狂うてゐる水際から、やゝ離れた、海岸の草原の上に孤影悄然として自然石の碑の立つてゐるのが薄暮の中に遠く見えてゐる。私は、少々薄氣味悪い心地がしながら、あくまでも生前の三富や今井の、若若しい、希望的な風貌を心に蘇らしながら、活きた彼等に親む氣で、ステッキに薄闇を探りながら、石碑に近寄つていつた。石碑の面には、瀬戸焼に寫眞を寫した二人の影像が嵌入してあつた。いづれも二十二歳の若い寫眞である。私はその影像を眺めつゝ、指を以つて字を探りながら、やうやうにして、簡単な碑文を讀んだ。そして心の中で彼等の靈に別れを告げつゝ、駆け上るやうにして、又峻しい斷崖に人の踏んだ足跡をさぐつて、上まで上がつて來た。その時も、全く暗くなつて、遠くの海上には、點々たる漁火を見るのみであつた。この時燈臺の射光は、はじめてその威力を發揮して來た。サーチライトの光影は遠くの夜の海を照らしつゝしづかに回轉してゐる。

旅館に歸つて、八時半に淋しく床に入った。しかし床にすぐ安眠熟睡することが出來て、翌朝午前四時頃一度目を覺ましたが、ふたゝび寢入つて、今度は六時に又目を覺ました。

翌日の三日は、もし晴天であつたならば、成東から乗換へて、勝浦の方に廻はり、外房州から内房州の方を乗つてみようと思つてゐたが、起き出でゝ見ると雨天である。これでは、今日、直ちに兩國行きの汽

車に乗つて歸京することに決心し、鴨鶏館から直ちに自動車に乗つて銚子驛に來り、兩國までの切符を求め、汽車に乗つて三十分ばかり経つ間に空はだん／＼晴れて來た。よつて、車掌に話し房總線の終點上總興津までの乗換へを承認してもらふ。成東にて二十三分、それから大網にて十九分ばかり待つて、二度汽車を乗換へ勝浦、上總興津行きに乗ることを得た。空は晴れて、雨後の氣温が漸く蒸暑さを増して來た。この房總線は、今を距ること二十五年前、私が二十七歳の夏一箇月ばかり、たしか長者町驛あたりの海岸であつたかに海水浴にいつたことがあつた。

その時一の宮、大原などへも遊んだ。その時分は大原まで汽車が通じてゐた。山野の面影に多少の記憶が残つてゐるやうに思へるが、殆んど初めての處を行くやうである。やがて十二時かつきりに上總興津に着いた。御宿、勝浦からこの邊は海角の砂で固まつた岩山を削つて無數のトンネルを穿つて汽車を通してゐる。

興津から内房州の北條線の鴨川終點までの間隔は、よく分らぬが、鐵道旅行案内に依つて判断してみると、約六七里はあるらしい。その間を自動車で聯絡してゐるのであらうが、途中に、おせんころがしなどといふ斷崖絶壁があるといふので、その間を行くことに頗る危険を豫感して、殆ど一命を賭して行く氣がしたが、興津で自動車屋に訊くと、彼は強く頭を振りふつて「そんなことは斷じてない。保険付き。」といふ。

果して、おせんころがしの絶壁は舊道に屬してゐて、海岸の道は案外無難で、熱海から伊東へいく伊豆の海岸の一層峻嶒なるに比すれば極めて平夷であつた。おせんころがしを、左方の後尾に、あれと同乗の客に指し教へられながら見ていくうちに、自動車は暫く、小高き絶壁の上をいつたが、間もなく、とある山峽をめぐりて海と離れたとおもふと、そこに日蓮上人生誕の故跡として知られたる小湊の漁村があつた。誕生寺は直ちに、その小さき山峽を又向うの海の方に出抜けたところの街道に沿うて宏壯なる夢の堂宇を翳してゐた。車は、本門前の立て場に少時休むので、その間に、いそいで寺に詣つ、小湊は、安房と上總との國境を成せる山脈の山骨が直ちに太平洋の海波に迫りたる、街道に沿うて續く狹隘なる一漁村であつて、海岸には岩礁が多いが、峻嶒な山角が東南に突出して、海水が小さい灣入をなしてゐるので、漁船が多く纏つないでゐる。

私は蒼惶として寺に詣で、再び自動車に乗つた。そこから天津までは漁村つゞきである。この天津から日蓮上人が少年の頃修行得道したといふ清澄寺へ參道が一里半ばかり右方の山中に入つてゐる。私はそこで自動車を降り、立て場の茶屋で一と休みして、清澄行きの乗合自動車の發車時間まで三十分あるといふので、その間に親子井をこしらへさせて、はじめて晝飯にありつくことを得た。今朝七時大吠の鴨鶏館で朝飯をとつてから、正十二時に興津に來て晝飯を認める間もなく、直ぐ乗合自動車に乗つて小湊を経て天津に來たので、空腹を覺えたが、そこらに食事をするやうな處もない。しかたなしに、自動車の待合せ

茶屋親子井をでこしらへさせた次第であつた。

私は食事がすむと直ちに乗合自動車に乗つて、同乗の客、私と、もに三人で清澄寺に向つた。他の二人は遊覧の参拜人でなく、印半纏を着た職人か工夫などのやうな者であつた。車は、しばらく山際の稲田に沿うた道を行つてゐたが、いつしか山の尾根にかゝつて、段々に勾配のついた山腰を迂廻しつゝ上つていつた。自動車の上から右手の方を見ると、山は殆ど直立したやうな急峻な側面に、凡そ四五十年を経たからゐの杉の樹が轟々として密生してゐる。道のところどころに白いペンキ塗の杭が建て、あつて、東京帝國大學農科演習林と誌してあるので、杉の密生してゐるのが合點出來た。いよ／＼登るに従つて山はいよ／＼峻しく、杉の林はいよ／＼深くなつて來た。見ると、行く手の、向うの高い峰の杉林の中に草葺き屋根の民家らしいものが三四軒見えてゐる。はてな、あそこまでには、一つ深い溪を隔てゝゐるやうだが、どうして、あんな人里遠く離れた山の上に人家などがあるのだらうとおもひながらゆくと、山の尾根に依つて、山道はそこまでつゞいてゐるのであつた。そして、そこが清澄といふ山間の一部落で、清澄寺の寺前の山上に凡そ四五十戸ばかりの民家が散在してゐるのであつた。道の左右は幾千仞とも知られぬ深く峻嶒な溪谷で、一面杉の密林に掩はれてゐる。その馬の背の如き狹隘を通り越すと、一つの茶屋があつて、清澄寺は、すぐそこにあつた。やがて自動車を降りて、そこから五六丁ばかりの山道を登つてゆくと、先つき遠くから望見した民家があつた。その多くは、何を生業にしてゐるか、よく分らぬが、戸障子などの建具を

拵へてゐたり、中には鼠入らずの戸棚のやうなものをこしらへてゐるところを見ると、この邊は杉の木などの木材が豊富なので、そんな職人が住んでゐるのであらうと思つた。

そのみならず、向ふの峰の上には帝國大學農科の演習林の寄宿舎が建つてゐる。そこからは波濤の如き山脈の折り重なつた彼方に、本當の太平洋の海波が白く夏日の下に煙つてゐるのが見える。帝國大學の威力は、なるほど、こんな地の利を得た處に寄宿舎などを設けて、避暑を兼ねてゐるのだなと思つた。

清澄寺の仁王門は間もなくあつた。門前には休み茶屋だの旅舎などが少々並んでゐて、信者の参拜するのを待つてゐる。今にお會式の始まる時節になると、山の上はさぞ賑はふであらうと思つた。

寺内は清浄にして、樹齡幾百年を算するか知れない杉の老木が二本鬱蒼として立つてゐる。夫婦桶と札の建つてゐる桶の老樹もある。いづれも内務省から保護木に指定されてゐる。支關に立つて案内を乞ひ、寺寶を拜觀した。二位禪尼源政子の寄贈した遺物などもあるが、政子は此の再建に與つて力を致した。その他日蓮上人自筆の南無妙法蓮華經の題目を書いた幅もあつた。が私には、そんな物よりも境内のいかにも清麗にして、庫裡の爐邊から坐ながらにして直ちに波濤の如く重疊してゐる、峰巒の彼方に太平洋の蒼波を望むことが出来る、景勝の地にあるのが好いとおもつた。寺は、今日では日蓮宗となつてゐるが、昔は眞言宗であつて、千光山金剛寶院といひ、寶龜二年（今より凡そ千二百年前）の頃不思議法師といふ僧りて柏樹を伐りて虚空藏菩薩の像を安置し、伽藍を造建したるに創まると傳へられてゐる。後承久年中

北條政子の發願によつて寶塔、經藏を造建した。日蓮は此の寺に入つて得度し、建長五年山の西方朝日の森の岩上に立つて、初めて南無妙法蓮華經の題目を唱へ、一宗開創の基を開いたのであつたといふ。

もし佛縁があれば、この寺に一泊くらゐしてみたいものだと思つたが、それもならず、それに、老杉鬱鬱たる山寺であるが、折柄雨後の午後の陽がきびしく照り付けて暑さ堪へがたく、勿々にして乗合自動車の待つてゐるところへ引返して來た。下山はわづかに三十分ならずして、もとの天津の立て場茶屋まで歸着した。そこで、又、興津の方から來る乗合自動車を待つこと一時間ばかりにして、漸く北條線の鴨川終點ゆきの自動車に乗ることが出來た。乗合自動車は、いふまでもなくトラック式のがたゞ自動車で、私は腸を悪くするのを覺悟しながら、車の屋形の鐵棒に、しつかり掴つて、ぶら下つてゐた。

一里半ばかりで鴨川に着き、五時二十八分の兩國行きに乗ると、車室は私一人であつたが、西日に照らされて車室の中は、九十三度の暑熱であつた。私は窓を悉く開放して涼風を入れた。汽車が動き出すにつれて、海の夕風が吹入れて來た。恰も新月が空にかゝつて景趣は一層加はつた。

その晩は安房北條に一泊の豫定であつたところ、兩國驛に午後十時四十五分に到着するので、そのまま乗り通して北條あたりから、すつかり夜に入つたために、西房沿海の風景を闇の中に見て通つたのは残念であつた。(九月七日)

## 秩 父 紀 行

私が秩父君や中村武羅夫君などのやうな地主さんや家主さんとお交際つぎあひをするのは、丁度百石取りの小身者が十萬石の大名とお交際をするやうなもので、すこしく氣が張るのだが、二人ばかりぢや面白くない、君が行かぬと話がはづまぬ、何處かへ往つて、飯でも食つて一日氣樂に話さうぢやないか、一晚泊まるやうな處なら尙ほ面白い。それはよからう。箱根は便利だがめづらしくない。伊香保でも好いが、少し本物の避暑になりすぎる。日光はあまり仰山になつて見物する方に急がしい。ぢや秩父の長瀬に往つてみようぢやないか、遠さも丁度いゝ加減だし、鮎も食べられる。それで六月の二十六日少しくらゐる雨が降つても却つていゝ、午前十時までに森川町の秩父氏宅に出會ふことに一週間ほど前からハガキで協議が纏つた。人の心はいひ合はさねども皆同じものなのであらうか、いみじくも又奇しき因縁は、すると、その前晩の新聞の夕刊は、此度畏くもわが第二皇子の宮御成年につき宮中にては新に宮號を宣賜ありて秩父宮と稱し奉るといふことを報じた。その由縁は、武藏國は明治大帝陛下が始めて皇居を定めたまひし地であつて、帝都より遙に西北の方を眺むれば、遠く王城を繞りて、さながらに長城鐵壁を築いてゐるかの如くに見えてゐる秩父の連山は、萬世國家鎮護の表象である。即ちあの豪健にして男性的な靈山の名に因みて、



わが二の宮の宮號に選定あらせられたるは最も自然の意に叶ひたるものである。

大方の、自然に對して感受性を有つてゐる人達は誰でもさうであらうと思ふが、私自身にとつても秩父は懐しい山である。同じ武蔵野から仰がれる山の中でも秩父は富士よりも筑波よりも親みが多い。その理由は、富士や筑波は餘り東京から距離が遠う過ぎるので何處からでも自由に見ることが出来ないのと、も一つは遠望であるがためにあまりにビクチュアエスクであつて、山岳といふ感じに乏しい。まして、私ども長く東京の西北隅に住馴れた者には富士や筑波に親む機會は少いが且に夕に秩父の連山に親む機會は多かつたのである。私はもう十數年の間一處不住であるけれど、以前に牛込の赤城に住んでゐた頃には、その二階から丁度秩父の山を望むに好かつた。それは今から十五年も遠い以前のことである。私は、ある他の目的の爲にその家を借らうと思つて見に行つて、二階に上がつて見ると、思ひがけもなく眺望が好くつて、江戸川に沿つた牛込の低地から遠くは早稻田、雑司ヶ谷の森つき、その高い杉の群木立の彼方に蜿蜒たる秩父の連山を望んだ時には、その家が、他の肝要なる目的に適するや否やを十分に考慮することを忘れて一途にその家の二階の眺望が氣に入つて、どうしてもそこを借らずにはゐられなかつたことを覚えてゐる。それは秩父の連山が紫紺色に匂ふ晩春初夏の頃であつたが、段々夏になるにつれて、暑い朱色の太陽はその山脈のずつと北端の峻峭な峰の肩のところに沈んでいつた。

その年八月の二十日頃、もう街には青い唐辛賣りの呼ぶ聲が聞かれる時分であつた。一日一夜豪雨のあ

つた翌朝早く起きて西の窓際に凭ると、洗つたやうに天地が透明になつて、眞夏の間暫く見なかつた秩父の山々が藍を染めたやうにくつきりと西北の空に渡してゐるのを見た時の涼しさ、それから山の色は日増しに鮮かになつて來た。どうかすると手に取る如くはつきりと見えることもある。晩秋初冬の頃になると一層美しい。そして十一月に入つて、都に住んでゐる者にも、急に冬の寒い一夜があつてその翌朝起きて秩父の方を見ると、果して薄く雪を被つてゐる。やがて十二月になり一月になつて、都にも雪が降るやうになると、秩父は全山白皚々として山勢宛として白馬の群が馳せてゐるかの如く連亘して見える。

寒い〳〵秩父嵐しが眞正面にそちらの方から吹いて來て、武蔵野は人目も草も枯れ盡してゐる。さういふ時に遙に秩父を眺めると冬の寂しさが犇々と胸に迫るやうであるが、どうかすると又そんな冬の最中でもう春が循つて來たかと思はれるほど暖い和かな日が続くことがある。青磁色に晴れた麗かな大空に明るい日が照ると、雪の秩父は朝日を浴びて茜色に輝いて見える。富士よりも筑波よりも秩父は何となく傍に遡寄つて行つて見たい山であつた。國木田獨歩が國境の連山懐しくと歌つたのは、武蔵野から遠く秩父の山を眺めた時の感懐であつた。隅田川の上流荒川はその秩父の山中に源を發してゐるのだ。熊谷から左折してまだ十數里も山の奥に入つて往つた處に秩父の舊い部落が散在してゐる。今日でこそ交通の便が開けたが、鐵道の架らない時分にはどんな桃源郷であつたらう。

いよ〳〵二十六日は、その前夜から梅雨らしい雨で、その日になつてみると雨はあがつたがひどく蒸々

する。十時に會合の約束が少しく遅れて十一時に森川町に往つてみると、もう鶴沼の住人中村君は來てゐて、二人で私の來るのを待つてゐる處であつた。

「さあ往かう。」と秋聲氏が早速に身仕度をする。上野十二時三十五分發に乗車して段々北郊を出はづれると梅雨上りの山野は緑の色濃く遠くから車窓に吹き入る風が心地よく顔を撫でる。閑話がそれからそれへと絶ゆる間もなく續くのであつた。

左窓から梅雨ぐもりの空の下に秩父の連山が幽かに見えてゐる。それにつゞいて赤城、日光の諸山も車窓の左右に見えつ隠れつする。人間の本能は勝手なもので、私は、夏になると、ひとりでに東京の上野口から乗車する汽車がなつかしい。そして九月の中旬そつちの方の避暑地から戻つて來て、仕事をすることも遊ぶにもいゝ都會生活のシーズンの急がしさに暫く旅の事を忘れたやうになつてゐるが、やがて十一月十二月になつて嚴つい冬が近づいて來ると此度はもう上野口の汽車はたゞ思ひ出してみるさへ慄然とするほど寒くつて、頻に東京驛又は新橋口よりする豆相あたりの避寒地が無上に懐しくなつて來て、色々な小説的生活が空想に湧いてくるのである。秩父、赤城、日光の山々、其等はやがて來る夏季の清興を樂む舞臺である。何となく懐しいはそれ等の山である。汽車が北へへと進むにつれて空氣の觸覺が倍々爽涼になつて來て興趣果つべくも思はず、何時の間にかもう熊谷に來てしまつた。そこで秩父線に乗換へるのであるが、一時間ばかり待たなければならぬので、その間に驛構内の熊谷堤へ出て櫻の並樹の蔭など歩いて見

る。秩父の群山はもうすぐ西の方に現前してゐる。右方その北寄りに遠く霞んで見えてゐるのが妙義の奇峰らしく、又その少しく北に當つて大きく圓かな形をして梅雨曇の下に半ば雪をば被いでゐるのが淺間山と見えた。もう何方を向いても山に近づいて來たことが思はれる。夏季は清涼飲料を渴望すると同じやうに山巒の氣は人間の本能的要求である。

熊谷から秩父まで從來は他の鐵道と同じく蒸汽の動力を用ゐてゐたが、つい一二箇月前から電氣動力を用ゐることになつたのである。熊谷を發車して十哩ばかりの區間は行く手に方つて秩父の山巒を眺めながらも割合に平凡な田野の間を往つてゐたが、寄居町までさしかかつて來ると、秩父の前山はすぐ車窓の左右に迫つて來た。そして左窓より覗くとすぐ眼の下に荒川の溪流が磊々たる兩岸の岩に激しく流れ落ちてゆくのが見える。その清い流れに沿うて峰と峰との間に稍、廣い田畑が切り折かれ、桑の葉が茂り籬落が點綴してゐる。折柄農繁季節で山中の農夫は僅ばかりの水田を耕し今しも稻の植付けにとり掛つてゐるところと見える。車窓から見てゐると、鐵道と即いたり離れたりしながら一と條の坦々たる街道が桑の葉蔭になり或は人家に隠れたりしながら遠く秩父の方に入つて往つてゐる。それは秩父古成層岩の、雨が降つても決して泥濘にならぬやうな道であつた。中村君は車窓から覗いて頻にその道を讚嘆し、

「どうです、好い道ぢやありませんか。」といつてゐる。川は處に従つて或は清瀬となり、或は急流となり、或は碧潭を湛へつゝ流れながれてゐる。鮎を捕るのであらう、眞裸體の男が木の箱の如き物を頭から

被いで、どぶんと渦巻く急潭の中に眞逆さまに飛込んでゐるのが見える。淺瀬のやうな處に舟が二三艘繋ぎすてある。車窓が流れに沿うて溯るにつれて兩方の峰は次第に峻しく青くなり、それとともに空氣はいよ／＼清涼になつて來た。今晚一泊の豫定地である長瀬は寄居から四つ目の寶登山といふ驛で下車すると、すぐ二丁溪流の方に出た處にあるのである。

向うに着いたのはまだ五時に一寸前であつた。旅館兼料理屋は長生館といふのが、そこに一軒ある。設備が完全であるとはいへぬが、それでも決して我慢出來ぬといふほどでもない。先づ、その家に落着いて、丁度風呂が出来たところで一浴した後、いづれも身體を勞はる人達ばかりなので、うっかりすると風邪を引くといつて、貸浴衣の上にトンビを被り長瀬の碧流、所謂秩父赤壁に臨んだ岩石の上に出て見た。秩父は地質學者が多く研究に來る處で地質學上研究の資料に富んだ處であるといふことだが、吾々には其の事は分らぬけれど、赤壁の兩岸を疊んで削立した絶壁は水蝕の爲めに清く洒されてゐる。一つは近ごろ降雨の少かつたせいでもあらうが水量もさう凄まじいといふ程でなく、ころ／＼岩の根方に渦を巻いてゐるところもあるが、全體の感じが極めて明るい氣持ちのする處である。深い處まで川底の小石が見え透くほどの清い水で、兩岸の峰が青い影を洒してゐる。旅館の座敷から見ると、すぐ眼の前の向岸に沿うて疊まれてゐる大きな戦國艦程の一塊の岩山は丁度婚禮の時の島臺の大きいのと思へば少しもちがはぬ。清く洒らされた岩の上にいざり松やその他いろ／＼の雜木が青く生えてゐる。それは水量の少い今は淺い沙底によつ

て向う岸の陸地と續いてゐるのであるが、少しく水量が増すとすぐ島になるのである。岩島の此方に面した側は高く水の上に削立してゐて、その屏風の如く曲折した處に深い水が突き當つて緩く澱み流れてゐる。岩壁のところどころに猿が腰を掛けるほどの平があつて、里の子等が丁度浦島の子の如く釣魚をしてゐるのが見える。入口が今しも西の山の端に傾きかかつて明るい夕榮えが眞正面にその島臺に照り付けてゐたが、吾々が此方の岩石の上を歩き廻つてゐるうちに、釣魚をしてゐた里の子等はやがて岩の上に着物を脱ぎ棄て、岩壁から碧流を目かけて、どんぶとばかり飛び込むのであつた。

涼しい夕風は水の上から湧いて來て、夕陽がすつかり峰の蔭に姿を隠してしまふと四邊はいよ／＼靜かになつて刻一刻と夕暮れてゆく。子供は陽が落ちてまだまだ水の中で遊んでゐたが、そこへ遠くの座敷から見てゐると、旅館の女中であらう。淡紅色の腰卷一つになつた若い女が眞白な裸體になつて河原を傳ふて水の中へ入つて入つた。そして膝の上あたりまでの處にいつて顔や乳のあたりを洗つてゐる。淡紅色の腰卷の裾が流れに絡んで浮いてゐる。まるで人魚が半身を現はしたやうである。彼女はやがて髪を掻き上げなどして、しまひにその一つの腰卷も取つてしまひ、一旦積まで上がつて來て、乾いた腰卷を身にまとい、先の濡れた方を流れの中で振り雪いだ。そのうちにも夕暗は次第に水の面を蔽うてきた。里の子供もいつの間にかもう岩の上に見えなくなつた。川の向岸には山の根まで桑畑がつゞいて、その中に養蠶をすゐるらしい大きな家が散ばつてゐる。まだ汽車の通はない時分秩父街道はそつちに通じてゐたので、今でも

舊道には自働車や人車が往復してゐるのである。小學校の女教員らしい海老茶の袴を穿いた女が、薄い色の蝙蝠傘を翳して桑畑を見え隠れにゆくのがその翌朝座敷から見られた。そちらの岸の川上の方に、なか／＼人家が群がつてゐるのである。向岸の人家に灯が點つて、水の上がとつぶり暗くなつてしまつた。

「あゝ腹がへつた、腹がへつた。飯の持つて来やうが遅いぢやないか。」

と二三度も繰返した後、やつと階段を踏む音がして膳を運んで来た。秋聲氏は頻りに鮎のことをいつてゐたが、鮎は少し貧弱でフライと魚でん、そのほか鹽辛い味噌の鯉こく、鯉の洗ひといった品々であるが料理はさすがに鄙びてゐる。武羅夫氏も身體の健康を思つて近頃酒はほんの少しばかり、二三杯で乾杯にしてあとは飯をその代り幾杯か代へて、腹の蟲がやつと満足すると、そろ／＼眠くなつたところで繪葉書など書き、やがて無事に枕を三つ並べて寢床に横はつた。

翌日は、晩には少し小早に東京まで歸着する豫定で、十時過ぎの電車でそこから停車場をまた四つ五つ奥の秩父の町までちよつと入つて往つて見やうと朝食を済ますとすぐ宿を出立つた。停車場の茶店などでは頻に今回秩父宮の御宣下のあつた噂をして喜悅してゐるのも、この地方の淳朴の民俗が見えて、私の様な愛國者には氣持が好い。

電車はそれから又桑畑や森つゞきの中を分けて高い峰と峰との峽を西南に向つて駛せた。眼近の山と山との重なつた奥の方から、峻峭な大きな峰巒が、時々ちよつと顔を覗けてはすぐ見えなくなつてゆく。秩

父山塊はさまで高い山ではないが、山岳が随分奥深く重疊してゐることを思はせる。そこで古來交通の不便であつたそんな深い山の中にもかかはらず不思議に此の地は早くから舊記に乗つてゐるのである。和銅もはじめこの山の中から出来た。日本武尊の東征の遺跡も歴存してゐる。

やがて電車が秩父の町に近づいて来ると、左窓にあたつて一つの眞黒な巨山の姿が突兀として眉端に迫つて来た。頂上の七八合目あたりまで灰色の雲を付けて、見るから只ならぬ山姿である。中村君は早くもそれを認めて、

「あの山を御覽なさい。」といふ。

私は振顧つて窓の方を見ると、それだ。その左方にもまた奥深く藍鼠色の峻しい峰が折重なつてゐるのが見えてゐる。山巒の氣が頻に其等の峰のあたりに動揺してゐる。

「好いなあ、好い山だなあ。」と吾等は繰返へしていつた。それは、後で町へ往つてから訊くと武甲山であつた。私が都から幾年仰望してゐた秩父山群の主峰の一つなのである。

秩父山中には古來物産が多い。材木や石材なども産出するが、殊に秩父銘仙はおなじみの織物である。町を歩いて見るのに、そんな奥まつた山の中であるにもかゝらず物産が多くつて住民自から所を得、恒心がある爲めか、何となく町が落着いて人氣も好ささうに見える。そして相應な手廣く商賣をしてゐるらしい問屋や店舗が軒を續けて本通りの街幅などなか／＼廣い。そして一と筋町でなく小綺麗な裏通りが二

つも三つもあるのは馬鹿にならぬと思つた。秋聲君と武羅夫君とは、

「そしてなか／＼別嬪がゐるぢやないか……あれ」

といつて、道を往く襷掛け銀杏返しの二十ばかりの娘が、豆腐屋へ味噌漉しをさげて買ひ物にゆく姿を立ち止まり振返つて目送したりしてゐた。店頭に坐はつて、舊式な柶車を繰り廻はしながら繭から糸を撚つてゐる女にも、なか／＼垢脱けのした愛嬌の好きさうな女がゐた。朝に夕に武甲山の頂を徂來する雲を眺めて大きくなり、都の風にも染まずに一生を老いる彼女達は愛すべきである。

街の中程に延喜式内秩父神社が祀つてあるのも此の山の中の町のいかに舊くから開けた土地であることを思はしめるに十分である。秩父の町から尙ほ一里餘り奥に入つて往くと影森村がある。そこが電車の終點になつてゐて三峰山神社に登山するのもそこから上つてゆく。金仙寺などいふ臨濟宗の名刹も此處にある。その他舊い神社佛閣が多いのも此の山中の町が今日の東京より早く開けてゐたことを思はしめるのである。

何だかまだ見残した物があるやうな氣持がしながら十一時十四分の電車の時間に合ふやうに停車場に引返へして來た。

歸路。昨夜の残夢のあとを追うて私は電車の中で野を吹いて來る風に弄られながら心地よく／＼としてゐた。間もなく熊谷に來て其處から又汽車に乗り換へて無事に上野驛に歸りついたのはまだ日のある

午後の四時一寸過ぎであつた。

(大正十一年七月二日誌す、サンデー毎日)

## 木曾の明月

ある年の夏ももう終に近づいた八月の二十四日か五日の頃東京を後にして關西の方に旅立つたことがあった。朝九時頃牛込驛から汽車に乗つて中央線を往つた。東京には歸つてくるには來るが、いつ歸るとも豫期するところがないので、これが暫らく東京の見納めであると思へば、いくらか後髪をひかれる思ひもしたが、實のところその頃大分東京の街の散歩にも飽いてゐたのであつた。年中東京にゐるのもあまりに氣がきかなさ過ぎる。それに牛込の矢來でもう去年の九月からたつた一人で家を持つて自炊生活をしてゐた。それにも飽いたのである。

汽車が新宿驛を發してだん／＼東京の西郊に出離れると近頃常に市中にばかりゐた眼には清々しい緑の武藏野を渡つてくる風が涼しく窓に流れて、新鮮な田畑の色や雑木林につづく松林の木立などに眼が覺めるやうであつた。多摩川の鐵橋を渡つて八王寺をも過ぎ、汽車が小佛だの笹子などのトンネルを通過する頃は日の暑い盛りで、煤煙と蒸熱さに堪えかねたが、甲府驛で生温いプラットフォームの水を手拭に浸して襟のまはりに黒くなつた煤と汗を拭ひ取り、紫の露の雫の葡萄を二た籠ほど買つてそれを、りつつ、追々車窓の眺に入つてくる甲斐が嶺の奇趣妙景に覺えず眼を奪はれてゐると、獨り旅の寂しい旅情も

向うの山々の白雲と同じく消えてゆくのであつた。

富士見の高原を駛せてゐるあたり、左窓にあたり、天に支えたやうになつて魁偉な姿をして聳えてゐるのは甲斐の駒ヶ岳、地藏岳の諸峰と見えた。やうやく西に傾いた太陽を山の彼方に受けてゐるので、汽車から見える方は眞黒で、絶えず頂點から肩のあたりを揺曳してゐる水蒸氣様の薄い雲霧が金色の光線に映えて、丁度金粉を撒いたやうに渦巻いてゐる。まるで黒い巨牛の背の如き感じのする山は暮色の彼方に深沈としてゐる。

眼を轉じて此方の右窓の方を眺めると、それはまるで變つた外景である。八ヶ岳は碧く晴れ渡つた大空に鮮かなる全姿が高く緩く浮きでゐる。駒ヶ岳地藏岳の峻險近づくべからざる感じのするに反し八ヶ岳は婦人の如く明媚親しみ易い感じを興へてゐる。私は日野春、富士見の驛々でプラットフォームに降り立つて高原の風に吹かれた。

鹽尻で名古屋行き列車に乗換へると、これはまたひどく佇しい二等車で、電燈がなくつて極めて舊式の石油ランプが薄暗く點つてゐるばかりであつた。尤も今から十一年前のことだから、乗客も自分のほかには一人しかなかつたが、それは二つ三つの驛を乗つてすぐ降りてしまつた。夜に入るとともに晝間の苦熱は次第に薄らいで來たが、列車が信濃川の源流である犀川と木曾川の源を成してゐる鳥居峠の分水嶺に分け入つてゆくと、もに山中の冷氣もまた窓を襲ふて來た。折柄七月十五日夜の満月が木曾駒ヶ岳の峻險

の眞上のところに懸つて、水のごとき清光は隈なく山と谷を照してゐる。月の光の明るいとともに物の蔭は一層小暗くて木曾川の水の音のみは高く聴かれるが川は何處にあるやら定かには分らない。車窓から高く眼を上げて眺めると、夜の更けるにつれて月の色はますますく牙へ、しとゞ露を含んだ天も山も谷も凡ての物が蒼茫と夢の如く白んでゐる。宮の越驛のプラットホームを見ると、附近の名所を掲示した立札に木曾義仲の菩提寺德音寺がこゝから二丁と記してあるのが蒼白く照らす月の光に讀まれるも何となく懐古の感が深い。その晩は豫定のとほり次の驛の木曾福島に下車して一泊した。晝の如き月影は夜中雨戸を閉さぬ障子にさしかけてゐた。木曾川もそこまで來るともう大分大河の上流らしい、凡水ならぬ感じがしてゐる。

翌日は正午から立つた爲に木曾の溪を出離れて名古屋に着くまでまるで釜の中に居るやうに暑熱に苦められたが、名古屋の暑さは又格別ひどかつた。私は眩暈を感じるばかりであつたが、それでも夕景から名古屋を立つてゆくと、見渡すかぎり一面の青田から吹いて來る風は涼しく車窓に吹き流れた。そして行く手の關ヶ原から伊吹山の方にあたつてただならぬ黒雲をつけてゐると思つてゐると、忽ち大粒の雨滴がばらばらと窓ガラスを斜に濡らしてきた。伊吹山の頂邊に懸つてゐた黒雲は見る間に尾濃の平野を掩ふて黒暗となり、野を渡る強風は千頃の稻田に青い波を揚げてゐる。窓を打つ雨滴の音は次第に繁くなつたと思つてゐるうちに急雨は沛然として青田に水煙を立て、降つてきた。汽車の屋根から瀧の如き雨垂れが窓

枠を傳ふて流れた。

やがて昨日から即いたり離れたりして來た木曾川の長江を渡つて岐阜、大垣を過ぎてゆく頃には驟雨は晴れて冷々とした風が肌を吹いた。今日正午木曾福島を立つてからの汽車の中の暑熱が洗ひ流されてしまつた。雨後の伊吹山は黒く藍に染めたやうにくつきりを見せてきた。肩のあたりには、尙ほ未練らしい灰白色の霧が揺曳してゐる。自分は窓から首をさし覗けて強か涼風に吹かれながら其等の野や山を見入つてゐた。そのうちに漸く暮色がかゝつて來た。

木 曾 江の平野を走つてゐる頃には右窓にあつて、遠く湖東の亂山の頂邊を離れた十六日の月が蒼茫として水煙りに煙つた青田のうへにまるで水の底にでもゐるかと思ふやうな青白い光を隈なく漲らしてゐる。自然はどうしてかうまで美しいであらうと思ふと、私のやうな神を信ぜぬ者にも天地の奇工を讚美し、それを感謝せずにはゐられなかつた。自分は思はず月の色に浮かれて、獨り車窓に舷を載せて何か知ら獨吟してゐた。その夜は大津の町に泊つてみた。

月 明 の 會 木 87  
寝苦しい一夜を大津の見知らぬ旅籠屋に明かして翌日は赫々日の照る下を三井寺などを見物して廻つた。辨慶の力餅を賣つてゐる寺の境内の見晴し茶屋に腰を掛けて遠くの琵琶湖を見渡したり、比叡の峰を眺めたりしてゐると、そこへぞろ／＼上がつて來る子供を伴れた一連れの女達があつた、一人は五十餘の老婦人で一人は三十になるかならぬくらの女房であつた。若い方は丸鬘に結つて、紺無地の白い地肌が

見え透くやうな透綾の單衣を着てゐる。茶屋の店に腰を掛けて何か口を利いてゐるその滑らかな京言葉を聞き、白い肌の色、容姿のいゝ風俗を見ると、私ははじめて身は遠くの關東から、京都に近づいて來てゐるのだと思つた。そこで今日比叡山に上るつもりであつたのだが、それを中止してこれから直ぐ京都に入らうと決心した。

その晩方大津を立ち京都驛に下車して烏丸通を電車に乗つて行くと廣く透いてゐる電車の窓から冷いやうな涼しい風が吹流れて、とても東京の夜では味はれないやうな初秋めいた感じがするのであつた。やがて加茂川の畔に出て四條の大橋の上に立つと、涼しい川瀬の音が先づ耳に快い響きを傳へてそこから涼氣は湧き上がつて來るのであつた。川の上下を見渡すと、河原にはずらりと軒を並べて家毎に涼床が架かつてゐて、明媚な無数の灯が幽暗い夜を彩どつてゐるのであつた。やがて私は軽い空腹を覺えたので橋の袂のとある洋食屋に入つて、川の上に架け出した食堂の椅子に凭れて二三の淡い食べ物を取り、冷いビールを口にしてみると、暗の中の川瀬の水は兩岸の燈火を映して金銀の玉を碎いて流れ落ちてゆく。涼しい夜風は絶えず川の方から湧いて來た。一昨日の朝東京を立つてから此處まで遠く來た途中の苦熱の記憶が夢のやうに薄れてゆくのであつた。そして東京ではとても味ふことの出來ぬ水邊の清興が私の心を新なものにしてしまつた。

(大正十一年八月七日誌。改造)

## 北 陸 紀 行

五月の廿四日の朝上野を八時二十分に立つて越後から加賀越前の方にいつた。改造社の依頼で講演旅行に出掛けたのだ。

講演は、廿五日越後の長岡を口切りにして、新潟、富山、金澤、福井といふことであつたから、近年旅行は随分臆劫になつてゐるのであつても、時候が丁度好い時分なので、五六日の旅に出てみる氣になつた。

廿五日の晩までに長岡に行けばいいので廿四日は途中の赤倉温泉に一泊してみた。その先の直江津までは、八九年前に京都の方から歸京する時に、米原から北陸に廻はつて、信濃路を経て來たので、越後の西の方だけは汽車の窓から見て知つてゐるが、越後の本場は今度が初めてであつた。

その日朝家を出ようとすると、曇つた空からぼつり／＼雨滴が落ちて來た。北武藏、埼玉の平蕪から上州の野に行くと、丁度穂を擻いた青い麥の野に、本降りになつた雨が白く降りそゞいでゐるのも一興であつた。

高崎を過ぎてから、煙雨の中に妙義の奇峰が見えて來た。



松井田から横川を経て輕井澤に至る間の新緑は、雨に洗はれて一層の鮮美を増した。その時雨は降り止んでゐたが、深い溪谷から奔騰する雲霧が巍峨たる峻峰の縁に絡つて這ひ昇るのが、宛然一幅の活畫圖であつた。

輕井澤は、私は、汽車から眺めた外は知らない。多くの人の膾炙して往くところであるから、勿論避暑地として好い土地に相違あるまいが、汽車から見ただけでは、平凡な處のやうである。尤も日々淺間山を仰ぐのも悪くもあるまい。それから信濃路の平原は、これも亦た平山凡水である。

長野ではもう五時を過ぎてゐた。そこまで来ると、今朝東京上野を出る時乗つてゐた客は、いつしか悉く降りてしまつて、自分一人になつてしまつた。雨は一時止んでゐるが、まだ本當に止んだといふのではなく、川中島の平野に淡蒼い靄が立ち罩めて、桑麥の緑と、もに一抹に融けてゐる。長い一日の車行に日はやうやく暮れかけて来た。長野を過ぎてからも今夜一泊の豫定地赤倉に行く下車驛田口まではまだ四つ五つの小驛があつた。しかし信越の國境に入つて行くと四邊の景色も自から平凡でなかつたが、それと、もに、山間僻地の農家の籬落を過ぎて行く時私は、何ともいへない佻しい感情が胸に湧いて来るのを覺えた。かういふところにも生活はあるのだと思つた。

昔の北國街道と不離不即の分水嶺を分けて、やがて汽車は柏原に出て来た。四邊の土地もやゝ開けて、人煙も豊になつて来た。それから田口に行く間に、左方の高地に電燈が都會地の一角のごとく明く點つて

ゐるのが望まれた。それは、赤倉から温泉を引いて、近年開けた妙高温泉であつた。私は、こゝで泊つてもいゝなあと思つたが、やつぱり赤倉まで上つて行くことにした。

田口から自動車で一里半ばかりを登つていつた。

その夜は曇つてゐたが、宿の者は明日は晴れますといつた。果して翌朝は軒端に射し込む朝輝と小鳥の聲に早く眼を覺まし、起つて南面の雨戸を推すと、なるほど眺望は廣濶壯大である。旅舎の背後に妙高、神名、やゝ離れて黒姫、飯綱の諸峰が斑白の殘雪を被つて峙立してゐる。暫くの間その雄大な朝の眺望に私は寢衣のまゝ窓に凭つて、浩然の氣を養つてゐた。それから温泉に一浴して、朝食を濟まし、繪葉書などを書き、番頭や女中の案内でそこらの別荘地を散歩した。遠くの溪の底で、閑古鳥がカッポウカッポウと鳴いてゐるのが、一層山中の靜けさを増すのであつた。

赤倉はたしかに好い處であるが、惜しいかな樹木が少い。夏季にはもつと緑蔭が欲しいものである。

その正午田口驛を發車する汽車に乗つて越後の長岡に向つた。高田、直江津は一度汽車に乗つたことがある。直江津から先は全く初めての旅行であつた。直江津を出て、犀瀉、瀧町、柿崎、鉢崎、青海川、鯨波はその名稱の表すとほり、直ちに日本海の波に瀕し、汽車は殆ど海波に沈まんとするかの如くトンネルの中に入つてゆくのである。折柄五月の末のことゝて、さしもの雪國も、初夏の日がまぶしく車窓に照りつけた。私は昨日からの車行の疲労で睡眠不足を覺え、乗客の少い車室に横臥してゐたが、初めて行く沿

道の風景眼に新しく、折々頭を擡げて窓外に眼を放つた。冬季は波の荒いので聞えてゐる處であるが、今は、その冬季の荒れるといふのが嘘かと思ふやうに波が穏かである。太平洋に面する東海岸にもこんな波の静かな處はない。私は興津や熱海や、その他湘南の海岸をよく知つてゐるが、とても、このわたりの今見て通る海岸のやうに波の静かな處はない。これならば、赤ん坊でも海水浴が出来ると思ひながら、見てゐた。

長岡から一つ手前の來迎寺といふ停車場の附近で、はじめて、信濃川の鐵橋を渡つた。信濃川の汪洋とした長流は、越後の平野と互に地質地勢上原因結果となつて出来てゐるのである。信濃川はこの豊饒なる平野をうねり／＼つて、やがて新潟に至つて日本海に注ぎ入つてゐる。

その晩は長岡で講演することになつてゐるのであるが、改造社員をはじめ、他の連中はどうしてゐるか兎に角自分は一人で長岡に行きさへすればいいのだと思つて、同驛に下車し、今朝赤倉の旅舎で、長岡でも新潟でも大野屋といふ旅館が好いと聞いたので、ステーションから俾にトランクを載せ、自分は徒歩して市街を歩いてゐた。すると、驛から、わづかに二三丁も行かぬ左側に、地方の市にしては立派な公會堂が建つてゐて、その正面階上に改造社の赤地に白文字を染め出した幔幕を張つて今晚六時開演の廣告を出してある。「よし／＼。」と、心にうなづきつゝ、大野屋旅館に至り、投宿し、トランクを運んでくれた男衆に、「改造社の人は来てゐないか。」と訊くと、「お見えになつてゐます。」といふので、やつと、迷い兒のやう

な氣持から解放された。別室にゐた改造社員栗林、比嘉の二君、それから東奥地方を講演の歸途北陸に廻つて來た秋田、片岡の二君と相會することを得て、愉快であつた。而して此の北陸地方の講演を、私と共に始終一貫する任を帯びてゐる吉田絃二郎氏は今晚六時に來着の電報を途中から打つて寄越したといふことであつた。

その晩講演が果て、から、公會堂の喫茶室で、長岡市書肆の主催で吾々の爲に歓迎の意をかねた談話會が開かれたが自分は疲勞してゐたので、御免を蒙り、自分の講演を済ますと早速旅館にかへり就寝したが、どうも旅つかれで熟睡出来なかつた。

翌日も幸に好晴であつた。——此度の旅行で最も恵まれたのは、始終晴天つゞきであつたことだ。昨夜は十分な睡眠は得られなかつたにしても、これから新潟までの車行はわづかに二時間で、そして、はじめに見る新潟へ行くといふので、私の旅行気分は大いに新しくなつて來た。今日は吉田絃二郎氏夫妻、改造社の栗林、比嘉二君も同行である。秋田片岡の二君は朝寢坊のことゝて夕方までに行くといつて、まだ夜半の夢であるのを後に残して吾々は先發した。

長岡から新潟まで、越後平野の中心地に行くに別段の奇趣妙景もない。たゞ遠く煙霞の中に彌彦山の翠微が見えてゐる。かくて新潟に着いたのが十二時一寸前。驛から直ちに自動車で信濃川に架した長い木橋を渡り、いよ／＼新潟市に入つた。旅館は長岡の大野屋の支店で、居心地は悪くなかつた。私は晝餐後、

疲勞を醫するために按摩を呼んで二時間ばかり晝休みをした。吉田君、秋田君、片岡君などは新潟の書店の人達に案内せられて先つき市の見物に出掛けた。私は暫らく休息してゐるうちに、疲勞もやゝ回復したので、あとから出掛けた。海岸の砂丘の上に出ると、遠く日本海が一眸に入つて、左方の波の彼方に佐渡の島が巨軀を横へてゐるのが霞の向うに見えてゐる。あゝこれが佐渡の島かと、吉田君等と、芭蕉の荒波や佐渡に横たふ天の河の話などをしつゝ、日本海の穩かなる波を眺め、それから又一回二臺の自動車に乗つて、信濃河口の方を廻つてみた。遠く砂洲が海に入つてゐる方に白帆が水の上を滑つてゆくのが見えてゐる。その又彼方、天の方に高く、残雪を頂いた山脈が連亘してゐるのが見渡される。岩代から羽前の方の國境の山であらう。

新潟は一才東京の本所深川の二區を一市にしたといつたやうな處である。信濃川の三角洲に立つた、所謂新しい潟の市である。此の行生憎、音に名高い雪國の美人を見ることが出来なかつたが、市の地勢は砂洲に位して、河海の水と市が殆ど水平に立つてゐるやうなところに一つの水郷としての興味が無いことはないが、あんまり豫想し期待してゐたほどの土地ではなかつた。

その翌朝は五時前に眼を覺ました。廿七日は六時五分發の汽車で一駛越中の富山まで行くのである。時間にして約十時間乗らなければならぬ。途中の長岡で私は正宗の二合瓶を買ひ、冷酒を嘗めつゝ、どうかして眠らうとしたが、容易に寝られない。直江津で汽車を乗換へ、辨當を使つて、日本海の波を肴に又冷

酒をなめつゝ行つた。

糸魚川で吉田君も下車して相馬御風氏を訪問するといふので、自分もそのつもりでゐたが疲れてゐると今晚富山に着いて、一番はじめに前座をつとめ、それから直ぐに金澤に行つて泊ることに豫定を變更したので、相馬君を訪ふことは自分は中止し、そして糸魚川から優に一時間午睡の間に過ぎてしまつた。

富山に着き、富山館といふ旅館に到ると、そこには三宅やす女史が來合せてゐた。暫時休息して舊城趾門の公園にある縣會議事堂の講演會場に至り、私は眞先きに講演をした。今日の講演は、自分でも、前日來に比し樂に出來たやうな氣がした。一つは會場のせいもあつたかも知れぬ。

それが済むと、二番目の三宅やす女史の濟むのを待ち、同行してその晩直に金澤に向つた。三席をつとめた吉田君も同じ汽車の間に合ひ、三人同行金澤に向つた。最後に今日から同行に加はつた佐藤春夫君が残つた。富山市の新聞社から送られた名物の鱒のすしを開いて辨當をつかひながら、それから二時間ばかりで金澤に到着するのである。越中は有名なる米の生産地であるだけに、夜の車窓から見渡しただけでも美田が遠く開けてゐる。まだ宵のことゝて、田野から吹き送つて來る微風が窓に流れこんで、すがすがしい。それとゝもに田面で鳴く蛙の聲も何となく懐しいやうな情趣をそゝつた。

金澤に着いたのが夜の九時。それから、私と三宅女史とは、佐藤春夫氏の泊つてゐる源圓といふ旅館に投宿した。吉田君は今日富山市を通り越して既に金澤に先着してゐる妻君と別の旅館に赴いた。源圓は、

金澤ごのみの調度など仰山に飾つてある旅館であつたが、夕飯の料理と、夜具などの粗悪なものには少々驚いた。

翌日廿八日は一日暇があつたが、金澤は八九年前一度来たことがあるので、それ以上委しく見ようとす  
るには、金澤を、もつとよく知つた人に案内してもらはなければつまらないので、自分は、晝間そこら  
を、いたづらに散歩して、九谷焼の安物などを買つたりして歸つた。晩の講演會は汚い劇場であつたりな  
どしたゝめか、私にはうまく出来なかつた。講演が濟んでから佐藤春夫君の案内でつば甚といふ料理屋へ  
いつて夕飯の御馳走になつた。一寸金澤の風味の一端を味はつたやうにおもつた。

旅  
そこ  
よ  
け  
れ

翌日廿九日は福井まで又二時間半ばかり汽車に乗つた。福井の奈波屋といふ旅館は川の畔に臨んで涼風  
を入れる處であつた。そこでも私は前座をつとめた。そこから直ぐ近處の縣會議事堂であつたが、五回の  
講演で今日が最もよく出来たと思つた。

その夜直ちに米原に出で、そこから東海道の幹線に乗つて翌朝熱海へ歸着のことに決定し、金澤市を立  
つ前に寢臺車を申込んでゐたところ、幸にして米原を午前十二時三十五分に發車する急行車に寢臺があつ  
たので、講演ををはり夕飯をしたゝめてから福井を發車し、四時間ばかりにして米原に到着し、直ちに東  
海道急行の寢臺車に入ると、一睡の中にもう函嶺を越してゐた。(六月十七日記す)

## 車 窓

午前九時二十四分京都發東京ゆきの最大急行列車は、瞬く間に京都の市街を出はなれて、眞青に彩られ  
た晩春の野を轟然たる響をあげて、ひた走りに駛せてゆくのである。今や窓外の春は全く老いて、野にも  
山にも一様に濃い青葉の緑を飾り、處々には目覺めるやうな蓮華草が紫紺の毛氈を敷いてゐる。列車はそ  
の薄絹に包まれたやうな五月晴れの白い霞の中を突いて走つた。

先月の中旬夜遅く東京を立つて京阪の客となつた私は、二週間ばかりの豫定が意外に長くなつて、一と  
月ばかりも居馴んだ京畿の山川に別れを告げ、今日また遙々と東京の空に歸つてゆくのである。列車が京  
都を動き出すまで何となく心の落着かなかつた私は、車窓の眺めが遠くの野のはてに東寺の塔を見失ひ、  
やがて稻荷の裾をめくり、大谷の溪谷に進んで京都の街の名残りがまつたく眼界を逸してしまふと、やう  
やく先刻から買つたまゝ傍においてゐた東京の新聞を取上げて讀みはじめた。けれども一應眼につくやう  
な大きな項目に眼を通してしまふと、私の注意や興味はいつも窓外の眺望か、さもなければ室の旅客の觀察  
に向けられるのであつた。

逢坂山の隧道を通過して大津の驛に二分間ばかり停車すると列車は琵琶湖の渺波を見下ろしながら駛せ

ていつた。比良比叡の諸峰は統を張つたやうな遠霞の中に夢見る如く白く煙つてゐる。私は稍々暫くそれらの眺望に眺め飽きると、今度はまた腰を掛け直して車内の旅客を一人々々心の内で見ていつた。その中で目に立つほどではないが稍々風變りの一人はすぐ私の左側に席を占めてゐる五十五六やがて六十にも近い男であつた。彼は私が京都から乗つた時にはもう先客の一人であつた。鐵無地色のざんぐりした袖物の袷衣に同じ羽織を着て薄茶色の扱帯をしめ、顔の造作何處となく飄逸らしく、色や澁茶色を帯び、頭には烏打ち帽子を冠つて、あまり白からぬ白足袋に白い皮緒の雪駄を穿いてゐる。私が京都驛で入つて來た時には長く敷いた膝掛けのうへに横臥つてゐたが、樂々寢入ることも出來ぬと思はれて間もなく起上り、そして、古書畫の寫眞帖のやうなものを繰抜いて眺めてゐた。すぐ頭の上の網棚に置いた朱の定紋をつけた古風な紙張りの行李といひ、何處から見ても骨董屋らしい。私は今見た新聞の記事から東京では昨日と今日と明日と三日間、此度入札に附する伊達伯爵家の寶物の下見が日本橋俱樂部で開催されてゐて、非常な前景氣であるといふことを思ひ浮べて、その男の方を見向きながら、

「伊達家の寶物を見においでですか」と言葉をかけると、彼は一口、

「えゝ」といつたきり、餘念もなく寫眞帖を一枚々々披いて眺めてゐたが、やがて一順見終ると、その帖を私の方に差出して貸してくれた。私は自分で見てゐた國民新聞のその記事の處を折出して渡した。

寫眞帖には唐物岩城文林と記した茶器を巻頭にして私どもに到底味ひ解することの出來ないやうな古書

畫から種々な珍什が何百點といふ數知らず列擧してある。古書畫の多くは支那傳來の物で、日本では雪舟、雪村を初め探幽、文晁などの名畫が、一つ／＼精しく見てゐると寫眞帖を一順をはるのさへ眼の疲れるばかりの品目である。

折柄外景は顔も染るばかりに野や山から絶えず薫風を吹き送つて、車窓の旅情頗る長閑なるにまかせ、私は靜にその寫眞帖を開いて眺めていつた。私の右側には美髯を蓄へ洋装した中年の小柄の紳士が腰掛けてゐた。私とその寫眞帖を眺めてゐるのを見て、顔を近寄せてきながら、

「何ですか、大變立派な物ですね。」

といつて言葉をかけた。

「これが今日の新聞にも出てゐるでせう、此度入札になるその伊達伯爵家の什寶です。」

「あゝ、なるほど出てゐます、出てゐます。あゝさうですか。」といつて、彼は更に顔を近よせた。

雪舟や文晁などの名畫、それから支那の古人の畫詩には更に好ましいものが多かつた。その中にはあまり高價なものではないかも知れぬが、黄檗僧の三十二人が寄せ書きした巻物の書なども好ましいと思つた。何といふ僧の描いたのか一と筆がきに觀音の像を描いたのが慈悲を表象して優しい感じを表はしてゐるのもよかつた。

「なるほどこれは大したものだ。」私がいふと、

「さうですねえ。大したものですねえ。」と右側の旅客は答へた。

私は見をはつたその畫帖を左側の持主に返へしながら、

「この中でどんな物が一番高價を稱へられてゐるのですかね。え。」

「岩城文林が一番高價でせう。骨董屋は答へた。

「へえ、こんな物が、支那の古畫などはそんな物より高くないのですか。」

「それ等も高いことは高いが、それよりもまだ茶器の方が高いのです。」

「一體どのくらゐするのです。」

「その茶器が五萬圓ぐらゐでせう。或はもつと高いかも知れぬ。いよ／＼入札になつて十萬圓にもなるかも知れぬ。」

「へえ。馬鹿に高いものですなあ。私は呆れたやうにいつた。

「そして雪舟などはどのくらゐです。」

「それも一萬圓はするでせう。」

「ぢや此の寫眞帖にある凡て／＼大凡どのくらゐの見込です。」

「さうですなあ、百萬圓と、まあいつてをるのですが、もつと出るかも知れません。」

「百萬圓。大變な入札ですなあ。何ですか、この伊達伯爵家の寶什を入札にするといふことはもう二三年

も前から、私ども、新聞で見つてゐたやうに思ひますが、ぢや今度いよ／＼入札になるのですねえ。」

「え、もう三四年も前からその話はあつたが、此度の戦争で世間の景氣が直つてきたから、今やるんです。今百萬圓の物があの時分なら三四十萬圓ぐらゐのもですから。」

「成るほど、なるほど。」私はうなづきながら答へた。

そして漸々話を交へてゐるうちにその骨董屋も右側の旅客も二人ながら神戸の人間であることが明かさ

れた。互にそれが分つてから彼等は私を挾んで遠くからいろ／＼神戸に關する雜談を交換してゐた。

「久原が百萬圓持たして全部買占めるつもりで人を東京にやつてゐるといふのは眞實かね。」右側の客は骨

董屋に向つて訊いた。

「そんな風説はあるにはあるが、嘘です。」

「しかし今度も少しは買ふだらう。」

「え、少しは買うでせう。」

私はその時何かの雜誌で久原といふ富豪のことを讀んだのを想ひ起してゐた。その記事には一代で一億の巨富を積んだ人間には安田善次郎があるが、十年間で一億の産を作つたのは久原房之助だと書いてあつたのを見て、私はその時始めて日本にそんな俄分限者の出来てゐるのを知つたのであつた。

私の兩側の二人の談話はいろ／＼に變化していつた。

「どうだね？内田信也などはまだそんな気は出さなですか。洋服の旅客は訊ねた。」

「内田はまだそんなことには手を出さないやうだなあ。」骨董屋は答へた。

私はまたそれをきいてゐて、神戸に此度の戦争の影響をうけて船で數百萬圓の巨富を贏ち得た内田信也といふ人間のあることを新聞で見つてゐたことを想ひ起した。そして、

「神戸や大阪には今度の戦争で随分成金が出來たといふことですねえ。」と二人の談話に口を入れた。

「え、随分ありますよ。」と洋服の旅客は私に答へながら、また骨董屋の方に向つて「どうだね此度は大阪よりも神戸の方が多いいふことだが、さうかねえ。」

「神戸の方が多いでせう。」

「鈴木はどうかね。」

「あれはまた大きい。女でよくあゝ残したものだ。」

「何でも番頭に確乎しつぷした人間があるといふぢやないか。」

「金子直吉かね。」

「あゝ、さうく、金子、金子。金子といふ人間は唯事業をするのが楽しみだといふ評判だ。」

「それでも自分でももう二三百萬圓はあるでせう。」骨董屋はいふ。

「番頭で二三百萬圓。その主人といふのは幾許いくばくぐらゐあるんです。」私は黙つて二人の噂話を聞いてゐた

が、またさういつて口を挟んで訊ねた。

「千五百萬圓ぐらゐはあるといふ話ですねえ。」洋服の旅客は骨董屋に話しかけた。

「そのくらゐはあるでせう。」

「それが女ですよ。鈴木よねといつて。」洋服の旅客は私に説明した。

「へえ、女で。」私は喫驚したやうにいつた。

「しかも一代身上です。」

「へえ、女が一代でそんなに。」

私は伊達家の寶仕の高價なるにいゝ加減喫驚した上に、またそんな富豪の噂さで、さてもくあるところにあるものは金だといふやうなことを思ひながら、「日本には大分金が出来たのですねえ。」と、どつちつかずのことをいつた。

「えゝ、出來たのですねえ。」洋服の客は答へた。

「まだく出來ます。」骨董屋は自分の金でも殖えるやうに楽しさうにいふ。

列車はその間に近江の平野を過ぎ、やがて米原驛に着いて停車した。そこで北國筋に向ふ旅客を降して新に二三の乗客を乗せると、再び急速力を出して馳走した。そのあたりから野は次第に狭まり、左右に丘陵が迫つてきた。即ち列車は關ヶ原の狹隘に向つて分け入るのである。これまで幾度か東海道を往復して沿

道の眺望には見飽いてゐながら、私は近江美濃の境に跨る伊吹山を仰いで關ヶ原を通過するときぐらゐ何ともいへない感興に耽らせられることはないのである。箱根を越える時、また關西線によつて鈴鹿山を越える時といへどもこの關ヶ原を通る時ほどそんなに感慨に迫られることはない。

私は車窓に顔を覗けて遙に伊吹山の雄姿を探望してゐた。まだ朝じめりの乾きはてぬ、麗かに澄み渡つた五月晴れの碧空は眩ゆきばかりに輝やき、嫩かな新緑をもつて彩取られたる野山にはあるともしも覺えないう白い春霞が一面に立ち罩めてゐる。待つほどもなくそのゆく手の空にあたつて伊吹山の一角は列車の進む軌道の曲折につれて見えつかくれつ現はれてきた。

「あゝ伊吹山が見える。」と、私は思はず車窓に面して獨語した。

すると傍に横臥してゐた骨董屋はそれをきいたと思はれて、もぞくさ起上りつゝ窓に顔を向け、

「あゝ、これが伊吹山ですか。」と聲を發した。

「えゝ、伊吹山です。好い山だ。」私は感嘆の聲を放つた。

さういふうちにも山の全姿は車窓に向つて満幅の繪畫を展開してきた。

「なるほどこれが伊吹山ですか、よく伊吹山といふことをきいてゐたが、今はじめて見る。」

「好い山だ。今日はまた不思議にはつきりとよく見える。」

私は重ねて感嘆の聲を洩らした。まつたく今日ぐらゐ伊吹山をよく見たことは、二十餘年來屢々此處を

往復してゐながら初めてとあつた。伊吹山、何といふ記憶に懐かしい山であらう。私の幼年時代から少年時代に至る間の修養と趣味とは常に日本の舊史とその史蹟に關聯せる地理とにあつた。私がその伊吹山を覺えそめたのは平治の亂に一敗地に塗れたる源義朝が、その時年齢尙十三の一子頼朝を引き連れ、わづかに鎌田政家等二三の家の子に擁せられて東國をさして落ちゆく途中積雪のために父子道を失ひ、頼朝はつひに平氏の追手に捕へられて六波羅の清盛が屋敷に引いてゆかれた。日本外史に、

「伊吹山麓に捕へらる。」とあるのが、どんなに私の哀感をそゝつたことであらう。私はそれをよく記憶してゐて、自分が十九歳の時初めて上京するときにも汽車の窓からこの伊吹山を探り眺めることを忘れなかつた。都をはなれ失意の心を抱いて北國に落ちゆく人、或は東山道をへて遠き奥州のはてに歸る人、逢坂の關を越えて、湖水の彼方に比良比叡の峰々を遠く振顧りがちに近江の野路をゆく間はまだ後にしてゆく都の名残りも偲ばれた。一度不破の關を過ぎてしまへば都はいよ／＼雲井の空にとほざかるばかりである。知らず、古來幾人かこの山麓を過ぎてもしまへば都はいよ／＼雲井の空にとほざかるばかりである。知らず、古來幾人かこの山麓を過ぎるものが憂愁に充てる眼をあげて山頂の雲を眺めたらう。

ある年は晩秋初冬のころ私はこゝを通つた。それは遠い外國にいつてゐてなくなつた兄を弔らふために歸國してふたゝび東國にかへる時であつた。雪模様の灰色の雲は低く低迷して黄褐色にうら枯れた伊吹山は憂鬱な空の表にはつきりと浮びいでゐた。



また或る年は夏のをはりの時分こゝを通つた。その時私は中央線によつて名古屋にいで、漸く日の暮れそめるころ尾濃の平野をとほつてゆくと名古屋あたりから蒸すやうに暑かつた空は一面に墨を流したやうに掻き曇つて、千頃の青田にはもの／＼しい嵐が颯々と波を揚げた。と思ふ間に大粒の雨滴は早くも横ざまに車窓をうつてきた。風はます／＼強く吹いて、やがて銀箭の如き急雨は沛然として降り濺いできた。その篠つく雨の音の中を列車は轟々と響きをあげて駛つていつた。そして大垣を過ぎるころにはさしもの豪雨もいつしか止んで、沿道の草木は眞青に洗ひ清めたやうな艶かな濡れ色をみせ、雨氣を含んだ冷かな風が開放つた窓を流れるやうに吹いた。その時車窓の遠望は遙かに伊吹山の雄姿を認めた。その方の空にはまだ降り足らぬやうな凄じい夕立雲が黒く鎖して、漆を流したやうな峻しい伊吹山は薄暮の天際に人を脅かすやうに聳り立つてゐた。私はその雨後の伊吹山をも忘れることが出来ぬ。そして今日はまためづらしく五月の陽光の中に氣象の加減で稍く距離を置き、匂はんばかりの淡藍色に染めなされて、明媚なる温容を表示してゐる。

「好い山だ、うむ、繪のとほりだ。すつかり繪になつてゐる。骨董屋は頻りに感嘆しはじめた。

列車はその山麓をめぐり、やがて漸次に西北の遠霞の中に山を残して過ぎた。

私は、廣い關ヶ原の野のはてに山の姿を見失ふまでいつまでも何時までも目送してゐた。

「好い山だ。あのまゝ繪になつてゐる。骨董屋は同じことを何度も繰返していつて私の方を見た。そして

卒直な物の言ひ振りで、

「あなたは御商賣は何ですか。」と訊ねた。

「えゝ。」と私は笑つてゐた。

「やつぱり繪の方でせう。」彼は微笑していつた。

「すこし違ひます。小説を書いてゐます。」

私も微笑しながら答へた。

「あゝ小説ですか。それは好い御商賣ですわね。さうして方々見て歩きながら文章を作つてゐるときつと面白いです。好い御商賣ですわね。」

彼は面白い道づれを得たといふやうにいつた。

「いや、格別いゝ商賣でもありませんが、しかしかうして方々旅をして歩くのは好きです。」

「それでいゝです。さうして方々お歩きになると、いろ／＼面白いことを發見するですから。」

骨董屋は自分相應の理窟をつけて話しかけた。私はそれに一つひとつ肯きながら、

「私はこの汽車の窓から山を遠く眺めるのが何より好きです。」

すると、彼は面白いことをいふと、いはんばかりにまた微笑しながら、

「あゝ、えゝです。山はえゝです。かうして見てゐるとそのまゝ繪になるところがありますよ。あの山は

そのまゝ繪です。なるほど、かうして景色を見てみると繪が出来るはずだ。日本の繪はどうしても此の日本の景色でなければ出来ない。よく取つたものだ。」

「さうです。文晁なども随分實景を隈なく寫したものですねえ。私は文晁が諸國を漫遊して方々の名山を寫生した墨繪を線かきの木版を見たことがあります、なか／＼うまく描いてみますよ。」

「あゝ、文晁は熱心でした。えゝです。骨董屋はそんな話のときに定つて用ひるらしい言葉で應答した。

「それを見ると殆ど日本全國を歩いてゐます。あの伊吹山なども描いてゐるが、今見たところによく似てゐます。やつぱり近江の方から見たらしいな。」

「あゝさうですか、文晁は熱心なものだ。熱心でないといけない。」骨董屋はわが意を得た話題だといふやうにいつた。

「探幽であつたか元信であつたか、關の元信筆棄ての杉といつて、元信が京都のどこかの寺の杉戸に大きな杉を描いたことがある。その杉は自分の心おぼえに會つて伊勢路を通つたとき、關あたりの山で見て、あゝいゝ杉だなどおもつてゐた、その杉を想ひ起して描いた。するとその後元信はまた江戸へ下るとき伊勢路をとほつて、京都の寺の杉戸に描いたのはこの杉であつた。と、その杉をよく見ると、實物の杉は枝や幹の形といひ、青々とした色といひ、とても自分の描いた繪などはそれに比べて、くらべ物ならぬので、元信はそこで遂に自分の繪筆をすて、味嘆したといふはなしがありますが、まつたくあのあたりの杉は美しいです。」

骨董屋はその話を知つてゐるかと思つたが、彼は知らぬらしく、私のいふことに耳を傾けてきいてゐたが、

「うむ、元信、これはまた熱心だ。その熱心なところがないといけない。」

「あの伊吹山なども今見たやうな色はとても普通の畫家には描き表はせませんな。」私はこの骨董屋を對手には、すこし饒舌りすぎるとおもつたが、さつき見た伊吹山の美觀に刺戟されていくらか神經が昂奮したやうになつて聯想の駛するまゝに語りつゞけた。

「これからこの線路をとほるよりも名古屋から乗り換へて中仙道をゆくと好い山が澤山見られます。」

「あゝ中仙道……。」

「木曾を通るので。するとまづ此方から數へて木曾路の入口に惠那嶽といふのがあります。これが随分高い山です。それから木曾の駒ヶ嶽がすぐ右側に見上げられる。御嶽はその反對の窓から頂の方がすこし見える。信濃の鹽尻といふところから長野の方に乗つてゆくと、まだ／＼いろんな美しい山が見られるのですが、そつちへゆかずにすぐ東京の方へ乗りつゞけても八ヶ嶽といふ山が見られます。それがまた好い山です。それから地藏嶽、駒ヶ嶽など。富士山の後側も見られます。」

「うむ、富士山は好く出來た山だ。」彼は獨りうなづきつゞ、「富士ぐらゐいろいろに描かれてゐる山もない

が、それでどう描いても、どれもみな似てゐるのがまた奇妙だ。」

「さうです、さうです。どの繪にもみな虚偽がない。」

「さうですよ。みな眞實です、今日は一つよく富士を見たいものです。」

その間に列車は最も近く山と山との迫まつた狹隘を通過して、戦術の知識なき者にも戦陣を張るには最も都合の好さうに思はれる關ヶ原の平地を左方に展望しつゝ疾走していつた。漸々たる春草の野は、遠く碧蕪疎林につゞき、四邊の麥畑には里人の影も絶えて、凝乎と窓外に眼を放つてゐる私の頭の中には遠く慶長の昔此處に火花を散して運命の輸贏を争つた東西兩軍の諸將の面影が髣髴として浮んで來た。さう思ふと思ひなしにか殷々たる列車の響きは、さながら山谷に鳴動する砲箭の叫びのやうに聞え、心なき一莖の青草にも、一世の霸圖空しく摧けて、永への恨みを呑んで無慘な最後を遂げた西軍の諸將の靈魂が宿つてゐるかのやうに思はれる。私は今日に限つたことでない。此處を通過するたびに何時もいつも汽車の轟く音を聞きながら當時の戦争の響きを聯想するのであつた。

やがて正午近くなるにつれて、露を帯びてゐた青い野の景色は次第に白く乾いて、熱いあつい太陽が眞正面に廂のない車室の窓を射してきた。列車の急速力につれて捲き起る風は煤煙と、ともに砂塵を吹き込んだ。

「大變なほこりですな。」

「えゝ、ひどいほこりだ。」

私達はやゝ話にも飽いてきた。

「午飯はどこらで食べたが丁度いゝですか。」

骨董屋は私の方をむいてたづねた。

「丁度名古屋がいゝでせう。あそこがたしか十二時四十分かになります。」

「あゝさうなりますか、一つ晝飯でも食べないか。」

「さうです。汽車で辨當を食べるのも楽しみです。晝飯を名古屋で食べて、それから晩は少し早いが静岡

の鯛めし、これがうまいです。」

「あゝさうですか。骨董屋は楽しさうにいつた。そして、

「名古屋が來たらどうぞちよつと頼みます。」

さういつて彼は暫く横になつた。

私はまだ十分眼を通さなかつた新聞を取上げたり、春とんびのポケットから雑誌を取出して開いたりしたが、文字は分つても興味がすこしも湧いてこなかつた。それからまた單調な尾濃の平野を走ること二時間ばかりにしてやつと名古屋へ着車した。物賣りの聲は喧しく窓から喚いてとほつた。乗客はみなほつとしたやうになつて、立ち上つてプラットフォームに降りて歩くもあり、窓を覗いて辨當や茶などを買込む

ものもある。汚れた小倉服をきた驛夫は箒を持つて入つてきて、煙草の吸殻や蜜柑の皮の落ち散らかつたのを掃いていつた。そのあとからまた一人の驛夫が漏斗で水を濺いでゆく、そのあとを大きな雑巾で綺麗に拭いていつた。新しく乗つた客も銘々の席に落着いて、車室内がだんだんもとの静かさに返ると、やがて車掌の吹き鳴らす笛の音が聞えて、列車はふたゝび揺ぎ出した。

「食堂に入つてもいゝが、汚い器皿でまづい洋食を食べさせられるより、私はかうして到るところどころで辨當や壽しを買つて、その土地々々の風味を味はうのが一人の情趣がありますよ。」私はまた骨董屋をつかまへて平生思つてゐる車窓の哲學を談じた。

「うむ。」と、骨董屋は箆を口に入れたまゝ大きくうなづいた。

「それも時節が暑中だとか、また寒い時分なら食堂に入つてゆくもいゝが、私のやうに酒を飲まぬ者は、かうして春の野景色を眺めながら日本のお辨當を使ふ方が好いです。熱い茶を入れたこの土瓶もすて難いです。私は食堂で洋食を喰つたあと、まだそのうへに紅茶だの、珈琲など飲んだら、食べたものをすぐ吐してしまひさうだ。」私は、骨董屋にだけ聞き取れるほどの聲で、調子に乗つて御飯を食べながら饒舌つた。

「おほきにさうです。」

やがて辨當の折を窓外に投げ棄てるころには列車は尾張の平野もいつしか通過して、參遠の野を驀進していつた。太陽の光は倍々強く窓を射て、煤煙まじりの熱風に襟頸のまはりに心地のわるい汗を溼ませた

乗客は、長時間の車行に飽きて、ぎら／＼脂光りのするその顔にはいづれも疲労が見えた。暫く話聲も途切れて眞晝の静さが車室を領した。そして軌道を轆る鐵輪の響のみけたゝましく野の間に轟いた。

「あつい。」

と、一と口たれかゝ洩らした。  
するとこちらの方でも、

「あついですなあ。」

「えゝ暑いです。」

「いつもこのあたりが一番飽きるころですよ。丁度東京と大阪の眞中ぐらゐにあたりますからな。」  
そこらの人々の間に雑話はまた復活してきた。

「はあ、この邊が東京と大阪の眞中になるのですか。」骨董屋はきゝかへした。

「ほどそのくらゐの見當です。」

だん／＼話の間に骨董屋は今度十八年ぶり東京へゆくのであることを語つた。

「ぢや、すつかり變つてゐる。私も一年に大抵一度や二度は東京にゆくが、それでも行く度に變つてゐるものです。」さういふ洋装の旅客は名古屋に生れて、少年時代から殆ど中年まで東京で過し、神戸にいつてからもう十餘年になるといふことも明かされた。

それから大阪が広いと思つてゐても東京に比べるとひどく狭く思はれるといふことや、東京の街區の分りにくいといふやうな取留めもない雑談がそれからそれへと擴がつていつた。

「いや分り難いのは牛込の若松町の邊ですよ。それから芝口も分りにくいところが澤山あります。」

私が京都で入つてきたときに、もうその前から乗つてゐた向側に腰をかけた洋服の旅客は疾から私達の雑話に耳を傾けてゐたが、さういつてこちらの話に割り込んできた。

「えゝあすこらにもそんなところがあります。」

だれも返事をするものがなかつたので、私はさういつて應答した。するとその五十餘りの頑丈な骨格をした、しかしどこか正直さうで魁偉な容貌をした彼は、それを機會に、訛りのあるやゝ不明瞭な口調でくどくどと先刻の話をつづけた。私達はだれも格別の興味を引かないので、代るがはるたゞ「えゝ」「えゝ」と返答してゐた。

列車はやがて激瀾たる濱名湖の煙波の上を渡つていつた。濱松も過ぎ、天龍大井の二大鐵橋を通りこしてやがて静岡に近づくころには、いつしか空も影つて、さすがの太陽の熱もいくらか衰へそめてきた。

「もう静岡が近くなりましたよ。私は骨董屋を呼びかけた。」

「あゝさうですか。静岡についたら一つその鯛めしを買ひたいものです。彼は楽しさうにいつた。」

「えゝ買ひませう。そこで夕飯には少し早いですが、買つておいてだん／＼食べるんです。」

「あゝ、さうしませう。静岡では殆どすべての乗客が鯛めしを買つた。」

「うむ、なるほどこれは大變に加減がいゝです。骨董屋は口に入れながらいつた。」

辨當をつかつてしまふと、私はどうかして少許眠らうとつとめたが、頭が疲れてゐて、どうしても眠れない。汽車はとある隧道をぬけるとそこには濶い海が開けて見えた。沖はどんよりと曇つて、靜かな波の上に鯉魚舟が列をつくつて泊つてゐるのが見える。富士川の鐵橋を渡つてゆくと行く手の空には脈々たる愛鷹山が長く半天に横つて、薄墨を流した如き雲霧が高く動いてゐる。景は次第に大きくなつてきた。

「あれが富士ですか。骨董屋はそちらを指してたづねた。」

「さあ、富士の裾山でせう、この模様では今日は見られないかも知れぬ。」

列車は遠くその裾野を迂回して駛せた。富士は深く雲霧に没して、たゞ裾の方の大傾斜ばかりが遠く眼に餘るばかりの壯觀を描いてゐる。

「あれが裾野です。私は骨董屋に指示した。」

「あゝ裾野。彼は窓の方を向いて一心に眺めやつた。」

そのうち雲霧は漸次薄れて、濃い水蒸氣の中から山の輪郭だけがまるで夢の様に微かにかすかに認められた。夕陽は丁ど愛鷹山の左肩のあたりに沈まんとして、金色の光が縞目のやうに雲霧の腹を射てゐる。

じつと見てゐるうちに、山頂から僅に三四尺のところ近づいた日は忽ち落ちる如くに長い傾斜の彼方に隠れてしまつた、そして日の光が弱くなるにつれて富士の輪郭は次第にはつきりとして、初めは夢の如く白かつた色は、やがて淺黄になり、次で匂ふばかりの紺色に變つて、その色はますます濃くなつてきた。目近の野山を埋めた柔かい新緑の林は丁度山の遠景を五合目あたりまで没して、富士はその彼方に濃藍色の艶姿を黄昏の空に點出してゐる。

「ちようど今見えてゐる形が北齋や廣重の描いた富士です。」

「さうです、さうです。北齋のとほりです、北齋はこれをもつと藍を強くしてゐるだけのちがひだ。北齋は熱心なものです。廣重よりも熱心です。……しかし廣重もえらい。」

彼は頗る我が意を得たやうにいつた。

「今日はまことに愉快的な旅をしました。伴侶が好かつたから。」彼は重ねてそれをいつた。

列車が箱根の溪谷にわけ入つて、外景の展望を失つてしまふと、車室の人々の面にはまた深い疲労の色が浮いてきた。彼等は一日の車行に倦んで少しも早く目的地たる東京に着車するのを待つてゐるのである。

すると先刻向から話しかけた洋装の旅客はまたもや口を切り出した。彼は何とかして聴者の興味を喚起せんものと思心するかの如く各方面に話題をもつていつたが、遂に熱心なる聴者を得ないのである。そして彼は最後に頭の上の網棚から新聞紙に包んだものを取りおろして披きながら、

「これは水鉛といつて今大變に値打のあるものです。今度の歐洲の戦争で非常に必要な物です。私、先月の二十六日から山陰道の方の山を十二日間歩いて採つて來ました。」彼は鉛色をした鑛石の包みをひらいて摘んで見せながら、それで新聞紙の端に筋を引いて、

「このとほり鉛筆のやうに字が書けます。」といつて説明した。

一同の注意は期せずして彼の手に集まつた。彼は始めて自分の談話に人々の注意を惹きえたことを意識しつゝますます熱心に鑛山探検の状況を語つた。

「これは今一噸一萬圓してゐます。外國にはない、世界で日本にあるきりなのです。私は今度故郷に十二年ぶりでいつて見ましたが、この水鉛が私の村から出るのです。今現に採掘してゐる處もありますが、此度新しく試掘願ひを出しておきました。」

彼は殆どひとりで話しつゞけた。あとから後から別の包をひらいて、

「これがその水鉛を含有してゐる亞鉛鑛です。これが水鉛の鑛石です。こゝにずつと純な水鉛が通つてゐます。……私は石炭坑には山の中に自分で四年ばかり入つてゐました。」

「どれ、ちよつと、その……」といつて、私の左側から覗くやうにして傾聴してゐた骨董屋は手を差伸べて水鉛をとつて紙に捺擦つて見た。

「なるほど、鉛筆のとほりだ。」

「で、今この水鉛の出てる山は十萬圓でなければ賣らないといつて、私の生れた土地の者は意張つてゐます。どうしますか、大阪あたりから随分買ひ手がやつて來るです。」

私はちつと始終の話を聞きながら、今朝京都で乗つてからのいろ／＼な旅客のいろ／＼な談話を考へてみた。何をきいても景氣のいゝ話ばかりである。凡ての新聞には伊達家の什寶入札の前景氣を大仰に書いてゐたが、一つの新聞には鐵成金船成金について銅成金銀成金が出来たことをかいて、この頃岩越線などの一等室二等室には資本家らしい者や技師のやうなもので殆ど何の汽車もどの汽車も満員であるといふやうなことを報じてゐた。そして日本には今や不景氣といふ文字がなくなるであらうといふやうなことを附け加へてゐた。私は今現にその岩越線の二等室の一部を東海道の汽車の中でも見てゐるのである。さうしてそれと／＼にも私はふとアンドレーフが書いたコーカサスの寶掘りの一生を想起した。彼等は金鑛を探りあてようとして一生をコーカサスの山の中で果たしながら終にその金鑛を發見しないで死んでゆくのである。

向側の旅客は此度の自分の探鑛旅行の頗る見込みのあつたことを尙ほも語りつゞけながら、其等の鑛石をまたもとのやうに新聞に包んで固く緊つて網棚に載せた。

一氣に箱根山を馳せ下つた列車は凄まじい急速力で國府津に少時停車すると、またもとの急速力で疾走

した。緑の野はすつかり暗に没して藤澤か平塚あたりの人家の火が見えたり隠れたりして過ぎた。横濱に來ると探鑛の旅客は鄭寧に私達に挨拶を残しつつ、角々に皮のついた古い柳行李などを提げて降りていつた。

「あゝ疲れた。もう三十分で東京につく。」

と、私は大きな欠伸をしながら、起つて網棚のバスケットを取下した。

## 郊外小景

嫩竹

旅こそよけれ

東中野へ些やかな假りの庵を構へて、庭に僅かばかりの空地があるので、貸家ではあるが、植木を少し許り入れてみた。中でも竹と芭蕉はこの夏の炎暑に思ひの外よく生育して、植木屋が持つて来た時二本白い象牙の如き小さい筍が芽を出してゐたが、親竹の根を深く土中に堀つて植えたゝめ筍は長い間土の中に隠れてゐたが、とても出はすまいと格別期待もしなかつたのが、やがて一と月も立つうちに、いつしか上に龜裂を生じたかと思ふと、そこから思ひがけもなく二本の筍が現はれて来た。私はそれと知らずして買った牝が子を産んだ如く雀躍りして喜び、一日に何度となく近づいて見て物尺をあてゝ、それが一日の間に、いか程伸びるかを測つてみるほどに大事にしてゐると、一本の方がぐんぐん生長するに反し一本は地上に三寸ばかり芽を覗けたまま腐れてしまつた。一本は六月の半から七月の半一と月ばかりの間に二本の親竹と同じくらゐに伸び上り軒の上尙ほ四五尺の高さに達し枝を翳した。三竿の竹、清風明月の宵など縁先に端居しながら、さや／＼と若葉に音をしてゐるのを聴いて喜ぶのも佻しい借家住ひの儂ない一興である。

る。

芭蕉

郊外小景

芭蕉をぜひ植えたいと思つたが、その植木屋になかつたので、何處かにありはせぬかと心掛けてゐるうちに幸ひほかの家にあつたのを分けてもらつて植えた。これも思ひのほかよく、生育して、三株の莖から伸びる芽が、初は棒の如く長く巻葉をぬき出でゝ、それが半日一日のうちにも眼に見えて成長し、柔かい薄みどりの巻葉はやがて二尺から二尺五寸ぐらゐになると、そこで始めて固く巻いてゐた葉を少しづつ端の方から披いた。そして一旦披きはじめると、一日のうちにつき潤葉を披いてしまふ。柔かい涼しい緑の葉は五尺から六尺ぐらゐに伸びて少しの風にも大きな青い葉は軽く煽られてゐる。九十五度六度の炎暑に惱殺されてゐる時に縁先に芭蕉の青葉が揺れてゐるのを見るのが何よりの慰めであつた。

しかし私はその芭蕉を夏日の慰めとしてよりも来る秋の雨夜の樂みとして植えたのである。此の間は今年はじめのひどい野分がした。まだ残暑がきびしいといつても郊外の夜はもういくらか涼味を感じるやうになつて、夜の掻い卷の肌觸り心地よく、折から時雨の音づれる聲にふと眼を覺ますと、雨戸のすぐ外なる芭蕉の葉に降りそそぐ雨が聴こえるのであつた。

芭蕉野分して盃に雨を聴く夜かな



の古句の味のしみくと思はれるものこの頃である。秋やうやく聞けるにつけ、いづれの夏の花樹よりも  
纖弱なる芭蕉は秋を傷むのも早い。

芭蕉葉の何となれとや秋の風

つれなく吹く秋の風は終日芭蕉の葉を吹き揺すつてゐる。やがてさしもに夏の緑を縁先一ぱいに翳して  
みた潤葉の端から、だんくんに末枯れてゆく頃、軒端に折瀝たる秋の聲にじいつと獨り思ひ入る目を待つ  
てゐる。

柿

れ け よ そ こ 旅

東中野から落合のあたりは柿の木が多い處である。以前農家の籬落にまじりて朱き熟柿の色、田圃の寂  
びたる晩秋に情景を點出してゐたものである。今は東京の人の住宅地の垣の中に取り入れられて、その粗  
朴な樹の形、初夏の頃滿枝の嫩葉は暗緑色の涼蔭を軒端につくつてゐる。柿は最も多く私をして田圃の粗  
朴なる生活を聯想せしめる。一つは、自分の故郷の家に柿の古木が屋敷のまわりに四五本もあつて、幼少  
の時、晩秋木の葉は殆ど枝から落ちてしまつた時分、高い處にある梢頭に攀ぢて烏とともに熟柿を取つた  
田圃の樂しみを思ひ起すからであらう。去來が嵯峨の落柿舎の佗びたる生活も偲ぼるゝは郊外の籬落にま  
じれる柿の實の紅である。秋闌くるにつれてその色倍々冴え、その味いよ／＼甘熟する。

私は三坪ばかりの庭に似合ふほどの柿の木をも一本植えた。それは甘い實の成る柿であると先の持ぬし  
は云つてゐたが、私は味を目的としない。五月の頃の柔かい嫩葉の緑蔭をめ、晩秋の頃の冴えたる朱玉  
の色を愛でてである。

東中野の郊外は秋寂びたる庭に柿の實の赤く夕陽に照つてゐるのを見るに必ずしも不適當の地ではない  
が、京都の嵯峨の在所の佗びたる田圃には比べられぬ。東京の郊外は京都の近郊ほど人を落着かしめぬか  
らでもあらうか。

雁 來 紅

景 小 外 郊

雁來紅こそせひ庭に欲しいと思つて、市中の草花屋などを方々往つて訊いてみたが何處にももう苗はな  
かつた。そして種を買つて來て蒔いた。二つ葉は蒔いて五六日も立つとすぐ可愛い芽を覗けたが、丁度そ  
の時家を近い處に移したので、無数の二つ葉は土と一緒に大きなポール函に載せて引越した今の處に持つ  
て來たが、とても育ちさうな見込みがないので放棄してしまつた。新宿の終點の草花屋にはそれがあるか  
も知れぬと思つて往つてみると、大きいのでやうやく三四寸ぐらゐの苗があつたので、買つて來て入口の  
生垣の際などに植えた。その頃近づきになつた西隣の家は主人が私と同縣の人であつた。家主も同じく、  
井は別であつたが板垣の開きから始終出入りして互の庭など見てゐた。そこには私の望みどほりの眞紅と

黄色と斑になつた雁來紅が五六本あつて威勢よく育つてゐた。私はそれが羨ましくつて、自分の處の心細いのと、日に幾度となく見比べてゐた。私はそれでも根よく朝夕水を灌いでゐた。すると見込みのないと思つた雁來紅はその中二本ばかり八月の炎天に多少發育して、尖の方に猩々緋の小さい葉を出して來た。そして種類は少し異ふが隣家のを凌ぐゝらゐの大きさになつた。その頃隣家のは、ふと蟲がついて段々いぢけてしまつた。隣家の主人と私は二人でひどくそれを惜んでゐた。

すると、吾々の家とは檜葉の生垣に沿ふた道を一つ隔てた前の家の生垣の内、軒下の羽目板の脇などに、私共のとは、とても比べ物にならぬほどの大きな葉鶏頭が無數に生えてゐるのを前から時々見てゐたが、一日、夕方表の庭や通りに撒き水をして猿股一つの眞裸體になつてゐる時、自然と口をきゝ合ふやうになつたのを機會に、そちらの庭を座敷の方に廻つて見ると、これは驚くまいことか、まるで雁來紅の叢である。幾百本と數知れぬ雁來紅は、いづれも人の胸まで達くほど伸びて、そこら一面眼覺むるが如き猩々緋の雲が棚曳いてゐるかと思はれる。私と私の隣家の主人とは今更に自分達の庭の葉鶏頭の身すぼらしさを思つて、やゝ暫くの間、感嘆の餘り口もきけなかつた。私達は何とかして、その餘りに數多い雁來紅を、せめて一本づゝでもいゝから貰ひたかつたけれど、さすがに露骨にそれをいひ出し得なかつた。そして欲しくつてほしくつて堪まらない心持ちであることがその家の御飯焚きの婆さんから主人に通じた。主人はまだ獨身で、何處かの學校へ行くらしい書生が四五人合宿してゐた。皆勉強してゐると見えて、い

つも、近所中でも最も静な家であつた。私の不在中に主人が訪づれて、「鶏頭を大變御所望のやうですが、いくらでも上げますから取りにいらつしやい。」といつてくれた。後になつて其主人は、一つ橋南大の教授 Y 氏と知つた。

欲しいほしいと思つてゐる此方の心が向ふに通じて、さういはれてみると、年にも似ず子供のやうに嬌差を感じたが、此の頃の炎天つゞきに移植して折角貰つたものを枯しでもすると惜しいと思つて機を待つてゐた。ある雨模様夕方、雁來紅の主人は自分で、一本群を抜いて大きなのを掘つて私の庭に移植してくれた。高さは五尺にも達し、鮮紅眼を眩するばかり、しなやかに反を打つて伸びた葉の形は丁度石橋の踊りの獅子の頭を聯想せしめる。新竹と芭蕉の緑の中に一莖の雁來紅を點じて庭の眺めが俄に賑やかになつた。

これもやがて晩秋初冬の候鴻雁のおとづれる頃になつたらば、その色倍々霜に冴えて寂びたる庭を飾るであらうと、それを今から楽しみにしてゐる。

(大正十一年八月二十日、時事新報)

## 關ヶ原あたりの春

東海道を汽車の窓から眺めながら旅をして、關ヶ原附近ぐらゐ、私にとつて感傷的な氣分に耽らしめる處はない。それは、單に意味深い史跡を以つて裏付けられてゐる土地であるばかりではない。山や田野の布置形勢が何となく私の興味を惹着けるのである。

あの邊は雪の深い處であるが、従つて春の來るのも遅い。東京を八重櫻の咲いてゐる頃に夜行列車で立つてゆくと、早曉狭霧の中に一本の山櫻が寂しく山の麓に咲き残つてゐたりする。

伊吹山はそのあたりの野末に聳えて見える。冬枯れの頃北國に近い雪横様の空に立つてゐるのを見ると何となくうら悲しい旅情をそそられる。そして又晩春初夏の頃に見ると、靨黷として朝顔のやうな匂やかな藍色に染まつてゐることもある。

あゝ感慨に満ちたこの邊の野の色、山の姿よ。

## 湖 光 島 影

## 琵琶湖めぐり

比叡山延曆寺の、今、私の坐つてゐる宿院の二階の座敷の東の窓の机に凭つて遠く眼を放つてみると、老杉蒼鬱たる尾峰の彼方に琵琶湖の水が古鏡の表の如く、五月雨霽れの日を受けて白く光つてゐる。湖心の方へ往復する汽船が煙を吐いて靜かに滑つてゆくのも見える。帆船が動いてゐるのも見える。そのあたりは山の上から眺めても湖水が最も狭められてゐる處で、向ふ側から長く突き出して來てゐる遠洲は野洲川の吐け口になつてゐる。北方（西岸）から突き出てゐる處に人家が群つてゐて、空氣の澄明な目などには瓦葺粉壁が夕陽を浴びて白く反射してゐる。やがて日が比良比叡の峰つゞきに没して遠くの山下が野も里も一樣に薄暮の底に隠れてしまふと、その人家の群つてゐる處にぼつりぼつり明星のごとき燈火が山を蔽うた夜霧を透して瞬きはじめる。その賑やかな人家の群りが先頃から、京都の繁華を離れて此の無人聲の山の上の僧房生活をしてゐる者の胸には何となく懐しくて堪らない。人里の夜の燈火のむれがどんなに此の山の上からは心を惹くか知れない。そこは八景の一つに數へられてゐる堅田の町であつた。堅田の町、秋ならば雁の降りる處。また浮御堂の立つてゐるので知られてゐる名勝區である。叡山東麓の阪本からこ

の延暦寺の根本中堂のあるところまで急阪二十五町の登路。阪本から堅田までは汀づたひに二里弱離れてゐるから、私の凭つてゐる窓から燈火の見えてゐる處まで直徑どのくらいあるか、私は兎に角、早く一度そちらに降りていつてみたくなつた。

琵琶湖はまた鳩の海ともいひ、その名の如く琵琶に似て、瀬田、膳所、大津などの湖尻から三里ばかり北に入つてゆく間は東西の幅も一里位のもので、それが野洲河口の長沙と堅田の岬端とで狭められてゐる邊は約半里くらゐのものかも知れぬ。それだけの間が恰も琵琶の轉軫の部分である。所謂近江八景は「比良の暮雪」のほかは、多く湖南に屬する地點を撰んで名付けてあるが、今日の如く西洋文明の利器に漬されない時代には、その邊の風景も落着いてゐて一層雅趣が豊であつたかも知れぬ。その頃は唐崎の松も千年の縁を誇つてゐたのであらう。膳所の城もその瓦臺影を水に醗してゐたであらう。栗津が原の習々たる青嵐も今日のごとく電車の響のためにその自然の諸音を亂されなかつたであらう。芭蕉は殊のほかこの湖國の風景を愛で、石山の奥には長く住んでゐたのであるが、翁の詠んだ句には湖水の深い處の句は、自分の寡分のせむか餘り知らない。多く湖南に屬する景物を吟じてゐる。

唐崎の松は花よりおほるにて

と大津にゐて詠んでゐる句を見ると、二百年前にはそれが實景であつたかも知れぬが、今はもう半ば枯れて空しく無慘な残骸を湖畔に曝してゐる。それは樹齡の定命で自然にさうなつたものか、それならば止むを得ないが、汽船の煤煙で枯れたものとすれば惜しいものである。

とにかく堅田、野州川河口の長沙以南の湖畔の景致は産業文明のために夥しく損傷されて、昔の詩人騷客を悦ばしめた風景の跡は徒に過去の夢となつてしまつてゐる。水も底が泥で汚く濁つてゐる。その代りに轉軫の部分から胴の部分に入つて、堅田の鼻をひと廻りして遙に北に眼を放つと、水面忽ち濁け雲煙蒼茫として際涯を知らない。

私は琵琶湖の奥の絶景を人から聞いてゐたのは長いことであつたが、いつかは行つてみたいと思つて氣にかゝりながら久しく果たすことが出来なかつた。先頃京都にゐる間にも三條大橋の京津電車の終點からゆけばわけないので、幾度か思ひ立ちながら毎時好機を逸してばかりゐた。すると、僧房の色彩の乏しい生活と、寂しい心を誘惑するやうな堅田の人家の群りと燈火とは遂に私をして、ある五月雨ばれの朝早く比叡山の上から二十五町の急阪を降つてゆかしめた。發着の時間がよく分つてゐなかつたので、比叡の辻の太湖汽船の乗降場までゆくと、八時半にそこに寄航する東廻りの船が二十分ばかり前に出たあとで、その船は煙を吐きながら堅田の沖を今滑つてゆくのが見える。私はぐるりと湖水をひとめぐりするつもりである。殊に東岸には奥の島があつて、そこには古い長命寺の寺があるので、かねてよりその寺に行つてみたい

と思つてゐたから、どちらを先きにしてもよかつたのだ。私は折角二十五町、阪本の濱までは三十五六町の道を喘いで降りて来たのに、そんなわけで、残念さうに遠くの水の上をゆく船の影を追ふて眺めたが仕方がない。そこで通ひ船の船頭の教へるまゝに、その次に西廻りをゆく船は急行で、阪本港へは寄航しないので、堅田まで俾でいつて、其處から乗ることにした。なるべくならば少しの行程も水路をゆきたいのであるが、先頃來、山の上から眺めてゐる堅田の町に入つてみるのも旅の一興であると早速心を取り直して俾のある處までまた七八町の道は無駄足して下阪本の濱から俾に乗つた。比叡の峰つゞきの裾山が比良岳の方に向つて走つてゐる山麓の村里を過ぎ挿秧のはつたばかりの水田や青蘆の生ひ茂つた汀つたひの街道を走つていつた。俾の上から湖東の方を顧ると、此の春遊びにいつた三上山が平潤な野州郡の碧落と緑樹と點綴せる上にくつきりと薄墨色に染まつて見えてゐる。衣川といふ昔は一萬石の城下で、北國街道の宿であつた村を越して、村はづれを流れてゐる衣川といふ小川の土手を上つて橋を向ふに渡ると、堅田の人家は右手の湖の方に突出でた田甫の彼方に見えた。大津を十時に發する船は十一時に堅田を發することになつてゐる。時計の針は此の時もう十時五十分を示して、船は田甫の向ふの青蘆のうへに黒い煙突だけを見せて吾々の俾を追掛けるやうに水の上を滑つて進んでゐる。脚達者な車夫は、

「これに遅れたら、もうお金もらひまへん」と笑つて語りながら急速力で駆け出した。

「どうぞす。浮御堂へ一寸寄つてお見やすか」と車夫は、そちらへゆく道と棧橋の方への岐小路の處で

聲をかけたが、私は、京にゐる間から今まで幾度か行きそびれてゐるのに懲りて、直ぐ棧橋の方へ走らした。軒の低い呉服屋や荒物屋などの竝んだ商家の通りを過ぎて俾が棧橋の手前の切符賣場にやつと轆棒を下すと、ぼうと笛を吹いて汽船の姿が近くの水の上に見えた。

浮御堂は、その棧橋を渡りながら右手の方の汀から架け出してあるのが見えてゐる。緑の濃い松が數株そのまはりの汀に立つてゐる。芭蕉は、

鏡あけて月さし入れよ浮御堂

と詠んでゐる。叡山横川の恵心僧都の創建で海門山満月寺といつてゐるのは、ふさはしい名である。中には千體阿彌陀佛を安置してある。やがて船が着いて私はやつと湖上に浮ぶことが出来た。前甲板に吳産を敷いて天幕を張つてある處に座をとつて私はそこから四方を顧望してゐた。

今朝山を下りて來る時分には、どうかと氣遣つた天氣は次第に晴れて大空の大半を掩つてゐた雲は追々に散らけ、梅雨上りの夏の來たことを思はせる暑い日が赫々と前甲板の上を蔽ふたテントの上に照りつけた。雲が刻々に消散して頭の眞上にあたる蒼空が次第に天上の領域を擴げてゆくと共に、水の面も船の進行につれて蒼茫として潤けて來た。日は水を照らし、水は光を反射して輝き、水と天と合して渾然たる一大碧瑠璃の世界を現出し、船はその中を、北から吹いてくる習々たる微風に逆つて靜に滑つてゆくのである。湖水では北風が吹くと晴としてゐる。昨日一日山の上で濛々として咫尺を辨せぬ淫雨に降り籠めら

れ、今朝は夙に起きいで、二十五町の急阪を驅けるごとく急ぎ下り、勝手の分らぬ船の乗降に、さらでだに疲れたる頭を無益に悩ましたるそのうへに尙ほ二百里の間、いぶせき田舎の泥濘路ぬかみちを俥に揺られて、ほとと探勝に伴ふ體苦心苦の辛さを味はひ、強か幻滅の悲しさを感じてゐたのが、眼の前に開けた美しい湖山の大觀のために、今までの憂苦は全く忘れられて、私の心は嬉々として眼の覺めたとき悦びに満ち、或は左舷に立つて眺め、或は右舷を凭つて遠く瞳を放ち、片時も眼を休ませないで、飽くことを知らず刻々に移り變る山の影水の光に見惚れてゐた。ここまで來ると比良比叡の峰つゞきが、適度の距離を置いて一とまじめに雙眸に入つて來た。上空から次第に拭ひ去られた雲は僅かに比叡と比良の頂に白紗を纏ふたごとく残つてゐたが、正午ごろになつて太陽の光が一層強くなつてくると、やがて比叡の頭にも雲は消えてなくなり、船の北進するにつれて山の影は次第に淡く南に残り、清楚な夏の姿は、さながら薄化粧を施したやうに緑の上を白く霞に包まれてゐる。

船が堅田を出て初めての寄航地である。南濱に寄つて、そこから再び沖に出ると比叡の山影はいよ／＼淡く、逢坂山からずつと左に湖南の方に連つてゐる山脈とともに段々と遠く水の彼方に薄れていつた。そして左舷には、蜿蜒として湖西の天を蔽ふて聳えてゐる比良岳がその雄大なる山谷の全幅を雙眸の中に展開して來た。雨後の翠巒は一際鮮かで、注意してよく見てみると、峰は大きく二つに分れてその二つがまた處々深い溪によつて幾つかの峰に分れてゐる。雲は山の面から去つてしまつたが、一番高い主峰だけに

は綿を千切つたやうな灰白色の雲が頂にかゝつたまゝ何時までも動かうともしない。それが如何にも主峰は主峰だけの威嚴を示してゐるかのやうで雲に隠れた部分は距離が遠いせゐるか清楚な夏の色も暗緑色に掻き曇つて恐しさうな感情を興へてゐる。雄松崎の白沙青松は、主峰が大きな溪によつて二つに分れてゐる處から流れ落ちて來る急角度の傾斜を成した比良川の溪流が直ちに湖水に迫つて汀に土砂を押し流したところに出來てゐる。山は攝津の六甲山などと、同じやうに花崗岩質の山と思はれて、船の上からも白い砂の盛れ上つてゐる溪流の水路が明かに見えてゐる。比良岳はその高標の割に何となく雄偉の感じに富んだ山である。一つは山の處々に薙の多いのが、何となく慘憺として悲壯な感じを起さしめるのかも知れぬ。肉が少く骨の太いやうな山である。それでも山下の村々はこの静かな山の裾に平和に棲息してゐると思はれて眼の醒めるやうな山麓の青草と緑樹に埋れて汀を綴つて人家が斷續してゐる。雄松崎は近江舞子の名、遊覽者の眼を欺かず、洗つたやうな清い汀に静かな小波が寄せてゐる。まだ樹齡のさまで古くなささうな、すんなりとした松林が白砂の上に遠くつゞいてゐる。

其處から西北にあたる比良の北岳の中復の岩に深く刻まれた皺があつて、飛瀑が懸つてゐるのが白く見えてゐる。楊梅の瀑といはれてゐる。船の上からそこまでは直徑にしても一里以上はあるだらうが、それでも可なり大きく見えてゐるところを思ふと、なか／＼高い瀧らしい。

船は長い間比良岳を仰望しながら走航をつゞけてゐた。更に右舷の方に眸を轉ずると、此の時、湖東の

奥の島の三つに整つた山の影はもう稍東南の方に退いて、その前に横はつてゐる沖の島の翠微が赭土色の断崖面をいつまでも眼印のやうに此方に向けてゐる。

湖面は東北に向つて、愈々遠く濶け、淼漫たる水は海の如く蒼茫として窮まるところは空と水と遂に一つに融けてその他には何物も認められない。やゝあつて多景島と白石島とが遠くの水の上に微かな姿を現はして来た。

多景島は青螺の如く淡く霞み、沖の白石は丁度帆船が二つ三つ一と處にかたまつてゐるやうに見えてゐる。その向うの方にぎざぎざとして入江の影ともつかず、人家の群りともつかず障子に映る影繪のやうに、たゞ輪廓のみ續いてゐるのは彦根から長濱の方であらう。地平線の上は水に煙つてゐて、はつきりとした物が見えないが、その上の方に遠く青空を支へて湖東から湖北の天を繞らしてゐる山の容が透迤として連なつてゐるのが次第に明かに認められて来た。遠く北國の方から来て、北美濃と東浅井郡との境を長城の如く堅めてゐる山脈は北の方に抽んで、高く、深い鬱氣を付けてゐるのが金蕨岳といふのであらう。それより山勢大なる波濤の如く南に走つて伊吹山に到つて強く支へられてゐる。伊吹山は北背に其等の山脈の餘波を堰き止めやうとして山容やゝ崩れてゐるが、西南に面した部分は急に鮮やかな傾線を引いて、さながら東國と西國との通路を守るものゝごとく、關ヶ原と思ふあたりの狹隘を俯瞰して峙つてゐる形勢が明かに看取される。東海道を往復する毎に、いつも私の強い興味を惹く山であるが、今日は雨後の

澄明な空氣の中に夢の如く淡く薄紫の霞を罩めて靜かに立つてゐる。比良岳の主峰と同じやうに、その頂にも一團の雲がかゝつて、それが何時までも消えようとしなない。頂點がどこまで空に達してゐるか分らない。そこに何だか犯し難い神祕を藏してゐるやうで、高山の威重を示してゐる。傷ましいやうな大きな崖のあるのも見えてゐる。西軍の主將石田三成が戦に破れて、あの山の中の洞窟に潜んでゐたといふのは極めてふさはしいといふ一種の悲壯な感じを表はしてゐる。伊吹山の南の方は暫く山脈が断絶し、更に關ヶ原低地のある南方に至つて再びもくもくと天に支へるやうに隆起してゐる一團の山塊が古の不破の關を固めてゐた靈仙山である。伊吹山や靈仙山や其等の山々が皆昔時の東山道の通路を隔してゐたといふことは一望して明かに肯かれる。琵琶湖は是等の湖東の國境に連なる山脈の眺望と、比良岳の翠巒を仰ぐことがなかつたならば、湖水の風景はどんなに平凡なものであつたか知れない。是等の山々をパノラマの如く雙眸に收めてゐることは、琵琶湖をして恰も中禪寺湖や葦の湖などのごとき、高山の中腹に湛てゐる火山湖の趣きを成さしめてゐる。それと共に湖水を取り巻いてゐる四圍の地が古來人文の中心に近く、また湖東の地が屢々戰國時代に在つて英雄の争覇戦の行はれた史蹟に富んでゐるので、自然がたゞ單純な山河として豊かな歴史的の感興を以て裏付けられてゐる。

私は右舷の欄干に凭れて伊吹山の頂にかゝる雲と、その傷ましい難の跡とをやゝ暫らく見つめてゐた。船はその間にも進航をつゞけて、白鬚明神の社のある明神岬を廻つてゐた。明神岬は比良岳の餘脈が比良

の北岳から二つに分れて、一つはそのまゝに北に走り一つは本来の比良山脈と殆んど直角を成して湖岸に迫り山崖が汀に突出してゐる處がそれである。そこまで来るともう今まで長い間見て来た比良岳も斜に後に退いて、綿帽子を着けたやうな主峰のみが鋭かに聳えてゐるのが遠く眺められるばかりである。明神岬の鼻を一寸廻ると大溝の町が水に臨んで立つてゐる。そこから琵琶湖の岸に沿ふて近江國の西北端になつてゐる高島郡の平野が安曇川を挟んで潤けてゐる。近江聖人の邸址で知られた青柳村の藤樹書院も大溝の港から半道ばかり北に行つた處に在る。明神岬の鬱蒼たる森に至つて盡きてゐる比良の支脈を後にしてから船はやゝ山の眺望から遠ざかつて安曇川の河口に擴がつてゐる平洲を左舷に見て進んでゆくが、それでも比良岳がそのまゝ一直線に北に向つて伸びて出来てゐる蛇谷峰、阿彌陀山などの相應な高度を示してゐる山巒が安曇川流域の平野の果てに屏立して左舷の遠望に景致を添へてゐる。それは丁度二時頃の日盛りで、強い日光に照りつけられてゐる其等の山巒には多量の雨氣を含んだ薄墨色の水蒸氣が纏うて眼を威脅するやうに險しい表情をしてゐる。

竹生島は大分遠くから見えてゐたが、その邊まで来ると、一層明かに青い水の上に浮んでゐるのが見えて来た。伊吹山、金糞岳、それから若狭、越前の國境に繞らしてゐる蜿蜒とした連山も段々明かに認められて来た。賤ヶ岳、淺井長政の居城とした小谷山なども指さされた。そして伊吹山は恰も其等の盟主であるかの如く、頂點のところ白い横雲が捺塗つたやうにやつぱり引懸つてゐる。天に支へるやうな巨大

な體に溢れるほどの感情を表はしながら何といふ強い沈黙であらう。頂の雲は今にも動きさうな形をして流れてゐながら、雲も山もそれを見てゐる人間の眼を焦らすかのやうに、彼等は動いたり口を利いたりすることを忘れたのかといひたいほど沈滞してゐる。

饗庭野の陸軍演習地のあるので賑はうてゐる今津の町は、水の上からも、陸軍の白いバラックの屋根が多くあるので遠くから、それと知れてゐる船はそこを最後の歸航地として棧橋を離れると、今まで北に向つてゐた進路を轉じて稍、北に振つた、東に向つて進んだ。竹生島は船首に當つて段々近寄つて来た。その時分にはもう乗客は殆ど何處の船室にも、甲板にもなくなつて、或は私一人であつたかも知れぬ。やがて竹生島の棧橋に上陸したのは午後三時であつた。堅田からそれまで四時間の間飽くことを知らぬ美しい山水を眺めつゞけにして来たのであるが、丁度活動寫眞などを餘り熱心に見てゐると、後で頭痛がしたり精神が疲労したりすると同じやうに、知らぬ間にひどく神經を使つたと思はれて、さうなくてさへ先達つて京都にゐて二度ばかり劇しい腦貧血を悩んだ後なので、竹生島の棧橋に上陸するとともに頻りに生欠伸が連發して頭が病め、何とも云へない不快な心持ちになつて来た。その晩は竹生島の寺に一泊するつもりであつたので、ともかく寺務所の一室に通されて暫らく休息した上で、觀音堂や都久夫須麻神社などを一順參拜した。いづれも太閤の桃山御殿の一部を移したものとかで、壯麗なる蒔繪の天井や柱が年を経て剥落してゐる。すこし良くなつたと思つた心持がまた前に倍して悪くなつてきたので、観るのはいい加減に



してまた寺務所の一室に戻つて来て外套にくるまつたま、仰けに寝てゐた。頭は壓し潰されるやうに痛む、胸は嘔氣を催はして少しでも頭を動かすことが出来ぬ。氣も遠くなるやうな心持になつてゐた。そして若し此のまゝ、腦溢血にでもなつて死んだらどうなるだらうなどといふやうな雜念が湧いて起つた。それでそこにゐた所化に事由を話し、別棟の寢處に移つてその晩は夕飯も食はず風呂にも入らず、呻吟しながら寝てゐた。それでも一と寝入りして九時頃に眼を覺ますと、頭もやゝ軽く、氣分も大分快くなつてゐた。それで安心して此度寝なほすと、翌朝まで一と寝りに熟睡することが出来た。

湖の西岸は汽船の往復も一日に數回あるが、湖東の方はずつと汽車が通じてゐるので、従つて船の便は少く、大津と竹生島との間は東廻りは一日の往復一廻づゝしかない。琵琶湖の一番奥になつてゐる。もう餘呉の湖に近い鹽津をまだ闊いうちに帆船が竹生島に朝の五時三十分に寄航するのである。歸航はせひとも湖東を廻つて来ようと志してゐたので五時半の船に乗り遅れたら、また一日竹生島に逗留しなければならぬ。寺男は氣を利かして寢室を覗いて、どうするかと注意してくれたが、強ひて起きられさうだつたけれど、折角まだ二三時間は眠れさうなので、此の快よい睡眠は何物にも代へがたく、私は蒲團の中から聲を出してもう一日延ばすことにした。

午前十時三十分には西まはりをして大津の方に歸つてゆく船があるので、その時はいつそ昨日と同じ風

景を眺めて歸らうか、二日續いても三日とは受け合はれない梅雨半ばの此の頃の天候は明日になつてまたどう變るかも知れないとさまざまに迷つてみたが、まゝよ、雨が降らば降れ、雨も又奇なりと思ひあきらめて、遂々その一日は竹生島に逗留することにして、それより舟を雇うて島の周圍をひとまはりしてみる。謠曲の「竹生島」に、

綠樹影沈んで魚木に登る景色あり、月海上に浮んでは兎も浪を走るか、面白の景色や

といつてゐるのは實景である。島の周圍は全部岩石を築き上げてそれに生ひ茂つた眞青な苔や一つ葉、擬寶珠など名の知れぬ無數の草がその上に生ひ被さつてゐる。その上に又緑の木々が蒼鬱として繁茂し、瑠璃を砕いて溶かしやうな美しい眞青の水に暗綠色の影を醸してゐる。深い水の底を鯉や鮒などが泳いでゐるのが、よく透いて見える。頭を上げて岩上を見ると上には驚くほど無數の種類草木が足を踏み入れる隙もないまでに雜然と密生してゐて、中に櫻、椿、藤、楓などの四季々々を飾る樹木が案外に多い。椿は殊に島の蔭に面した、凄いほど青い水が岩を醸してゐる處に濃綠色の影を翳してゐる。舟夫はその椿が眞赤な花を付ける時分や藤の花が長い薄紫の房を水に映す頃の島の美しさを語つた。私にもその時分の美しさがよく想像せられた。琵琶湖もそこまで来ると、若狭、越前の國境に連なつてゐる山脈の餘脈が直ちに湖岸に迫つてゐて、廣い水は其等の斷崖によつて圍れてゐるので、中彈寺湖や葦の湖などの火山湖と少しも異なる感じを興へてゐる。

その日は一日さうして孤島に逗留つて私は又しても退屈さうに湖上を遠く眺めて早く夜が明けて明日になることを思つた。辨天の祠前の舞臺に上つて東の方を見ると、沖は灰色に搔曇つて伊吹山も、ただ山の輪畫ばかりが幽かに見えてゐる。明日は雨らしい空模様で、島の根を洗ふ波の音が夕刻に近づくに従つて大きくなつて来たやうである。

頭の調子がどう狂つたか、昨夜は一寸も眠られなかつたので、夜の明けのを待ちかねて起きいで、體を拭いて衣服を更め、五時半に發する汽船をもう五時頃から棧橋の處に降りて待つてゐた。沖は曇つてゐるが、切符を賣つてゐる老人に今日の天氣はどうかと訊くと、「天氣になりますやろ」といふ。雨が降つたら湖が多少荒れるばかりじゃない。阪本から二十五町の杉林の下を叡山まで登つてゆくのが難儀である。昨夜は眠られぬまゝにそんなことばかり氣にかゝつてゐたが、老水夫の經驗によつてその點は安心らしい。やがてブウと汽笛が島の蔭で鳴つて鹽津から出て来た船が着いた。客は私一人かと思つて通ひ船に乗り込んでゐると、寺の高い石段を寶巖寺の老僧が新發地しんぱつちなどに扶けられて、杖を突いて急いで降りて來られる。舟夫に老僧が何處かへゆかれるかと訊くと、何處かへゆかれると答へたが、言葉がよく分らなかつたので、何處へゆくのだらうと思つてゐるうちに老僧はそこに渡した歩板あゆみをわたつて舟に入つて來られた。十四五歳の新發意が千代田袋に菓子折くらゐの小さい包みを持ちそへて附いてゐる。私は好い鹽梅

に老僧に會ふことが出來た。二晩厄介になつたお禮もいひ、話しに七十幾歳の高齢で、竹生島には小僧さんの時分からずつと定住してゐられるのだといふ。花は咲き鳥は歌ふことがあつても嘗て女人を解せず、量酒を知らず、春風秋雨八十年の生涯を此の江湖の水によつて遠く俗界と絶ち、たゞ一と筋に佛に近よることを勤めて老の到るのを忘れてゐられるのである。それは昨日ほかの者から噂にきいてゐた。

老僧は通ひ船に乗り込んだはずみに私の方に近づいて來られたので、私は會釋をしつゝ、

「いろ／＼お世話になりました……」

とお禮を述べると、老僧もそれと同時に、女のような柔和な笑顔をこちらに向けて、

「ゆきとゞきませんで、さぞ御不自由でお困りでございましたせう」

と、聲も女のやうに優しい寂のある聲である。觀音さまには男相と女相とあり、或ひは男とも女とも區別のつかぬ御顔をして居られるのであるが、老僧こそ風光明媚なるこの竹生島觀世音の化身ではあるまいかと思はれて、顔容といひ音聲といひ、體まで小さく瘦枯れて女と見まがふ柔らかな方である。中古の黒緞の道服に絹袖の着物の質素な装をした老僧は杖をついて舟の中に向ふをむいて立つてゐられる。

やがて汽船の傍に漕ぎ寄せて老僧はこせうに扶けられて船に乗り移り、私もそのあとから續いて乗つた。離僧さんが手荷物を老僧に渡して歸つてゆくと、一等室には老僧と私と二人きりである。老僧は行儀よく端の方に腰を掛けて、兩手を膝に載せてをられる。どこまでゆくのであらう。あまり遠くへゆくので

もなさうだと思ひながら、

「どちらへおいでになりますか？」

「私は早崎まで、すぐこの先の地方ちかです。」

「あゝ左様ですか、御老體にもかゝはらず、お達者で御結構です。お幾つにおなりになりますか。」

「あゝ左様ですか、私の老母は當年七十八歳になりますが、先年竹生島へ参詣いたしましたことを話して居りましたので、湖水の風景を觀かたく是非私も参詣したいと思つて居りましたが、今回漸く宿望を遂げました。誠に聞くに優る美しい景色の處で。」

「あゝ左様で、その頃は今より又一層交通なども不便であつたでせう。」

老僧は柔和な口元に優しい微笑を浮かべながら語る。世間のさういふ老僧などに屢々見る對手を見下したやうな尊大な口の利きやうや、僧侶に共通の俗人を諷すやうな言葉尻の臭味もない。そこへ船童が茶を入れてきた。老僧はそれを見ると、船童に、

「私は白湯にしてもらふ。この方はお茶にして、……此の方はお茶にして。」

さういつて二度目の、此の方はお茶にしてといふのを稍々語勢を強めていはれた。ボーイはその通りに老僧には白湯を汲んで薦め、私の方へは茶を煎れて出した。すると、老僧はその茶碗を手にとつて底に一

滴も残さぬやうに仰向いて茶碗を啜り、空になつた茶碗を靜と茶托の上に伏せて置かれた。人は平素の行儀を一朝にして改むることは出来ない。書生流の私は茶碗を半分だけ飲み残した。老僧に眞似てそれを伏せることもならず、そのまゝ茶托とともに卓の上に突出して置いた。舟車の中では大抵の人は通常の家に在るよりも一層行儀を忘れて顧みないものだが、老僧には少しもさういふ風は見えぬ。その時も私があるくなつて老僧が一人きりであつてもその通りに恭謙であつたにちがひない。一碗の食一滴の水も佛恩であるから、これを粗末にしてはならないといふ訓條を恪守して、それが今は習ひ性となつてゐるのであらうと思はれた。そのうちにもう船は向岸に近づいたと思はれて船長が入つて来て老僧に挨拶をしていつた。私も起つて老僧にお別れの辭儀をして顔を上げてみると老僧はまだ圓い頭を兩掌に載せて卓の上に額づいてゐられる。私は詮方なくもう一遍額を下げた。船童は手荷物を持つて老僧の先きに立つて案内する。私もあとから送つて出た。

舷側には一二人の乗客を乗せた通ひ船が近づいて来た。老僧は船長や船童に扶けられて通ひ船に乗り移り、蘆の上いきちんと坐られた。そして舷側を離れるとともに恰も佛の前に稽首くやうに、三度ばかり鄭寧に頭を下げて謝意を表せられた。恐らく此の時の老僧の心には船長やボーイその他の見送つてゐる者が佛の使者として考へられたのであらう。老僧の心眼には一切の有情無情が佛の一部として映つてゐるのであらう。

船はさうして老僧を通ひ船に移すと直ぐまたけたましい推進機の音に水を蹴つて進航を始めた。甲板に上つて見てみると、朝霧の中から漸く眼の覚めかゝつてきた水の上にとどこからともなく薄い日影がさして湖の上が次第に白く輝いて来た。老僧の圓い頭が一つその中に見えて通ひ船は段々向ふに遠ざかつてゆく。早崎に續く地方の寺や人家の屋根が緑の樹々と點綴して汀の青蘆の彼方に遠く廣がつてゐる。先刻竹生島の棧橋で老人のいつたとほり、天氣は確かに晴れであるらしく東の方が倍々明るくなつて東北の方の山脈が霧の奥から雄大なる姿をすこしづゝ露はしてきた。金葉ヶ岳、伊吹山も深い雲霧の彼方にまだ夢みてゐるやうな淡い影だけ見せてゐる。老僧はと水の上を見ると白い水煙の彼方にやつぱり圓顚の姿が小さく見えてゐたが、そのうち舟の影と共に霧の中に消えてしまつた。竹生島も、もうずつと西北の水の向ふに影が薄れてしまつた。

昨夜の代りに今のうちに少し寝て置かうと思つて一旦船室に入つて来たが、やつぱり甲板の眺望が氣にかゝつて眠られさうにないのでまた起きて出て見る。その間に船は姉川の河口を廻つて南濱といふところに寄つて、そこからは乗客がどや／＼甲板に上つて来た。賤ヶ岳の方も今朝は船尾の方にそれと認められる。小谷川も朝霧の中に朝日を浴びてゐる。長濱に着いた時はまだ七時で貨物の積み下しに出帆までには三十分ばかりの時間があるといふので、その間を利用して長濱の町の瞥見に上陸してみる。肥料にする干魚の臭や繭の市場の臭ひのする中に商賈に抜目のなささうな町の人間はもう夙に起き出でて、その日の業

務に就いてゐる。天氣は本當に晴れ上つて暑さが劇しくなつて来た。

長濱を出てから昨日は遠くに見た靈仙山が今日は長濱から彦根につゞく坂田郡の平野の彼方に天を衝いて盛り上つてゐるのが見える。彦根の城閣も朝霧の中に朦朧とした輪廓を見せて来た。その少し左の方に佐和山の城址も見えてゐる。

今まで忘れてゐた右舷の方の湖上に眼を放つと、多景島がやゝ近くに岩の上に立つてゐる堂塔の形を見せてゐる。沖の白石はその眞西にあたつて、今日も白帆を集めたやうに水の上に浮いてゐる。今日は一日に倍して湖の上が一層和やかで、平滑な水の面は油を流したやうにのんびりとして沖の方はたゞ縹渺と白く煙つてゐる。天氣が好いと見たか湖西の方の水面には幾つも帆船がかゝつてゐる。船が彦根を出るとボーイに誂らへて置いた辨當が出来たので、それを甲板に持つてこさせて湖上を展望しながら食べる。そこから奥の島の伊崎不動のあたりまでは三十分ばかりの間左舷の風景が稍々單調なので、今のうちに少し微睡をとつて頭を休めておいて、奥の島が近づいて来た時分に起きようと思つて室に入つてシャツと股引ばかりになつて長く寝そべつてゐると、相客は一人もゐないで、いゝ心地にづる／＼とまどろむことが出来た。そして眼を覺して舷窓から水の上を覗くと、いつの間にか伊崎の不動は後の方に退いて船は沖の島の東端を廻はつて早や奥の島との湖峽にさしかゝらうとしてゐる處である。此の邊を見ずしては大變だと、慌てゝ甲板に立ち出ると、左舷には文人畫に見るやうな奥の島の明媚な山水が眼の前に開展してゐる

ところである。それとも右舷の方を顧望すると、比良岳は漂渺たる水の果てに一昨日見た時よりも今日は一層壮麗な姿をして聳えて見える。

(八年七月八日誌す)

### 鳥羽の海光

四月の初、久し振りに關西の方の旅を思ひ立ち、通例東京の方から京阪見物に出掛ける者が取る、極めて月並の順路を経て、先づ伊勢路を志して出發したのは、四月の二日の夜九時三十分東京驛發の急行であつた。

實は、近年ひどく身體の持ち運びが臆劫になり、汽車の乗り降りから手荷物の世話などに、一人若い人間を同伴したかつたのだが、都合わるく、結局一人で立つことになつた。それでも立つ日には新聞の續き物を三回と、尚ほ旅装を整へてからも他の新聞へ送るべき雜録などを書いて、ついでに持つて出で、赤帽に手荷物を運ばして、前日買つて置いた寢臺車に横はると、もうその晩の夕刊さへ讀むのも大儀になり、横濱へ停車したのもよくは知らず、ひどく煤烟臭いので、ふつと眼を覺まして、はゝあ箱根だと思ひ、静岡、濱松などゝ、夜更のプラットフォームで窓外を驛夫の呼んで歩く聲を聞いたやうであつたが、そのまま又寢入り、やがて名古屋へ程近くなつて眼を覺ました時には、もう沿道の菜の花の野も、ほのくくと明け放れて來た。

名古屋で關西鐵道線に乗換へ、木曾掛斐の二大鐵橋を渡つてゆく頃は、曉雲尙ほ空を鎖して何となく濕

りがちであつたが、時刻の移るにつれて春陰の空模様は次第に明るくなり、東京ではまだ彼岸櫻さへ咲かなかつたに比べ、此方は春の訪れるのもやゝ早いと思はれて、海に近いステーションの構内にある櫻はもう満開してゐるところもあつた。

やがて龜山に着き、そこから汽車は參宮線を南に駛せてゆく。この行、最初、自分は、どうした心機からか、ふと伊勢參宮を思ひ立つた。自分をはじめ大廟へ參拜したのは、今からざつと三十年ほどの昔になる。關西鐵道線路はその後たび／＼乗つたことがあるが、龜山より以南は約三十年ぶりである。沿道の景色の古い記憶は全く薄れてしまつてゐるが、二十歳の時の夏、一人近江の草津から龜山を経て參宮線に乗つて來た時分のことが夢の如く思ひ起された。大廟參拜も參拜であるが、當時の旅行記などを讀んで、何となく伊勢灣の風光に親しんで見たかつたのが當時の旅行の動機であつたらうと思ふ。その時は二見の浦の海水浴の旅館に一週間ばかり滞在してゐた。

今度は志摩の鳥羽に一泊してみるつもりで、トランクの手荷物は、昨夜東京驛で預け鳥羽まで送つておき、自分は山田に下車して大廟に參拜するつもりである。やがて山田驛に着車したのが十時半。そこから腕車を雇ひ、まづ外宮に詣づ。此の日恰も神武天皇祭に當り、參詣の群集雜沓してゐた。こゝでも神苑の櫻花が爛漫として咲き盛つてゐる。伊勢路の春は東京よりも大分早い。好い日に自分は來合せたと思つた。

外宮の參拜を済まして又腕車に乗り、山田の町を、舊道を経て内宮のある宇治の方に向つた。車夫は俵を挽いていきながら、深切に、いろ／＼の説明をして聽かす。少しゆくと、だら／＼登りの阪道にさしかかる。それが間の山のお杉お玉の榮えた跡であるが、今はその邊り殊のほか荒廢して昔の面影さらになく、それでも例年四月一ぱい、昔の眞似事を興行し、ちやうど二三日前から又始めたところだといつて、道の傍の小屋掛けに汚れた淺黄の幕など張つて、どんちゃん騒がしい音を立て、囃してゐるが、まだ一向客脚は寄り付きさうな景氣も見えない。電車が出來たり、新道を自働車で走つたりする急がしい客が多くなつて、かういふ昔の遺物は、近世産業革命の通り過ぎた後に惨めに餘喘を保つて、取り残されてゐるに過ぎない。車夫は阪道を上りながら、

「それに今日ではもう昔のやうな一文錢がないやうになりましたさかい、一向あきまへん。」と、笑つていつてゐる。

お杉とお玉とが、大きく鬢を張つた頭髪で、見物が彼女達の顔に向つて投げ付ける錢を巧みにその張つた鬢でうけ留めるのが興であつた。昔ながらの春は今年も又めぐり來てゐるが、お杉お玉の姿はもう見ることは出來ない。伊勢音頭で名高い古市の備前屋は今でも女郎屋であるが、虎屋は旅館に商賣を變へてゐる。私はその虎屋の前を車の上から眺めて通りながら、そこへ一晩泊つてみてもいゝなどと思つて通り過ぎた。

宇治橋の手前で俵を下り、五十鈴川の清流に架した、その橋を向うに渡つて神苑を歩いて、大きな楠や杉の鬱然頭上を蔽ふた五十鈴川の御手洗場に来ると、そこには多くの参拜者が清い流れを掬んで口を嗽ぎ手を清めてゐる。自分もそれに加はつて手水をつかひ、それより尙ほ深い樹林の中の参道を進んで、拜殿の太敷き立つ檜の丸太の堀立柱の御帷帳の前に近づき、數多の群集に伍してぬかづき拜した。頭を上げて御垣の奥を遠く仰ぎまれば清淨無垢なる白木造りの萱葺の宮居の棟に金色燦爛たる鰐木が何事のおはしますかほしらねども、たゞ／＼尊げに眼に映じた。

滞りなく大廟を拜しおはると、急に昨夜の夜汽車の睡眠不足の疲れを覚えて、少しも早く今宵の宿に到着して樂々と休息したくなつた。宇治橋の手前から又俵に乗つて、何斯と車夫の説明して聽かすのに、車上よりたゞ受けこたへをしながら、返りは古市の遊女屋の背後につゞく田圃を遠くに眺める新道を通つて山田驛まで戻り着き、丁度鳥羽ゆきの下り列車の入つてるところだつたので、急いで汽車に乗り、二見驛を二つ通り越した鳥羽の終點に着き、俵を雇ふて、停車場前の案内所について、旅館の都合を訊ねさすと、對月樓は満員で、一人の客は謝絶する、それより、やつぱり一つ内で經營してゐる皆春樓へおいで下さいといふので、そこへ行くことにしたが、皆春樓といふのは狭い鳥羽の町の遊廓を通り越すと、すぐ向うの山端の中腹に見えてゐる麓がそれであつた。

「は、あ、あそこまで上るのか。」と、自分は、やゝ躊躇ふやうにゆふと、俵夫も梶棒を握つて足を停めな

がら、

「いけまへんか。」

「うむ、高いな。」函嶺や日光に行きつけた自分は、腕車で山を攀ぢ上ることなど意に介しないのであるが、今日は、もう、ひどく休息を欲してゐるので、それが何となく臆劫であつた。尙ほ車夫に委しく訊ねると、設備はよさうなので思ひ切つて上ることにした。それに決すると、車夫はそこに自分を乗せた俵を置いて、後を押す者を呼びにいつた。やがて戻つて来て、えつちらおつちら羊腸とした山道を押して登つていつた。なるほど登るにつれて鳥羽灣の風光は一眸の下に展けて來た。

宿は氣づかつたよりも案外清らかに洗練されてゐた。座敷から眺めると鳥羽灣に横たはる島嶼がすぐ眼の下に散點してゐる。

湯が出来てゐるといふので、それは何より嬉しいと、早速一浴し、浴槽の中に立つてガラス窓から眺めると、そこからも鳥羽の海はひと眼に見える。窓の外は山腹には山櫻がもうひと雨をも待てないやうに寂しく満開して、和やかな春の風に揺れてゐるのが、いかにも東京から遠くへ春の旅に出て來る氣分にふさはしい。

やがて旅塵を洗ひ流して座敷へ戻り、女中を呼んで少し中途半端ではあるが、今朝四日市あたりで朝の汽車辨當を使つたまゝだつたので、

「あんまり早い夕飯にすると、晩の楽しみがない。まだ晝飯をやつてゐないんだが、何か握飯でもこしらへて来てもらひたい。」と命じて、鳥羽灣の風光と縁先の山櫻とを賞しながら、辨當を使った。たれか一人同伴者があつて、此の愉快を分つといふなどと思ふ。

繪葉書を取寄せて、それを書きながら、微睡を催して来たので、仰向けに横たはると暫くの間眠つて、眼が覺めると、ひどく元氣が回復して頭が敏活になつた。宿帳を持つて来て「どうぞ。」といふので、それに書いてやると、暫くしてから、支配人がやつて来て「近松さんでございましたか。」といつて、いろいろな話をした。此の旅館は主として東京の資本家の株式組織の會社の經營になつてゐて、東洋遊園株式會社といひ、二人の女中も東京の者である。その支配人も茨城縣人で、いろ／＼な文士などの來遊した話をした。そんなことから、又ずつと親しい氣持が生じてきた。そのうちに日もやうやく暮れて、座敷の中にばつと電燈がつくと同時に、山の下に見えてゐる鳥羽の町の藁つゞきにも無数の電燈が輝きはじめ、向うの海の沖にもそつちこつちに燈火が瞬いてゐる。

やがて夕餉の膳を運んで来た、四谷の産れであるといふ二十四五の女中に給侍してもらつて夕飯を認めてゐると、山下の鳥羽の町の灯が何となく暖國めいた潤みを以て人を誘ふやうに懐しく思はれる。

「町へ降りていつて見たいなあ……でも歸りに又ここまで登つてくるのが苦しいかな。」私は、箸を動かしながら、幾たびとなく沈吟するやうにいつてゐたが、最後に「いつてみよう。すぐ寝るのは惜しい。」

といつて、若い男衆に同伴するやうに女中に頼んだ。

すると先刻座敷に話して来た支配人も用事があつて下まで御一緒にまゐりますといつて、多勢で山を下りた。東京にゐては、昨夜までまだ夜の外出は寒さを感じたのであつたが、此の海に瀕した南方の地に來てみると、夜の空氣の肌觸りが何ともいへない溫柔で、少しの棘々しさを感ぜない。宛ら綾羅で身を包まれてゐるやうな心地がする。夜の明りの中に山櫻が白く咲いてゐるのが、ところ／＼見えてゐる。春の夜らしい、木の芽や嫩草の薫りが、どこからともなく立ち匂ふてゐる。

旅館のある處まで山は直徑にすれば五六町の急阪であるが、九十九折りに曲折した道になつてゐるので、歩行にさまで困難でもない。すぐ麓の處に常安寺といふ禪宗の古刹があつて、一週間遠忌の法會が行はれて、毎夜の説教がある。寺は明治天皇が昔し京都から關東へ赴かせられる時の行在所になつた由緒のある名刹である。一寸覗いてみると、近在近郷、多くは海の上の島から來て參籠してゐる老婆達が宿坊に足を踏み込む處もないまで満ちて寢床をとつてゐる。

禪寺の門外に一步踏み出すと、そこにはすぐ鳥羽の港の遊廓がつゞいてゐるのである。上方風によく洗ひ磨いた出格子の傍に引き手の女が立つてゐて道をゆく者を呼びかけてゐる。

清潔な、歩きよき道を歩いて、宿の男衆を伴れて、東京を立つ時急しくて買ふ間もなかつた寫眞のフィルムを買つたり、先刻書いた繪葉書を郵便局に持つていつて投函したりしながら、「なるほど、これなら、



郵便の便利も悪くはないし、さう寂しくもないし、仕事を持つて東京から遊びに来て滞在してゐるのもいい。』などと思ひながらやがて街を、海際の船の繋留してゐる邊まで出て來ると、水に臨んだ旅館の二階で、絃歌のさんざめく聲が盛んに海の方に響いてゐる。何うしても春の夜の海港にふさはしい情調である。ステーションは、そこから山の端を廻るとすぐなので、私はトランクを受取りかた／＼ステーションまでいつて、それを受取り、中に入れた仕事道具の入るものだけを取り出し、あとは又旅館の案内所に預けておいて、歸途についた。

山を上がり／＼折々立ち止まつて海の方を振顧つて見る折しも、十六日の月が向うの島の上に朧るにさし昇つてきた。港の燈は人を誘ふやうに懐しく瞬きつゞけてゐる。草木の萌える香が柔い風につれて又しても鼻に通ふてくる。

やがて戻つてくると、もう床は別室に設けてあつたので、私はもう一ぱい入浴して、温まつた身體を寢床に横へた。

翌朝遅く目を覺まして床を離れ、もとの座敷に出て來ると、宿の者が多勢縁側のガラス障子の所に寄つて海の方を眺めてゐる。何事かとそちらを見ると、海上遙に聯合艦隊の艦隊が二列の縦列をつくりながら徐々として入港してくるところであつた。支配人は、

「お目覺めですか、軍艦が大變に入つて來ました。長門は大きくつて、入れないものですから、一つだけ

あつちの方に居ります。」といつて、指す左方の島蔭を見やると、なるほど海上幾里の遠くに長い城砦を描いた巨艦が半身を顯はして横はつてゐる。その島の上空には高く大きな輕氣球が繁つてゐるのが見える。空はやゝ曇つてゐるが、今日も天氣らしく、そこらの山の上に開けた離段の如き畑には麥の緑、五菜の緑が麗はしい春光を浴びて輝いてゐる。

揚枝を叩へて浴室に入り、山の清水を汲んで沸かした朝湯の浴槽に漬りながら、窓から海の方を見下ろすと、そこからも聯合艦隊の艦隊が悉く見える。

輕い朝飯を済まして、旅館の後の山上の庭園に出てみると、茶店の四阿屋に大きな望遠鏡が備付けてある。それから海の方を覗いて見ると、向うの軍艦の甲板で作業をしてゐるのが一々指呼することができ、肉眼では何があるとも分らない島畑の眞青な麥の畝に女の働いてゐるのも見える。

しかし、私はいつまでも放心して遊んでゐることは出来なかつた。東京の新聞に書いてやらねばならぬ原稿の用がある。午前十一時半の汽車で立たなければならぬ。やがて内に入つて机に凭り、新聞の小説を一回書き、早々に荷物を收めて男衆に送られて山を下つて、ステーションに來た。汽車はもう發車に迫まつてゐるところであつた。大阪の湊町へ直行する汽車なので客は満員である。私は今日は伊賀の上野まで乗るつもりである。薄曇りはしてゐるが日は暖く、車窓から眺めると、そこちの山の麓、神社の杜の木の間などに櫻が白く咲いてゐる。野の黄菜も至る處に咲いてゐるが、これはまだ咲き亂れるといふところ

までにはならない。そのために尙ほ春の盡きないことを思はしめて、春はこれからだといふ氣がする。龜山から、いよ／＼關西線に入った。このあたりの溪山の眺は私の夙に好むところである。

伊 賀 國

伊賀國は小國であるけれども、この國に入るには何方からゆくにも相應に深い山を踰えねばならぬ。自分はいつも汽車の中に安坐しながら、此の國を通過するのであるが、西から木津川の溪谷を溯つて來るのもいゝし、東から鈴鹿山脈を横斷して南畫めいた溪山の間を入つて來るのも興が饒い。況んや俳聖芭蕉の生地である。吾々日本人の自然觀、人生觀乃至それ等の風物に對する趣味といふやうなものが芭蕉一人の存在によつて、いかに幽邃深遠の趣きを加へたかといふことを考へると、人間の世界には、烏合の群集ばかりでは足りない、寶玉の如き一人者がなければならぬ。

私はこの伊賀國の野と山とを多年憧憬して居た。眺め飽かぬ鈴鹿山脈の溪山を横斷して汽車が伊賀の國境を踰えると、すぐ拓植の驛がある。芭蕉はこの拓植で生まれたといふことである。それを上野と拓植とで生地争ひをしてゐるのはつまらぬことである。芭蕉はたゞ伊賀の人でよい。

汽車がその上野の驛に着いた頃には、又今晚あたり雨になりさうな空模様になつてきた。今日これからすぐ月ヶ瀬に往くつもりであるが、勿論梅にはもう季節は遅れてゐるが月ヶ瀬の溪山も亦た多年憧憬してゐるところである。

ステーションを出て車夫に訊くと、そこから上野の町までは約一里ある。そしてすぐこれから月ヶ瀬に往くにしてもやつぱり上野の町を通過してゆくのである。手荷物を携へてゐるので、それを、今朝鳥羽を立つ時、皆春樓で紹介状を書いてくれた上野の宿屋へ預けて置いて、單身月ヶ瀬に直行して彼地に泊まり、今宵は梅花はなくとも、十分梅溪の山水に浸らうと思つてゐたのに、とかく荷物の爲に累せられて行動の自由を缺く感があるのを憾みつゝともかくも俾を命じ、一臺にはトランクを載せて走つた。南に向つて行く手の方は四圍の山々遠く、平野が目も遙かに開展してゐる。そこから上野まではやゝ上り道になつてゐて、伊賀川の長橋を向うに渡ると、昔し藤堂家の支城の跡の丘陵にさしかゝる。それを向うへ出抜けると上野の町がある。皆春樓の指状にある本町通りの友忠といふ旅館についてその状を示し、案内せられて座敷に通ると、宿の若主人がその手紙を見て挨拶に來り、

これから月ヶ瀬まではまだ四里の道があるのみならず、最早梅花の季節は過ぎて自動車の往復も頻繁ならず、宿といつても土地の農家が、三月梅花の季間のみ片手間に客を泊めてゐるので不行屈きである。今晚は格別見る物のない處であるが、當處に一泊ありて上野の町を見物し、殊に芭蕉の舊跡叢叢庵へは是非御一覽をお勧めするといふので、月ヶ瀬にも泊つてみたかつたけれど、もとより上野の町にも、何となく、夙に親みを抱いてゐることであつたから、有無なくそれに一決し、まだ暮れには少しの間があるので、私は寫眞機を携へて市街にいで、主人に委しく教へられたとほり旅館の前の整然たる街路を眞直に南

へゆくと五六町ばかりにして、やゝ街はづれる場末、一寸横丁を左折して入つた處に芭蕉翁の舊庵があつた。

簑 蟲 庵

道よりも少しく高く石垣を積んで、その上に竹の粗朶垣を結び繞らし、佗びたる門を入つて門小舎めいたる家の入口から訪ふと、姿は見えず奥から女房の聲がして、「そこをずっと植木の中を右へおへでやすと門がありますよつて。」といふ。十歩ばかり行くと門はすぐ取付にあつた。

門の内はやゝ荒廢した、見たところ二百坪足らずの庭園になつてゐて、芭蕉の時代からあるらしい老松が數株亭々として立つてゐる。ところ／＼に苔の蒸した寂び石など配置してあり、庭の中央は窪地の古池になつてゐて水は枯れてゐる。その向うに翁遺愛の燈籠と提示した風雅な石籠燈が立つてゐる。

門を入つて、一本の老松の幹の下を左手に迂迴すればすぐ庵室の廻縁の前に出る。庵は藁葺に廂のみ瓦を用ゐ、堅固に三和土で固めた地形の上に、座の低いそして軒の低い古風な家が立つてゐる。今は、この地出身の東京の富豪菊本氏の所有に歸し、氏の愛護の下に庵は舊形を保存せられてゐるのである。柱も天井も床も障子も凡べて煤けて黒染んでゐるが、それでも舊形を損せしめぬやうに時々修繕が加へられてゐると思はれて、存外軒のまはりなどまだ確りしてゐる。

縁先の大きな寂びた踏石の上に立つと、薄暗い座敷の中は伽藍として、留守のやうであつたが、聲を掛

けて訪ふと、奥の間の方からすぐそれに應ずる返事があつて、やがて立ち出で、來たのは二十あまりと見える、才發さうな美しい娘とも小間使とも思はれる女子であつた。

行儀作法の正しい物腰で膝をつき鄭寧に挨拶をするので、此方も慇懃に來意を告げて庵の一覽を乞ふと、

「どうぞこちらへ。」といつて、座敷に通し早速襖の彼方から座蒲團を取つて來てすゝめる。

私は何だかひどくローマンチックな興味が自然に生じて來た。寂びにさびた芭蕉翁の舊庵に、荒廢した庭園といひ、内部の暗褐色に煤けた壁や柱の色とはまるでちがつた美しい小間使がゐようとは思ひもかけないことであるが、それが何となく此の舊庵にふさはしいやうにも思はれた。

私は座蒲團の上に一應すわつたが、又起つてそこらの床や違ひ糊のあたりに近づいて精しく眺めた。床は一尺ばかりの幅で、木肌もわからぬやうに黒く煤けてゐる。疊敷は六疊で、天井も低く質素なものである。

美しい女中は煙草盆を運び、番茶をほこび、菓子運びなどしておいて、今度は大きな手函を持つて出て來た。そして靜かに蓋を開けて中から取り出して見せたのは、翁の句を誌した短冊であつた。多分現在の庵主の手に入るまでに壁か襖のやうな處に貼り付けたまゝ、随分粗末に持扱つたものと思はれて、墨の痕も幽かに讀みわけられるやうに暗褐色に煤けてゐる。短冊は三枚で、翁の名句、

あか／＼と日はつれな／＼も秋の風  
寒菊に粉ふりかゝる白の音

もう一句何かいふのがあつた。

その他、古池に蛙の飛込んでゐる翁の戯畫と稱せられる物や、行脚の際に用ゐた頭陀袋の布地の蟲食んだものなどを數點取り出して示された。

なほ訊くと、その座敷とゞもに奥にも六疊が二た間あつて、凡てゞ三室に臺所の附いた草庵である。來訪者に對して六葉一組の叢蟲庵の繪葉書を贈られ、芳名録に署名を希望せられた。

厚く謝して尙ほ庭などを歩いて見たうへ、美しい小間使に門外まで送られて辭して歸つた。

旅　　そ　　よ　　け　　れ

その晩宿の若い主人は自家の所藏の芭蕉翁の手記の嵯峨日記といふものを持つて來て見せた。嵯峨の去來が落柿舎に逗留してゐる間の朝夕の事が簡素な筆に記されてゐるのが、情趣却つて紙上に溢れてゐた。

夕飯を濟ませて、市街の夜況を見ようとして、繪葉書を投函しかた／＼外に立ち出ると、今にも落ちさうでやう／＼堪えてゐた空からぼつり／＼と雨滴が顔を打つて來た。縣廳もない、山の上の平野の中に位した此の町は道筋など井然として、さすがに城下町らしい古風な面影が何處やらに残つてゐるが、身は今遠い旅の空に來てゐることを思ふと、陽氣の狂つた寒い夜の雨がひどく侘しい。郵便局までいつてそこらの暗い町筋をただ一と廻りしたのみで引返した。宿の居心地も昨夕の鳥羽に比べてひどく侘しい旅情を

そゝる。

明日は月々瀬まで往くのだと思つて早く寢床に入り、按摩を呼んで療治をしながら、それでも快くうとうとしてゐると、十時を過ぎる頃多勢の泊りが着いたと思はれて、此方に歩いてくる下駄の足音がして、やがて自分のすぐ頭上の二階に通る音が聞え、間もなく土地の藝者が來て、ぼつん／＼と鴨綠江ぶしだの、どゞ逸などを放歌する聲がした。私は床の中に寢返りを打つて、頻りに神經を惱ましてゐた。「この分では、とても今晚は安眠することは出来ない。座敷は方々に空いてゐるのに察しない宿屋だなあ」と、不平を抱きながら、それでも療治の效で、つひに眠つてしまつた。二階の客はあまり騒ぎもせず、そのうち何時の間にか、三味線の音も聞えなくなつた。

翌朝女中に訊くと、客は土地の客ではなく、何でも埼玉縣あたりの村長さんや村の有志などが十幾人、この國の上野在にある模範村の視察に來て、序に伊賀の藝者も見て往きたいといふので呼んだのださうである。私はそれで、女中に向つて笑ひながら、「そんな遠方から模範村の視察に來るほどの村長さん達が、藝者を呼んで騒ぐとは不心得だな。」といふと、女中も、「へえ、さうでございます。私もそれで夜前ひきました。あんたはん方模範村の視察やなうて、これは藝者の視察にお越しでござりまするか、いひました。」といつて笑ふ。

## 月ヶ瀬

翌朝早曉床の中で一旦雨に眼を覺まして、失望を感じながら、又そのまま暫く寝入り、今度起き出でた時には、何時落ちて来るかも分らぬが、降つてはゐない。しかし春雨時の常習として大したこともあるまいと宿の者もいふので、早々に朝食を認め、九時すこし過ぎ昨日から申込んで置きし乗合自動車の來るのを待つて月ヶ瀬に往く。

月ヶ瀬は上野町から恰も西南四里の處に在る。自動車は無蓋の上に雨氣を帯びた陰濕の風を切つて駛走するので興味を殺ぐこと甚だしい。加之先客二人正面の座を占領し、自分は逆に横を向いて馳せてゐる。田圃や村落の間の田舎道を半町はおろか、十間の長さの眞直なところもないカーヴに次ぐにカーヴを以つてする羊腸たる道路を走るのであるから、私は見てゐて獨り心の中で思つた。東京の日本橋の上を走る運轉手も此の道を往くほどの神経は勞しないであらうと、一寸の間でも油斷すると、忽ち田の中か崖の下に轉落せねばならぬ。暫く何等の奇趣妙景なき村落と田圃の間を通りぬけ、やがて伊賀と大和の國境になつてゐる小さい峠を越す邊から山容や、雅趣を加へて來た。そこから月ヶ瀬の關門なる尾山の村まではもうすぐである。自動車はその入口の處までしか通しない。

自動車を降りて、道を右手にとり、懸崖に寄つて家を構へた農家の間の細徑を登つてゆくと、徑の曲り角ごとに指の圖を描いた道しるべが立てゝある。それに従つて行くと、稍々六七町ばかり阪道を登りつめたところが、いつしか山の尾嶺になつてゐて、すぐ向うの眼の下には深い名張川の溪谷が見下ろされる。もうそこらの山畑や人家の軒先には梅の樹が至る處に立つてゐるが、花は疾くに季節を過ぎて色の褪めた花瓣がやうやく枝に散りとどまつてゐる。ところ／＼の掛け茶屋も盛りを過ぎた今、いづれも店を畳みかけてゐるところである。梅は遅いが溪山の眺望が豫想に背かず好いので、山畑の畦道を、道しるべを頼りに先きへ／＼と進んでゆくと、その頃から雨滴がぼつり／＼落ちて來た。蝙蝠傘を開いてそれを凌ぎながら、時々天を仰いで、「春雨はいたくな降りそ旅人の道ゆき衣ぬれもこそすれ」といふ業平の歌を口の中でいつて、春雨の晴れるのを心に祈つたが、道傍の麥畑に働いてゐる若い農夫に、「この雨は、どうだな、この邊の空模様では本降りかな？ それとも直ぐ止む雨かね」と、訊ねると、若い農夫は二人あだが、頭を振つて、「本降りだす。なか／＼止みまへん。」といふ。いよ／＼たより少くなつて、私は氣を焦つて道を急いだ。そこはまだやう／＼月ヶ瀬の入口の尾山の取附である。蝙蝠傘をたゞく春雨の音は俄に繁くなつて、はては傘の端から瀧の如き雨垂れが流れ落ちて來た。深い名張川の溪谷の彼方を遠く見放すと、溪の向うにも山又山が重疊して、煙雨濛々たる中に峰の波が打ちつゞいてゐる。そのあたり一帯の溪山を月ヶ瀬といつてゐるのであるが、特に月ヶ瀬の字といふのは、尾山の山の上から見渡すと、ちやうど川を隔て

て西北に當る峰の中腹に據つて人家が點在してゐるのが、それである。そちらにはまだ幾らか梅花が残つてゐると思はれて、遠くから望むと、雨の煙の中に白くぼかしたやうに濡れて見えるのが月ヶ瀬の梅である。春雨は容易に止みさうにないので、濡るゝを厭はず急いで、山の中腹を開鑿して通じた畑徑を迂曲しつつ、眼の下に見えてゐる溪流の方に下りていつた。そこは尾山から月ヶ瀬に通ずる大谷といふ處で、名張川の溪流を挟んで兩岸の山の麓に人家が點在してゐる。川には此のあたりに不相應な大きなコンクリートの橋が架つてゐた、尾山の方から山の中腹に沿ふて來た街道は、其橋を向うに渡つて道は向岸の山裾を通ふてゐる坦々たる道路となつてゐる。其道を何處までも傳ふてゆくと月ヶ瀬、桃香野の溪山の村を過ぎて三里餘にして笠置に出られる。

大谷まで下りて來ると、春雨は瀧の如く傘より流れ落ちて、道はやうやく坦道に就いたが、それより進むことも退くこともならぬ。やう／＼そこにある荒物屋の軒に雨を避け、東京を出る時新調した夏外套を脱ぎ、袴の裾の泥に汚れたるを、寛の水で雪ぎ、襟頸の汗をぬぐひなどして雨の止むを待つたが、なかなかやみさうもない。俵はあるまいかと訊くと、梅花に人の出盛かる頃なれば、いくらもあるが、今は見物の客も絶えたから俵もない、たゞ一臺あるけれど、挽く者は、これから十七八町も下の月ヶ瀬の山の上にあるので、それよりも尾山の自動車の止まる處までは、わづかに七八町の道なれば、そこまで辛抱して歩いた方がよいといふ。

雨はしきりに降りていつ止むべくも見えぬ。爲方なく腰を据えて店頭繪葉書などを求め、且つ昨夜上野の本屋で探ねても、なかつた齋藤拙堂の「月瀬記勝」を賣つてゐるのを發見し、一本を購ひ、それを披いて見たりしてゐるうちに雨もやゝ小降りになつた。

溪に沿ふて住む者はなかく多いと思はれ荒物屋には後からあとから物を買ひに人が入つて來る。尾山の小學校から歸つて來る子供が立ち寄つていつたり、裁縫の稽古にでも通ふらしい十七八の小娘が番傘をさして連れ立つて物を買ひに寄つたりしてゆく。

月 空もやゝ明るくなり、川の向の一群の杉木立から白い霧を吐いてゐるのが、雜木林の山の背を這ふて上騰し、やがて上空の雲の中に融けゆく。

雨 私は東京の神田で買つた日和下駄を臺なしにするも惜しく、何より歩行に惱むので、中齒の朴齒下駄を新にすげさせ、それを穿いて、手荷物をあづけ、橋を向うに渡つて、雨の晴れ間を月ヶ瀬から桃香野の下まで歩いて見た。山の容はさまざま崎嶇でもないが、何となく雅致があつて、殊に月ヶ瀬のあたりは、山の上に拓り開かれた段々畑と懸崖に據つて屋を架した人家とが、竹林と梅樹と杉木立と互に錯綜して籬落を綴り、見上げるやうな高い處に瓦葺が見えてゐる。「月瀬記勝」の口繪に遠嶺の人家といふのが人を欺かない。先程尾山の一目千本の高臺から煙雨の中に月ヶ瀬の人家を遠望したのがそれであつた。今又月ヶ瀬の麓まで來ると、溪流の末は山と山との折り重なつた中に隠れて、その向うの高い嶺の上に桃香野の人家が

遠く望まれる。溪山の眺めはどこまで往つても窮まるるところがない。その川が後には南山城の大河原に至つて伊賀川と合流し、木津川となつて山城の木津に至り、更に南山城の平野を北流して、淀に至り淀川に合するのである。

そのうち春雨はすつかり止んで薄日が射して来たので、私は気が軽くなり、悠々溪に沿ふた坦道を歩んで尙ほ桃香野の近くまで下つていつた。梅花はもう悉く凋落してゐるが、道の左右に嵯峨たる枝を翳してゐる樹容の一つとして雅趣なきはないのを見て月瀬記勝に遍地香雲といひ、雲温雨香といふの、決して誇張の辭でないことを察した。

しかし、一時までには必ず自動車の待つてゐる處まで歸らねばならず、明るくなつたと思つてゐた空が又暗くなつて来たので桃香野の遠嶺の人家を望みながら割愛して又一筋の坦道を引返へして来た。そして心に思つた。月瀬に往くには通例伊賀の上野から入つてゆくことになつてゐるが、今日尾山までの道の無趣味であつたことを考へて、これは、やつぱり笠置の方から入つて来た方が好いと思つた。

春雨は又ひどく降つて来た。私は着物の裾を片手からげながら、道を急いで荒物屋まで戻り、そこで預けて置いた日和下駄などを取つて、溪に臨んだ平坦な道を迂回しつゝ尾山の方に歩いて来ると、雨は又止んだ。荒物屋から自動車のゐる處までは、なるほど遠くなかつた。

そして上野の旅宿に歸りついたのはもう二時を過ぎてゐた。都合のいい汽車の發車までには、あまり時

間がない。早々に勘定などを済まして自動車で上野のステーションに走らせた。丁度、昨日下車した時の汽車であるが、稍遅れてゐる。汽車を待つ間に春雨は又降りしきつて来た。先刻月ヶ瀬で降つた雨とちがひ、稍嵐さへ吹き添ふて四邊がひどく暗くなつた。プラットフォームの彼方に見えてゐる田圃の菜の花が折角開きかけたところを雨に打たれて頭を垂れてゐる。そちらの野は次第に北の方に段々高くなつていつて、やがて伊賀平野の北端を劃してゐる山の麓までつゞいてゐる。ところ／＼に落着いたやうな人家が散點してゐる。



## 雨の京都へ

雨は次第に強くなつて来た。今日は、これから二三時間のうちに京都の舊居に入るのだと思ふと、何となく楽しみである。京都へは去年の一月以來ゆかぬ。

そのうち汽車が、屋根から瀧のやうな雨垂れを落しながら入つて来た。室内は殆ど満員である。漸く一つの空席を見附けてはじめて今朝からの疲れがほつとした。それから島原の一驛を経て、伊賀と山城との國境をなす長いトンネルを向うへ出抜けると、もう地は南山城である。自分はこの邊の溪山の眺めを殊に好む。人の息と雨の飛沫とに曇つた硝子窓の外を覗くと、山も畑も溪もたゞ降り頻る春雨に鎖されて糢糊としてゐる。トンネルを西へ出はづれると、すぐ大河原の停車場がある。そこから左窓にあたつて、今日月々瀬の溪で親んだ名張川が濛々と雨に煙つた向うの山峽から流れ出て伊賀川に會流してゐる。雨の木津川の溪を眺めつつ汽車は次驛の笠置についた。停車場の権内、笠置山の麓、對岸の村落、そこら中に見渡す櫻が春雨の降る中に眞白く咲き誇つてゐる。何となく華かな明るい春といふ氣持ちがして来た。それから加茂を過ぎて木津驛に來た。京都ゆきはそこで乗換へねばならぬ。

嵐雨は刻々に募り、プラットフォームは斜風亂雨の中に吹き曝されてゐる。やうやく京都ゆきの汽車が

奈良の方から入つて來たので、それに乗つた。車室は雨に鎖されて薄暗く濕つてゐる。

やがて一時間ばかりにして京都に着き、雨中に自動車を走らせて東山の畔なる安井の舊廬に入つてゆくと、留守を頼む老人夫婦、

「おゝ、おいでやす。えらい、おそをしたなあ。今日は朝おいでやす思ふて、今朝からもう火鉢に湯を沸かしておきました。」といつて、自分の居室に充てた階下六疊には自分の愛撫の火鉢に火をおこし、鐵瓶に湯がしやんしやん煮立つてゐた。私は何年か振りて櫻の咲く頃京都に來たのである。

### 峽中の大原野

京都の名所は今までに大抵見てゐたが、まだ、いつたことのないのは八瀬と大原とであつた。四月の五日の晩京都に入つて三四日すると、すぐ岡山の郷里の方に往き、月末京都に歸つて折柄大阪に来てゐた上  
司小劍氏と同行して大原見物にいつたのが一と月ばかりの旅行の中で最も愉快な印象を残した。

上司君は午前中は仕事があるので、午後一時か二時までに往くといふ約束であつたから、そのつもりで待つてゐたが、雨であつたら中止といふ約束もしてあるので、どうかと思つてゐると、幸いに雨天の多い天候に雨は落ちず、たゞ薄曇りがしてゐる。此の分ならば、きつと出て来るであらうと思つて、今か／＼と待つてゐると果してやつて來た。早速自動車を命じて驀然に東山通を走らした。出町橋の東詰から道は高野川に沿うて溯つてゆくと、陰氣に曇つた空の下に春霞靄の眺望のないのは甚だ物足りなかつたが、菜の花が行々道傍に黄金の莖を敷いてゐて、それから好い匂が自動車の中まで匂ふて來る。八瀬を過ぎて谷はいよ／＼深い。一と筋の坦道は幾度か窺まらんとしては漸く通ずる。道傍の山裾や岩角に山吹や野椿の花が咲亂れてゐる。左は鞍馬、右は比叡につづく峻岨な山の容が一つとして奇趣を帯びざるものはない。思つたよりも大原は深い峽中に隠れてゐる。

やがて三千院の入口にいつて自動車は停車した。寺域は清淨で閑寂を極めたものである。寺僧に頼んで内部の一覽を乞ひ、拜觀をおはつてそこを出て、門前の茶店に小憩してゐるうちに又雨が落ちて來た。茶店に腰を掛けながら向うを見ると、茶の木畑と菜の花とが點綴してゐる中に、櫻が咲いてゐたり、竹林があつたりする。向うの方に緩く傾斜をして峽の彼方の山の麓を一條の白い道が尙ほ遠く何處までも入つていつてゐる。昔の若狭往來で、若狭まではこれから尙ほ三十里の道を往くのである。

糸の如き春雨は、しと／＼と茶畑の菜の花にふり灑いでゐる。峽中の峰は濃淡を畫いて悉く糝糊とした雨の中に煙つてゐる。何ともいへない靜寂である。上司氏とともに飽くことを知らず暫く峽中の雨景に眺め入つた。

(大正十二年五月十日)

## 吉野路

年月心にかげながらまだ果たすをりのなかつた吉野を観るつもりで、ひとり京都の宿を立ちいでたのは、花の季節はもう夙に過ぎて、野にも山にもたゞ眼の覚めるやうな美しい新緑の色が日に日に濃くなつてゆく五月の初であつた。

七條の停車場から汽車に乗つて洛南の郊外に出ると、まだ曉の夢から覚めきれないやうな鳥羽野の麥圃は、遠く五月晴れの煙霞の立罩めた中にはしてもなく開けて、あちこちの人家や籬落を繞つてゐる菜畑には、もう黄白の花がすこし末枯かけて、朝露に濡れながら敢果ない幻のやうに薄ら寂しく咲きおくれつゝる。すぐ眼近に見えてゐる東寺の五重の塔を模糊とした朝霧の棚曳く中に車窓から振顧りながら私は座席に落着いて、バスケットの中から折りたゝんだ地圖などを取出して披きながら、多年の宿望を果たす今日の悦びを感じつゝ、靜に探勝の氣分に浸つてゐた。伏見を通り越して桃山、木幡も過ぎ、宇治まで來ると、そこでボギー車の向うの端に北斗町か宮川町あたりと見える藝者や舞妓をつれてゐた騒々しい一連の客をはじめ、大抵の客は降つてしまつた。私は一昨年の丁度今時分半月ばかり滞在してゐた宇治川の畔の情緒に富んだ花屋敷の生活などを懐しく想ひ浮べてゐるうちに、汽車は深い竹籬や茶畑の間を過つて駛せた。

やがて奈良平野の西の空に生駒の靈巖を望むところまで來てゐると思ふ間に、もう土佐派の繪に見るやうな眞青な嫩草山、それにつゞいて蒼鬱とした春日山などが車窓に映じてきた。大佛殿の大きな屋根の頂に輝く鴟尾が眼を射た。私は丁度まる三年ばかり見なかつた其等の景觀を懐かしみつゝ熱心に窓外に眼を放つてゐる間に汽車は奈良に來て停車した。南大和にゆくには、そこから櫻井ゆきの線路に乗換へねばならぬ。三十分ばかりプラットフォームに待つてゐるうちに高田、櫻井など大和平野の市邑を聯絡して奈良と王寺との間を往復してゐる輕便鐵道の汽車のやうな小さい列車が入つてきた。

列車は大和平野の東端を眞南に櫻井に向つて駛せてゆくのである。右窓からは際涯もなく潤けた麥圃や桑の葉波の彼方に葛城、金剛の雄大な山容が遠く五月の陽光の中に白く霞んで見えてゐる。左方は春日山につゞく卷向山、初瀬、三輪などの笠置山脈の連山が列車の進行につれてパノラマの如く展開してくる。私は奈良から乗り合はしたこの地方の老紳士に大和名所を巡覽する道順などについて訊いてゐる間にいつか京終、丹波市などの停車場を四つ五つ過ぎて三輪の驛に着いた。近松の「戀飛脚大和往來」で名高い三輪の茶屋は畢竟作者の虚構にしる詩人の空想は遂にそれを實際化せしめてゐるのである。老紳士は私のためにその三輪の茶屋の今も尙ほ現存することや、三輪山を神殿とする官幣大社大神神社などについて語つて聞かせた。私は車窓から顔を覗けて元祿の詩聖が空想の舞臺になつた其等の山や野を眺めた。梅川が風俗の人の目だつを包みかね、借駕籠に日を送り。奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明し、二十日餘

りに四十兩、遣ひ果して二分残る。鐘も霞むや初瀬山」といつてゐる、近松のこの文章を讀んで私は幾年の久しき、この地方の野山を夢想して懐かしんでゐたか知れない。その三輪の茶屋も初瀬山も今面まのあたりに見てゐるのである。さうおもつて、私は其等の山野が興へる刹那の印象を最も藝術的に受入れやうとした。老紳士はやがて三輪町長といふ名刺をくれておいて車から降りていつた。私はあとにただ一人、狭い車室内を右の窓から眺めたり左の窓から覗いたり願望低徊終らぬうちに列車はまた動きはじめた。間もなく此度は櫻井に来て停車した。

初瀬の観音に參るには、そこから初瀬輕便鐵道が通ふてゐる。私は小さいバスケット一つ提げて改札口からすぐつゞいてゐるその方の乗場について車室の中に腰をおろした。小さい列車は三輪山、卷向山から初瀬山につゞく一帯の山脈の、先刻汽車から眺めたとは丁度反對になつてゐる裏側の浅い峡谷の間に開けた田圃の中を駛せていつた。やがて四十分ばかりして初瀬につくと、そこからまた俾で先刻の老紳士が教へてくれた初瀬町のとある旅籠屋へと命じた。旅籠屋はかういふ田舎によくあるとほりの、料理屋を兼ねてゐる家で、多勢の怪しげな女が顔を醜く塗つて參詣の客を呼んでゐた。

「まあお休み、まあお入り。」

といふ聲が寺前の往來を、兩側から呼び交はしてゐた。

鯛のおつくりや同じ魚の吸物で晝飯を認めてゐるうちに、晩春初夏の候にありがちの蒸暑かつた空か

ら、絹糸のやうな柔い雨がしとくと降つてきた。飯を済ますとすぐ蝙蝠傘をさしてだら／＼登の町を歩いてお寺に參詣した。寺は初瀬山の南腹に在つて、新義眞言宗豊山派の總本山。天武天皇の勅願で、道明上人の開基。今は丁度牡丹の季節なので近在近郷からの參詣はいふに及ばず大阪あたりから交通の便を利用して遊山半分の賽者引きもきらず、百八間の長い廊下を私はその多勢の善男善女に交つて高い石磴を踏みつつ上つていつた。廊下は下が一番長く、中が短く、上が又稍、長く三折になつてゐて、その兩側には紅白の牡丹の大輪が恰も満開である。廊殿の軒には所々にさまざまの古風の形をした鐵燈籠が釣してある。廊下の曲り角の處では、講中の御詠歌を誦する聲が高らかに響いてゐる。私は何となく、古い昔の、信仰心の篤い素朴な衆生が、佛教の恩澤に遍く照らされてゐた時代に身を置いてゐるやうな感じがして、そぞろに涙ぐまれてきた。やがて上り詰めると、そこに觀音堂がある。構造は京都清水の觀音堂に似て、堂前に小さい舞臺がある。本尊は聖武天皇の朝德道上人の作にかゝり、十一面觀世音、二丈六尺の立像で、寺傳によると鎌倉長谷の觀音と一木兩體で、これは本木、あちらは末木で刻まれ、願主德道上人巨木を得て二體の觀音を作り、一つを大和長谷に安置し、一體は有縁の地に衆生を化せんがために尊像を海中に投じた。後十六年を経てそれが相模國三浦郡の海岸に漂着した。即ち勅命によつて一寺を鎌倉長谷に建立し、德道を開山としたといふことである。内陣を拜觀すると、なるほど幽暗い御堂の中には燦爛眼を射るばかりの金色を放つ巨體の尊像がわけもなく、尊く拜ませられる。やがて内陣を出てお堂の背後の出口から後

庭を歩いてまた舞臺の上に立ちつゝ私は多年の願望であつた観音を拜した喜悅の情の胸に溢るゝ思ひを抱きながら、尙ほ行程を急ぐので、寺前の店屋で繪葉書などを買つて、もとの停車場へといそいだ。

櫻井から眞南に二里ばかりゆくと多武峯談山神社がある。そこは藤原鎌足公を祀つた別格官幣社で、社殿壯麗、關西の日光ときいてゐるから、私は、これからそこへ參らうか、それとも畝傍の神武天皇御陵、橿原神宮などを拜觀して、どちらとも今夜は途中に一泊して、明日早く吉野にゆかうか、それとも、もう何處へも寄らず、これから直ぐ吉野にゆけば七時か八時までには向に着く。尙ほゆきたいところをいへば、初瀬からまだ四里ばかり山奥に入ると室生寺の古刹がある。紀州の高野山と同じく弘法大師の開基にかけり、俗に女人高野といはれる塵外の一清境で、高野山が女人禁制であつたのに反し、こちらはその禁法がなかつた。國寶や特別保護建造物が多くあつて、先刻初瀬の町で買つた繪葉書には何人にも一見すぐ注意を惹くやうな、苟も古美術の趣味ある者には恍惚たらしめるやうな、優秀端麗なる地藏尊や觀世音の彫像がある。私はその繪葉書を眺めて、いつそ初瀬からすぐそこへ入つてゆかうかとも思つたのであるが、今度の旅程には豫定してゐなかつたので、この秋まで割愛して延ばすことにした。そして私は其等の端美なる繪葉書を大切にバスケットのの中に收めてゐるのである。早くその大和の國の山奥に秋が來て、満山の木々が紅葉するのを待つて、そこへゆきたい。

多武峯も春は櫻に秋は紅葉の名所ときいてゐる。室生寺も秋まで延ばしたから、こゝもその時まで楽し

みにとつておくことにしよう。さう思ひ定めて私は櫻井から今度は畝傍御陵にも橿原神宮にも寄らずに、其等は汽車の窓から遠く拜しながら、ずつと吉野までゆくことに決心した。待つ間ほどなく奈良から王寺ゆきの列車が來たので私はまたそれに乗た。今まで奈良から眞南に向つて駛せてきた車道は櫻井を基點として右折し、眞直に西に向つて大和平野の中心を貫いて駛せてゆくのである。右窓からは大和三山の耳無山、左窓からは天香具山、畝傍山が麥圃の間に見えてきた。藍色の座席に腰掛けながら、先刻櫻井の停車場で買つた大和一圓の地圖を披いて見てゐると、梅川忠兵衛の詩劇で馴染の新口村といふのは丁度その耳無山の西麓にあることを發見した。それも前にいつたとほり作者の虚構に過ぎないのであるが、私は車窓から熟々、麥畑に青い波を揚げてゐる野面を眺めながら如何にしてこの土地が元祿の當時の詩人の印象に留まつて藝術の構想に攝取とくられたかといふことをもう一遍考へてみないではゐられなかつた。そして現實を美化する詩人の空想の力の豊富なることを今更讃嘆せずにはゐられなかつた。けれども近松は絶大の空想力によつて現實を美化したとゞもに、その半面やつぱり現實を十分よく捉んでゐることも私は看取した。今の世にはもう梅川や忠兵衛のごとき耽美的な殉情的な性格はゐないかも知れぬ。少くとも殉情耽美の人間はあつても、彼等のごとく單純であるわけにはゆかない。けれども、あの詩劇の副へに出て來る副人物新口村の百姓忠三郎、その嬬のごとき現實性を備へた人間はきつと今もこのあたりの土地にゐるであらう。新口村のあるあたりは大和平野の中心であつて、農業の最も盛んな處である。元祿の詩人はそこ

を見た。忠兵衛の親里を新口村に假構したのは、このあたりが大和の代表的の百姓どころであるからだ。そんなことを思ひながら昔の作者の用意のあることを考へて、雁次郎や福助によつて演出せらるゝあの美しい詩劇の一齣に凝乎と空想を馳せてゐる間に汽車は香具山、畝傍の驛々を、いつの間にか通り過ぎて王寺和歌山線の高田驛に着いた。そこでまた乗換をしなければならぬ。私はバスケットと傘を携へてプラットホームの向側に停車してゐる小さい車室に入つていつた。それは今まで乗つてきた、奈良から櫻井を経て王寺を聯絡してゐる列車よりもなほいぶせく思はれる車室である。そのうへに先刻から南風が吹いてひどく蒸暑くなつてきた。車窓から見ると遠く奈良、郡山の方までも展けた野の末は白く霞を罩めて煙り、沿道の麥圃には見わたすかぎり緑の波を打たしてゐる。先刻から通つてきた巻向、三輪、初瀬の峯巒は漸々遠ざかるにつれて淡藍色に薄れゆき、香具、耳無の碧蕪も次第に大麥小麥の波に隠れて三山の中最も近く、その形の最も大きい畝傍のみは野末の煙霞の中に純碧の霞をかためたるごとく立つてゐる。少しく瞳を左方に轉ずると、遠く平野の西北隅を劃してゐる生駒山の圓かな輪廓は雲煙の界に夢のごとく淡く描かれてゐる。さうして車道が大和平野の西南隅を漸次南に駛せてゆくにつれて、このあたりの汽車にはじめて乗つてゐる私はあまりにいつまでも今まで經て來た方ばかりを回顧してゐる間に、右方の車窓に思ひもかけない翠巒の眼近く迫つてゐることを發見した。それは二上山から葛城、金剛の諸山につゞいてゐる一帯の山脈である。

私は嘗て近江と美濃との境に時つ伊吹山を少年時代から懐かしい山の一つに數へたことがあつたが、金剛山はそれにも優りて私の少年時代の純眞なる思想を飾つた山なのであつた。南朝の忠臣楠正成の史譚を愛讀して措かなかつた私はこの金剛山の名を穿記して到底忘れることが出来ないものである。ここに城を築いて據つた正成が寡兵を以つて、雲霞のごとく押し寄せて來る北條、足利の大軍に抗し、神策奇譚を用ゐて其等の賊軍を殲殺した忠勇武烈なる物譚は日本略史や日本外史の愛讀者たる私の純眞な胸をいかに躍らしめたことであらう。頼山陽も櫻井の驛から南の方遙に金剛山の巍峨たる姿を眺めて楠氏父子の忠誠を思ふといつてゐるが、少年時代にその文章を愛誦した私は心に楠氏を離れてこの山を仰ぐことが出来ないものである。而して楠氏のことを追懷すれば自から金剛山のことを思ひ浮んでくる。楠氏の忠誠といふことは、爾來人間の倫理思想の幾變遷した今日にあつては、これを五百年以前の當時のまゝに適用することは或は無理であるかも知れぬが、その飽くまでも信念の厚い、點塵の濁りを留めざる殉難的行爲は、依然として永久の倫理思想の最高峯に立つて具象的標證となつてゐるのである。私は少年時代の愛讀の書に日本外史を有し、その時代の純眞なる私の稚い思想を飾るべく楠氏の忠誠なる傳奇的な物語と雲表に聳ゆる金剛山とを有つてゐたことを幸福に感ずるのである。

その金剛山は、今ゆく手の空に高く聳えてゐる。今は私の思想も移り、時代の思想も變遷した。従つて少年時代と同じやうな感激の心をもつてこの山を仰ぐことは出来ないのであるが、かくの如く日本歴史中

の精華によつて裝飾せられたる山は、それをたゞ普通の山を見る時と同じやうに、何等の聯想なしに仰ぎ眺めることは出来なかつた。

私は地圖を披いて、尙ほ委しく附近の地理を點檢しながら、車窓一ぱいになつて入つてくる峰巒を飽かず眺め入つてゐた。二上山は大和川の峡谷によつて生駒山脈と葛城山脈とが大和平野の西端に添ふて南北に兩斷せられてゐる、その南半の葛城山脈の北端を成して、突兀たる峯の中ほどが抉つたやうに遙に二つに分れて見えてゐるのが、それである。そしてその中腹の窪いところが竹内峠で、昔時大和の中部地方と、大阪とを聯絡する通路に當つてゐたのである。私は其突兀たる山容を望見しながら、また「戀飛脚」のことを思ひ浮べた。「あの葛城の神ならで、晝の通路つゞましく、身を忍ぶ道戀の道、我れから狭き浮世の道、竹の内峠袖濡れて、岩屋越とて石道や、野越え山暮れ里々越えて、行くは戀ゆゑ……」といふのが、あの竹内峠である。近松がこの地方の自然を詩に詠じてゐることが繰返して偲ばれた。私の懷憶にも構はず、汽車が南に駛せるとともにその二上山も段々後の方に遠ざかつていつた。長い晩春の日は、漸次西に傾きそめた。屏々たる一帯の翠微は山背に夕映を浴びて金粉を蒔いたやうに眩しく煙つてゐる。そして山の頂邊が後光を背負つたやうに明るく輝いてゐるのに反して、中腹から麓の方は青緑の膚、藍の蔭一際鮮かたで、その處々に點在してゐる人家から、紫の炊煙が靜かに立ちのほりながら、末は中腹の晚霞の中に溶けてゐる。見渡す限り新緑の淡色に彩られた野も山も、今白金のごとき暮靄に罩められたるまゝ、靜かに

夜の幕の下りるのを待つてゐるやうである。

私は車窓の右を眺めたり、左を覗いたり、はじめて見るこの窓外の觀景に頭が一洗せられたやうに清新な氣分になつて、却つて心が落着かないくらゐであつた。やがて五所の町を過ぎれば次驛が壺坂、淨瑠璃で熟知の壺坂寺はそこから東一里半の山の中にある。私はそこにも憧憬を残しつつ、尙ほ南へと運ばれていつた。そして車道は漸次深い峡谷の中に分け入つた。午から曇つてゐた空は暮に近づくとも一層暗黒に掻き曇つて、左右の翠巒を風が吹き揺つてゐる。私はその間に暫く落着いた愉快的氣分になつて先刻初瀬の觀音で買った繪葉書を郷里の母や、東京の一二の知人にあて、書いた。今から十年ばかり前に西國三十三箇所を順禮してこのあたりを通つた老母の思ひ出のために。

吉野口の停車場に來た時にはもう深い山の中は寂しく暮れかけてゐた。そこから吉野川畔の六田まで通じてゐる吉野輕便鐵道の汽車がもうプラットフォームの向側に來て待つてゐた。列車は更らに窮屈な山の間を分けて喘ぎあえぎ上つていつた。私は地圖を點檢しながら車道が少しも早く吉野川の溪谷に出ることを待ちわびてゐた。吉野川！ 私は、今日車窓の左右に眺めて來た初めて見る諸方の山や野にも劣らぬ熱度をもつてどんなに長い間この川に憧憬してゐたであらう。吉野朝廷に關聯する正史ばかりでなく、種々の夢幻劇によつて、此川が古來どんなに美化されてゐるか。「千本櫻」の維盛卿とすし屋の娘お里との傳奇的

情話もこの一と條の清流の畔に因縁しており、「妹背山婦女庭訓」の大時代的裝飾劇もこの川を舞臺として

ある。私の美的幻影の中には、この川がいつも芝居の背景に描かれた青い山と山との間を流れてゐるあの美しい川とのみ映つてゐるのであつた。私は朝から乗降の頻繁な一日の車行に大分疲れてきたので、一刻も早くその幻のごとく脳裏に映つてゐる川の畔に出たかつた。

やがて稍、長いトンネルを一つ向うへ通り抜けて谷が變ると、まだ河身は見えぬが山谷の形勢がどこかそこ等に河流の通じてゐることを示してゐる。汽車はある山麓に添ふて走り、鐵道の崖下に狭い田圃が開けてゐるところへ家が二三軒立つてゐて、その一軒の家の背戸に若楓がまるで躑躅のやうに眞紅に燃てゐるその村里のかなたに、一帯の低地が新緑の底に埋れて見えるのが吉野川の河筋であらう。そんなことを思つてゐるうちに汽車は稍、山谷の開けた平地に出て來た。そして、とある停車場に到着した。そこが吉野川の畔の古い下市の町のある下市口であつた。汽車が停車場にさしかゝる少し手前から吉野川に架した大きな板橋が向ふに見えてゐる。昔から此の橋の上を一日に米穀が千石通るといふので千石橋と名づけられてゐる。下市口からその板橋を向ふに渡ると下市の町で、さうした山の中にはめづらしい白壁や大きな瓦の屋根などが新緑の間から見えてゐる。「義經千本樓」によつて事實化された釣瓶鮎を賣る鮎屋彌助といふ店があつて、釣瓶形の容器に入れた鮎鮎を賣つてゐる。

「……立歸る春は來ねども花咲かす娘が漬けた鮎ならば、なれが宜かろうと買ひに來る。風味も吉野下市に、賣り弘めたる所の名物、釣瓶鮎屋の彌左衛門、留守の内にも商賣に拔目も内儀が早漬に娘のお里が肩

襪、裾に前垂はや／＼と愛に愛もつ鮎の鮎押へて、しめて、なれさする、味盛りの振袖が、釣瓶鮎とは物らし。……」

私はその文辭を思ひ起して、浪華の淨瑠璃作者によつてポピュラアになつた、このあたりの風景を飽かず眺めてゐた。プラットホームには大きな杉の丸太や板などが山のやうに堆積されて、周圍の山ほどちらを向いても美しい杉の林に被はれてゐる。吉野の奥の大峯山に登るには此處から洞川といふところへ出てゆくのが一番順路であると聞いてゐる。その途中官幣大社丹生川上神社は下市から二里南にいつた黒瀧村に在る。十津川に沿ふて遠く紀州の熊野の方に越してゆくのもこの下市を経てゆくのが順路になつてゐる。私は、それらの方にあたる深い山を眺めて、私にはまだ未知の世界なるその地方にいつかは入つていつて見ようといふ憧憬に胸を躍らしてゐた。下市を過ぎると、やがて吉野川の流れが右窓の眺めに入つてくる。けれどもそのあたりは極めて流れが淺くて狭い。そこから六田の終點はもうぢきである。

そこは深い山の中の停車場にしては、流石に吉野遊覽の客が乗降するのと、吉野材木の集散地となつて、あるほどあつて、思つたよりも構内の廣い停車場である。プラットホームなども長くつゞいてゐて、寂しい夕暮れであるにもかゝらず汽車を降りてそのプラットホームを改札口の方に歩いてゆきながら、さういふ場合に屢々襲ふて來る旅情の寂しさも今日は不思議に湧いて起らない。もう觀櫻の季節は疾に過ぎてゐるので、芳野にゆくりしい旅客も降りたやうにはなく、改札口を向うに出ぬけると、外には



それでも車夫が十人ばかり客待ちをしてゐる。

車夫は、これから夜道をかけて二里の山坂を登つてゆかねばならぬのだからと仰山さうに、どうしても二人びきでなければゆかないといふ。

旅  
こ  
そ  
よ  
け  
れ

俵はやがて先びきをつけて走つた、そこらには強い香の漂ふ吉野杉の製材が高く積み重ねられてゐるのが暮色の中に白く見えてゐたり、盛に木材を挽く製板所の機械の音の響いてゐるのも何となく吉野の奥まで入つて来たといふ心地をさせる。車は坦々たる大道をすこしいつてから右に折れて、吉野川の廣い河原におりて板橋のうへを駛せた。私はこゝまで来て早く見たい／＼と思つてゐた吉野川を面に見ることができた。積は晩靄の底に微白く暮れやうとして、黄緑色の瀬から爽かな風が襟を吹いてきた。こゝは今は六田の渡しといつてゐるが、昔は柳の渡しといひ、川の畔に柳の古木があつたところで、こゝから半里ばかり上流の上市の渡しを櫻の渡しといつてゐたのだといふやうなことを車夫は話しながらゆく。汽車などのまだ通はない、ずつと往昔は、京都あたりから吉野に来る者は櫻井から多武峯を経て、山越しに龍在峠、雲井の茶屋を通つて上市に出て、それから櫻の渡しを向ふに渡したのである。飛鳥井雅章が「たづねきてこゝも櫻の峰つゞき吉野初瀬は花の中宿」と、いつてゐる通路が私には懐かしく追想された。私はいつか一度は花の咲いてゐる頃徒步してその道を通つて来てみたいものだななどと思ひながら、すぐ川上の方を眺めると、そこには鐵橋の架設工事が大半出来上つてゐる。吉野はますます便利になり俗悪になることであ

らう。やがて俵は板橋を向ふにわたり、吉野川の南岸に沿うた六田の町を通りぬけて一の坂を登つてゆく。

吉野は、吉野連峰の北端なる金峯山が長く吉野川の溪谷まで尾を引いてゐる、その尾根に據つてゐるのである。東海、東山、北陸諸道に比べて、近畿から山陽、山陰にかけては、仰いで崇高の感を起さしめるやうな高山雄峯に乏しいが、その中で此の吉野連山は意外に高い山嶺を成してゐる。大和國は一市十郡であるが、國の半分以上の面積を占めてゐる吉野一郡と、あとの奈良市と爾餘の九郡とが、國の中央部より稍北によつたところを流るゝ吉野川によつてま二つに横斷されてゐる。そして國の北半が四面青山垣を環してゐる海のない國であるにかゝはらず、中央部に平野が開けて、美田が穰つてゐるのは我が皇祖が二千六百年の昔此の國土に宮居を奠めましたことに地勢上の深い道理があることが思はれる。昔の事共を考へると我が帝國が今日の大を成した、實に國家發祥の靈地である。吉野は一國の大半を占めてゐる大きな郡で、その全部が殆ど山ばかりで、悉く美しい杉檜の森林によつて被はれてゐるのも氣持がいい。私はさういふ美林を單に産業といふ側からのみ考慮したくない。日本の風景美として鑑賞したのである。それ草木花卉悉く美ならざるはないが就中常盤樹、針葉樹の緑の美ほど眺め飽かぬはない。杉や檜が古來どんなに藝術家によつて嘆美されてゐるか、名匠狩野元信をして鈴鹿山中の杉を見て、到底わが筆の及ばざるを歎じて繪筆を棄てしめたといふ傳説を思つてみても分るのである。畫家でない私は、自分が夫を藝

術にすることが出来ぬのを悲しむ。而て元信と同じやうに杉を見て其美に恍惚としたことは度々ある。日光の東照宮山内の杉もさうであつた。日光の湯の湖の畔をめぐつてゐる杉も美しい。箱根の蘆の湖畔の舊東海道に残つてゐる八町の杉並木も美しい。私はさういふ美しい杉の美林が、この吉野全郡から紀伊の國にまで遠く連亘してゐる連峯を被ふてゐることを考へると、そこには言語に表はしがたい天然の美が深く秘藏されてゐるのが何ともいへず心持がいいのである。そして其等の吉野連峯が、いづれも相應な高標を示してゐることも私には愉快である。最高峯は佛經ヶ岳で六千二百尺といふから、丁度關東では赤城山くらゐの山である。それが全郡に蟠屈して紀州の方までつゞいてゐるが、山は随分奥深い。吉野はその萬疊の山の丁度入口のやうな處に位してゐるのである。

俣は迂餘曲折した道を登つていつた。新緑の山は蒼茫として暮れてきた。爽かな若葉の薫が夕風とゞもに漂ふてゐる。俣の上から振顧つてみると、吉野川の溪は遠く暮靄の底に開けて一と條の清流が其間をうす碧の布を敷いたやうに長く横つてゐる。上流の方にはこんな山の中にはめづらしく家並の整つた上市の町の瓦葺粉壁が蒼茫とした暮色の中に見えて、美しい電燈の瞬きが眺めてゐるうちに、だん／＼艶かしく敷を殖やしてきた。何となく寂しい山路の旅をゆく者の心を引着けずにはおかぬやうに思はれる。

「上市といふ處は山の中にはめづらしい大きな家が揃つてゐるぢやないか。」私は俣の上から聲をかけた。「え、なか／＼とこです。金持ちがたんとごほりますさかいな。金持ちはみんな林業家です。」

「成程なるほど、美しい杉林を有つて好い商賣だナ。」

「さうです。林木商の集るところですさかい、金はたんと落ちますわ。藝者も多勢居りますしな。宿屋や料理屋になか／＼好えのがございます。」

「やうだらう。かうして此處から見ても何だかそんなに思はれる。」

吉 底に夢のやうに美しく見えてゐるを見てさう思つたのではない。前にもいつたやうに、此吉野川にはまだ見ぬ以前から永い間憧憬を寄て、この山の中の上市の町の幻影をいろ／＼に描いてゐたのであつた。それを今蒼茫とした暮靄の底に遠くから眺めるところによると、かわて空想に描いてゐたのと少しも違はないやうに思はれたからである。六田の吉野驛から、吉野川に添ふた半里ばかりの平坦な道路がその町まで白くつゞいて電燈が道のところ／＼を照してゐる。

道はやがて一の坂を過ぎて、吉野の宮の前に行くころは、山の中はもうすつかり夜になつてしまつた。尙暫く登つて、やがて稍急坂を上ると、車夫は暗の中に大きな松の樹が枝を翳してゐる崖の下をゆきなから、そのこの崖の上に村上義光の墓碑の立つてゐることなどを語つてきかせた。すると、今日初瀬寺に詣うでた時分から、ひどく蒸暑かつたと思つてゐたのが、いつしか強い颯風に變つて、あたりの草木を吹き靡かしてゆく音がさわ／＼と闇の中に聞える。大空は黒く搔曇つてゐるが、處々雲の切目から見えてゐる

星明りに遠くの山が波濤の如く重疊してゐるのが眼に入る。私の胸のうちには懐古の情が油然而として湧き上つてくるのを感じた。車夫は時々轆棒の手を休めながら、此處から見たのが下の千本、こゝを左に下つてゆくと七曲りなど、教へつゝゆく。やがて大橋を渡り、急な坂を上へのぼると道の左右に民家がつゞいてきて、旅館の燈火が明るく道を照してゐるところへ辿り着いた。旅館の番頭達は二人挽きの俵がたゞ一つ、もう花の過ぎた今時分の夜道に途まどひしたやうに上つてきたので、それを見ると忽ち俵の傍に寄つてきて、

「お早うござりました。どうぞ手前どもへ。どうぞお仕舞ひになつて。お座敷もよろしい處があいております。」

と、口々に聲をかけた。けれども今日三輪に着くまでの汽車の中で老紳士に教へられたのはも一つ上の宿といふので、私は銅の華表を通りこしたところにある芳山館の前で俵をおりた。

花の過ぎた時分とて泊り客は一人もなさうで、伽藍とした大きな座敷のつゞいてゐる廊下を一番奥の方に案内せられた。先刻の嵐は、いつの間にか雨になつたと思はれて、閉め切つた雨戸に凄まじい颯風と一緒に降りかける音が消魂しく聞える。あまり蒸著いので、廻り縁の雨戸を少し繰りあげさすと、内から射し出す電燈の明りの影に、大きな櫻の木が吹狂ふ嵐にざわ／＼と枝を揺られながら緑の葉から、ばらばらと飛沫を立ててゐるのが、きら／＼闇の中に輝いてゐる。私は、藤井竹外の古陵松相吼天鷲、山寺尋春

春寂寥、眉雪老僧時歇筵、落花深處說南朝といふ少年の頃語じてゐた古詩を思ひ起した。さう思ふと何となく今晚のやうに一天暗くして暴風雨の吹すさぶ夜が、吉野の地を遊覽するにはふさはしいやうに感じられてきた。私は屋外の風雨の音に凝乎と心を澄ましながら獨り黙然として羽織を脱ぎ、帯を緩めて座を占め、今身の吉野に来てゐることを靜かに思つて見た。

吉 あまり風が強いので立ててゐなかつた風呂を、私の爲に急いで沸してくれたりした。其風呂に入つて私は朝からの汗を洗ひ流し、旅の疲れを休めた。やがて、此土地の生れだといふ質樸な下婢が牛肉や玉葱を多く用ゐた鄙びた膳を運んできた。それにはすこし辟易したが、私此山の中に来て都會の者の口に合ふやうな食べ物を求めるのは間違つてゐる、吉野には美味を欲してはる／＼上つて来たのではないから、と思ひながら箸を取上げて初瀬の晝餐から何にも入れなかつた空腹を漸く充たした。膳を下げさすと、何より繪葉書を命ずると近處の繪葉書屋の女房が繪葉書その他の吉野名産の櫻花漬など持つて座敷に入つてきた。これからまだ旅から旅へ漂泊しようとおもつてゐる私には、こて／＼した土産物などは無用なので繪葉書を二組みばかり取つて、早速それを東京や郷里の方へあてて書いた。

路 191 さうしてゐる間も戸外の風雨は倍々荒れ狂ふて、凄しい力で櫻の枝葉を吹撓めてゐる。蒸々するやうな暖い雨は一仕切り、バケツを覆へしたやうに開放つた縁外の軒から流れ落ちた。私の心は、丁度その強雨の音に、いよ／＼落着いてきた。いろ／＼な悲壯な感懐が豪雨の奏する激しい音楽につれて湧いてきた。

俳人支考が、

歌書よりも軍書にかなし吉野山

と詠じた心持ちに似たやうな感情が私の胸に滲んで来るのをおぼえた。明日の見物の案内の相談かたがた宿帳を持ちそへて話しに來た番頭は、

「まだ奥の千本には幾らか花が残つておりましたが、この嵐でみな落ちてしまひます。折角遠方をお越しになりましたに生憎のことです。」

「あゝ奥の千本にはまだ残つてゐたでせうな。」と、いひつつ私はまた、西行の歌を思ひ浮べた。吉野山花のさかりは限りなく青葉の奥もなほさかりにて

れけよそと旅

「いや、花はなくなつても結構だ。却つて客が雑沓してゐる頃よりも丁度今時分の方がいゝです。」

そして私には、吉野朝廷君臣の悲壯なる物語や、義經、靜、忠信等の美しい哀史に對しても固より深い追懷を感じるのであるが、それよりも私にとつて多年熱情を寄てゐたところは、その奥の千本にあるといふ若清水や、西行が隱棲の跡であつた、私には南朝君臣の忠勇武烈な行爲や義經主従の情緒纏綿たる別離の悲哀などの、あまりに歴史に顯著な、そしてあまりに華麗な事蹟であるのよりも、寧ろ西行や芭蕉の寂しい冥想の生活の方が今は自分の生活に近いやうにおもはれて、私の今度はじめて吉野の地に分け入つた最も奥底の精神は、そのとく／＼の泉にあるといつてもよかつた。

吉野路

とく／＼と落つる岩間の若清水汲みほすほどもなき住居かな

また、その西上人の跡を慕ふてこゝに辿り來た後世の芭蕉は、

かの、とく／＼の清水は、むかしにかはらずと見えて、

今もとく／＼と零落ちける。

露とく／＼こゝろみに浮世すゝがばや

若しこれ扶桑に伯夷あらば、かならず口をすゝがん。もしこれ許由告げば、耳を洗はん。ともいつてゐる。

西行は岩間からしみ出る清水さへもあり餘るといふほどの消極的な生活をしてゐる。もとよりさういふ消極的な生活は到底今の吾々には實行出來さうもない。そしてそれを南朝の君臣、義經主従の事蹟などに對照してみると、そこに無限の人生觀を展覧することができるといふやうに思はれる。飽くまでも積極的な、煩惱の強い、人間慾の旺盛な生活と、極端に消極的な、閑寂な、覺悟した生活と、人間の抱いてゐる極端と極端との生活の様式が此處に歴々と示されてゐるかのやうである。その意味に於て吉野は見やうによつて單に歴史の表面を飾つてゐる事蹟のみばかりではない日本人の長い間の思想史を披いて見せてゐるのである。

「かうひどく降りますれば、明日は却つて霽れるかも知れません。どうぞお静に。」  
 といつて、番頭は寢床を設けて、雨戸を閉めてから退つていつた。

私はどうかすると頭が冴えて、いろ／＼な聯想が綿々として湧き上らうとするのを、強ひて忘れるやうにして明日の遊覽を胸の奥に樂み抱くやうにして眼を急いだ。

嵐は夜半までもつゞいてゐた。そのために又しても睡眠を破られたが、そのうちいつの間にか、ぐつすり眠つてしまつた。

翌朝目覺めた時には昨夜の雨はすつかり霽れて、美しい日の光が雨滴のしたたる新緑の葉々を照らしてゐた。朝飯を済まして案内の番頭と連れ立つて出たのはもう十時を過ぎてゐた。藏王堂の仁王門から上つて、まづ本尊金剛藏王大權現を拜する、藏王堂は普通に大和大峰山と呼ばれて、夏季白衣の登山者の多い金峯山寺の本堂で、山内第一の巨刹である。天武天皇の白鳳年中役の小角の草創、日本修驗道の根本道場である。本尊藏王大權現は三丈六尺、二丈四尺、二丈二尺の立像の木像三體を安置し、何れも憤怒の容貌惡魔降伏の姿勢を示してゐる。釋迦、觀音、彌勒の變化の相を想化し表現したもので、右手に三鈷杵を握り左手は五指を腰に當て、赫つと四邊を睨んで右脚を高く擧げ天地經緯の勵嚴なる相形を表してゐる。小角金峯山上に籠り、救世濟度のために大自在、大威力薩埵の出現を祈りしに、初は柔和忍辱の地藏菩薩現はれ、次で彌勒菩薩が現はれた。然るに尊者以爲らく、末世の衆生は上世と同じからず、かゝる慈悲圓滿の

相貌にては現未の剛強濁惡の衆生を濟度すること難しとて更に潛心凝思して熟禱已まざりしに最後に嚴然として示現したのは金剛藏王大權現の尊影であつた。小角それを見て、これぞ我が祈求する尊影なりと。合掌讚嘆してその感得するところを尊體に刻み、大峯山上に安置したと傳へられてゐる。

その後本堂は屢々兵燹に罹り、立像も小角の感得せる薩埵の意を體せる後世の彫像で、いづれも足利初期の創建になり、木材堅牢、規模雄健、當時の特徴を遺憾なく發揮してゐるといはれてゐる。

私は吉野保勝會で發行してゐる吉野名勝案内を披きながら、番頭の案内するあとから蹤いて見て歩いた。

太平記に「……去程に武藏守師直。三萬餘騎を率ゐて吉野山に押し寄せ、三度関の聲を揚げたれども敵なければ音もせず、さらば焼き拂へとて皇居並に卿相雲客の宿所に火をかけたれば、魔風盛に吹き懸りて、二丈一基の笠鳥居、二丈五尺の金の鳥居、金剛力士の二階の門、北野示現の宮、七十二間の回廊三十八所の神樂屋、寶藏、籠殿、三尊光を和けて、萬人頭を傾くる金剛藏王の社壇まで、一時に灰火となりはて、煙蒼天に立ち上る。あさましかりし有様なり。」

と書かれてゐる。太平記一流のいかにも壯な形容である。併し此處の文章は必ずしも誇張ではなかつたらうとおもふ。今見る金剛藏王大權現の力そのものを表象せる勇猛剛健の相形と相待つて、五百年前の當時をまぎ／＼と追想することができる。また事實吉野の地が歴史上忠臣烈士の事蹟に富んでゐる、篤信敢

行の士を輩出したといふのは彼の小角が潜心熟禱の餘に感得した悪魔降伏の思想に淵源するところが大きいのではないかとおもふ。古武士には敢てめづらしからぬことではあるが、取分け楠河州は稀れに見る神佛の敬神家であつたらしい。そしてその神佛に對する信仰心は武人としての行爲の上にも篤信敢行の人として顯はれた。古往今來恐らく楠河州くらゐ自分の行爲に對して篤い信仰を抱いて事に當つた人は我が日本人中にも比倫があるまいと思ふ。忠君奉公の意味と、其主體は狹義に解する時は往々膠柱の偏見に囚はれ易い憂ひがあるが、ひとり楠氏父子ばかりではない、南北朝當時の忠誠なる武士の行爲は、全く宗教的の信仰から發露した行爲であつた。彼等武人の念頭には正統天子に對して忠義を抽んでるといふことは直に神に對する篤信の行爲にほかならなかつたのである。さう思つて見る時は既に前にもいつたとほりに、楠氏の信仰心に富んだ行爲は萬世の後を照すこと日月と光を争ふといつてもよいのである。それは今日の如き散文的な産業時代インダストリアル・エジにあつても、どこかに吾々の行爲の規範を示してゐるのである。楠氏の如き篤信敢行の事蹟は在來の窮屈偏狹なる日本人の倫理想に依つて解釋しようとするがゆゑに、屢々それが今日に用ゆべからざる硬化定着した規範となるのである。それでは實に殘念なことではあるまいか。楠氏の事蹟は當時に在つては主として正統天子に對して忠誠のかぎりを盡したものであつたに相違ないが、その人間としての精神は飽くまでも宗教家に見る如き信仰の行爲であつた。私は今日の如き大産業時代グレート・インダストリアル・エジに於ては楠氏の如き、日本人の精華ともいふべき立派なる人間が單に偏狹固陋なる道學先生の手にのみ委ねられて、

吾々の日常生活とは風馬相闕せざるものとして忘れられ、それに新解釋を加へて新なる生命を復活せしむるものゝないことを、平世から遺憾に考へてゐた。今彼の小角が河内の葛城山に入りて三十年の間苦修練行した神祕的な事蹟や、金峯山寺開創の由來など、吉野朝の忠臣烈士の行爲とを併せ考へて、楠河州の忠勇武烈は遠く彼の小角の教化に淵源してゐることを深く思はせられたのである。

私はそのことを次からつぎへと思ひながら、番頭の後について此度は吉野皇居の址に行つた。懐古の客をして最も心を悲しましむるものは實にその金輪王寺の址である。そこは藏王堂の仁王門から右一丁許、藏王堂の小丘の裾をめぐつて西に行つたところに在る。約三段歩ばかりの平らな臺宅地になつてゐて、今は眞青な春草に彩られて一本の抗が宮殿の址をそれとを示してゐるばかりである。處々に立つてゐる櫻は、もうすつかり青葉になつて、わづかに葉がくれに一つ二つ白い花瓣が散り残つてゐるのも、思ひなしにか心を傷めしめる。

私と番頭とはその臺宅地の崖の上に立つて、やゝ暫らく低徊顧望しながら話した。そこからは波濤の如く起伏せる吉野山の支脈を越して遠く西の空に、頼母しさうな金剛山の雄姿が、昨夜の雨に洗はれて一入匂かな藍色を見せてゐる。

「手前どもがまだ十二三の子供の時分までは昔の御殿が幾分かまだ残つておりまして、よく廊下や縁の上を駆けまはつて遊んでゐたのを記憶いたしております。」六十あまりの番頭はさういつて語つた。

「それから彼處の溪の底に少しばかりの竹藪が見えております。」といつて、番頭はすぐ眼の下に見えてゐる深い杉林に被はれた溪間の竹林を指しながら、

「あの處が村上義隆の戦死したところでございます。義隆は父の義光が自害するのに心を残しながら、父の命に背くわけにもまゐらず、どこまでも大塔宮の御先途を見まゐらせやうとして、あの狭い溪道まで御供をして落ちてまゐりますと、敵勢五百騎ばかり押寄せ来ましたので、無勢に多勢。どうすることも出来ませんので、義隆只一人踏み留つて其等を斬伏せして居ります間にまぎれて宮は難なくそこを落ちのびて十津川を経て高野山へゆかれましたのでございます。」

彼は、昔の太平記讀みのやうな敬虔な口調で、物譚りをつづけた。

私は、じつと始終を聞きながら、眼を上げて十津川の方へ落てゆく間道といふ峠の方を見やると、杉檜をもつて黒く被はれた高い峯、峯又峯の上に遠く重疊してゐるのが仰がれる。私の心はそれやこれや、萬事を知て萬古語らぬ悠久たる自然と、古い歴史の幽光とが麗らかな春光の中に融けて胸に滲み入るやうに思はれた。

(大正七年八月七日高野山にて草す)

### 伊 賀、伊 勢 路

私には、また旅を空想し、室内旅行をする季節となつた。東京の秋景色は荒寥としてゐて眼に纏りがな  
い。さればとて帝劇、歌舞伎さては文展などにさまで心を惹かるゝにもあらず、旅なるかな、旅なるか  
な。芭蕉も

憂きわれを淋しがらせよ閑古鳥

といひ、また

旅人と我名呼ばれん初しぐれ

ともいつたが、旅にさすらうて、折にふれつゝ人の世の寂しさ、哀れさ、またはゆくりなく湧き来る感  
興を味はふほど私にとつての慰藉はない。東京は、私には、あまりに刺戟が強く、あまりに賑かすぎて、  
心はいつも皮相ばかりを撫でゝゐるやうである。東京にゐると、文筆のわざさへひたすら枯淡なる事務の  
やうになつて、旅にゐるときのやうに自然の情趣が湧かない。私の魂魄は今、晩秋初冬の夜々東京の棲家  
をさまよひ出でゝ、遠く雲井の空をさして飛んでゐる。

私は府縣別の地圖を座右に備へて置く。そして毎晩就寢のとき枕頭にそれを展いて見るのである。哀れ

深き旅の空想は私の夢を常に安からしめる。富士の頂きに初雪を見る頃になつて、さすがに夏は懐かしい東北の山河は、私には思ひ浮べるだにおぞましい。南海、西海の邊土は、未だ多くわが脚を踏み入れたことはないが、須磨、明石さへ遠隔の地のやうに思つた昔の京都の殿上人の抱いてゐたやうな感情は私にも遺傳されてゐるとおもはれて石炭の煙突煙る九州の地は私にはあまりに遠國すぎる。私の最も愛好する地勢と風は伊勢大和近江の境にある。そのあたりの地圖を閲しつゝ私は自由に旅の空想を夢むのである。此度の旅は少くとも二箇月くらゐはさすらふ豫定でそのつもりで旅支度をとゝのへ些の未練もない東京の空には暫時の訣別を心の中に告げつゝ夜九時の急行車で中央ステーションを出發する。この時停車場の大廊下に鳴りひびく旅人の下駄の足音も私の耳には天樂の如くいみじき音律となつて聞えるのである。それより心地よいクッションにまづ腰を落着けつゝ今宵一夜を共に此處に明かすべき同車の旅の人々の知らぬ容貌風采、さては一步想像を深めて、それ等の職業、運命などについて考へてみるのもまた一興である。此の際に於ける私の注意の働くと、想像の奔放なることは、到底歌舞伎座や帝國劇場などにあつて死劇を觀てゐる比ではない。

やがて夜行列車は、寝つ起きつする間に翌朝の午前六時を少し過ぐる頃無事に名古屋に着く。私は昨夕東京を立つとき伊賀の上野までの乗車券を買つてゐたので、そこで關西線の湊町ゆきの二番が發車するのを待つ間二時間ばかりに軽い朝食を取つたり、電車を利用してちよつと名古屋の街の一角を窺いて見るで

あらう。實は多年の宿望なる、關原、古の不破の關所のあつたあたりのわびたる野山、村里の秋景色をも歩いて見たいのだが、それは今は割愛して豫定のとほりに、やがて湊町ゆきに乗つて午前八時二十三分發で伊勢路に向つて旅をつづける。

桑名、四日市は昨夕の残睡のうちにつしかり通りすごして、車道は漸う／＼四山の群がる間をわけ登るに、冬近き空の氣色定めなく、鈴鹿は雲に隠れて嘘のやうな時雨がはら／＼と窓を打つてきた。行方なき風雲の、先きを急ぐ旅でもないので、かういふ日にこそ廢驛を眺めわびたいとおもつて、待夜の小室節關の小萬で名の高い關の驛で汽車を棄てる。まだ十時半過ぎたばかりなので早い。

今夜はこの處に一夜逗留して見たいと思ふが、名匠狩野元信が、いくら巧に描いても繪は到底自然生えの杉の美しさには比ぶべくもないと惜歎を發して繪筆をとつて、投げ捨てたと傳へられる筆捨の溪も遠くはない。殊にこのわたりの杉は自然を見る眼の常人に卓絶してゐた審美眼を感動せしめたも無理からぬほどに美しい。それで停車場の車夫に掛合ひつゝ、有名な地藏尊は歸途に残して、まづ筆捨山に向ふ。時雨れて濟むほどの雨ならば、行々かの恐ろしきローマンズの傳はる坂下より昔の鈴鹿峠を越えて、江州に入り、一阪は照る／＼鈴鹿は曇る。あひの土山雨が降る。てふ郷曲の風情を一人旅の身にしめながら土山までのり、その晩は遂にいぶせき旅籠に夜を明し、翌日は尙ほ三里の道を水口までゆき、貴生川を経て汽車を利して柘植に廻り、そのまゝ上野に出るか、或は土山より昨日の道をまた關に戻るか、それは其時の心の



赴くままになし、再び名古屋、湊町の線路にたよりて左方の車窓に聳峙たる靈山寺山、長野峠の錦繡を遙かに送迎しつゝ、やがて伊賀の國境に入れば、春ならば黄白の菜の花薫る上野の盆地遠く展けて、收穫済みたる野の果て、落葉しぐれる山の際に、戌亥の方に白壁の土藏を置いたる農家の冬待ち顔に靜かに立つを見る。佐奈具の一驛をへてやがて上野に着く。此地は芭蕉翁故郷塚、伊賀越の敵討で名の高い鍵屋の辻など心に留むるかたぞ多し、私はこゝに一夜二夜を明し、翁のことどもを忍びつゝ、俳人ならぬ俗人の俗陽を洗ひ、

今宵たれ吉野の月も十六里

と翁もいはれしとほり、かねて假りの住居の望みなる吉野も程遠からねばそれより大和街道を志て名張に向ふ。ところ／＼は俾を下りて、車夫を勞はり、ひろひ歩きして、南畫に描かまほしき秋の山々の黄葉を拂ふ風に旅衣を吹かれつゝ、そのわたりの溪山の眺めは私をして容易く立去りかねしめるであらう。

(大正六年十一月二日)

## 大 和 路

その時もしすぐ名張にゆかないで伊賀上野から名古屋湊町線を、そのまゝもう一つ先の島ヶ原驛まで行くのもいい、汽車の窓から見てみると、雛段のやうな山田が一つひとつ緩い傾斜面に重なつて、やがて小高い丘の上までつゞいてゐる。そしてその頂には、背後に杉檜の鬱蒼とした小高い山を控へて裕福さうな農家が三點五點立つてゐる。草葺屋根の母家に續いて白壁塗の土藏があつたりするのが眺められる。春ならば山田の畦に青草が萌えいで、長閑な春暖に桃の花が咲きこぼれてゐたりする。

東京大阪京都の繁華な都會を遠く離れてあの丘の上の人達はこんなところに何を樂しみ、何を考へて一生涯を送るのであらうといふやうなことが想像せられる。自分もあんな丘の上に居を構へて、暖い春の日光に浴しながら、縁側に寝轉んで、遠い東京の喧騒を餘處に聞いてゐたら、どんなに神經が鎮まるであらうといふやうなことも考へられる。一體に伊賀、大和、南山城の境域に連續してゐる山谷水態は、この溪谷に入つていつて見ても小さく纏まつて、南畫などによく見る如き雅致を具へてゐる。

吉野川上流の溪谷、吉野の奥。名張川及伊賀川の溪、宇治川の奥ことごとくさうである。私はその名張川の溪と伊賀川の溪とを最も好む。月ヶ瀬の梅の美は半ば溪山の美に在る。鎗の穂先を連ねたやうな峰の

杉林と、籬段をいくつも重ねたやうに溪の底或は丘の傾斜面に小い畦によつて仕切られて開墾されてゐる山畑とを背景として、農家の茅屋と相點綴して早春を告げてゐる風情にいひやうのない桃源境の長閑さ静けさがある。梅がある爲に月ヶ瀬の名夙に天下に冠絶すれど、其實溪あるが爲に梅の名が高いのである。既に然りとすれば、私は二月の花無しといへどもこのわたりの秋景山水の美を棄てるに忍びないのである。

私は、或は伊賀上野から伊賀川の溪谷に即いたり離れたりしながら、笠置街道を俾で鳥ヶ原の方に行くかも知れぬ。その道には西蓮寺などいふ寺がある。鳥ヶ原にも觀音提寺といふ寺がある。また初め志した通り一旦名張までいつて、そこから大和の方に越えないで、そのまま名張川の溪谷に添うて月ヶ瀬の方に下つてゆくのも楽しい。名張川は大和の宇陀郡に源を發してゐる宇陀川と、やつぱり宇陀郡の東部伊勢境の山嶽地方から流れ出で、伊賀に入り名張町に到つて宇陀川に會流する河内川などの水を合せて伊賀大和の境をなしつゝ北流して二度大和に入り、月ヶ瀬の溪を成し、更に北流して南山城の大河原村に到りて伊賀川に會し、直ちに左折して西に向ひ、笠置山の北麓に沿うて笠置、五軒屋、加茂、木津などの市邑を経て木津川となり、南山城の平野を灌溉しつゝ更に北流して淀に到つて遂に淀川に合す。

私はこの名張川の溪を好む。月ヶ瀬か、どこか、不便をしのびつゝこの川沿ひの小さい町に逗留して見るのも一興である。或はずつと下つていつて大河原驛に暫時みて見るのも可い。その上流月ヶ瀬の下流二

里許兩岸の峰々が削立してゐる間に高尾、廣瀬などいふ村があつて、粗朶などを積んだ小い柴舟が山と山との迫つた清瀬に懸つてゐたりする。

大 伊賀の鳥ヶ原から汽車で來ると、伊賀山城の國境にかなり長い隧道があつて、それを西に出抜けると、丁度近江と山城との國境をなしてゐる大谷隧道の入口よりもまだ險阻な峰がすぐ頭の上に聳え立つてゐて、深い杉に蔽はれてゐる。その勾配の急な山の根もとの處に大河原の停車場がある。そこまで來ると名張川はすぐ向の山と山との間を分けて急瀬を成しつゝ流れ出てゐるのが注意深い眼には必ず見落されな

和 路 大 田舎の停車場で宿屋なども不便であらうと思ふが、そこわたりの溪山の眺めは箱根の山北あたりの山のやうに粗野散漫でなくつて、纏りもよく、雅趣に富んでゐる。停車場があるので東京を遠く離れてゐても、さまで心細くもないわけだ。歸りたくなつたら、すぐ汽車に乗つてしまふばかりである。もし飽かなかつたら、いつまで居つても可い。汽車は大原と次驛の笠置との中間あたりに一つ鐵橋があつて、それより以西は南岸の險しい棧道を走つてゐる。笠置驛には礦泉がある。そこまで汽車でゆくのもいゝが、船で下ると更に妙である。三四年前の四月の末であつた。私はそこを汽車に乗つて奈良の方に志してゐた。すると、その時日は照つてゐながら、温い春雨が降つてゐた。兩岸に巨岩、怪石迫り、紺碧の淵を湛へた急流を一つの小舟が溯つてゐる。長く纜を挽いた一人の男が磊々たる岩の上を飛んだり這つたりしながら上つてゆく。舟の中には一人の男があつて、下流の方から横降りに降りかゝつてくる雨をよけ乍ら紺蛇の目

の傘を阿彌陀に翳してゐた。それへ、稍、西に傾いた春の日影があかるく照りかけてゐるのを見た。笠置の驛は丁度南朝の遺跡を以て有名な笠置山の麓に位してゐるが、村はづれより北の對岸にある。汽車から見ると、そこはすぐ背後の山に據つて家居が出来てゐて、上の方には寺の高い塔なども見える。それから尙ほ流れについて下り、加茂驛のあたりまでゆくと、もう川幅も廣くなり、向岸には野が開けて、春には眞青な麥畑が煙霞の立ち罩めた中に夢のやうに遠くつゞいてゐる。

(大正六年十一月二十日)

## 大和路の春

青丹吉奈良の古都のあつた大和平野は陽春四五月歩いてみるのにこの邊りくらゐ好いところはない。その大和平野の到る處に點在してゐる千年二千年の古跡を見て歩いた時のその自然の印象を誌してみようと思ふ。

私が奈良を好いと思つた時は、大正三年の末に奈良に來た時であつた。同じ土地でもその時々々の季節、晴陰その他の關係で、印象が全く違つたものになる。

その時は四月の、たしか二十四日の夜遅い汽車で東京を立つたやうに思ふ。翌朝名古屋で關西線に乗換へて奈良に向つた。四月の末といへば東京でも春爛けて、八重櫻がそろそろ凋れる頃である。東海道の夜行列車は遠參兩州のあたりで、もうほのぼのと沿道の野面が蒼茫とした狭霧の中に茜色に染められてゆくのを朦朧と人いきれに曇つた車窓の中から認める。暢氣な性質の人間は何時までも、列車の轟きを打ち消すやうな大きな鼾聲を揚げつゝ、睡りこけてゐる者もあるが、大抵の旅客は、もうその頃になると、落々熟睡出來なかつた顔を上げてクッションの上に起き直る。私も昨夜はあんまり車室が蒸暑かつたり、またかうし

て晩春のゆくゑを趁ふて關西の方へ自由な旅行をする嬉しさに頭の心が昂奮してしまつて遂々熟睡することが出来なかつた。昨夜は従つて、凝乎と眼だけは閉ぢながら、窓枠に凭れてゐる頭の中では種々な事が綿々として考へられた。かうして東京から關西に向つて行く汽車の旅。顧みれば幾十度と數へられぬほどであるが、まだ學生時代暑中休暇で歸省してゐた頃を除き、爾來十幾年の間、嘗て一度たりとも、幸福な感を胸に抱いて汽車に乗つたことがなかつた。その理由は今此處に語る必要はない。たゞ毎時不満足な、感傷的な、不幸な感情を抱きながら汽車に乗つていつた。その事を「あの時も、あの時も……」と心の中で繰返して追憶してゐた。そして今度のこの旅行を従來の車行に比べてみると、確かに不幸な原因で旅するのでもなければ、感傷的な思ひを胸に抱いて乗つてゐるのでもなかつた。明かに今度の旅行は其等の忌はしき感情から解放されたものであつた。たゞかうして汽車に乗つて、多くのさまざまの旅人や自然を無心に觀察しながら氣樂な旅行することは従來の自分には稀なことであつた。

參州の蒲郡あたりからもう晴れやかな、明るい春の朝日影が窓硝子に一ぱい射しかゝつて、靜かな曙の狭霧の棚曳く彼方には眼の醒めるやうに青く伸びた、海近い麥圃の上に漁船の帆柱が林のやうに立つてゐるのが見えてゐる。

やがて名古屋に着いたのは十時近いところで、そこから大阪の湊町ゆきの關西線に乗り換へると、もう氣分は自然に京阪地方に來た心持になつてくる。朝早い車窓の中から眺めると、眼も遙かに遠く開けた尾張

の平野は見渡す限りの菜の花で、まだ昨夜の夢から覺めきらぬもののやうに、うつとりと露に濡れそぼちてゐる。汽車は、遠くの下流に白帆の見えてゐる木曾川の長い鐵橋を轟々と渡つていつた。私は東海道の車室と違ひ人氣少い車内に寛いでゐる睡眠不足の頭に自然に安らかな微睡を催してきて、いつとは知らずクッシッシに凭れてうと／＼としてゐた。そして龜山に來て參宮鐵道から乗り終へた旅客がどやどやと入つて來たので眼を覺まされた、僅の間眠つたのでも、それで頓に頭が爽快になつて元氣が回復して來た。今朝早く眼覺めてから無性に物憂く氣怠かつたのが、今は何を見ても十分なる興味をもつて受入れることができるやうになつた。龜山までは三四人しかゐなかつた車室が、大阪あたりから伊勢參宮の戻りらしい旅客で、さしもの廣い車室も満員になるとともに、いかにも春の旅人らしい陽氣の談笑の聲がそこにもここにも湧いて、文明の利益によつて運んでゆかれる伊勢參宮にも伊勢まゐりには伊勢詣りらしい昔ながらの一種の長閑な氣分が誰の上にもたゞよつてゐることを感ぜずにはゐられなかつた。

折柄四月の正午時、もう窓外は暑過ぎるやうな晩春の日が沿道の野山にちろ／＼照り輝いて、ゆく手の右方にあたつて西北の天際に屏風のごとく聳へてゐる鈴鹿山の頂邊には墨を流したやうな雨雲が覆さるやうに盛んに動いてゐる。車道は次第に上りの勾配になつて、喘ぎ／＼進んでゆく列車の轟く響が四圍の山に、けた／＼ましい反響を呼び起しつゝ深山の中腹を穿つて駛走した。

私はこの關西線の車行を好む。殊に鈴鹿山を越えてゆく時、木津川の溪崖を走る時の車窓の眺めが好き

である。

車内の歡聲湧くがごとく、中にも四五歳ばかりの男の兒に羽二重の紋服を美しく着飾らせた大阪の客とおほしい若い夫婦がその兒を愛してゐる無邪氣な談笑につれてほかの客も覺えずそれにつり込まれて笑はされてゐる。どんよりとした花曇りの空から大粒な雨滴がぼら／＼と窓硝子を斜めに打つて來た。小萬で名高い關あたりからは、それが暫らく本降りになつて、窓外の野山はしと／＼と春の雨に濡れてゐる。加太、拓植あたりの山中は何處やら函嶺に似たところがあつて、一入車窓の眺めがなつかしい。拓植を過ぎてから次の佐那具までは伊賀盆地に向つて一瀉千里の勢ひで馳せ下つてゆく。鈴鹿山中の雨もこゝまで來ると、いつしか明るくなつて、微温湯のごとき大粒の雨が、日の照つてゐる空の一方に尙ほたゞずんでゐる薄雲のあたりから落ちてゐる。盆地の野末にはあちらにも此方にも籬落が見えて、白壁づくりの土藏に春の日影がきら／＼と映つてゐる。長い間山の中を分けて來た機關車の喘ぎと同じやうに何となく軽い壓迫を感じてゐた旅客の心が再び空の色と同じやうに明るくなつて來た。佐那具は伊賀盆地の端にある。そこから次驛の伊賀上野までは一面の平野で、暖い春の雨に黄白の菜の花が湯氣に蒸されたやうに遠く近く煙つてゐる。

私は何となくこの伊賀の國を好む。俳聖芭蕉の生國であつたといふことも——即ちこの詩聖の詩句の妙なる力によつて、この國の山河自然が深い懐しみを以て私の心に映じてくるのもその一つの理由である。

が、芭蕉の詩を通して観ないでも、直ちにこの國の自然が一種の浮世ばなれのした雅味を備へてゐるのが早くから私の興を惹いてゐるのである。

列車は上野盆地の平野を横切つて春雨に烟る菜の花の中を駛走した。藤室家の支藩であつた上野の城址は煙雨を隔て、菜の花の彼方に模糊として見えてゐる。やがて汽車が上野驛について停車すると春雨に降り罩められてゐた旅客はいひ合はしたやうに吾れもわれもと硝子窓をあけて物賣りを呼び食べる物を買つた。

大 和 路 の 春  
伊賀の上野から次驛の島々原驛を一つ過ぎると、もう山城と伊賀との國境で、長いトンネルを向ふへ出抜けると、其處は南山城の大河原驛である。伊賀川と名張川とを合した木津川の清流は國境の山の間をくぐつて大河原の驛前に流れ出てゐる。そのあたりは關東や信越地方に見る如き高標のある山ではないが、しかし何となく山深い趣があつて、殊に大河原のステーションのある處は峻嶒な山が削立してゐる。車道はそこから笠置、加茂の二驛の間木津川の溪に沿うて西する。

伊賀上野から島々原あたりの汽車の窓から眺めると、雛段のやうになつた山の上に人家が群がつて、いかにも泰平な相を備へてゐる。あの溪山の趣は、月々瀬即ち名張川の溪谷をはじめ此邊一帶の山河の特徴で、同じ山中の住居でも關東地方の如く險惡粗豪な感じがなく、優雅温藉な趣が深い。かなり高い山の上まで田畑が開かれて、そこに白壁づくりの土藏などが麗かな日光に浴しながら、片山里の春を享樂してゐる。

るのは、餘所目にはさながらの桃源郷である。

木津川の碧流に沿うた車窓の眺望は、また最も私の愛するところである。その時、伊賀平野で晴れたと思つた春雨は、汽車が木津川の溪崖を駛走してゐる時分になつてまた降つてきた。天の一方では明々と日が照つてゐるのに、暖い雨は斜に西から東に向つて降つてゐる。油を流したやうな碧流の旋みに黙々波紋を描いてゐる。すると柴舟が一艘激流に逆つて漕ぎ上つてゐる。磊々した岩上の上を這つて一人の男が遠くから綱を引いてゆく。一人の男は棹を操つて岩を突張つてゐる。一人は蛇の目傘を翳して舟の中に立つてゐる。明るい春雨が斜めにそれに降りそゞいでゐる。何といふピクチャレスクな光景であらうと思つて、私は汽車の窓から、いつまでもそれを見送つてゐた。雨は笠置驛あたりから又止んで、加茂驛に来る時分には長閑な春霞が向岸の南山城の緑麥の野を白く罩めてゐる。その次が木津で私はもう奈良に近くなつたと思つて、飽かず眺めてゐた窓外の景から眼を轉じて立ち上つて旅鞆を片づけたり帯を締めなほしたりした。

奈良に着いたのは三時頃で、今晚の宿はどこにしようか、あれかこれかと汽車の中から考へてゐたが、ステーションで車夫に訊くと武藏屋は今廢業してゐるといふので、どこでもいゝことにして公園の菊水に行つた。

それは大正三年四月の二十五日のことで、長い春の日も、宿について少憩して、入浴したりなどしてゐ

るうちにぼつ／＼暮れかけて來た。私は今一刻千金の、此の古都の行く春の日を宿の座敷に唯じつとして過すのが惜しくなつて公園の方に出てみると、すぐ前の南圓堂の方では高らかな聲を揃へて御詠歌を合誦してゐるのが聞えて、それに和する敲鉦たかづなの音が、静かな夕暮の空氣の中に濕やかに響きわたつてゐる。習なま習と吹く風につれて、まだ咲いてゐる山櫻の白い花片が、下をゆく袖にはら／＼と散りかゝつた。一體東京の櫻花の華美なものに比べて畿内附近の櫻は多く山櫻で、東京の花の、葉よりも先に花を開くと異り、葉の芽ぐむのと同時に花を開く。それが東京の花とちがひ濃厚でなくして淡彩である。

さながら古都の情調にふさわしい厭世的な敲鉦の音と詠歌の聲は、それらの薄らさびしい山櫻の花びらに震へるやうに黄昏の空に浸みて傳つた。

公園の中をひとまはりして戻つてくると、二階の方では陽氣な三味線の音がして、大勢の客がそれに伴つて流行歌を唄つて騒いでゐる。三味の音にも歌の調子にも明かに、今自分は京阪に近い奈良に來てゐることを意識せしむる上方の音が歴々あひくと感ぜられた。そこへ女中が夕飯の膳を運んできた。膳の上には蟹、烏賊のおつくり、鱈の吸物といふやうな、上方式の品の數々が載せられてあつた。

あまりに執固しつこくやられるといつても下品で厭になつて反感を起さしめる上方式の散財の聲が、今日は、いかにも京阪の春らしい氣分をそゝるのであつた。私は飲めない酒を命じて二三杯あけながら靜にその情調に浸りつゝ夕飯を済ました。

翌日は春日神社から三月堂、二月堂、大佛の方を一順めぐつた。その時春日神社の丹塗りの本殿の近くに今を盛りに満開してゐた八重櫻を見た時私は、

古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな

といふ古歌を思ひうかべて、その櫻の傍に稍、しばらく立つて見てゐた。牡丹のやうな八重の花瓣には蜜蜂がうん／＼唸りながら花から花へ飛び移つてゐた。その唸る聲に盛んな晩春の日の氣分が表はれてゐるやうに思はれた。

けれどもその時、私はいつまでも奈良に逗留つてゐることは出来なかつた。その日の中に中國の方の郷里まで歸着する豫定なのであつた。私は午前の汽車で大阪に向つた。

法隆寺の塔宇は汽車の右窓から北の方の松丘の麓に見えてゐる。去年——大正二年の五月にそこに行つたことが思ひ出された。それは五月の二十四日過ぎであつたが、麥の野は最早大分黄色に熟して、清々しい初夏の風が南に見えてゐる金剛山の方から吹いて來た。その頃の季節の魁をする燕が嬉々として、私の乗つてゆく俵の前路を遮り、地上に腹を附着けるやうにして飛んでいつた。法隆寺へゆく野道の溝を干して里の子供等が鮒や泥鰌を漁つてゐた。——去年の五月の時分のことを思ひ浮べて、種々な回想に耽つた。その頃は私は主に大阪にゐた。そして去年の十月二十四日の晩梅田から汽車に乗つて東京に歸つたとき

り、約半歳ぶりに關西に來たのである。關西にはまだ／＼見残してゐるものが多くある。明治二十七年に東京にいつてから東京では正月を二十幾度迎へてゐるが、そのくらゐ東京及び東京附近のみを見てゐて、あまりに關西を見ることを怠つてゐた。關西では凡ての物が私に新しい興味をそよめるのである。

そんなことを思ひつゞけてゐる間に汽車は生駒山の南方大和川の狹隘に入つて大和平野から大阪平野に向つて出ようとしてゐた。

その翌年大正四年の四月の二十五日にはまた私は奈良西の京の古寺を巡拜してゐた。その時は京都に長く足を逗めてゐたので、その前日大阪に來て一泊し、翌日大阪から電車で生駒山を通過して西の京の古い寺々を見て歩いた。四月の二十五日であつたが、まだ櫻によつては満開であつた。西大寺の境内には今眞盛りの咲きこぼれてゐる櫻が古い御堂の傍に立つてゐるのが、華かなそして永久に新しい自然と千數百年の過去の遺物との對照をまぎ／＼と麗かな春光の漲る中に表現してゐるのが、私には名狀しがたい佗しいやうな懐しきを感じしめたのである。私は麗々と照り輝く春の日を浴びながら、眞青に伸びてゐる麥圃の中の里道を伸で秋篠寺、唐招提寺、新薬師寺と歴訪してまはつた。尼さんの住んでゐる法華寺だの、平城宮趾などをも見て廻つた。暖く軟かい春の風の吹いてゐる中で田圃の麥に土を培つてゐる農夫が不思議さうに背を伸ばして鎌に凭れながら、見知らぬ旅人が麥圃の畦を傳ふてゐるのを何時までも見守つてゐた。

唐招提寺から新薬師寺までは近い。そこらは皆昔寺院のあつた跡で、跡形もなく崩壊した築地塀の中か

ら散り際の櫻が下をゆく車の上にはら／＼と落ち散つて来るのも物悲しかった。

新薬師寺の紫銅の鑄造佛の優秀無比なるは観る人、何人も讚嘆驚異の聲を放たぬはないであらう。私はさうして、晩春の日を一日西の京の古寺順禮に費し、長い春の日が漸く生駒山の上に傾きかけようとする頃、法華寺を最後の打ちどめにして再び西大寺の電車停留場に向つて電車を田圃道に走らした。晝間は薄暑いくらゐであつた陽氣も日脚の傾きかゝるともに冷々とした夕風が麥圃の上に吹いてきた。道傍の苗代や水田の中ではもう蛙が鳴いてゐた。物懐しい何處か安息の場所を求めてゐるやうな心地をそゝるその鳴き聲を、私は俵の上で聴きながら「あゝ早く京都の宿へ歸つて靜かに落着きたいものだなあ」と思つた。しかし京都に歸つても、畢竟そこも自分の最後の落着き場ではない。私はつく／＼さすらひの悲しさを感じずにはゐられなかつた。

その翌年の五年と六年とも關西には來たけれど、いつも京都にばかりゐて大和平野には遂に來なかつた。そして七年の五月にはまた來た。その時は五月の四日の朝吉野を志して京都を立つた。そして行々初瀬の觀音に賽し、夜に入つて吉野に着いた。その日は午前前から厭に南風が吹いて蒸暑かつたが、私は四月の二十九日に東京を立つ十日ばかり前から輕微な風邪に罹つて、それが何時までも癒らず、どうかすると時々軽い發熱をしてゐた。少し熱氣のあるところへ搗てゝ加へて心持ちの悪い南風がざはめいて、蒸熱い空氣が恰も自分の體溫のさしひきのやうに息を吹いた。初瀬の觀音の長い廊下を一つひとつ石磴を踏んで

上つてゆくと、じとじとゝする心地の悪い汗が出て着物の袖口や襦袢の襟裏が肌にく／＼附着いた。廊下の傍に栽培してある初瀬の名物の一つになつてゐる牡丹の葉枝を時々どつと息を吹いて来るやうに颯颯が揺つていつた。蒸暑い風の合間々々に絹糸のやうな細い雨が降りそゝいでゐた。鬱蒼とした初瀬の山の木々が颯颯に煽られて白い葉裏を輝かしてゐるのが疲れた私の眼に眩しく映つた。何ともいひやうのない疲労を感じる日であつた。もう春が過ぎて初夏になつたのだ。物憂い夏が間近く迫つて來てゐる。はじめで詣りできて見た今日まで子供の時分から長いながい間美しいイリュウジョンの中に描いてゐた。西國八番の札所なる初瀬の觀音でその美しいイリュウジョンを現實に見出すことが出來ないのにやゝ失望して、少しも早く吉野の奥に入つてみたくなり、一向行程をいそぐ氣になつた。再び初瀬輕便鐵道で櫻井まで戻つて來て、其處から、高田ゆきの汽車に乗つた。二等の車室には私の外に大阪あたりの、女好きと思はれる六十格好の頑丈づくりの老人と三十を一寸出た位のお妾とも見える二人づれがあとから入つてきた。彼等は初瀬觀音へ牡丹を見かた／＼參詣した歸り途と思はれた。この邊は大和平野の中心地點になつてゐる四方翠緑の山陵を以つて環らしてゐる地勢は、九州の地から遙かに東征せられた皇祖神武天皇がこの國に都を奠めたまふたに不思議はないと肯ける。海岸を持たぬ國土としてはこの大和平野くらゐ平潤な面積を有してゐる地點は日本全國に少ないであらう。大和平野は四方山嶽を繞らして自然に一つの城廓をなしてゐる。右窓からは大和三山の一つなる耳無山が見えてゐる。天の香久山は左窓に見える。もう少し先きに



畝傍山も見えてゐた。耳無山の附近に「冥途の飛脚」で名高い新、口村がある。「梅川忠兵衛」は近松が架空の作であるにしても大和國の百姓のモデルを新、口村にとつたのは頗る面白い。この邊は大和國の農業の中心地域になつてゐるから、自然類型的にも忠兵衛をこの邊の人間にするのが妥當であつた。

私がさうして汽車の窓から左顧右眄してゐる間にも西南の金剛葛城諸山の方から吹いて來る颯風は一面の麥圃に青葉の波を揚げてゐる。平野の北端をなしてゐる法隆寺のあるあたりは遠く白い霞の彼方に隔り、生駒山の圓かな輪廓さへも殆ど霞に隠されてゐる。野の上には春の女神が纏うてゐるのか、白いヴェールのやうな霞が手には觸はれさうに漾うてゐる。畝傍も耳成も天の香久山も、初瀬三輪の山々も悉く白い霞の衣を被いでゐる。

高田驛に着くと、そこから關西幹線の王子驛から和歌山にゆく列車に乗り換へる。それから吉野の驛までは大和平野の西南方の境を劃してゐる葛城山脈の東麓に近い平野を南に駛せてゆくのである。その線路の右窓からは其等の山脈が手にとる如く見上げられる。近松の作で忠兵衛と梅川とが人目を忍び、生國の大和へ落ち延びたといふ竹の内峠は葛城山脈の北端に峻つてゐる二上山の腰をめぐる通路なのであつた。葛城山の裾野に據つて家居をしてゐる。あの平和なる籬落を繞る夕煙を見よ。折から長い春の日は山脈の彼方に春きそめて行く手の金剛山から壺坂の方へかけて大きな虹の橋が架つた。

## 高野山から

七月五日午後二時の暑い最中京都を立ち、奈良をへて、法隆寺驛の一つ次の大和の王寺驛で和歌山市行の線路に乗換へ、高田、御所、壺坂、吉野口などの諸驛は、丁度二箇月以前五月の初吉野を見るときに通つた道でもあり、その頃とちがひ強い日光が西と南とから車窓に直射してくるので、右手の窓は全部閉鎖して、葛城、金剛の翠微を仰ぐさへ物憂かつたが、吉野口を通過すると車道は次第に勾配になつて、金剛山裾山の峡谷を左右に翠巒を仰ぎつゝ進んでゆく。右窓から行く手の山腹に高く人家の點在してゐるのが見えたりする。やがて吉野口が四哩餘の車程を馳せて山麓の寒驛北宇治といふに着く。そこまできると千早城址のある金剛山はすぐ西南里餘の空に春く夕陽を山背に浴びて、全山虹のごとく煙つてゐるのが仰ぎ見られる。

北宇治の次驛は大和の五條。茲は吉野川の流れに添ひ、鮎漁をもつて名高きのみならず、町を東に出はづれて吉野街道をゆくこと十二三町。吉野川の清流を前にして古刹學品山榮山寺といふのが建つてゐる。私は五月に吉野にいつた時には吉野川を楽しみ眺めた。吉野ステーションを出でて六田の渡を向岸に渡り、吉野の山に登つてゆく車の上から遙に振顧つて山麓を繞る清流の靜かに黄昏れてゆく状を見渡したの

も悪くはなかつた。上流に沿ふて群がつてゐる股賑な上市の町の白聖が次第に夕暗に没しそめると共に早くも遠くの川ぞひ一體に電燈が瞬いて見えたのも懐しかつた。けれど私はまだ吉野川を見足りなかつた。もつとよく吉野川を眺めたかつたのである。吉野の歸途わざ／＼その上市に寄道をして晝食をした時に妹山背山を見たり、遠くの川上から流して來た筏のかゝつてゐる淀を眺めたけれど、そのあたりはまだ水量が少くつて汪洋とした趣に乏しかつた。それが下流の尙ほ五六里をゆく間には自然に水量も増すはづである。何や斯や、海から遠く山の中に入った、この川ぞひの五條の町には一晩泊つてみたかつた。

汽車は北宇治を出ると金剛山の裾野を一瀉千里の勢ひをもつて、大きな圓の一部を畫くやうに迂回しつつ直に吉野川流域の低地に向つて駛せ下る、やがて五條に着いたのは午後の六時過。長い夏の日はまだ全く金剛山の彼方に没し切らぬとおもはれて、暑い日ざしが停車場のプラットフォームに咲いた夾竹桃の紅の花を明るく照してゐる。

赤帽がゐないので車夫を呼んで重い手荷物を運ばしめ、「座敷から川の見晴らされる靜かな宿へ。」といへば、車夫はやゝ考へつゝ、

「丁度えゝところがございます。そこへゆきませうか。」といつて、轆轤を上げ、ステーションの前から一と條の街道を右折すると暫くして又左に折れながら急な阪路をだら／＼降りてゆく。そこを降りてから五と條の町の家並は次第に整つて、郵便局や神社のお旅所のあるあたりから、殆ど一と筋の町ではあるが、大

阪や京都などの大きな都會にあるやうな入口の大きな呉服屋が並んでゐたり、仕舞屋しきふたやづくりの店頭に磨き格子の嵌つた十間もあるやうな大きな間口の家があたりする。きくと其等は何れも林業や鑛山を営んでゐて、この町で屈指の豪商で、縣下でも有數な金持ちであるといふことだ。車夫は五條は奈良について縣下の股賑な町であると話しながら走つた。そんな町が開けてゐるにもかゝらず、汽車が遠くから吉野川の流域を展望しながら初めステーションに入つてくる時には、何處にその町があるか分らないくらゐ、五條の町は、金剛山脈の裾野が遠く吉野川の低地に到つて陥落してゐる處に立つてゐるのである。

やがて車夫が轆轤をおろした家は、あまり泊客のなさ／＼うな古風な寂れた宿屋であつた。先刻停車場で車に乗る時、つく／＼私の様子を見てゐた車夫は、ほかにも料理屋兼業の藝者など出入りする家はいろいろもあるが、そこは騒がしいのみならず、私の最初の註文の川を見晴らす處でないといつて此家に連れて來たのである。しかし後で大阪の學校にいつてゐるといふ宿の息子の語るところによれば先月縣下に衆議院議員の補缺選舉のあつた時、犬養毅氏が應援に來て、「この間丁度犬養さんもこの部屋にお泊りになりました。」といつた。私は犬養氏を平常あまり崇拜せぬ方であるが、地方の崇拜者であつたら、さぞ光榮に感じたらうとおもつた。併しその部屋は犬養氏の一晩をこゝに明かすにしては餘りにいぶせく寂れてゐると思つたが、息子の話では縣下でも特に黨争の激しい土地だといふ、この町の有志家が天下の名士外交調査會委員なる國民黨總務犬養木堂先生の御旅館としてこの家を選定したのは、先刻の車夫が、商賣柄熟あてなと私の

風俗を見てここを選定してくれたことなどを思ひ合はせて何か好いところがあるのだらうと思つて安心してその座敷に旅衣の塵を拂ふことにした。

家は吉野川の廣い河原の岸に臨んで、高い二階座敷の濡れ縁から眸を放つと展望頗る廣濶で、水は川幅の三分の一位のところまで向岸の藪疊について流れてゐる。長い土手の藪を越したすぐ彼方は野原村といひ、それにつゞいて吉野川域の村々が尙ほ遠く開けてゐるさうで、竹藪の上を、上流の方から下流の方まで屏々として連立してゐる遠く山麓までは一里を行かねばならぬ。左方の山脈の上に少し許り淡藍色の顔をのぞけてゐるのが、吉野から大峰につゞく山脈で、畿内ではこの大和の南半を占めてゐる吉野郡の全部に蟠屈する大峰山脈即ち大天井ヶ嶽から山上ヶ岳、佛經ヶ嶽、釋迦ヶ嶽につゞく連峰が一番高い。中でも佛經ヶ嶽は高標六千三百尺と註せられてゐる。

更に眸を右方に轉ずると明日、これから上らうとする高野山麓の翠微が望まれる。五條の次の驛二見といふところに行くと、そこへ今向ふに見えて居る藪のかなたの山の裾を丹生川といふ支流が流れて来て會流する。其川上、ここから二里ほど南に行つたところに吉野朝の賀名生の行宮址がある。後村上天皇の暫らく移りました所である。町の背後は川の縁まで遠く裾を曳いて來てゐる金剛山が屹然と聳えてゐる。遠い歴史の昔を懐憶したり、山河の自然を心ゆくまで凝乎と眺め入つてゐると、私はひとりでいひやうのない旅情の湧き上つて來るのを覺えた。それは寂しいながらも天に謝するやうな楽しい、甘い感情で

あつた。そして猶ほ飽くことなく廣濶な眺望を恣にしてゐるうちに、遠くの峰嶺も、向ふの竹藪も、水の流れも、廣い積も次第に暮靄に罩められてやがて同じやうに暗い單色の底に影を没して了ふと、高く晴れ渡つた大空には今にも降つて來さうな夏の夜の星が瞬きそめた。私は心小兒の昔に返つて獨り無心にそれを數へてゐると、數へれば數へるほど、星くづはその數を増してきた。そして丁度高野山のあるあたりと思ふ方から暗い大空を斜に東北に渡してゐる銀河が夜と、もに其光を増してきた。

高野 懸崖に凭つて架出した涼臺に膳を持ち出して名物の鮎の鮓や鹽焼で夕飯を済ますと、息子を案内に町を散歩して、吉野川に架かつた板橋を歩いて見た。戻つて來るともう青い蚊帳の中に白い布で包んだ軽い寢床がこしらへてあつたので、私は遣る瀬のない旅愁を感じながらも、又何んともいひやうのない安らかな静かな心持ちになつて、何物にも心を勞せらるゝ氣づかひもなしに床に身を横たへると思ふ間もなく、いつしか深い睡りに陥ちたのであつた。

翌朝眼を覺ますと、近ごろ不思議に心地よく熟睡した一夜であつたことを何よりもまづ意識して、元氣旺盛の感が體中に充ちた。昨日寢るときに少し明けて置いた障子の隙間から涼しい朝の風が川の面から流れこんできては青い蚊帳を揺すつた。

「さあ、これから音無川の榮山寺を見て、今日高野に登るんだぞ。」と思つて、起き上つた。

(大正七年七月高野山にて)

## 高野山奥の院

山の上は秋の來るのも一入早い。もう昨日、今日夜など書院の机に凭りながら、靜座してゐると前裁の叢では地蟲の鳴く音がじつと聽えてゐる。爽涼の氣は夜の更けると、もに肌を滲みて、心は底までも澄みわたるやうである。

流石は晝間はまだ赫々と殘暑の日が照つてゐるが、高く紺碧に晴れた空の色、群青を塗つたやうな老杉の頂から湧き出る白雲の光にも秋思は既に天地に満ちてゐるのである。方丈の廣い廊下に佇んで其等の色に見入つてゐると、胴の紅な蜻蛉が秋を知らずする精靈のごとく明るい目を浴びながら庭のうへを軽く飛び交うてゐる。洗つたやうな眞青な夏草の茂つた築山を一つ越して彼方に蕙々雲を摩して聳ゆる金剛峯寺の老杉の林から蟬時雨が、恰も銀鈴を振る如く牙かに響き渡つてゐる。

金堂の前にある古池に蓮の花もぼつ／＼咲きそめた。私は 泥の中から咲き出で、得もいはれぬ清香を放つ此の君の紅白の色や緑の葉の形をこの上なく愛るのであるが、東京では不忍の池が蓮の名所であるけれど炎暑の最中とて、それが咲く頃はいつも體も心も取り亂したやうになつて、靜かな心持ちで蓮の花など見てゐることも出來ずに過ぎてしまふ。それがこの山ではめづらしく落着いた氣分で樂しむことが出來

る。よく汽車に乗つてゆくと、尾張地方の鐵道の線路に沿うて土を取つたあとの溜池などに紅白の蓮が咲いてゐるのが窓から眺められるが、さういふのは何となく同じ花でありながら妙に卑しい。高野山に咲く蓮花はそれに反して思ひなしにも尊く清げである。

蓮華ばかりではない、山内到る處にある小さい古池や苔寂びた泉水などに睡蓮や河骨の咲いてゐるのがよく見られる。

奥の院へも先月初め登山した當初は度々參詣したが、この頃大分暫くおまゐりせぬので、昨夜夕飯後に久しぶりにまゐると、一と月たつ間にそこらは、また格別、何處よりもめつきり秋らしくなつたことが思はれた。一の橋を渡つて森々たる老杉のそゝり立つ木下暗に入つてゆくと、苔寂びた無數の墓碣は道の兩側に累々として重なりそこから大師御廟まで十八町の間垣を築いてゐる。今は丁度このあたりの魂祭りにあたるので、見上げるやうな大きな石を積み上げた古い石塔の前には、どこかの菩提寺で手向けたのであらう、裸のまま立て、ある蠟燭の火が杉の下闇を吹いて來る夜風に揺々と覺束なげに動いてゐる。私にはそれがさながら冥府の人の隣いてゐるやうに見えた。

大師、この山を開創以來千百年の間、幾世の人が貴賤上下の差別なく夢のやうにして生死していつた自分の跡を永遠にまで印さうとする敢果ない望みから残して置いた墓碣は今はこのわたりの溪を埋め、峯を蔽ふばかりに堆積してゐるのである。その間に四抱へ五抱へにも餘るやうな杉の老幹は丁度昔のギリシヤ

やローマの宮殿寺院などに見る圓柱のやうに亭々として二十間三十間の高さに立ち並んで、翠蓋を翳してゐる。私はそれを如何なる人工の寺院にも優れて立派な佛殿だと思つて幾度となく佇立して巨大な圓柱を見上げながら歩いてゆく。するとつい先刻までは夢の如く淡い色をしてゐた八日ばかりの月が、いつの間にか色を増して金色の光を放ちながら、杉の茂みから自然の殿堂の中を照してゐる。やがて玉川の清流に架した無明の板橋を渡つて、燈籠堂に詣うと、油煙と、蠟燭の煙に黒染んだ御堂の中には無数の金燈籠に參詣の人々の上げていつた燈明の火が處狭きまでに並んで揺れてゐる。この山開創以來の古い傳説になつてゐる貧者の一燈は、富者の萬燈と相對してほそぼそと明煌々たる清光を放つてゐるのも頼母しい。中にも白河法皇の御獻燈になつたといふ一燈は火の色も他よりは一層牙かに太くして、七百有餘年來縷々として不滅の光輝を放つてゐるのもいと尊く拜せられた。

燈籠堂をめぐつて堂の後の大師御廟の前に出ると、そこには若い四五人の僧侶が香の煙のたゞよふ中に聲高らかに經文を誦してゐるのが夜色沈々たる山谷に響いて神寂びて聞えてゐる。私も暫く廟前に拜跪してゐた。やがてもとの道を戻つてくると、昔ひとりで燈籠の上つたといふ老杉の頂に、月色は前より一層さやかに輝いてゐた。

(大正七年八月十六日)

## 春　興

東京へも少しも早く歸らねばならぬのだが、それは此度小石川の方へ構へやうとする巢を造る準備のため、たゞ春興を趁ふには、東京へはさまで歸つてみたくない、けれども是非一度は歸つて他家へ預けてある荷物調度の類を始末せねば、預つてゐる家でも迷惑してゐるであらう。しかし東京へ歸へるにしても、この春興闌の時に、飽いた東海道の車行を事務家のやうにして乗つてゆくのは心から興會を覺えない。それで、私はまだ一度も通つたことのない北陸道から信越線を経て上野驛へ入らうと豫期してゐるのである。さうして考へてみると、東京へ歸つてゆく旅行もそぞろに楽しいものに思はれ、そぞろに旅情の湧いてくるのを感じる。それで、近江の米原から先は清新な印象を以つて私に迫つて来るそちらの方の山河や都會の事などを日日夢に畫いてゐるのであるが、さりとて畿内の春興にも背き難い。私の夢魂は夜なく美しい、この五畿内各地の山川市邑にさまよひ歩いてゐる。四月の十七日、もう四月も半ばを過ぎると、名にし負ふ圓山の夜櫻は十日ばかりも前の美しい夢と散り、清水、嵐山の噂も追々遠ざかつてひとり御室の八重櫻が都城にゆく春の名残りをとどめてゐる。晝から御室へいつてみようかな。東京へ行く前に急いで済まして置かねばならぬ文債に追はれて半日の暇も惜しいのであるが、晝寝も奉公とやら却つて御室あ

たりを歩いて来ると、あとは抄るかも知れぬ。と、遊意がむら／＼と動いて来た。しかし御室も餘りめづらしくはない。とにかく洛中洛外の附近一圓はさまざまで清新な感興を興へさうにない。どうもそんなに氣が進まない。五畿内のゆく春を惜しまないで、このまま東京に行つてしまつたのでは、多年夢寐に思つてゐた南河内の方の春を又今年も見ないで過ぎることになる。それが何よりも残念である。ほかは兎に角南河内の方の春はせひ一度見て置きたいと思つてゐたのに、どうかすると今年も行きそびれてしまひさうである。文債は二三日怠業にしてもよい。東京行が従つて二三日延期になつても、そのくらの犠牲は拂つて、今一刻千金の南河内の春を見よう。年々歳々花相似たるも歳々年々人同じからず、又來年その地の春が見られるか、どうか分らない。さう思ひ出して来ると、今の機會をとり外づしたら、永久に捉へることの出来ぬ大切な物を取り逃がすやうな落着かない心になつて来た。明日などといつてゐては、油然と湧き起つたこの感興が又消え失せて、あとは無興味な、冷い、仕事や時間の打算になつてしまふ。今のこの感興に任せて騎虎の勢で起たねば興味がなない。行きたいなあ、と思へば思ふほど、もうとても止められなくなつた。私は早速衣服を更め一時五十五分の京都驛發奈良廻りに乗るつもりで家を出た。もう二十五分しかない。ままよ遅れたら、その次の三時四分でもよい。

柴門を閉じて花見に獨り者

### 河内の觀心寺

河内の觀心寺へ行つてみたいと思つてゐたのは久しい前からであつた。寺は楠氏累代の菩提寺で、南河内郡の東南隅金剛山麓の川上村に在り、本堂は特別保護建造にして寺寶に楠氏の遺物數多あり、國寶も十數點に達してゐる。古い美術と、光輝ある歴史傳説と、美しい自然とが夙に私の憧憬の的となつてゐた近畿の名勝區の一つである。

満員のを二つばかりやり過ぎて電車の中で時計を出して見ながら車掌に訊くと、此處から平常は八分十分で行けますが、今頃は満員ですから十二分くらゐはかゝりませうが、きつと間に合ひますといふ。廣場の前で電車を下りて急ぎながら見るとステーション・ホールの正面の大時計はまだ四分ある。自分の懐中時計は丁度發車の時間になつてゐる。乗車券を買つて改札口に駆けつけると、もう改札係りはゐない。乗り遅れ食堂に入る春の旅

初から三時のにすれば家で晝飯を食べて出てよいやうにひとり御馳走を拵へてあつたのだが、それを放つて置いて出かけて来た。腹もよい加減に空腹を覚えて来たので階上の都ホテルの食堂に入つてゆく。

乗車券を買ふ時關西線の柏原までといふと、賣り場の女事務員が、大阪廻りですかと訊ねたので、馬鹿なことを訊く奴だといふやうに奈良廻りですといつて、自分は先刻家で汽車の時間表を繰つてみた時から先入的に大和の方の春景色ばかり頭にうかべてゐたが、食事をしながら落着いて考へると、成程大阪を經ていつた方が遙に時間と錢の經濟だと氣が付いたが、いくら早くつて錢が少しくらゐる儉約になつても大阪を市内電車で通過することは遠州灘を渡るよりも恐ろしい。やがて湊町ゆきに乗込むと、こゝにも春は遍ねく丸髷に結つた茶屋女を連れられた二三人の客が男も女も顔を紅くして大きな聲で狐拳をやつてゐる。此方の方では眼鏡を掛けた色の淺黒い、三十四五の、思慮のありさうな妻君が、男の子を三人に女中をひとり連れて腰掛けながら、そんな騒ぎを氣がついてつかぬやうに微笑を噛みしめて外方そつぽを向いてゐると、十一二を頭の男の子達がまた珍らしさうにその方を見ようとしてゐる。眼を放つて窓外の遠景を眺めると、稻荷山から阿彌陀ヶ峰、音羽山一帶の東山は模糊とした春靄を隔て、清水の堂塔知恩院の大臺が漸く色づいて來た新緑の間から幽かに隱見してゐる。眼近の鳥羽野の平野は一圓麥の緑と菜の花の黄とでさながら柔かい絨氈を敷きひろげたやう。

奈良で客が殆ど入れ代つてしまふと、此處でも、いづれも五十を越した五六人の男が好い機嫌で瓢などを携へながら、どや／＼と入つて來た。年増の茶屋女が二人附いてゐて傍若無人に大口などを利き合つてゐるのも春の旅と、私はそれを餘處に聞き流しながら携帯の旅行記や地圖などを繰り披いて見てゐた。

菜の花の中に城あり郡山。今はもうないが黄菜緑麥の春は永へに新らしい。奈良から乗つたその花見づれは郡山で降りてしまつた。法隆寺、王寺と春は殊にも長閑な窓外の景色である。停車場近くの水田ではもう若蛙が優しい啼き聲を立ててゐるのも一入懐かしい。私はそんな聲を聞き田圃の方から微かに春草の匂ひを吹いて來る軟風に頬を撫でられてゐると、かうして、つい此間まで寒威に虐げられてゐた自分の弱い生命が再び凡ての生物と同じやうに造化の恵みに浴し、一陽來復の悦びを享け楽しむことが出來たといふことを、しみ／＼と五體に遍ねく意識してそぞろに感涙の溢れ出づるを知らなかつた。春の日は葛城山脈の彼方に漸く春きかけると、薄絹の如き白霞を罩めて大和の平野は次第に蒼茫として來て、麥浪の彼方には遠く吉野の山上ヶ嶽や大臺ヶ原山の頂が蜿蜒として天際に連つてゐる。西南の方に葛城山脈の續きに金剛山も巒巒として峙つてゐる。初瀬や三輪の方の山も見えてゐる。法隆寺で汽車が何かの故障で二十分餘も停車したので豫定よりもひどく遅れた。私は遅れたらおくれともい／＼と思つてゐた。それが春の旅である。今晚は南河内の長野に行つてそこへ泊るつもりである。夜までに其處へ行き着けばよいのだが、時間どほりにゆけば五時三十八分に柏原に着いて、それから又すぐ五時五十三分の河南鐵道に乗り換へて一時間で長野に着く筈であるが、これでは、一時間ばかり柏原で次の汽車を待たなければならぬことになりさうだ。實は丁度大阪平野の果てに夕陽が沈みかける頃の葛城山や金剛山の蒼茫とした暮色を左方の車窓から心ゆくばかり眺めながら、向ふに着かうといふ豫定であつたのに、この上一時間遅れると、もう日が

沈んでしまつて、すっかり夜になつてしまふ。そのみが残念であるが、大和川の溪に沿つて大和と河内との國境を通過する頃の窓外の山の形やその樹林の布置や色はどうしてもまぎらふよしもない土佐繪である。そして丁度今時分に見るべき處である。この派の開祖春日基光がいかにかのわたりの自然から學んだかといふことが思はれる。圓い輪廓を成した松の木山のところ／＼に小さな山畑が切り開かれて、そこには今桃の花が眞盛りである。大和川の溪に臨んで窓に顔を出してゐると寒くも暑くもない軟かい春の風が香ばしい嫩草の匂ひを送つて来る。

案の定柏原で一時間次の發車を待つてゐる間に、まだ二間ばかり地平線の上に残つてゐた茫つとした夕陽も遂に麥と菜の花の野の彼方に沈んでしまつた。私は葛城山脈は、今日はもう見られぬものと諦めてしまつた。やうやく發車したマツチ箱のやうないぶき怒き自動車は臭い煤烟を吐き散らしながら暗の中を騒々しい音を立て、駛せる。薄暗い電燈の光では新聞も讀めないの、私は何だか明日かけて今日の旅が醜い幻滅に終らねばよいがといふ不安に襲はれつゝ、少しも早く長野に着きたいと祈つてゐた。最後まで一人残つた老爺の客に教へられて、やがて長野驛に下車し暗い構内を立ち出で、足場の悪い道を探つて歩きながら、老爺に聞いたとある旅館に辿り着いた。宿は大阪附近でよく見る伽藍として薄汚い料理屋兼業の家で、「風呂に入つて夕飯を食べて、一晚寝せてもらへばよいのだ」といつて、風呂に下りてゆくと、長野温泉など、廣告してゐながら、二三日も取りかへないのかと思ふ

ほどに汚れて臭くなつた湯がおまけに又微温ぬるい。こんな事で風邪でも引込んでは大変なやうなものだと、倍々幻滅の豫感が本當になりかけて來たのを不快に思ひながら、その汚い湯に長く浸つてゐて座敷に戻つてくると、女中が膳部を運んできた。鯉膾に鱈の煮つけなど大阪近くにきまり切つた御馳走だが、眼の醒めるやうな鮮綠色をした蕨の軟い風味は珍らしい。

「こいつは好い」

「たんと出來ます」

明日觀心寺へ行く道などを訊きながら、丁度好い加減の空腹においしく夕飯を済まして、やがて床の中に横はると、遠くの座敷で鄙びた三味線の音がしてゐるのを聞きながら、いつしか寝入つてしまつた。

翌朝七時頃にふと眼を覺まして、雨戸を閉めてない廊下の方を、枕の上に頭を振り向けて硝子越しに見ると、外は濕つぽい陰氣な空模様である。これは雨かなと思ひながら又蒲團を顔に着せ掛けてゐると、外の亞鉛の屋根にぼつり／＼と音がしてきた。

そら見た事か、昨日の京都驛でたつた四分のことで乗り遅れた時から、何だかつけが悪いと思つてゐたのだ。それに乗り遅れたればこそ、法隆寺で二三十分も停車する列車に乗ることになつたのだ。その列車だから柏原で空しく一時間待つ間に日が暮れて、プログラムの一つに書き入れてゐた葛城、金剛の暮色も暗に没して仰ぐに由なく、宿へは延着したゝめに一層風呂の湯が冷めて臭く汚れてゐたのだ。一刻の時も



惜むでゐる事を颯々と形付けて早く東京に行かないから、こんな事になつてしまふのだ。此處の二日旅は時間と金銭を徒らに消耗して代りに疲労と不愉快と後悔とを贏ち得たに過ぎなかつた。蒲團の中で眼を瞑つて、そんな事を忌しく思つてゐると、亞鉛に當る春雨の音は一入高くなつた。チェツ！ まよよ。かなつたらもう何處をも見ずに早速午前中京都へ歸つてしまはうと、さう諦めて尙ほ一時間ばかりも床の中に身體をのぼしてゐて漸く起き上り、洗面所に行つて、冷水で體を拭いて戻つて女中が注いで出す茶を啜りながら一本靜かに吹かしてゐると、氣まぐれな雨は段々疎まばらになつて明るくなつた。

西北の空に碧いところが透いてきた。

「おや、晴れるぞ、これは。」

「おほかた晴れますやろ」

「ぢや御飯を急いでくれ。」

九時頃になつて、女中に山裾の近道を案内せられて宿を立ち出でる頃には一と雨洗つたあとの散り残つた山櫻や新緑の木々が麗かな旭日に匂ふてゐた。

女中に教へられた通り、道芝に置く露を踏み分けて間道を傳ひ、やがて本道に出ると、しるべ石が立つてゐて、右觀心寺道と刻してある。だら／＼登りの坦々たる一條の街道、三十町ゆけば觀心寺、二里行けば千早の古城址まで迷はずつゝいてゐるのだ。丁度打ち水をしたほどの春雨の後の道が雪踏穿きに好い踏

み心地に濕つて風塵揚らず、道の左右松の木山と山との溪澗に籬段の様に重なつた山畑には麥と菜の花とが半々に黄緑を彩つてゐる。白い山櫻が松の木蔭にまだ處々咲いてゐる。麗かに照り渡る朝陽に暖められた爽かな朝風が襟頸を撫でるやうに觸れる。私は幾度か佇立して美しい蒼空を仰ぎ、四邊の風景を眺めた。

塞翁が馬とはこれか日和運

まだ早いので人通りは稀れだが、千早の方から出て来るのであらう。雨傘を開いて乾かしながら下つてくる人間がある。薪木を積んだ牛車が下つて来る。下からは雜貨を積んだ牛車が登つてゆく。長い道を連れもなく上つて来た牛は遠くに自分の友を認めると、やつぱり懐しいか狂はしい聲で吃驚するほど吼えながら脚を疾めてゐる。三坪にも足らぬ小さい菜畑は丁ど芝居の小道具のやうに麥畑の緑に介在して續いてゐる。

牛の背に蝶むつれゆく河内路

やがて道の半分ほど来たあたりが峠の絶頂になつてゐて今まで溪の底に見えてゐた麥畑が、此度は道の兩側に高く籬段を築き上げてゐる。農夫が襦袢一つになつて暖い春の日を浴びながら麥に土を培つてゐるのも長閑である。牛のもう／＼吼えるのを聞きながら峠の辻を向ふへ廻りきると、そこには更に廣潤な別境が展開して来た。道はまた何時しか山の中腹を繞つて通じ、深い溪底には、そこにも麥隴菜畦の籬段

が続いてゐる。崖に據つた白壁作りの家屋がその間に散點してゐて、山から引いた水車がキラ／＼と春光に輝きながら長閑に廻つてゐる。その向ふに紀伊と河内の國境を走る葛城山脈が蒼空を劃して、春鶯の奥に禿兀とした巖涌山の浪漫的な山容、紀伊峠の陥落した山嘴などが眉廂の下に集まつて来る。やゝ左方に眸を轉ずると、溪の向うの眞黒に鬱茂した杉の木山の重疊した一番高い處に金剛山の翠微が宛然藍を染めたやうに鬚鬚として東方の天に顔を窺はせてゐる。擦り鉢の底のやうになつた溪の行き詰りには菜の花と麥畑とを繞らした人家が群つてゐて、向ふの小高くなつた樹林の葉隠れに幽かに朱色の堂宇が見えてゐる。私は豫想外の仙境の眺めに恍惚となり、ステッキに凭つて憩ひながら、顧望やゝ久しうしてゐた。そこへ牛車を引いて私と前になり後になり上つて來た男に訊ねると、彼も亦春日の下に牛車をとどめて私のために指し教へてくれた。向ふに見える堂宇は即ち楠家累世の菩提寺觀心寺であつた。金剛山は恰も寺を俯瞰せる如く雲際に屹立してゐる。この時私の頭には、忽ち涙の滲むやうな崇美な歴史的な感情が湧いて起つた。延元の昔は最早吾々には現實としてそれを認めることは困難になつた。けれどもそれは永久に美はしい宗教的感情となり、古い繪畫の如き蒼古な藝術となつて吾々の心に尙ほ鮮かに生きてゐるのである。

容齋の武者繪に見たる五百年

かういふ感情が濡れるやうに私の胸をじつと包んでしまつた。

牛車と私はまた山の腰を繞つた街道を遅々として辿つていつた。やがて菜の花の村に入つてゆくと、

そこは川上村字寺元といふ處である。密柑やゆで卵などを露いでゐる小店の並ぶ一と筋の道を行くと突き當りに觀心寺の寺務所の門が見えてゐる。そこへ入つておとなふと若い寺僧が玄關に行儀正しく畏つてゐて、

「拜觀ならば、そちらの塀の外を廻つてゆくと、大きな赤い門がありますから、それからお入りになつた方が便利です」と教へた。

いはるゝまゝに、また門を出て白い條の入つた薄茶色の練塀の外について今の道を又暫く先へ行くと果して四五段の石段の上に赤い大きな門が立つてゐる。正面のずつと高い所に先刻遠くの街道から見た形の好い御本堂が立つてゐて、そこまで上つて行くには清らかに掃除のとゞいた小廣い庭を又幾階に仕切つた石段を踏んで上らねばならぬ。ともかくも門を入つて庭に立ち、第一に感じた印象は境内の廣袤といひ、いかにも愼ましやかに引締つてゐて、楠家累世の菩提寺たるに應しい清楚な好感を抱かした。京都や奈良附近に在る昔の巨利が帝室の權威を借り時の俗衆の財寶を搾つて傲然法權を弄して善男善女の弱點に君臨したやうな俗惡なる痕跡が認められないのが何よりも氣に入つた。庭に立つて眺めると右手の方の廣い庭園には數十株の八重櫻が瀾漫として今が丁度眞盛りである。左の方の二三段石段を上つた處には小さい寶物庫が立つてゐる。今日は日曜日で午からは遊覽者が相應に雑沓する様子であるが、時間が少し早いので境内は靜寂として朝の雨のあとがまだ清らかな砂地に潤うてゐる。頭を回らして溪の彼方を繞らした東

南の山を見ると、そちらのはうにはまだ露けき曙の色が澱んでゐるかのやうで、峰の中腹には數株の山櫻が夢のやうに白く咲いてゐる。一と筋の山道が山の腰を廻つてそこへ通うてゐるらしい。

此方の八重櫻の蔭には老媪が一人露臺を張つて、まだ漸う／＼茶を沸かす支度をしてゐる。私は、後村上天皇行宮の跡と誌された石碑の立つてゐる小さい池の前を眞直に正面の本堂の方へと石段を上つていつた。

當山は、文武天皇の大寶年中役の小角の開創にして雲心寺と號し、後弘仁年中弘法大師來つて大師一三禮の作本藏如意輪觀世音菩薩を安置し、寺號を改めて新に檜尾山觀心寺と名づけられた。爾來帝室御歴代の勅願所として御崇信あり、就中南朝の諸帝は殊に叡信深くあらせられた。今の御本堂は淳和天皇の時勅願によつて造營せられたもので特別保護建造物である。小さく引締つた建築で、屋根や軒端の勾配や線の感じが誠に快よい。一順拜しをはつて堂を下り、そこから右手の方に開けてゐる幽清な境内を奥の方へと歩を運んだ。それでも、もう早い觀覽者が五六人來てゐて、何處かの女學校へでも行つてゐるらしい二十ばかりの娘とその女親らしい婦人が東京近い言葉で話しながら若い女連れと打ち群れて歩いてゐる。本堂とやゝ離れた處に三重の塔が一重だけ出來て、草葺の屋根をしてある。延元年中楠正成三重の塔を建立せんとして成就しない間に湊川で戦死したので初重のみ存し、俗に建て掛けの塔といふと、板札に誌してある。

尙ほ境内を東に數十歩行くと、弘法大師の法嫡道興大師即ち當山開祖の靈廟があつて、その隣りに楠公の首塚がある。公湊川に戦死の後敵將足利尊氏が公の義心に感じて特に其首級を公の遺族に送つたものである。

墓前に一基の石燈籠が立つてゐて、それに中井履軒の書が刻んである。青苔を撫して文字を辿ると、

忠 廻 斜 日 義 陵 清 霜

楠 公 元 千 年 載 如 生

と、筆致奔放に書いてゐる。私にも一句浮んできた。

楠公に櫻手向けん八重櫻

朝から感興に乗じて一里の山道を上つて來て、憩ふ間もまた興にまかせて境内をぶらついて疲れを忘れてゐたが、暫らく足を休めようとして再び寺庭を出て門前の茶屋に腰を掛けた。堀脇の往來をまだ何處までも辿つてゆくと此處から千早の城址まで一里半ある。遠くから見えてゐた金剛山は、折り重つた裾山に影を隠して此處からは見えないが、道は懐しい新緑の奥につゞいてゐる。

一服して又境内に戻り、寶物庫を拜觀しながらそこにゐた寺僧に事情を話して、一昨年高野山にゐた時十八年ぶりで會つた東京の學校で同窓であつた僧侶東條氏に當山住職にあてゝゐる紹介の名刺を忘れたことをいふと、寺僧は快よく承諾して、更に庫裡の方から高野山在學中の若い僧を呼んで來て改めて懇ろに

本堂から處々を案内せられた。先程残した後村上天皇の檜尾山陵にも若僧に案内せられて登拜した。陵は恰も楠公首塚の背後の山の中腹に在つて、墓齋として老杉古檜のそより立つた中を清淨に掃除された數百級の石燈を上り詰めた處に在る。私は先年拜した吉野の延元の御陵よりも此方の方が一層幽寂の趣が深くして何となく床しい感じがした。

やがて繪葉書などを求めて寺を辭し、門前に切手を賣つてゐる家の店先に憩ひながら遠くの知人に繪葉書を書いたりなどしてゐると、大阪あたりから遊覽に出掛けた男女が絡繹として續いて來た。

今年の春ではこの二日路の旅ぐらの清興を覺えたことはあるまいと思ふ。

### 廢滅の寺々

今年の四月の二十六日であつた。私は文樂座で越路太夫の紙治を聴いた翌日、半日ばかり大阪の街をぶらついて高麗橋の三越呉服店に入つて見て、そこで晝飯を食べて、それから奈良の西の京の寺々を巡禮しようと思つて、近頃開かれた大阪奈良間の輕快な電車に乗つた。

去年の春から開通されたこの電氣鐵道は、多年大阪の經濟界に快力を振つてゐて、後其經營する銀行の破産に座して今は牢獄に繋がれてゐる某氏が、其爲に殆ど財力を傾け盡して開設した、現在日本で唯一の完全な電氣鐵道である。

河内の國の平野は麥の緑と菜の花の黄と、一望統の如き春霞の立罩めて際涯もなく開展してゐる中を、平坦砥の如き軌道は一直線に生駒山の麓をめがけて走つてゐるのである。

生駒山の長い平坦な隧道を向へ出ぬけて尙ほ二三の停留場を過ぎると、やがて西大寺の停留場はある。沿道の雜木山にゆく春の名残りを思はしめるやうな薄色の躑躅の花の咲いてゐるのも、何故か折からの私にとつては物思はしめる種であつた。

やがて西大寺の停留場で降車すると、寂しい田圃の中に一軒の夏蜜柑や駄菓子などを賣つてゐる出茶屋

のやうなものがあつて、そこに二三臺の俵が暇さうに客待ちをしてゐる。四月の末の強い日が東の方の奈良の街の甍に照り映えて、旅に疲れた私の眼を物憂さうに射つてゐる。

私は俵を雇うて、

「西の京のお寺を巡るんだ。順々に都合の好いやうにやつてくれ、秋篠寺は何處だ。」  
と訊くと車夫は、

「秋篠寺ですか、秋篠寺は、あれあそこに見える松林の先の屋根がそれだす。」

といつて、西北に見える寂しい村落の方を指した。

私は先づ、秋篠寺に向つて志した。

凹凸の多い田圃の中の道を俵に揺られて稍々半道も行くと、青くのびた麥畑で土を培つてゐる農夫が珍しさうに頭を上げて俵の通つてゆくのを見てゐる。

秋篠寺のある村は貧しさうな部落である。汚い百姓家の立ち並んだ田舎道を辿つて行くと、松や雑木の生え茂つた丘の裾に荒れはてた廢寺が残つてゐる。それが千幾百年の昔光仁桓武兩帝が國家鎮護のために御勅願に成つた秋篠寺である。今は庫裡も鐘樓も山門も昔の跡形もなく敗滅して探ぬるすべもないが、僅に金堂のみは雨打風淋千幾百年の星霜を経て尙ほ残存してゐる。私は強い春の日を浴びながら、鈍さうな寺番の老婆に案内されて金堂の中に入つていつた。

けれども私はその内陣の本尊よりも何よりも特別保護建造物なるその金堂の建築の様式に何ともいへない快感を感じて、古く歩き耗たされた花崗石の石廊に立つてやゝしばらく低回しながら建築の與へる快感に耽つてゐた。

やがて秋篠寺を出ると、私はまた俵に揺られながら、今度は西大寺の方に戻つて來た。

西大寺の境内は廣いが、金堂も庫裡も鐘樓も凡べて建築は後世に建てかへられたもので様式はまづい。

勿論特別保護建築ではない。

廢滅の寺といふ感じはするけれども、藝術的に懐古の感興の起らぬ寺である。

西大寺を出て更に南に行くこと十數町の處に唐招提寺がある。

私は、先刻電車に乗つて通りぬけて來た生駒山の西の方に尊えてゐる姿を眺ながら、俵の上から車夫と談話を交しつゝ麥畑の間につゞく村々を通り、或は池の堤に沿うて行つたりしてやがて松林の一群繁茂した寺域の外郭をめぐる、南から寺の正門の方に廻つて唐招提寺の本門から入つて行つた。

千百有餘年の寺域は古く寂びてゐるけれど、自然の雜草は春の日と、ともに常に新しく、清く掃除された砂地の境内を流れてゐる小溝には芹などが青々と伸びてゐるのも一人物の哀れを思はしめる。

特別保護建造物になつてゐる金堂は、すぐ正面に立つてゐる。私は車夫を連れたまゝその金堂の傍にたずんで、物寂びた建築の與へる壯嚴で安泰な感覺に吾れを忘れて少時溺れてゐたのである。

けれども私はその内陣の本尊よりも何よりも特別保護建造物なるその金堂の建築の様式に何ともいへない快感を感じて、古く歩き耗たされた花崗石の石廊に立つてやゝしばらく低回しながら建築の與へる快感に耽つてゐた。

やがて秋篠寺を出ると、私はまた俵に揺られながら、今度は西大寺の方に戻つて來た。

西大寺の境内は廣いが、金堂も庫裡も鐘樓も凡べて建築は後世に建てかへられたもので様式はまづい。

勿論特別保護建築ではない。

廢滅の寺といふ感じはするけれども、藝術的に懐古の感興の起らぬ寺である。

西大寺を出て更に南に行くこと十數町の處に唐招提寺がある。

私は、先刻電車に乗つて通りぬけて來た生駒山の西の方に尊えてゐる姿を眺ながら、俵の上から車夫と談話を交しつゝ麥畑の間につゞく村々を通り、或は池の堤に沿うて行つたりしてやがて松林の一群繁茂した寺域の外郭をめぐる、南から寺の正門の方に廻つて唐招提寺の本門から入つて行つた。

千百有餘年の寺域は古く寂びてゐるけれど、自然の雜草は春の日と、ともに常に新しく、清く掃除された砂地の境内を流れてゐる小溝には芹などが青々と伸びてゐるのも一人物の哀れを思はしめる。

特別保護建造物になつてゐる金堂は、すぐ正面に立つてゐる。私は車夫を連れたまゝその金堂の傍にたずんで、物寂びた建築の與へる壯嚴で安泰な感覺に吾れを忘れて少時溺れてゐたのである。

老人の寺番はやがて鍵を以つてその金堂の内部に私を案内してくれた。本尊盧遮那佛は乾漆の上に金色を施し、見るから難有い丈六の御佛である。左右の脇土手手観音、薬師如來の御像また静寂の中に無限の意味を表示してゐるかの如く思はれる。

金堂の北に講堂がある。それは平城宮の朝集殿を賜つて此處に移したものださうで、矢張り特別保護建造物である。奈良の三月堂など、同じ様式の建築である。

その内部にはいろんな國寶や、考古の資料になる古物が陳列されてあるけれども、私にはさういふ細かいことになると感じが分析的になつて來て却つて懐古の趣味を妨げられる。それよりも唐招提寺全體の建築物の配置、外部から見ると全景の眺望などが私にはより多く感嘆を樂ましむる力を持つてゐる。

私はその講堂の一部の寺番の繪葉書などを賣つてゐる處に立寄つて繪葉書や縁起の類などを買ひ求め、そこを出てまた稍、しばらく静かに寂びた境内の砂地に佇んで願望低徊、長く立ち去ることが出来なかつた。

けれども唐招提寺よりも更に強く私の心を引いたのは薬師寺であつた。

薬師寺はそこからすぐ門前の農家の三四點在してゐる間の村道を通り抜けて行くと、やがて廣い寺域の跡らしい土塀の崩れかゝつたのや、堂宇のあつた跡の切り開かれて田圃になつたと思はれるやうな處が俾の上から目につく。

崩れかゝつた土塀の上の遅咲きの山櫻がほろ／＼とわびしさに咲きこぼれてゐた。子供が二三人竹竿か何かを持つて麥の青く伸びた田圃の畔を駆け廻つてゐる。

やがて俵はさびれた寺域の裏のやうな處に梶棒を下した。

「これが薬師寺の講堂だす。」

といつて、車夫はすぐ目の前に立つた大きな堂宇を指した。そこに俵を置いて、車夫は私を案内してその講堂の傍を過ぎ、尙ほその南に立つた金堂の石廊の處にいつて、

「拜觀だす。」

と聲をかけた。するとそこには若い雛僧がゐて、鍵を取り上げて石廊を案内して行つた。

唐招提寺に比べて境内はひどく荒廢に委してゐる。彼方の金堂や講堂の一見直ちに特別保護建造物たることを語つて、建築様式の優秀なるに似ず、此方は金堂も講堂も一見何となく様式の拙劣なるのが直に看取される。

やがて雛僧はその金堂の石廊を歩いて、堂の横手から扉を押開き埃臭い内部に私を導いた。

「これが國寶、薬師如來。左右の脇土手が日光菩薩、月光菩薩。」

と説明しつゝ、佛像の正面に廻つて行くのに躓いて行くと、私は思はず驚嘆の聲を發せずにはゐられなかつた。

と説明しつゝ、佛像の正面に廻つて行くのに躓いて行くと、私は思はず驚嘆の聲を發せずにはゐられなかつた。

その晩京都の宿に歸つて、行李の中に收めて持つてゐた田山花袋氏の「日本一週」の奈良西の京の條を見ると、氏も、

「……薬師寺の三尊佛を見て驚嘆しないものはないさうだが、私も矢張りその一人であつた。」と書いてゐる。

事實私も亦た田山花袋氏と同じく薬師寺の三佛尊を見て驚嘆した。

旅  
こ  
そ  
よ  
け  
れ

吾々佛像などに關する鑑賞眼の素養のない者は、さういふ物に接しても、ただ古い物だから好いものだらうといふくらゐの判別しか出来ぬ場合が多いが、この薬師寺の三尊佛はたとひそれが明治年間に出來たのであつても、大正時代になつて出來たものであつても、歴史とか歲月とかいふ條件を超越してさういふことには一切關係なく立派な鑄造佛だと思ふ。

米人フェノロサはこれを世界無比の鑄造佛だと稱揚したさうであるが、私は此様な見る影もなく荒廢した寺院の内部に、堂宇の外形とは全く反對に、かくばかり秀麗無比な佛像があらうとは思ひもかけなかつた。雛僧は紫銅で出來てゐると證明してきかした。佛體の色澤宛がら漆の如く鑄造後千幾百年の今日尙滴る如き光澤を存してゐるのは寧ろ不思議といふべきである。面貌優美温雅にして實に／＼有難い御佛と拜せられる。

私は、もし言葉を極端にエンファサイズしていつたならば、この薬師寺の薬師如來とその左右二佛に對

しては、殆ど恍惚たるばかりの愛情を感じたのである。先年フランスでヴィンチの名畫ジョコンダの繪像が何者にか盗み去られた時上田敏博士は、それに關する種々な風説を語つて、或はその美しい繪像にラブした者が盗んだのではないだらうかといふ風説もあると話されたことがあつた。後その繪像の行方は知れて事實はそれと相違してゐたが、私は今ジョコンダの盗み去られた際の風説の一つの如く、もし事情にして許すならば薬師寺の三尊佛を盗みたいくらゐに思つた。

廢  
減  
の  
寺  
々

雛僧は金堂を出ると、此方へといつて、此度は講堂へ案内して行つた。そこにも同じやうに薬師三尊が安置してある。前者に比べて後者は面貌俊逸とはいへるが、前者の如き慈悲忍辱の相貌に缺けてゐる。とにかく光明皇后の如き天才的な空想に富んだ宗教的な女性のおはしました時代の精神は實に遺憾なく是等の鑄造物に表現されてゐると思ふ。千有餘年の昔是等の鑄造者が如何に豊富なる宗教的空想と、それを藝術に表現し得る技巧とを具備してゐたかを思うて、私は獨り感嘆の聲を發することを禁じ得なかつたのである。

薬師寺では三重の塔と東院禪堂とが特別保護建造物になつてゐるが、その東院禪堂の内部に釋迦の鑄造物が安置されてゐる。この方は薬師如來とちがひ百濟あたりから渡來したものださうであるが、私はそれよりも矢張り金堂の内にある薬師如來の親しみのあつて、しかも生々としてゐるのを難有いと思つて拜した。

## 光悦寺

初冬に近い、ある秋晴和の日に京都の郊外の方に出て見たくなつた。嵐山、宇治、八瀬大原、高雄の春秋も珍らしくない。鷹ヶ峰の光悦寺に行つてみようと思つて出掛けた。

旅　こ　そ　よ　け　れ

圓山公園の見晴しに上つておちこちに眼を放つと、北山から愛宕、西山にかけて遠く西北の空を割つて美しい山脈の蜿蜒としてつゞいてゐる中に、丁度その中間西北の一隅に圓かな形をした峰が突兀として聳えてゐるのが眼に入る。秋日和のよく晴れ渡つた日にはその峰の中腹に開展した、山畑や人家の點在してゐるのが見える。秋漸く開けゆく頃野の面から凡ての農作物が收穫せられ取り去られて満目蕭條としてゐる中に大根の葉の、ひとり霜にもめげず倍々青緑の色を誇つてゐるのは美しいものである。圓山公園の見晴しから鷹ヶ峰の中腹に開展した臺草地を遙かに望むと、折からの秋の陽を反射して白く光つてゐる人家の壁の點綴してゐるところに鮮麗な青色を敷き展べてゐるのは、その大根畑の色であつた。

鷹ヶ峰は、本阿彌光悦が、三代將軍徳川家光から賜はつた所領であつた。家光も「光悦は國の調法」と稱へられて、將軍の眷顧を辱ふしたのであつたが、招きに應じて江戸に下ることを肯じなかつた。そして遙かに家光の下問に應へて、日頃の抱懷を述べつゝ、將軍より恩賜の鷹ヶ峰の地に隱棲して終生その地を

去らなかつた。

私は、京都の西北隅にある一條大宮で市街電車を下りて、そこから場末の街を通り抜け、緩い爪先上りの田舎道を日和下駄で、こつこつ歩いて行つた。道の南側に斷續して建つてゐる軒の低い陰氣な小家の格子の中では、西陣などを織る機の音が聞えてゐたりする、こんないぶせき賤の家で織る西陣の織物が仲買の手に渡り、問屋の手に渡り、京都の呉服店はいふに及ばず、東京や大阪の三越や白木屋、大丸、高島屋などいふ大きな小賣商の棚に陳列せられて都會の子女の眼を悦ばし、眩惑せしめるのである。

道は緩い勾配で少しづつ上つてゆくに連れて大根畑があつたり眞青色の竹藪が続いてゐたりする。そして、ところ／＼に秋陽を浴びて眞紅に輝いてゐる唐辛子の實の熟れてゐるのが大根の葉の青緑にまじつてゐる。これこそ萬緑叢中の紅一點であるなど思ひながら、私は、十一月の中ばとも思へぬくらゐ、そよとの風も立たない。あまりの好い日和に、歩いてゐるうちに段々汗ばんで來たので夏外套を脱いで腕にかけ、額の汗を拭き／＼歩いてゆく。太陽はやゝ西に廻つて、左方に見える衣笠山の松の木林に赤々と照り榮えて、大空にはさながら瑠璃玉の如き光を漲してゐる。道は丁度織田信長を祀つてある建勳神社の岡の背後を上つて行くのである。もう其處まで來ると、いつの間にか土地はもう餘程高みになつてゐて、振り顧つて京都の方を見ると、丁度そこから眞東にあつて比叡の峰が紫に霞んで、麓の八瀬の方に長く尾を曳いてゐる。如意嶽から南禪寺の山、華頂山、阿彌陀ヶ峰と東山一帯の丘陵が遠く南に走つて、その手前



には京都の街の瓦葺の波が煙霞の底に展開してゐる。道はそれから尙ほ遠かつた。そして兩側には相變らず緑の色の牙かな竹林と、青緑色の大根畑と、西陣を織る機の音のしてゐる民家が斷れぬに續いてゐた。そして道は一步々々ごとに展望を大きくして來た。比叡はすぐ鼻の先きに立つてゐる。その麓につゞく裾野の村が一目に見晴らされてゐる、一方行く手の左方に聳えてゐた鷹ヶ峰は段々接近して來て、やがてその麓の近くまで來ると、そこらあたりには又人家が少しづつふえて、竹藪を背にして荒物を露ぐ鄙びた店屋があつて、郵便切手も賣つてゐたり、白壁の眼に着く寺の塀が道の脇につゞいてゐたりしてゐる。光悦の邸宅の跡と云はれてゐる廣い地面は、空しく大根畑になつて、わづかに道傍に立つてゐる一基の石標がそれを語つてゐるばかりである。仰いで見ると、丁度その西北を防いでや、圓錐形を成した圓かな鷹ヶ峰が突兀として峙つてゐる。山の色はもう黄褐色にうら枯れ、松の常盤樹ばかりがひとり緑を傲つてゐる。その邊は又、人家がやゝ密集してゐて、軒先に折から盛りの菊の鉢植などをそんな山の中腹まで來ても坦々として何處までも通じてゐる。そこからまだ深く雲の畑の方に入つてゆくのである。裁付けの股引を穿いた老爺が天秤棒の先きに鹽鮭だの、町で買ふて來たいろんな品物などを括り付けて擔いで山の方に歸つてゆくのも野趣が深い。そこから俯瞰すると京都の市街は更に一と處に引纏つて見えてゐる。思ふに任すならば、京都のこのあたりに別荘を造つて住んでゐたら好からうなどと空想しながら歩いた。冬は寒さが厳しいかも知れぬ。が地は高燥である。夏は街にゐるより遙かに涼しいであらう。光悦が、將軍家光

から、何にても望むところがあるならば、取らせる。いへ、といはれて、多く望む所無之、鷹ヶ峰の地を賜りたい。といつて直ちに將軍の御朱印を下された。光悦はなるほど好い土地を見附けたものである、と私は思つた。

けれども、不斷東京に住居してゐる者からいへば、京都の地が既に隱遁的で閑寂の觀がある。その京都の土地で、更に又ここまで世を避けるには及ばないと、私は心の中で思ひ止ることにしたのである。私には金閣寺や銀閣寺のある邊よりも遙かに浮世ばなれがしてゐる處と思つた。

そして光悦寺は、兩側に並ぶ人家の間に左側に一寸した山門があつて、それを入つていしだま登の上をつたふてゆくと、些かな寺院の支關が取付にある。三四日前に、毎年年に一回營まれる光悦忌があつたので、寺に所藏の光悦の遺品など、まだ壁間に懸け連ねたままに開展してあつたりしたので、私は寺僧に乞ふて其等を一順展覽さしてもらつた。平素光悦について研究してゐる所なく、彼に關する知識が甚だ乏しいので、惜しいかな其等の遺品によつて啓發される所が鮮なかつたのは、自分の咎であるが、秋寂びた境内の庭樹の中をやゝ暫らくひとり逍遙しつゝ、藝術の巨匠を想ひ、藝術の生命の不朽といふやうなことを考へた。

光悦の藝術品に對する鑑賞談は、此處に、今、不用意に語ることは出來ないが、文明の華といへば蓋し彼のごとき徳川期文化の一方を代表する先驅者の隨一人である。彼は晝畫、刀劍、茶儀、陶器等あらゆる方面に行くところとして可ならざるはなき造形美術の巨人であり、趣味三昧の達人であつた。繪畫の方で

彼と同じ傾向を代表する巨匠俵屋宗達、尾形光琳などは彼について元祿を中心とする徳川文化の實に精隨であつた。元祿の文化については既に定論のあることである。尾形光琳の華麗豪華を極めた裝飾的美術と西鶴、近松等の絢爛なる文學とを併せ觀する時、ある一時代の趣味好尚、氣分等は斯くまでに互に反映相呼應してゐるものかと、寧ろ驚嘆されるばかりである。西鶴——近松でもそのとほり——文章を讀んでみると、その豪奢で、鷹揚で、絢麗な辭藻配置の字面に、自から光琳の華麗豪快なる繪畫が聯想に浮んで來るやうである。

今の時人、口を開けば直ちに文化生活をいふ。文化生活頗る可なり、しかも文化の極致は藝術にある。法律制度のごときは共存共助の生活に一日でも缺くべからざるものである。が、要するに人間生活の最大多數に遍通する綱概を總べてゐるものに過ぎない。文化の極致は、所詮箇々人の趣味、思想、感情に深く掘り込み、洗鍊彫琢してゆく深度に懸り存するのである。明治大正には自から明治大正期を後世に語るべき特色ある文化が存在してゐる筈であるが、徳川期文明の精華たる、西鶴、近松、光悦、宗達、光琳等の名流巨匠の流風餘韻によつて歴々指示しうべきやうなる文明の特質を成してゐる物があるであらうか。

(大正十年十月十日)

### 京都の冬を懐しむ

しばらく京都の陋屋に歸つてゆかぬのも京都を愛するからである。大正七年の四月に東京を去つて京都にいつてから九年の五月の末までも東京に戻つて來なかつたのも、東京を愛するからであつた。一つ處に長くゐると、アラが眼についていけない。京都も去年の五月に上京して以來、九月の初に一寸往つて二三日ゐたきり行かないと、この頃になつて大分懐しさが蘇つて來た心地がする。

早く京都に往つて、そして此度は淨瑠璃を稽古したい。あちらにゐて現實の人間を見てゐると、厭になることも多いが、長くあちらに往かないでゐて、そして獨りでフイ／＼口淨瑠璃を口ずさんでゐると、自分の聲から湧いてくる淨瑠璃情調を通して、いろ／＼彼方の懐しさが想ひ起される。

今の世にお俊のやうな女も梅川のやうな女もゐないのであるが、下手な口淨瑠璃でも口ずさんでゐると、何となくそんな女が存在するやうに思はれて仕様がなないので。否！ そんな女がゐないのだと思ふと、もう堪らない失望を感じる。無いことはない、あるのだ。近世の藝術は現實を複生することに専らであるが、理想主義の藝術は現實の缺陷を、藝術によつて埋め合はせようとしてゐた。

私は到底現實複生の藝術ばかりでは、とても息詰まるやうで生きてゐられやしない。

玉手御前のやうな熱烈なる戀の女、お園の如き古い婦女庭訓の生んだ女。

「爺さまの一徹で無理に連れられ歸りしが、一旦殿御と極まつた半七様、嫌はれるはみんな私が不調法。鈍に生まれたこの身の科、今から随分お氣に入るやうにいたしませうほどに、やつぱり元の嫁娘と仰有つて下さりませお二人さま。」

婦人が選挙権を要求して運動するやうな女ばかりになつたら、もう一生女は無くつてもいい。淨瑠璃の女に懸想して過し、現實に女を持たうとは思はない。

空想も亦た嚴密なる意味の現實そのものではないが、現實の人間は、理想を空想しうるのだ。現實に求めて得られない諦めから、空想を追ふて生きるのも強ち不満足ではない。

今、この冬に閉ぢ籠つてゐるにつけ、私は去年の丁度今時分の事どもを、あれこれと種々思ひうかべてゐると、その時けさほどに思はなかつたことも、今になつてみると、すべての事物がただ懐しい。

流行感冒が恐ろしいので、夜はいふまでもなく晝でさへあまり外出しないで一日家に閉ぢ籠つて暮してゐたが、それでも自炊をしてゐたので相當に身體の運動はしてゐた。訪ねて來る人の絶えて無いといつてもいいくらゐに獨居を騒がす者のなかつたのも却々心が落着いてよかつた。

まづ朝七八時頃眼を覺ますと、暫く床の中にじつとしたまゝ、仰向いてゐるが、やがて上半身を伸び上つ

て枕頭の大きな火鉢に昨夜寝る前忘れずに埋けてあつた炭團を掘り返へしてみると、眞赤になつて、中くらの蜜柑ほどのやつが残つてゐる。それに炭をつくと、忽ち熾つてくる。それから藥罐の水が煮沸してくる。やがて炭が眞赤になつた時分に、又伸び上がつてそれを炬燵に入れて長く暖まつてからやつと十時頃になつて床を離れるのだ。そして藥罐の湯を持つて階下に降りていつて水道の處で顔を洗ふ。水道が露地内の共用で戸外にあるのが難儀だつたが、それも馴れてしまふと、我慢が出来るのであつた。顔を洗つて戻る時新聞を持つて來る。その時間になると東京の『時事』や『讀賣』も來てゐる。

少し快い空腹を覺えて來たので、若狭蝶や鯛の子の唐辛漬のやうな物などで茶漬を食べるのだ。

お茶は好きでよく飲むが、番茶よりほかの茶はあまり好かぬ。いつも祇園町の宮田といふ店で買つて來る川柳といふのを焙じて飲む。

寒くならない間は起るとともに潔く寢床を上げたが、一月から二月は一旦床を上げてからすぐ炬燵をして蒲團を掛けて置いて、一寸起き出で、用をすると、すぐ又それへ入つて横になつて何か見たり書いたりしてゐた。

部屋の掃除もあまり寒くならない間は毎日八疊と六疊との二た間を清淨に掃いて、それから雑巾掛けをして机の前に坐ると、何ともいへず氣持がよかつたが、嚴寒の間は、なるべく部屋を汚さないやうにして、掃除は二日置きくらゐにしてゐた。雑巾掛けも五六日置きにした。

さうしてみると、存外一人きりでも寂しいとは思はない。結局、獨りの方が氣が散らなくて好ましい。好きで好きで堪らないやうな女があつて、向ふからも共鳴してくれれば一緒にゐても可いが、あまり好きもしない女と我慢して同棲せねばならぬほど女の必要を感じはせぬ。

蒲團にあてゝある白い布が汚れると、はづして、すぐ前の洗濯屋に持つてゆき、出来てくると、自分で針を持つて縫ひ付けたものだ。

米も自から炊ぎ、お菜も自から工夫する。私は酒を飲まぬが、糟汁が子供の時から好物である。田舎で又酒を造りはじめてゐるので、よく板糟を取り寄せた。こいつを冬の夜長に獨りで怠屈すると、火鉢に金網を載せて狐色に焼いて食べたが、糟汁を屢々拵へた。

すると今思ひ出しても可笑しいのは、疝性の潔癖から、フウ／＼息をしながら、やつと二た間を清淨に掃き出して、久し振りに冷い水で雑布掛けをして、暖い御飯も炊き、甘さうな糟汁も出来て、さて之れから獨り喰ひの甘さ、火鉢の傍に餉臺を置いてそろ／＼初めようとして、何かまだ不足な物があつて、それを取つて来やうとして急いで立つて行かうとする機會に火鉢に掛けた糟汁の鍋をすべらして、忽ち、信濃なる淺間山の如き灰神樂を上げたこと、正に一再に止まらなかつたことである。その時自分は、たゞもう啞然として天井を仰いで歎息の聲を發するのほかなかつた。噴火口から吐き出した如き灰は忽ち一面天井を蔽ふて、そこら中に指先で文字の書けるやうに降つて來るのであつた。

その時こそ私は誰れに當りつける者もないので、獨りで怨み、獨り悲み、獨りで諦めるより他はなかつた。ひとりで拳固で自分の頭を殴らうと思ふくらゐ腹が立つのであつたが、どうすることもできなかつた。しかし、淺間山の噴火にも譬ふべきひどい灰神樂を二度か三度上げてから、私も、つく／＼骨身にしてみても懲りたものだから、後には非常に起居を慎むやうになつた。あの東山義政から最も三昧に入つたといはれる茶の湯といふものは無論茶事そのものにも閑寂の興趣があるには違ひないが、あれは行儀を練るによい。それからは、自分は、たつた獨り、傍に見てゐる者はなくつても何一つ動かすにも靜かにしづかに物を取扱つた。

京都は冬が東京よりもひどく凌ぎにくいやうに、かねてきいてゐたが、實際は必ずしもさうではない。何より東京よりも雪が少いのが案外であつたし、第一風塵が立たないのが好い。嚴冬でも暖かい日にはトロンビを着ないで外に出ても肩のあたりが風塵で白くなるやうなことはない。そして東京地方ではどうかすると、冬に雨が四五十日も降らぬやうなことがあつて、空氣がひどく乾燥して、それがために咽喉を悪くしたりするが、京都では、ほとんど一週間おきくらゐに降雨があつて、空氣が適度に濕潤されるから、そんな憂ひもなかつた。

でも、晝間午後一二時ころ一番暖かい時を見て私は運動の爲に外出した。それは何處へゆくかといふ

に、大抵五條坂から清水の方へ陶物を見に出掛けるのであつた。私は陶物が好きである。そして冬になると私はいつもよく火鉢が眼に付く。火鉢が好きだ。平岡萬珠堂の二階にもよく上つて見た。三年坂の處にある、風雅な茶器など賣る店があつて、そこでは五條坂の六兵衛の拵へた物ばかりを賣つてゐた。随分値も高いが好い物があつた。

私は、その前の年の冬にも京都にゐたから、その時も段々寒くなつた時だつた。一つ支那の海鼠の火鉢を買ひたいと思つて京都市をぶら／＼見て歩いてゐると、上の方のある骨董屋の店頭でそれを發見した。無論支那出來の海鼠の火鉢は市中到る處に在つたけれども自分の氣に入つた大きさと形とがなかつたのだ。すると、その店には丁度自分が欲しいと思つてゐるくらいの大きさの火鉢があつたのだ。

火鉢は思ひきり大きくないと暖かくないし、第一氣分が落着かない。

私は、よく何處にでも流れていつてそのまゝそこに尻を据える習慣があるが、もしそんな町が、これからそろ／＼寒さに向はうといふやうな時でもあると、何よりも先づ火鉢が懐かしくなつてくるのである。そして氣に入つた火鉢さへ傍に置いてあれば、當座そこに落着くことが出来るのである。

で、私はその火鉢を買ひたいと思つて、その店頭で目を變へて何度行つて立つたか知れなかつたが、それだけの金の工夫が出來なかつた。無理にして出來ないこともなかつたがそれまで數年の間あんまり好きな女のために無理をして、疲れにつかれ抜いてゐた時であつたから、自分ながら可哀さうになるほど、ひ

どく意氣沮喪してゐて、僅か二十圓にも足りない火鉢を買ふにすら、幾度か躊躇したり思案するやうに臆病になつてゐた。此男、さうでなかつたら、尻の下まで無くしても乾坤一擲の勇氣を持つてゐないこともないのだが。

そして四五度見にいつてゐる間に、終には、たうとう店頭になくなつてしまつた。訊いてみると、昨日人が買つていつたといふ。それ以來そのとほりの火鉢を又見て歩いたが、遂に見付からなかつた。

又その次の冬が循つて來た。私が又京都の市中を火鉢を見て歩く時候になつた。北山時雨がして、西の空に佗しい、世を諦め顔の千切雲が垂れ下るやうになつて、つゞいて叡山と鞍馬の溪谷から遠く此方に眞白に雪を被つた比良の峰が、四條の橋の上に立つて望まれるやうになると、私は寂しい冬の晝夜をたゞ氣に入つた火鉢を唯一の伴侶として過すのである。

五條坂の陶物師の店では、去年の春の、あの崩落までは、丁度祇園町の新畫屋と同じやうに鼻息が荒くつて、とても錢無しでは寄り付かれなかつた。その前の年に火鉢を買ひはぐつた例の骨董屋の店頭へも無論時々立寄つて見た。京都は狭い土地だから、自分の寓居からそこまでは、牛込の中心から神田の中心まで行くくらゐのものであつたが、それでもかなり遠く思はれたけれど、又しては行つて覗いて見た。けれども去年のやうな火鉢は見付からない。そのうち又年が明けて——それが去年——正月になつて、暫く郷里の方にいつてゐて、此度歸つてきて、又行つてみると、店の間のも一つ奥の間で主人が鐵瓶の湯を沸ら

せながら傍に置いてある大きな火鉢がある。いふまでもなく支那出来で、二た抱えもあるやうな大きな胴にもつていつて、……雲龍風虎と龍の躍つてゐるやうな四字を焼き付けてある。私は正に垂涎三尺であつたが、とても賣る品ではあるまいと諦めて訊きもせずに戻つた。それから又十日ばかりして此度行つてみると、此度は店の間に据えて灰もあけてゐる。賣るのかと訊くと、賣り物ですといふ。値段を問ふと、老人の主人がゐる三十四圓といふ。私はたゞ欲しさに撫でまはして戻つて来た。それから又一週間ほどしていつてみると、やつぱり有る。その日は若い主人がゐる、又値段を訊くと三十圓ですといふ。老人の方がいけない。と思ひながら、その時は、まあ上れといふから、上つて茶を飲んだりして長い間撫で廻はして見たりした。しかし三十圓の金も考へた。

すると土間の方には、それは海鼠が一寸氣に入つた捻ぢ形物が同じやうなのが四つ五つも置いてある。それにもよく見てゐると、なか／＼氣に入つたのがあつた。その方は三十圓の丁度半分だといふ。私は随分迷へた。

この雲龍風虎を座敷の中央に据えて、しゃん／＼鐵瓶の湯を沸らせながら、どつさり火を注いでそれに倚りかゝつてゐたならば、吾れ一人で天下の冬を領してゐる氣分になれるであらうと。

さまざまに思ひ迷つて見たが、今の疲弊の場合に火鉢に三十圓は惜しいと、馬鹿に小膽になつてしまつて、空しく又數日を過し、それでも遂々しまひに清水の舞臺から後飛びするほどの度胸を極めて、三十金

を懐にして、此度やつていくと、嗚呼空しいかな、雲龍風虎の影失せて遂に無し。

又「昨日賣れました。」といふ。

それでその半金を投じて遂に海鼠の一つ買ふことにした。

そんなことをいろ／＼考へてゐると、この冬も京都に行つて火鉢を探して歩きたいやうな氣がして来た。

(森ヶ崎にて、大正十年一月二十一日夜誌す。「人間」)

## 順禮歌

山里に咲きわびてゐた櫻も漸う散りそめて、野には青い麥が纏て人の背も隠す程に伸び、菜の花の黄も末がれてゆく頃になると毎年きまつたやうに私達の村々から小豆島巡りといふものが出掛ける。

小豆島は、あの美しい瀬戸内海の水が備前と讃岐とによつて狭められてゐるその東端の海上に浮んでゐる周回僅に三十五六里にも足らぬ小さい島である。島は風光明媚。そして弘法大師の開基といひ傳へられてゐる八十八箇所所があつて、晩春初夏の頃になると對岸の中國や四國から數多の順禮が日々渡つてくる。

私がその小豆島めぐりの順禮の一行に加はつたのは、もう今から二十三年も昔のことである。小豆島めぐりといふことは、それがいつも季節の好い時分であるのを背景として、過去の懐しい無邪氣なロマンスとなつて私に残つてゐる。やつぱりその頃であつた。毎年春秋の時分になると阿波から人形淨瑠璃が瀬戸内海を渡つて私達の中國の田舎にまで旅を興行して歩いた。いろ／＼な外題をして見せたが、最も子供心に哀愁となつて記憶に残つてゐるのは阿波鳴門順禮歌といふのであつた。一體私は添乳の歌を聞くころから常に父の語る淨瑠璃を聴かされてゐたうへに、母がまた西國遍路といふやうなことに妙に憧憬を持

つてゐて、彼女は私を連れだす姿の二人を、丁度芝居などでみる順禮の親子のやうに空想して遙けき旅にさすらひたい願望をもつてゐたのである。それを私に度々話してゐたのを記憶してゐる。

母のその空想は遂に實現されなかつたが、小豆島めぐりは、いくらそれに近いやうなものであつた。それに、その前のまへの年の秋母は私達の父を亡つて後生をねがふ心が強くなつてゐた處へ、またその年の一月早々私の兄に死なれたので、母はひどく無常を感じる様になつて、遁世的な考から一層西國行脚を欲して、たとひ旅に死ぬ様な事があつても厭はぬから、一旦出家した以上はその儘永く行方を晦まして俗世の縁を絶ちたい程の志がないでもなかつた。

すると小豆島へはもう數十度もまゐつたといふ親類の老人が今年もまた島めぐりをするから一緒にゆかうではないかといつて誘つてくれたので、母は私と、も出掛ける氣になつた。私も兄の死は、前年の父の死にもまさりて哀傷の情がひどく胸に響いて、それがために少からず體にも障つたやうであつたが、執拗な感冒から動もすれば肺炎カタルでも起しさうな徴候さへ見えて熱の高低があつて食欲も進まなかつた。それで醫者に島めぐりの事を相談すると、醫者はひどく賛成して、少しくらゐ熱があつても出掛けることを勧めた。島山には、もうそろ／＼麥が熟しそめる時分であるから、私は暑くなれば漸々皮は剥ぐやうに一枚づゝ脱ぐつもりで、單衣を三枚重ねて家を出た。

脊に笈摺こそかけなかつたが、頭には西國八十八箇所順禮同行二人と誌した菅笠を冠り、手甲脚絆に身

を固め、納め札を胸にかけ、金剛杖をつきながら村はづれの板橋を渡つて、海のあるところまで、三里の道を、野を過ぎ山を越えて歩いた。ところ／＼に蓮華の花の毛氈を敷きひろげた野は見渡す限り薄い絨を張つたやうな眞白い霞が立ち罩めて、五月の日に暖められた軟かい風は眞青な麥の波をわたつて吹いて来た。山路をゆくとき丁度躑躅が眞盛りに咲いて、慵いやうな草木の蒸息れる中からもう夏を魁けるやうな松の鳴く音が騒々しく山中に響いて聞えた。そして小高い山の頂を一つ向へ越すか、そこにはまた山と山との間に狭い野が開けてその野の中を流れてゐる小川に添うて下へしもへ下つてゆくと、やがてその川が海に流れ込む川口のところに行の先達なる親戚の老人とはかねて馴染の船頭が小い和船を用意して私達の来るのを待つてゐるところであつた。そこには瀬戸内海の水がまた、無数の小島の群つてゐる間を分けて陸地に添うて幾曲りかしながら深く彎入してゐるところで、長いゆく春の日は海岸の小山の彼方に春きかけた夕映を身に浴びながら私達同勢七人はその小舟に乗込んだ。舟はまるで小さい池にでも浮んでゐるやうな穏かな波の上を、夕暮れかゝる暗をわけてぎい／＼といふ櫓の音と／＼もに靜に滑つていつた。そしてその夜は丁度對岸の山の上にある大師堂に夜籠りをして狭くらしい庫裡で脚絆と足袋を取つたばかり、着物もそのままの假寝をして、翌朝早曉大師堂の山を下りてくると、そこには昨夕からそのまま山の下に船を繋いで夜泊してゐる船頭が、もう苦を取除けて、私達の下りてくるのを待つてゐる。そこから十里ばかりの海を小豆島へ渡るのである。

四月の末からかけて五月頃の瀬戸内海の水の美と氣候の穏和なことは一度それを知つてゐる人でなければ語ることが出来ぬ。私達の乗つた船は朝なごのした鏡のやうな水のうへを長閑な櫓の音を高く響かせて滑つていつた。をちこちの島山は宛がら夢を見てゐるかのやうな薄い霞に罩められて、麓かな朝日の影を照り返してゐる海の面は曇つた銀の板のやうに鈍く輝いてゐた。強い海の臭を含んだ爽かな風が習々（まよまよ）と顔を撫でた。船は同じやうな山の鼻や島の影を幾曲りして、次第に廣い海の方へと出ていつた。

屋根板をとつた胴の間には、同勢十人に近い一行の連中が環をつくつて坐りながら、先達の老人の音頭で海の水にも鳴り響くやうな聲を揃へて順禮歌を唄ひ出した。

ふだらくや岸打つ波は三能野の、那智のお山にひびく瀧津瀬。

ふる里をはる／＼ここに紀三井寺、花の都も近くなるらん。

親類の老人といふのは、その頃六十に近い、若い者を凌ぐ嬰孺たる爺さんで、亡くなつた私の父とは二つ三つ年長で、二人は代々重縁の繋つてゐる親戚の間柄とて、若い時からの友達であつた。私達は子供の時から叔父さんをぢいさんと呼んで、兩方の家に吉凶のある時はいふまでもなく、佛の信心と酒とが大の好物であつた叔父さんは、お盆の墓まゐりと正月の年始とは必ず缺かしたことがなく、とりわけて佛事供養の折には私の家にとつて、その叔父さんは何人よりも缺かされぬ一のお客なのであつた。若い時に家代代の名主を勤め、廢藩後はまた長く戸長といふものを勤めてゐて、古いことをよく知つてゐた。岡山の名



君といはれた備前少將新太郎のことや大石内藏之助の若い時分の逸事などをよく聞かしてくれた。同行の連中といふは、そのお爺さん老夫婦に爺さんの妹でおせいさんといつて、薄いあばたのある脊のすらつとした品の好い中婆さん——その人は若い時餘處に嫁いたが、夫がひどい道楽者であつたので、娘の子を一人連れて戻つてきて分家をしてゐた。その娘はみいさんといつて、私よりは十位も年上の、目鼻立ちのいい別嬪であつた。私がまだ五つ六つの時分、母につれられて、その家に立寄ると、みいさんが私を負つて家の裏の栗を拾つてくれたことがあつた。——これだけが親類の連れで、あとはそのお爺さんの村のたれ彼れ、多くは農家の女房達であるが困らぬ人達である。

深緑に晴れ渡つた大空は、丁度瀬戸物の肌のやうに麗かな日光が一ぱいに漲つて青疊を敷いたやうな海の上は漣さへ起たず、遠くとほく眼のとほく限り白く霞んでゐる。船はその煙霞の中を分けつゝ、悲しみの籠つたそして長閑な順禮歌の合唱の聲を載せて滑つていつた。

岩を立てゝ水を湛へて壺坂の、庭のいさごも淨土なるらん。

艦で午近くなると船頭は、十四五の子供に櫓を押さしておいて自分は米を洗つて飯を炊き、晝飯の支度に取りかゝつた。精進の道中とて添へる物は香の物に和布の酢あえくらゐのものであつたが、いくらか鹽加減のある御飯に澤庵の風味、空腹の腹に得もいはれぬ味があつて、澁茶のついた、顔も入りさうな大きな飯茶碗に、手垢に黒ずんだ杉箸で、私は幾杯かを重ねた。一日も酒がなくてはゐられないその老人は、

昨夕船頭に買はして置いた酒を燂めさして、二人で氣長に飯をはじめた。日は頭の眞上から遍ねく照り輝いて、海は一面にちろ／＼と鏡の破片のやうに眩しく光つてゐるが、適度に氣温を冷まされた軟風は、そよ／＼と絶えず頬から襟先のあたりを弄つていつた。

船はまた幾つか同じやうな山の鼻端を曲つて、とある島によつて狭い水道をなしてゐるところまで進んで来ると、折から午過ぎの空氣はすこしづゝ荒だつてきて、さすがに靜であつた水のうへに青い細波が揺れてきた。

「ほら向ひ風だ。」啣へ煙管で櫓を押してゐた船頭は日に焼けた顔を上げてゆく手の海の方を見渡し乍らいつた。

「風が出たら仕方がない。仙さん船に弱い連中ばかりですから夜まで待つてもらはう。明日の朝までに大部に着けてもらへばいゝんじやから、急ぐことはないぞな。」老人はさういつて、船頭を勞うた。

水道の彼方には今までに見なかつたやうな廣い青海原が遠く展けて眞白い波頭が白馬の鬣の如く飛沫を揚げて凄まじく押寄せてゐる。

「えゝ、夜半まで待てば風が變る。」

仙さんはさういひつゝ、ところ／＼に人家の點在してゐる山裾の岸に船を漕ぎ寄せた。山には麥畑が籬段のやうに一枚々々重なつて、下から上までつゞいてゐた。その麥圃の中を半里ばかり奥に入つてゆく

と、御繁昌なお稻荷様があるといふので、女達は皆船から上つてその方にお詣りにいつた。私は母の誘ふのを聴かずに、水道の向に横はつてゐる島山に上つて見たくてたまらないので、船頭に頼んでそちらの岸に着けてもらひ、一人雑木の繁茂を掻きわけてその島のうへにと登つていつた。島は以前このわたりの土地を領してゐた家老の墓地のあつた處であつたが、今は墓守りさへ住まず、藪叢の荒れるにまかした、全く無人の島となつてゐる。私は八重葎の草をわけて墓碑のある方に深く進んでゆくと、ところ／＼に海風に揉まれた老松が高く翠蓋を翳してゐて、大きな碑石はその下に春の小草に埋れたまゝ立つてゐるのを發見した。私は黒く苔蒸した花崗石のその臺石に腰を打ちかけて憩ひ、島の彼方に遠く開けた瀬戸内海の水を遙に見渡した。志す小豆島はその水の彼方に白く霞を籠めて青螺の如く淡く横はつてゐるのが、それである。脚の下から白銀を延べた様に續いた海原には統の如き煙霞が一面に漂うて、遍き日の光は天地の端から端迄残る隈なく包んでゐるのである。

夜に入ると、もに風は次第に風いできた。晝間と同じやうな夕飯が済むと、また老人の先達で一と仕切り御詠歌の合誦が始まつた。

私は昨夕の睡眠不足に早くも睡氣を催して船の胴の間から、ずつと奥の方の舳の處に這入つていつて窮屈な體を横へて睡を貪つた。胴の間の順禮歌もいつしか止んで、暫く念佛を唱へる聲がしてゐたが、それも終つて了ふと、跡は船頭の仙さんが櫓を操り乍ら若い女房達に腹を抱へて笑はす様な大口をきいて賑か

にざゞめいてのるのが聞えてゐた。

船は好い鹽梅に順風に乗じてもう餘程沖に漕ぎ出でたと思はれて舳の棧を枕に横になつてゐると、船底に、びちりびちりと水の弄る音が響いてゐる。そのうち胴の間のざゞめきも靜つて、女房達も銘々身を横へるだけの場處を見附けて、寢に就くやうであつた。

すると晝間から、船頭の仙さんが、女房達を相手に大口をきいてゐる時に、

「こゝにゐる中ぢやあお前が一番別嬪だ。」と老人と二人で、十二分に過し酒の機嫌で船頭が戯けてゐた、二十七八の丸鬚に結び、齒を染めた女房の一人が、寢るところを探しながら、

「そちらの方に寢るところがありますか。」といひながら、幾つにも仕切られた横板を踏越して、私が一人横になつてゐる舳の奥に這入つてきた。

「おゝ、此處は好いところがある。」と、ひとり言をいつてゐる。

「寢るところはありますよ。」といひながら、私は仕方なく狭苦しいのを耐へて身を横に縮めた。

「どうぞすこし入れさして下さいまし。」といひつゝ、女房は頭を向にして横になつた。着物をきたまま脚と脚とが互ひに觸れあつてゐる。婦人の體の暖まりや頭のものゝ異様な臭などが、その頃まだ十分に女性といふものを解さない私の官覺をむづ／＼させるやうに刺戟した。私は折角心地よく安らかにこの一夜を寢て明かさうと思つてゐたのに、女房が入つてきたために氣が惱ましく、胸の動悸が昂まつてきた。

富山房百文庫

— 79 —

旅 所 ぞ よ け れ

定價十六錢



昭和十四年七月廿八日印刷  
昭和十四年七月三十日發行

著者 近松秋江  
東京市杉並區東田町二丁目一七五番地

發行者 富山房  
東京市神田區神保町一丁目三番地

代表者 坂本守正  
富山房社長

印刷者 寺井藤左門  
東京市牛込區市谷加賀町一丁目二番地

發行所 東京市神田區神保町一丁目三番地

富山房  
合資會社

電話神田二七一八番  
振替東京五〇一

(大日本印刷株式會社市谷工場印刷)

それでもいつしかぐつすり寝入つてしまつて、そして今度心地よく眼を覺ました時には、艫の方では船頭の太い濁聲が朝ぼらけの海風に響いてゐるのが聞えた。

女房もやつと眼を覺まして、やう／＼坐つて頭の支へぬくらゐの低い屋根の下に起直りながら、二つ三つ續け様に大きな欠伸をしてそれから寝亂れた後毛を掻きあげて、私に會釋をしながら、艫の方に仕切板を踏み越して出ていつた。

私もつゞいて起きていつた。そして屋根を取つた船縁から、ついと顔を出してみると、眼の前にはいつの間にか陸地が現はれてゐて、船は小豆島に着いたのである。潮に濕めつた沙地の渚には透きとほるやうな清かな水が、のたりのたりと、靜に小さい波を寄せて、磯臭い、爽な風が冷たく襟首を吹いた。弓のやうに遠く延びた海岸につゞく漁村のところどころに大きな木組みをして船を造つてゐる方から、木を叩く槌の音が、かん／＼と、長閑に、靜な朝の空氣に響いてゐた。

(大正七年四月六日)

1~7 萬葉代匠記(二)

武田祐吉校註 定價各九十錢 各十二頁

8 全金槐和歌集

川田順校註 全二六八頁 定價五十錢 千六錢

9 列強現勢史・ドイツ

大類 仲著 全四〇二頁 定價八十錢 九錢

14 若松賤子集

若松賤子著 全一八〇頁 定價四十錢 千六錢

15 新植物生態美觀

三好學著 全一九一頁 定價八十錢 千六錢

16 邦樂舞踊辭典

温美清太郎著 全三四三頁 定價七十錢 千九錢

17 西行法師全歌集

尾山篤二郎校註 全三九一頁 定價七十錢 千九錢

10 大科學者の歩める道

ウッソグ、ゲル、石川、次共著 全二九四頁 定價六十錢 千四錢

11 役の行者

坪内逍遙著 全二五三頁 定價五十錢 千六錢

12 ジオコンダの微笑

オールダス・ハックスリ著 全一九四頁 定價四十錢 千六錢

13 ゲーテ箴言集

ゲイテのやうな偉人の言葉は常に新しい。彼がその生涯になしたよき言葉は概ねこの集にある。これは美しく編まれたいはば「ゲーテ論語」であり、讀む人の胸奥に觸れる珠玉の文字である。

18 西國立志編

明治の時代を創り上げたといはれる人々にして、西國立志編を讀まなかつた人はなく、これを讀んで刺戟を蒙らなかつた者もない。スマイル原著の自助論、江戸川聖人といはれた敬宇中村博士の翻譯により日東隨一の修養書となる。明治以來これほど大きな影響を人に與へ且實際的な効果を現はした書は外になかつたが、又、我が近代傳記文學の先驅として、偉人傳集成として、且は又初期翻譯のスタイルを代表するものとして、今なほ讀んで興味のくもども盡きぬものがある。

19 國民性十論

日本人の國民性に就て眞摯な考察をした最初の書である。「忠君愛國」「祖先を崇び、家名を重んず」「現世的、實際的」「草木を愛し、自然を喜ぶ」「樂天洒落」「淡泊澆酒」「體麗體巧」「清潔潔白」「禮節作法」「溫和寛恕」の十論であつて、的確な論據による何人をも首肯せしむるに足るべき獨善ならぬ實證的國民性論である。日本精神研究の呼聲高き今日、故人の衣鉢を繼ぐ久松博士に校註を乞ひ、新に祥に上せて江湖に送る。

20 ハムレット

シェイクスピアのハムレットはまた我が坪内博士のハムレットである。これは重なる翻譯とみるべきものではなく、また翻譯の到り得る至高の妙所に達したものである。このことは原作者と譯者と同じ偉大さに立つ場合のみ可能である。今新版を作るに當つては、博士の高足日高教授を頼はして詳細な註釋及解説を加へ、研究書としても完璧を期したことを誇りたい。

[21] 兒童の世紀  
近世教育史上に光芒を放つエレン・ケイ女史の名著である。女史の著は戀愛と結婚の純化、性慾の淨化を説くと共に、生れる子、成る子を育てるの秘訣を述べ、原田教授の譯一冊出でて我が教育界に大きな波紋を描いたが、今また改訂の筆を揮つて定評一兒童の世紀」を成す。

[22] 世界童話集  
全世界の秀れた童話といふ童話が「光のお部屋」から「青いお部屋」まで八つの部屋に分類して収められ、彩るにこの國一流の童話家諸氏の麗筆を以てし、渾然詩畫一體の妙境を拓いてゐる。我子のために良書を採らば人の過してならぬ善本として自信を持って推薦する。

[23] 植物學語彙  
植物學上用語が多岐を極めてゐることの不便不利益は、斯學に從ふ人達の痛感されてゐるところである。本書は之等の日英對照の一冊、及び各用語に對する解説とが甚だ適切に採配されてゐる。

[24] オルレアンの少女  
これは愛國文學の隨一である。羊飼ひの少女ジャンヌ・ダルクが、神託を奉じて祖國の急に赴き、天啓外敵を斥けて母の國佛蘭西を覆つた危きより救ひ、中國刃を交へたゆくりなき敵將との悲戀に身を委ね、苦痛を味はひ、爲に神罰を蒙つて、絶望の苦を嘗め乍らも、がたまはる苦熱烈な祖國愛に、いましめの鐵鎖を斷つて群る敵中に入り、味方への勇躍を挽回しつゝ、其身は悲壯な死を遂げる迄詩聖シラーの靈筆に聊かのゆるみもなく、讀む者をして容易に巻を捲く能はざらしめる。

[25] 評一葉小説全集  
樋口一葉の全作品を一本に収めて、各篇毎に長谷川女史による緻密な評註を加へた。一葉の描いた世界も風俗も、既にその正しい鑑賞の爲には評註を必要とするやうになつた。一葉の溜息一つ聞き漏さぬ時、雨女史の、姉のやうな親身な評註は、それだけでも讀んでたのさく味はひの深いものである。尙「たげくらべ」は特に文藝俱樂部所載當時の挿繪をも加へてある。

[26~27] 唐詩選評釋  
萬葉を讀み唐詩選を學べば、東洋の詩心略し領し得たりとして不可なからう。古來本朝に於ても、唐詩に註する者二三にして止まらずと雖も、森博士に至つて遂に古今獨歩、其後に於ては唯屋上屋を架する者あるに過ぎない。たげ博士の詩學が深遠なる餘り、往々難解の嘆を聽くため、今新進の人東大支那文學研究室豊田博士を煩はして補註を施し、解説、唐詩人列傳を加へ、努めて卒讀を容易ならしめた。

[28] 新日本陽明學派之哲學  
現代が後見に傳ふるに足るべき善本を覆刻刊行するのは、本文庫の使命の一つである。本書は明治以降三代を通じて行はれ、その權威は彌が上にも昂揚されつゝあるが、今また九十年を超えて尙譽譽たる老博士、その後の研究を集めて本書の改訂を企てられ、爲に、全篇未を以て充たされ、更に文獻の大増補、「高井澤山」一章の新執筆等、全く面目一新せる新訂版となつた。列傳體の日本陽明學史として、國體學の權威書として、時人の必讀を俟つ。

[29] 復軒旅日記  
言海博士大槻文彦先生が一生涯に試みられた數十度の旅行に於て、逆旅の燈下、矢立の筆に細々と誌された旅日記、辭書學者としての先生の特異な觀察、耳目に觸れるもの一切への仔細な學的考量など、その人爲を知らうとする人達にとつて此上もない好資料である。更に自傳及年譜を加へてこの一巻を玉成する。

[30] 列強現勢史・ロシヤ  
さきにドイツ篇を出して絶賛を博したが、今またロシヤ篇成つて江湖に見ゆる。ドイツとロシヤとは現下我國の最大關心事、この二國の現勢を直截に知り得るの書は、これを指して他にない。尙ロシヤ篇に加へたロシヤ地圖は、外務省岩間徹氏の製作に成つたもので、我國に於て最も新しく最も正確なるもの、外にアート副寫眞數葉を加ふ。

[31-32] エゴイスト (自我)  
英の大文豪チョーチ・メリディンが代表作。全篇に溢る諷刺と、諷刺と皮肉と、逆説と、序詞一章、本文五十章の巨篇、讀み去り讀み來つて興の盡きるを知らない。青年貴族ウィロヒ・ペーターンが妻えらびの一件は、快活聰明なダラム嬢、美しく仲々食へぬところのあるクレアラ、内氣なりチシヤの三人を順次に相おろして我儘一ぱい、自我一天ばりの若殿振舞の、とど心ならずもリチシヤを得て落着するに至る。天來繁野博士、晩年を本書の全譯に傾け、鐵骨の苦心はその天壽をさへ縮めたかといはれるが、漸く稿成つて忽ち長逝、遂に出版をみずして了つた。今遺愛に乞ふて本文庫に收める。

[33] おらんだ正月  
史的人物中より科學者五十二名を拉し來つて、平易な口語文にその傳を敘す。英雄豪傑を傳するもの、これを乏しとせぬが、科學者のみを蒐めて一書に傳するは本書を以て蓋然としよう。加ふるに七八八節の挿繪あり、肖像・製作品・遺跡等一もあまらず、又口繪の名畫おらんだ正月を祝ふ人々」は本書の題名の由來を讀者に説明するであらう。

[34~35] 狂言三百番集 (上)  
狂言に漲る笑は日本人の笑そのものである。狂言は一應觀賞すべきものであるが、笑の文學としての價値も亦没却すべくもない。天の岩戸を開いた神々の笑は童年期に及んでこの狂言文學の大成となつた。本書の校註者は嘗て狂言集成を編み、今又その後に發見せる十六曲を加へて嚴校を施し、裝束附・語註をも添へて最善のテキストとして茲に提供した。三十三頁の狂言解説及び寫眞プレート・カットまたみるべきもの。

[36] 芭蕉翁繪詞傳  
芭蕉を讀んで繪詞傳に及ばざるはない。繪を以て傳する蕉翁一代、見えて楽しく讀んで癒しき、まさに風雅の書といふべく、高士の玩具と申さば當れりや否や。清風逸然、一巻が離し出すさびしをりの境地、また俗腸を洗ふに足らんか。

[37] 言語地理學

フランス近代の言語學界に於て第一の書として推される本書は、誠言語學に一轉機を作つたものである。文獻のみならず、古くは古語學はこの書を以て滅び、新しい學問の黎明が訪れた。方言研究といふよりは更に科學的な言語地理學、この學が創られたのである。原書は東大其他の講義にも用ゐられたが、翻譯の未だ出づるものなく、學界の待望久しきにわたつたが、外務省翻譯官松原氏、至難とされる本書翻譯の業を完成され、今此文庫に加ふるを得たのは至幸である。

[38] フランス戦話集

フランス戦争文學の粹を蒐めてこの一巻を成す。デュアメル・モロワ・ルナール・バラティエ・フランドレ・エブラック・モオパッサン・コッペ・ドールデー・クラルシイ・メリメ・ヴィニイ等十二人の佳作十三篇、續刊するドイツ戦話集と併讀して頂きたい。

[39~40] ナポレオン時代史

不世出の英雄ナポレオン出でて掲げるフランスの、否、ヨーロッパの歴史である。一箇の偉大な人生の歴史と、世界史空前の豪華版の歴史とを掲げて地球上に展開された大史劇を我々はこの書の中に觀ることが出来る。戰史の權威であつた著作博士、戰を描いては筆端自ら熱を帯び、附載の地圖を参照しつゝ、これを讀めば讀者はエチプトにイタリイに、スペイン・トラファルガルに、躬ら從軍觀戰するの感を覺えるに相違ない。

[41] ルーマニア日記

現ナチス・ドイツの文壇に雄視するカロツサが、若き頃歐洲大戰に一新兵としてルーマニア戰線に馳驅し、雜行軍や宿營、曉の遭遇戰や傷病兵の看護、炸裂する砲彈の下に回生した體験等身を以て描いた記録である。一つの戦線ルボルタージニであると共に、姉妹篇「幼年時代」や「成年の秘密」にみられる高い詩の精神は效にも發露して、これこそ歐洲大戰の生んだ戦争文學の最高位置を占めるものといはれる。向本書を讀むための地圖を作成して巻頭にそへたのは譯者及刊行者の老要心である。

[42] 科學物語

フアイブルは世界の子供達にとつて、「科學の小父さん」である。その昆蟲記はあまりに有名であるが、これはまた動物物理化學等自然科學百般にわたる童蒙のための書である。多數の挿繪を原書より轉載し又は新に描き加へてその解説を助け、子供のための科學書として、本書の右に出でるものはないと自負する。

[43] 學童日誌(クオレ)

名作クオレの譯は二三にして止まらないうが、この異國の名作を始めて本土に移し、全くこの國の物語に書き改めて而も原書の高い精神を傳へて餘すところのない點、敬請に値するものであり、不朽の名作として今敢て覆刻する所以であるが、確かに童心を培ふ沃土のやうな、豊かな深いものをこの本は持つてゐる。

[44] 上田秋成全集

貞享元祿の世近松に西鶴に芭蕉に繼いで懸ける我が文藝も、以降漸く末期の傾向をたどれるが中に、青の明星の如くひとり高きとして活きもこの、これ上田秋成の存在である。今小説・散文・雜俎の三部として全集を編み、全篇の白眉たる小説集を先づ世に贈る。彼の全作品を一本に集め、本文の嚴校と適切な註とは秋成研究の泰斗鈴木教授の勢に俟つ。

[45] 講大乘起信論

起信論一巻は佛教概論の書として、古來各家各派の別なく研されて來た。成立等に於ても幾多の問題を持つ本論を現代學界の述する最高水準を以て整理水滸されたのが本書である。人も知る望月博士の多年檢討の結論は快刀亂麻の如く小氣味よく解説され、この難解の書を何人にも理解せしめずんば息まぬといふ熱意が、隔々にまで行き互つて寸分の隙もない。

[46] 幼年時代

ドイツの、否中欧文壇の王座を占めるカロツサが、十六篇のをさなものがたりと自傳的スケッチとである。この作者のものは、何故か日本人の心にそのまゝ通ふ「あはれ」を流し、あえかなかなしみを盛つてある。彼が「青年時代」に體驗した世界大戰のルボルタージニたる既刊「ルーマニア日記」と、近刊「成年の秘密」等と共に、彼の代表的作品としてナチス・ドイツの誇とされるのは當然であらう。

[47] みゝずと土

あなどり易い「みゝず」がなんとあなどり難いか、又人間に貢獻するところが如何に多大であるかをこの書によつて、我等は十分に知ることが出来る。しかし本書から讀みとる最も大切なものは、ものを如何にみるべきか、の態度、科學者の研究態度である。ものをみる眼はどちらあらねばならぬか、ダーウインはそれを躬ら教へてゐる。本書はダーウインの名著であり、科學の書であり、或意味からは修養の書でもある。

[48] 中央亞細亞探檢記

中亞探檢記の最大傑作と稱せられるヘディン博士の「亞細亞探檢より」(タクラ・マカン沙漠探檢記)と「ロブ・ノール紀行」の二篇を選擇し兼ねて、本文庫の誇りとする詳密精緻な解説のうちに博士の鬱然たる業績を簡潔なく紹介した。

[49] ギリシヤ悲劇時代の哲學

ニイチエの理解はニイチエの古代ギリシヤ理解を解説することから始めねばならない。そして彼の古代ギリシヤに關する數多の著書の中から、代表的なものにこの書と「悲劇の生誕」とがある。この故に本書には「悲劇の生誕」の序文として書かれた「自己批判的試み」をも挿入したのである。

〔50〕 教育と社會學

今日、教育の基礎として社會學の必要を説く必要はない。既に社會學なしに教育を云ふことは不可能だからである。デュルケムはフランス社會學の創始者にして、斯學に於ける客觀主義を確立した人。全日本教育人のために本書を勧奨したい。

デュルケム著 全一冊 定價四十錢

〔51〕 明治史 大隈伯昔日譚

大隈侯が園城寺清氏を早稲田の書齋に引いて、口述を筆記せしめたもの、その趣意を極めた生涯は傳記として興味豊かなるは勿論、明治史の資料として重要視すべきものである。尙本書の校訂者京口氏は大隈侯によりて得られる明治史資料をこの一書に集中するの意圖から、早稲田清語・大隈侯座談日記・大隈侯昔日譚の三者より適宜採擇して大隈伯昔日譚の缺を補ひ、完き明治史資料として讀者に提供せられた。

園城寺清著 全二冊 定價九十錢

〔52~54〕 アラビヤン・ナイト

一千一夜の物語又の名アラビヤンナイト(アラビヤ夜話)は、この天地の間に二つとない最大奇書だとさへいはれてをります。この夥しい話篇の中から、少年少女諸君の心の養ひにもなるやうな美しい話めづらしい話、罪のない話三十篇をえらび出して、やさしい、きれいな文章に書き直したのがこのアラビヤンナイトです。シンパットの七航海、アラチンとふしぎなランプ、アリババの話をはじめ、アラビヤンナイトのお話として世界中に知られてゐる、おもしろいお話はもろもろこの中に入れてあります。

杉谷代水譯 各三冊 定價各四十錢

〔55〕 新西遊記

有名なる孫悟空、猪八戒らが、三蔵法師のお供をしてたふといお経を取りに、支那から天竺の印度まで行く道に十四年もの長い旅をして、それこそアラビヤンナイトにもまけない、いろ／＼の不思議に出あふ東洋の大冒険譚であります。譯者はむづかしい漢文の原作を、できるだけやさしい言葉にくだいて、みごとな少年讀物にしあげられたのであります。

中島孤六著 全三冊 定價八十錢

〔56〕 小波 かがね丸

明治大正二つの時代にかけて生れて育つた人で多いか少ないか、近代日本童話の父、巖谷小波先生のお伽噺や少年少女小説をまるごと讀み過ぎてきたと云ふものはたゞの一人もありません。「かがね丸」は先生二十二歳の若年ではじめて、新しい少年少女文學を開くことを思ひ立たれたときのいはばこの方の處女作です。

巖谷小波著 全一冊 定價四十錢

〔57〕 小波 新八犬傳

先生が少年世界の主筆として、一ばん花やかに働かれてゐた時分のいはゞ脂ののりきつた傑作集で、その時分のどれも粒ぞろひの名作をえらんであります。昭和の少年少女の諸君にぜひ讀んでいただくべく、「こがね丸」とともに、この二冊のお伽噺集を捧げます。

巖谷小波著 全二冊 定價八十錢

〔58〕 赤い蠟燭と人魚

我國兒童文學界の第一人者たる未明先生の童話は、未明童話集をはじめいろ／＼の本になつて出てゐますが、長い年代の間になつて代表的な作篇の手にまとめられた本はまだ一冊も出てをりません。この本は未明先生みづから奮心の作と信じられてゐる話篇三十種を長い生涯の全作篇からえらび出して、ほゞ年代順に新しく編まれたものであります。一般に未明童話の研究者、愛好者の諸君は云ふまでもなく、まだおそらくは名ばかり聞いて、まだその作に親しむ折のなかつた少年少女の皆さんが、この本によつて未明童話を十分に深く味はつていただきたいのであります。

小川未明著 全一冊 定價八十錢

〔59〕 棕鳥の夢

美しい童話に童話に、わが少年少女の皆様とは長年の親しみのある廣田廣介先生の幼年童話集であります。お母様お姉様が幼いお子様、御きやうだい達からお話をせがまれたとき、そして即座に、お話が思ひ出されなかつたり、せつかく思ひ出して半分お話の筋を忘れてしまふ話せなかつたりした場合、さつそく役に立つやうなお話が一年春夏秋冬、季節々々のうつり變りにはあはせて、それ／＼似つかはしい題によつて作られてゐます。

廣田廣介著 全四冊 定價八十錢

〔60~66〕 アンデルセン童話集

全二冊 定價各四十錢  
全三冊 定價各四十錢  
全四冊 定價各四十錢  
全五冊 定價各四十錢  
全六冊 定價各四十錢  
全七冊 定價各四十錢  
全八冊 定價各四十錢

〔67〕 註國文學史十講

芳賀博士は國文學に科學的方法を採入れて、雅緻な「和學」の状態から救ひ、國語學の上田萬年博士と共に、この學問の體系樹立に成功した最初の人である。その意味に於て國文學史十講は日本文學研究史上不滅の道標として永久の生命を持つ。今、門下の俊秀島津博士、精細なる校註をこれに加へ、其後に出でた文獻の盡くを挙げ、「今日の書」として十分に役立たしめる用意の下に校註の努力を惜まれなかつた。

芳賀久基著 全一冊 定價五十錢

〔68〕 敵討

日本人を知るためには敵討を知らねばならない、といはれる程敵討のもつ意味は重大である。しかもこれに就いての文獻を求めれば信憑すべき者の寥寥たるむしろ意外の感を感じる。故に平出氏の「敵討」がある。小冊能く上古より明治に及ぶ敵討の變遷及一つ一つに就き詳説して、蘊なく、確實な資料による興味深き敘述は、歌舞伎の舞臺をみるに等しい氣易さを以て、眞面目な學問を學び取らせる。

平出二郎著 全一冊 定價四十錢

[69] 調言

露伴先生にこの好著あるを知らぬ人も多し。續篇「長語」と共に、つろいで語る大露伴の、淡々として意味の豊かなる、讀んで拘すべし。本書の右に出るはない。隨筆を愛する人の見逃し難い本といへよう。

[70] 陣中の豎琴

明治の文豪露伴博士、日露の役に従軍して、陣中になされた佳什幾百篇、これに昭和の従軍詩人佐藤春夫氏が滿腔の共鳴を以て詳しい解説と鑑賞の筆を揮はれたもの。今こそ讀み、味はひ、讀えらるべき好著である。

[71] 増訂哲學史要

桑木博士嘗てヴェンデルバントを譯して「哲學史要」と題し、普く江湖に歡迎せられたが、近時原著にハインゼルト教授が二十世紀の哲學を増補せる本の出たのを機会に前譯を補正し、或は一章全部を新譯して、これに増補の二十世紀をも附加し、百科文庫に收められた。明快にして詳細、哲學を學ぶ人の好指針である。

[72] 新訂獨逸浪漫派

獨逸の浪漫派夫自應よりもプランデスの「獨逸浪漫派」が面白く、逆説の行はれる位、この本は文學研究書として歴巻である。「移民文學」と共に必讀の書。今吹田教授の新訂新註の善本を得て刊行する。

[77] 日本人

(附・戦争と國民性) 日本人が海外にのみあがれてゐた頃、博士は幾度も歐米の土を踏み乍ら反つて「日本人」を考へ日本を思はれた。それが既刊國民性十論となり、國文學史十講となり、更にこの「日本人」となつたのである。日本人のよきもわるきも客観しながら、そこに母國及日本人を愛する熱情ともいふべきものが溢れてゐる。日本人が「今」讀むべき書として蓋し最も適切である。附録の「戦争と國民性」も亦時局下必讀の好文であり、又博士のロンドンに於ける講演にして佐藤春夫氏譯の「日本精神」及び芳賀樺氏の解説「創造的自己批判の文學」同じくみるべきもの。

[78] 建禮門院右京大夫集

平家没落の大悲剧の中に咲き出でた一盞の花、右京大夫の全歌集である。建禮門院に仕へ奉り、平家盛を愛人にもつたこの人の歌のめづらしきも無技巧にして素直な詠みぶり、詳しい詞書が物語の生々しい平家没落の哀史とは、今まで單行されたことのない歌集だけに、日本文學、殊に短歌愛好の士にとつて最も新鮮味がある。今佐佐木博士に乞ふて吉水院並に竹柏園蔵の古寫本による最も權威ある定本を作り、博士の詳密な解説と註とを得て刊行するを得たのは、學界のために我社の欣幸とするところである。

[79] 旅こそよけれ

旅、旅と我々は四六時中旅にあぐらされてゐる。この渴望を醫すべく近松氏に乞ふて本書を得たのである。東に西に足跡遍きこの人の、文人としての高い教養と人生觀とを陰影にもつ紀行數十篇、書窓によく車窓にたのしい好伴侶である。

[73] ロミオとジュリエット

(シェイクスピア戯曲集) 改めていふまでもない名著の名譯、新に加ふるところは日高教授の苦心に成る解説と詳密なる註とである。何心なく讀み過した箇所に三重の重の意味があり含意のあることを、この註によつて始めて心附かる讀者も多いであらう。

[74] 神童・臙脂・ヒューバートと初恋

「ジオコンダの微笑」を出して好評を博したハックスリの短篇小説三題、「神童」は天才兒の不幸な死を痛めて彼の短篇中の傑作といはれ、「臙脂」「ヒューバートと初恋」は世界大戦及其後の男女生活の實相を描寫して遺憾がない。老巧平田教授の譯筆亦平明を極めてゐる。

[75] フランス短篇小説集I

フランスの短篇小説の代表的作家と作品とを網羅するやう、この本は編まれてゐる。色彩と味と多種多様な小説たるフランス文學の繪巻物がかくも讀者の前にたやすく繰りひろげられたのである。

[76] 研究坂翁大神宮參詣記

神道のみならず日本精神研究の資料として、現今待望の書である。本書は續々書類從にも收められ、夙に讀者の注目するところであつたが、詳しく評釋及び諸家の研究地圖挿繪を附して時代の要求に應へる。

[80] 世界大戦—その戦略

大戦中イギリスの參謀本部員たりし著者が、専ら戦術中心に説いた世界大戦史である。觀客席からみた舞臺ではなくて、樂屋からみた舞臺であるだけに、偉大な英雄が、實は一箇の偶像に過ぎなかつたり、操りの糸がはつきりみえたりする所に全く新しい世界大戦史が書かれたのである。殊に西部東部戦線もタンネンベルヒも、兩軍の採つた戦法が白日の下に曝されて、戦時下にある我國民の關心を喚ぶ問題に充ち満ちてゐる。

[81] 列強現勢史・東中歐諸國

ドイツ・イタリヤに境を接する東中歐の國々、埃・匈・波・ユーゴスラヴィヤ及びオーストリアの如く、チエッコの如く早くも崩壊して去つたものもあるが、その建國から現勢又は崩壊に至るまでを一貫して説いてある最も新しい歴史として本書は書下された。姉妹篇としてドイツ・ロシアを既刊したこの列強現勢史が、新聞記者藤氏から殊に絶讃を以て迎へられてゐる事實は、本書の眞價を物語るものであらう。

[82] 騎士道時代

バルフィンチの「騎士道時代」は同じく「傳説時代」・「シャルルマニニ傳説」と共に三名著と譯はれし不朽の良書である。神話傳説の入門書として、英文學の參考文獻として必ず讀まらるべきものなることはいふまでもないが、敢て神話學といはず、英文學といはずとも、この「アーサー王と圓卓の騎士の物語」ほどのものは、一般人の知識の一部でなくてはならない。歴史映畫をみるやうな、むしろそれよりも樂に讀める良讀の書として、この「騎士道時代」を奨める。



[83] トワイニス・テールズ  
 トワイニス・テールズ・テールズに就いては最早解説の必要がない程  
 爽してゐる。流麗な譯筆が如何程讀者を満足せしめるか、それを期待  
 するものである。次々と繰りひろげられる物語の数々、スケッチ風の  
 ものあり、歴史物語風のものもあれば、探偵的な味を帯びるものあり、  
 とりどりに讀む人を魅了せずにはおかないであらう。こゝには原作第  
 一巻の全部を収めた。

ホ長一  
 田英生  
 耶三子  
 共譯  
 著  
 全三冊  
 定價七十錢  
 九錢

[84] 序曲・入江のほとり  
 數篇の短篇小説と多からぬ詩と評論とを遺して、若く美しく逝つた英  
 吉利の閑秀作家マンスフィールドの香ばしい佳篇二作を紹介する。英  
 女性と小兒の世界を描いて比ひなしといはれたこの作家の優りなき傑  
 視とこまやかな觀察は清楚な筆に上せられていみじくも瀟灑と表現さ  
 れ、しかも全篇に漲る豊かな詩情は、接する者を幼き日の樂しき追憶  
 に快くも誘ふ。  
 譯者佐々木氏の麗筆は原作の持味をさながらに傳へて至妙。

マンスフィールド著  
 佐々木直次郎譯  
 全一冊  
 定價四〇錢

[85] 伊太利の薄明  
 ローレンスが死んで九年、その名聲は愈々高まつてきた。これは一九  
 一二年から一三年にかけて書かれた、たくましい描寫力を以てなされ  
 た紀行文であるが、彼のもつ内面の世界冥想の世界の如何なるものか  
 もまた二つ一小篇に遺憾なく託されてゐる。英文學史上に今や不動の  
 地位を占めたこの作者を知るに「伊太利の薄明」一篇の讀破は缺くべか  
 らざるものであらう。

ローレンス著  
 全外山一  
 定價五十錢  
 五錢

[86-87] 惡魔の靈藥 (上) (下)  
 作者の描く怪奇な幻影は奔放な想像力に育まれ、  
 絶妙な話術に再現されて上下二部の「惡魔の靈藥」  
 ルドウスは一夜罪を犯して上下二部の「惡魔の靈藥」  
 絶妙な話術に再現されて上下二部の「惡魔の靈藥」  
 ルドウスは一夜罪を犯して上下二部の「惡魔の靈藥」  
 絶妙な話術に再現されて上下二部の「惡魔の靈藥」

ホ國一  
 上松マ  
 九〇頁  
 下二八二  
 各四十錢  
 定價各一  
 九〇錢

[88] 思ひ出と告白  
 原題は「青少年時代の思ひ出」であるが、そこには多分に感傷的要素  
 が含まれてゐるので、譯者がかく題されたのである。「思ひ出」は  
 クロボリス丘上の祈禱、「告白」はシアルドネの聖ニコラ神學校「サ  
 ン・シユルピス」の第一歩」等の各章と、原著者の詳  
 しい序と譯者の解説とを内容にもつ。

エルネスト・ルナン著  
 全廣瀬三  
 定價五十錢  
 八錢

[89] 成年の秘密  
 「ルーマニヤ日記」でも「幼年時代」でもカロツサの異邦に見出すこと  
 で迎へられる。これ程日本人の氣持に近い人を見出すことの喜  
 びからでもあらうか。そして「成年の秘密」こそカロツサその人の喜  
 るには最もよきすがたであらう。本書の内容は全體が著者は高橋氏を  
 象から成り立つてゐるもので、筋は最も重要なものではありませぬ  
 方があの風変わりな著作に捧げて下さる大きな苦勞には心から感謝  
 篇を附す。た仕事は途方もなく困難なものと思ひます。」と。外に詩歌

ハンス・カロツサ著  
 全高橋一  
 定價五〇錢  
 六錢

[90] ドイツ戦話集  
 さきにフランス戦話集を江湖におくり絶大の歡迎を受けたが、今その  
 姉妹篇として「ドイツ戦話集」を編んだ。大和魂を誇る我々が、深い感  
 興を覚えるのである。

山岸光宣著  
 全二冊  
 定價五十錢  
 六錢